

ファーレンハイト～30
過ぎたらオッサンだっ
て言った奴、出て来い。
中身は中学生のまままだ
ぞ～第一部

風森愛

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

警察小説や刑事ドラマは事件捜査がメインですが、本作は警察官のプライベートがメインの小説です。



15歳の夏にラブレターを渡した日から22年経った今でも想い続ける男の物語

警視庁の警察官で所属は「音楽隊で楽器を拭く係」だと言う男がいる。その男、松永敬志が想いを寄せる幼なじみの笹倉優衣香は差出人の書かれていない葉書を心待ちにしている。半年ぶりに届いたその葉書は二人の新たな人生の始まりだったが、「音楽隊で楽器を拭く係」の松永敬志は笹倉優衣香の知らない顔を知り、その日を境に松永敬志

の心は氷点と沸点の間を行き来する。

◇14歳の時に恋をした幼なじみを37歳になっても諦めきれない主人公と、18歳の時に恋をした同期へ気持ちを感じたまま16年の時を経た34歳の後輩女性の2つのラブストーリーが同時進行します。

◇この作品は他の小説投稿サイトにも公開していません。

◇2024年3月改稿しました。

目次

第1章

初めての花束 | 2

あなたを想う夜 | 13

ルームミラーの目線 | 21

動物園 | 29

伝わる想い | 37

美容師の弟 | 44

幕間 エレベーター | 54

凍てつく心 | 62

第2章

幕間 想いは秘密のまま | 70

三人組の恋路 | 81

幕間 あなたのために | 90

欲しいもの | 100

3分で大惨事 | 110

それぞれの思惑 | 119

幕間 秒で終わる恋 | 130

第3章

誘導尋問 | 140

幕間 始めたら終わりがあ | 149

つながる心 | 157

暗闇の抱擁 | 166

もう一つの居場所 | 176

幕間 ここから始まる二人(前編)

185

幕間 ここから始まる二人（後編）

193

傾く心

200

第4章

野獣二人

208

君のために7回目

219

そよぐ風は恋を運ぶ

229

見上げる夜空

240

幕間 涙の理由

251

お砂糖とミルク

260

第5章

消去と後悔

270

誰も知らない

282

雪の降る日

291

目撃者

304

電話の声

315

第6章

二人の鼓動

327

武闘派女と忍耐男（前編）

339

武闘派女と忍耐男（後編）

346

幕間 初めて聞く話

356

敵意と希望

365

幕間 恋の終わりに

375

第7章

姐さん、襲来（前編）

385

姐さん、襲来（後編）

393

幕間	始まった二人(前編)	404
幕間	始まった二人(後編)	415
	16年の片思い	426
	いい男と庇う男	437
	ハイヒールとライフル銃	447
	空いたグラス	458
幕間	おにぎり派の忠告	467
幕間	言葉足らずの乙女心	477
最終章		
	君としたい(前編)	487
	君としたい(後編)	498
最終話	心に灯るあかり	509

第1章

初めての花束

眩しい太陽を目を細めて見上げる女の子。後ろでひとつに結んだ髪。まだ長さが足りない横の髪はピンで留めて、太陽の光が反射してきらりと光る。

「進路は決めた？」

セミの鳴く声がうるさくて、顔を近づけないと何を言っているのかわからない。

彼女は俺の返事を待たずに前を向いて俺の先に行く。

俺は何も言わずにその後を追う。

噴き出す汗は、暑さだけが理由ではない。

——待って、待ってよ。

カバンの中には彼女に宛てた手紙がある。夏休み前に渡したかったけど渡せなくて、もう一ヶ月も入れたままの手紙を今、渡そうと彼女を呼び止めた。

振り向いた彼女はカバンを開けた俺の手元に視線を落とす。取り出した手紙を、汗が

滲む封筒を、俺は彼女の手に当てた。

「優衣ちゃん……手紙、あの……読んで」

その手紙を手に持ち、宛名を見ている優衣香が顔を上げないうちに、俺は走り出した。額の汗が目に入る。

セミの鳴き声と照りつける太陽と体にまとわりつく熱い空気。

後ろから俺の名を呼ぶ声がした。



その日、帰宅した笹倉優衣香は郵便受から取り出した郵便物をエレベーターの中で確認していた。

クレジットカードの明細にダイレクトメール、そして何も書かれていない葉書。

その葉書を裏返し、『久しぶりだなあ』と呟く優衣香は、書かれた宛名の文字を見て頬を緩ませている。

差出人の名もメッセージも無い、宛名だけが書かれたその葉書は、差出人が近日中に

優衣香の家を訪れるという意味を持つ。

優衣香がこの葉書を初めて受取ってから十年が経っていた。



十一月九日 午後九時五十二分

玄関ドアを開けると、久しぶりに会う優衣香は俺の姿を見て一步下がった。無理もない。今日の俺はチャラいから。

「いらっしやい。音楽隊で楽器を拭く係の地方公務員さん」

「ふふ……久しぶりだね」

「敬ちゃん、チャラいねー」

——やっぱり言われたか。

今日の俺は黒いデニムを腰で履き、白のオーバーサイズのプルオーバーを着て、リュックを背負っている。

髪型はパーマをかけたミディアムヘア。髪色はダークブラウンだが、ところどころライトブラウンのハイライトが入っている。

おそらく、玄関の照明に照らされて金髪に見えるだろう。ネックレス、指輪、ブレス

レットを付け、髭も生やして自分でチャライと思っていたから、思わず笑ってしまった。

俺が笑うと優衣香も笑う。

この笑顔を好きになって二十三年が経つ。

いつか俺だけの優衣香になって欲しくて、会うたびに想いを伝えているが叶うことはなかった。

でも今日は、本気で想いを伝えようと思つて、プレゼントを持ってきた。渡さないで。「優衣ちゃん。ちよつと早いけど誕生日おめでとう」

後ろ手で鍵を閉める俺を不思議そうに見ていた優衣香へ、俺は鍵を閉めた手とは反対の手に持つ物を差し出した。

「わっ！ 薔薇だ！」

両手で受け取った優衣香は深紅の薔薇の花束が二つあることに気づいた。それぞれを片手で持ち、交互に見ている。

「誕生日は十二日でしょ。だからだよ」

薔薇は五本と七本の花束だ。

十二本の薔薇の花束はいつか渡したいが、それは今ではない。

俺は靴を脱ぎスリッパを履いて、振り向いて靴を揃えていると、優衣香の声が耳に流

れ込んだ。

「おばさんがね、先週来てくれたよ」

——連絡はもらってる。優衣香は元気だと教えてくれたよ。

「ああ、そうなんだ」

向き直った俺を見上げる優衣香は、少し眉根を寄せている。俺が素っ気ない態度でいることに不満なのだろう。

実家が隣同士の、次男の俺と同じ年の優衣香を母は娘のように可愛がっている。だから、息子の俺が母へ連絡しないことを咎めたいのだろう。

「手を洗ってから、行くね」

「うん」

薔薇の花束を抱えてリビングに行く優衣香の後ろ姿を見ながら、俺は視界に入る物を全て記憶した。いつもしていることだ。前回来た時と何が変わったか、変わっていないか。

もちろん優衣香に変化がないかも観察する。

いつものことだ。これは一種の職業病だが、優衣香にとつては会わなかった間に起きたことを全て見透かされるよう気持ちになるのか、少し嫌そうな顔をする。



リビングに行く、キッチンで花瓶に水を入れて、優衣香と目が合った。

優衣香は花瓶に合うよう薔薇の茎を切って生けている。

パチンパチンと小気味よいハサミの音を聞きながら、ソファに腰を下ろした。リュックから取り出したペットボトルの緑茶を飲んでいると、優衣香の声が耳に流れ込んだ。

「男の気配はする？」

「相変わらずいいみたいだね」

俺は薄く笑って答えた。

優衣香にはもう男の気配などしない。なら俺の想いを受け入れてくれてもいいのではと思うが、それは優衣香が決めることだ。

俺は想いを伝えるだけ。だって弱みにつけ込んでるみたいだから。

優衣香は薔薇九本を生けた花瓶をリビングテーブルに置いた。

——薔薇九本の意味って、確か……。

俺は目の前に置かれた薔薇を眺めていると、優衣香が俺を見た。

「ありがとう」

「うん」

「こんなこと、初めてだね」

俺は微笑む優衣香の腕を引つ張った。

足元にある俺のリュックに足を取られた優衣香を抱きかかえ、左腕を腰に回して、右手を離し、右手の指を優衣香の首すじに添わせた。そして囁く。

「そろそろ観念してくれてもいいんじゃないの」
いつもしていること。

初めては十五年前だった。俺が結婚する二年前で、二十二歳の時だった。優衣香に恋人がいた時と俺の婚姻期間中を除いて、幾度となくしてきたこと。

「もう四年、でしょ。男じゃないの」

俺は目を伏せても唇が見えない距離にいる優衣香の瞳を見た。

——今日は本気なんだよ。優衣ちゃんお願いだから……。

優衣香は今日、俺の気持ちを受け入れてくれるかも知れない。薔薇九本の意味、そして今の優衣香の目だ。俺を真つすぐ見ている。

俺は首すじに添わせていた右手に力を込めて優衣香を抱き寄せ、耳元で囁いた。

「優衣ちゃん……観念してよ……お願い」

優衣香の体が一瞬震えた。やっぱりダメなのか——優衣香はいつもと同じ言葉を返すのか。

「嫌ですよ」

やっぱりな。いつもの言葉が返ってきた。悲しいな、そう思っていると、優衣香の左腕は背中に回った。右手は俺の髪を優しく撫でている。

二人の鼓動が重なる。

俺は驚いてしまい、体が強張っていることに気づいた。優衣香の柔らかな感触、髪の毛から香る甘い香り。

——ダメだ。離れないと。

俺は右手を解いて体をずらしたが、左腕は優衣香の腰を抱いたままテーブルの薔薇を見つめた。

——優衣ちゃん……何で……本当にいいの？

俺は初めての経験に動揺してしまった。落ち着かないと思っていると、俺の横顔を見上げる優衣香の声があった。

「今日は何時までいるの？」

「えつと……三時に出るよ」

俺は優衣香に向かずに答えた。

優衣香は返事をして俺の体からすり抜け、リビングを出て浴室へ向かった。



風呂から上がってリビングに戻った俺に、優衣香は冷たいミネラルウォーターのペットボトルをくれた。俺から甘い香りがすると笑い、私も入ってくるねと言い残しリビングを出ていった。

風呂でシャンプーしている時、優衣香を胸に抱いた時に漂った香りと同じだと気づいた。俺と優衣香が同じ香りを纏っているのかと思うと気恥ずかしくなってしまったが、甘い香りのシャンプーとコンディショナーは、髪がいつもより長いせいで香りが残っている。

最近の俺の仕事には合わない香りだが、今日はいいか。

ソファに座りテーブルの上の薔薇を見ていると、花屋で薔薇の花束をと店員に伝えた時の記憶が蘇って来た。

花屋には似つかわしくないこんな形の俺に驚きつつも、笑顔で接客してくれた女性店員に言われた薔薇の意味だ。

薔薇を十二本と言った俺に、恋人にプロポーズかと問う彼女に驚き、違うと伝えた。薔薇は本数によって意味が違うと教えてくれた彼女は、本数毎の意味を書いた紙を見せてくれたが、優衣香は十二日が誕生日だから十二本でいいだろうという考えは安直過ぎ

たようだった。

彼女が見せてくれた紙に書いてある意味を見て俺は悩んだ。十二本は渡したいが、二本ひとまとめの花束は今じゃないから。

なら組み合わせをどうするか。九本と三本にするか、五本と七本か。でも、六本を二つでもいいと気づき、本気で悩んだ。

結局、五本と七本で花束を作ってもらうことにしたが、その意図を汲んだ彼女は俺の顔を見て微笑んでいた。

意味は『あなたに会えて嬉しい』と『ひそかな愛』だ。片思いが実ることを願っていると思われたのだろう。それは間違っではない。

優衣香に薔薇の花束を渡した時、その意味はわかっていなさそうだった。だが、目の前にある花瓶に生けた薔薇は九本だ。もし優衣香が意味をわかっていたのなら嬉しい。わかっていたから、初めて俺の背中に腕を回して、髪を撫でてくれたのかも知れない。

俺が悩んだ九本と三本の意味は、『いつもあなたを想っています』と『愛しています』だから。

——やっぱり俺を受け入れてくれるという意味なのかな。

しばらく薔薇を眺めていたが、残りの三本を思い出して部屋を見回していると、優衣香がリビングに入ってきた。

「敬^{たか}ちゃん、髪の毛乾かしておいでよ。あと歯磨きもね」

髪の毛を下ろし、艶のある薄紫色のロングワンピースに同じ色のガウンで身を包む優衣香の姿を見て、俺は息を呑んだ。

あなたを想う夜

閉じたカーテンから月明かりが漏れる優衣香の寝室に、俺は独りでした。

初めて入る優衣香の寝室。

セミダブルベッドの上で俺は左脚を立て、左腕は頭の後ろに回している。

これまで何度も夜に優衣香の家を訪れているが、ソファで寝落ちしてしたことはあってもベッドで寝るのは今日が初めてだ。

今、優衣香は別室で仕事をしている。

風呂から上がりリビングに入ってきた優衣香が言葉を続けようと口を開いた瞬間に、優衣香の仕用のスマートフォンが鳴った。

電話に出た優衣香はすぐに折り返すと云って電話を切って、俺に寝室で待っているよ
う言い、慌ただしく別室へと消えた。

——どうして寝室に入れてくれたんだろう。

そんなことを考えながらスマートフォンを眺めて時刻を気にしていると、寝室に優衣

香が現れた。

「ごめんね、時間まで寝よう」

「……………うん」

優衣香はガウンを脱ぎ、ベッドの脇にある椅子の背もたれにそのガウンを掛けた。そして俺の左側に腰を下ろす。腕を上げ、髪の毛をまとめ、首の右側に流している。

俺はその姿を瞬きもせず見ていた。うなじ、背中、両腕が露わになった、なだらかな曲線を描く優衣香の後ろ姿を。

優衣香は俺の隣へ滑り込んだ。

俺はスタンドライトを消そうとする優衣香の右手を掴んだ。淡い光に照らされる優衣香の顔を覗き込み、囁く。

「優衣ちゃん、してもいいの?」

俺に向き直った優衣香は、左手の指で俺の頬を撫ぜた。解かれた俺の右手は行き場をなくす。

頬を撫ぜる指の動きに合わせて、睫毛が揺れる。

その睫毛の奥の瞳が俺を見据えた時、優衣香は頬を撫ぜたその手を、耳の後ろへと伸ばした。

「敬ちゃん、何かあったんでしょう?」

指は後頭部へ伸び、髪を撫でていた。

優衣香は、葉書が届いた翌日に俺が来たことから不審に思ったという。薔薇の花束もそうだと。そして、ソファで抱きしめた時にいつもは一回だけなのに今日は二回も言つたからおかしいと確信した、と。

これまで確かに俺の女になって欲しいという意味を含んだ言葉を言うのは一回だけだった。腕の中の優衣香が『嫌ですよ』と返事をして、俺をすり抜けて逃げて笑うまでが毎回のお決まりのパターンだった。

「何があつたのかは言えないでしょう?」

「……………めん」

優衣香が俺と付き合うのを嫌がるのは、俺が警察官だからだ。警察官であっても、所属を明らかに出来る警察官だったら、優衣香は俺と結婚してくれていたかも知れない。

でも、家族にすら『音楽隊で楽器を拭く係』としか言えない今の俺の所属のままなら、それは無理だ。

「ねえ……………何か性的欲求が昂るようなことがあつたんでしょう?」

「えつ……………」

普段どんなことが起きてても平静を装う俺でも、優衣香のその言葉にはさすがに焦つてしまった。なぜわかつたのだろうか。優衣香は親指で俺の頬を撫でている。

「その欲求は私では解消することが出来ないのはわかってるはずなのに」

「うん……」

「でも、それでも私のところに来てくれて嬉しいよ」

俺は目を瞑り、ため息をついた。俺が優衣香のことが好きな理由を改めて思い知らされる。こういうところが好きなのだ。でも、それ故に、優衣香は俺の支えになることを拒んでいる。

「優衣ちゃん、キスしていい？」

「嫌ですよ」

いつも通り即答する優衣香と顔を見合わせて笑ったが、ベッドで向き合っているのに、俺の手は優衣香の身体の向こうのシーツに触れているのに、俺はキスどころか抱きしめることすら叶わないのか。そう思っていたが、優衣香は右腕を俺の首の下に滑り込ませた。

「腕枕してあげる」

おいでと優衣香に誘われるまま、腕枕をされた。

優衣香の顔の下に、俺の頭が収まる。俺の唇は優衣香の肌に触れている。優衣香の肌はこんなに柔らかくて滑らかだったのか。肌の香りは鼻腔をくすぐる。

——したい。

優衣香の身体の向こうのシーツに触れていた手の指で、優衣香の背中をそつとなぞる。

「抱きしめてもいい？」

いいよと言ってくれた優衣香の背中を強く抱きしめると、優衣香は小さく、んつと呻いた。この声を聴いても、艶のある薄い布越しに優衣香の肌身の柔らかさを感じても、俺は我慢しなくてはならないのか。

自分の中の庇護欲と嗜虐心が交錯する。

だが、優衣香の肌の温もりに包まれていたら、眠りに落ちるまで時間は掛からなかった。



アラームの音を覚ました俺は、隣に優衣香がいないことに気付き飛び起きた。でも、優衣香が直近までここにいた形跡はある。シーツに微かな温もりが残っているから。

寝室のドアを開けると、微かにコーヒーマットの薫りが漂っていた。リビングに入ると、キツチンに優衣香の姿があった。優衣香は近寄る俺に気づき、微笑む。俺は優衣香を後

ろから抱きしめた。

「ずつと腕枕してくれてたの?」

振り向いて俺を見上げる優衣香は、『してないよ』と言う。俺が寝た後すぐ起きて仕事していたと。俺は優衣香の耳元に唇を当て、警察官相手に嘘を吐くのは良くないですよと囁くと、優衣香はクスクス笑った。

◇

洗面所に行くと、洗面台の脇の一輪挿しに薔薇が挿してあった。頬が緩む。残りの二本はどこにあるのだろうか。寝室には無かった。薔薇の意味は何だったかなと思いい出しながら身支度を整える。

今、俺が着ている部屋着は俺のものだ。この他にワイシャツと下着と靴下が優衣香の家に置いてある。優衣香が洗濯してくれるが、おそらく来る前にも洗濯しておいてくれるようだ。半年ぶりに来た今日でも、洗いたてのような清潔な香りがするから。

リビングに戻ると優衣香はコーヒーを淹れてくれた。優衣香は俺の姿を見て、チャラいと笑っている。そして、髭がくすぐったかったとも言った。髭をここまで伸ばすのは稀だが、自分としては案外似合っていて気に入っている。でも優衣香が嫌がるのなら髭

は出来るだけ控えようか。

——行きたくないな。

腕時計を見ると、優衣香とあと僅かで離れなければならぬ時刻だった。優衣香の顔を見るが、別れを惜しむような素振りは一切見せない。今日も、これまでも。いつか優衣香のそんな姿を見たいと思うが、そういつたことをする女性に良い記憶はない。

「そろそろ行く時間かな」

「そうだね」

俺はリュックを背負い、玄関に向かった。靴を履き、振り返る。『またね』と笑顔で言う優衣香に『離れたくない』と言うと、優衣香は破顔し、手を顔にやって笑う。その笑顔に俺も笑い、『また連絡するよ』と言って玄関の鍵を開けようとする、優衣香の少し上擦った声が聞こえた。

「敬ちゃん、キスして」

後ろから降り注いだ思いがけない言葉に驚いて振り向くと、優衣香は俺の服を掴んでいた。本当にしてもいいのか、俺は優衣香の表情を観察した。

優衣香は唇を引き結び、俺を見上げ、唇に視線を落とす。

——本当に、いいの？

俺は優衣香の肩に両手を乗せ、目を閉じる優衣香に唇を合わせた。薄くて柔らかい唇

だった。

目を開けた優衣香の瞳は潤んでいる。俺の腰に添わせていた優衣香の指に力が入る。

——もつと、していいの？

そんな目で見られたら、俺はもう止められない。

右手で優衣香の頭を抱え、左腕で優衣香の腰を抱いた。優衣香を引き寄せて唇を歯を、舌でこじ開ける。優衣香の上顎を舌でなぞり舌を絡ませる。

混ざり合う水音と苦しげな優衣香の吐息が響く。

唇を離して優衣香の半開きの唇に視線を落とした。唇から溢れた唾液を舌で絡め取り、濡れる唇を舌でなぞり視線を合わせると、優衣香がまた唇を合わせてきた。

優衣香が漏らす甘い吐息は劣情を煽る。

——優衣ちゃんなんで……なんで今なの……。

抱きしめた優衣香の向こうに花瓶に挿した二本の薔薇がある。意味は——この世界にふたりだけ。

——このまま時が止まってくれればいいのに。

ルームミラーの目線

十一月十日 午前三時六分

優衣香^{ゆい}の部屋の玄関ドアが閉じる様を見ていた。

鍵を締める音がして、チェーンロックが掛かる。

——あ、言い忘れたな……。

優衣香に今後は電話してもいいか聞きたかったのに忘れてしまった。

今は仕事に目処^{めど}がついた時に葉書を送っている。優衣香の住所と名前を書いて俺の名前は書かないが、それは俺の結婚前に時に決めたことだった。

十三年前、優衣香に結婚すると知らせた日、俺は泣きながら優衣香を好きだと言った。『優衣ちゃん^{ゆいちゃん}と結婚したい、結婚したかった』と何度も何度も繰り返して、溢れる涙が頬を伝ってスーツを濡らしても、俺は無言の優衣香に縋^{すが}った。

優衣香は『新しい生命^{いのち}に責任を持つのは当たり前だ』と俺を窘^{たしな}めた。『敬^{たか}ちゃんはパパになるんだから』と、自分の存在が夫婦間に波風を立ててはならないと考えた優衣香は、

俺の携帯電話から自分の連絡先を消去するよう要求した。

その際に、何か用事があるなら家に葉書を送つてと言われたが、婚姻期間中に俺たちが会うことはなかった。だって産まれた子供が可愛かったから。

だが俺の結婚は三年で終止符を打つ。誕生したその子供は俺と血の繋がりが無かつたから。

独身に戻つてる今も葉書を送っている。葉書が届いてから、早くて三日後、遅くて十日後に俺は優衣香のマンションへ行く。

今はお互いのスマートフォンに連絡先は入っているが、お互いに電話やメッセージを送ることはない。だがこの十年で優衣香に電話をかけたことが一回だけあった。それは父が殉職した時だった。

——いいか。メールすればいいや。

俺はマンションの廊下を歩き出した。おそらく今の俺は頬がだらしく緩んでいると思う。だって、優衣香が初めて俺を求めてくれたから。ずっと願っていた未来になったのだから。もう葉書を書かなくていいのだから。

俺はエレベーターホールに差しかかる前に、黒いキャップを目深に被った。

——仕事だ。迎えが来てる。切り替えないと。

口角に力を入れて、緩んだ表情を仕事のものにする。

エレベーターには乗らず、その手前にある非常階段を下りて行く。一階まで下り、外に繋がるドアを開けようとドアノブに手をかけた瞬間、人の声があった。その場に留まり、やり過ごす。

やがてその声は聞こえなくなり、外へ出た。

◇

午前三時十九分

マンションを出て、早足で向かった場所に迎える車は停まっていた。助手席の後ろの席に滑り込む。

助手席に座る男は振り向いて『お疲れ様です』と言い、すぐに前を向いた。運転席に座る男はそれを見てから振り返り、『ちよつと遅かったですね』と言った。

「ああ、すまない」

そう言いながらシートベルトを着け、顔を上げるとその男はまだ俺を見ていた。

口元には笑みを浮かべているが、視界に入る俺の全身をくまなく観察する目をしている。その男は、優衣香が嫌がるその目を綻ばせた。

「へえ……」

優衣香と面識のあるこの男は、関係が長いことも知っている。助手席の男は何も知らない。

「なんだよ、早く行けよ」

走り出した車は街に溶け込んだ。

助手席の男から、目を通して欲しいものがありますと言われ、書類を受け取る。それを街の明かりに照らして、読む。

文字数は少なく、一見すると関連性のない単語の羅列に見えるが、ある組み合わせをすると文章になる。それを記憶する。

この書類は、署に行った際に回収され、その場で水を張ったバケツに沈める。

文字の羅列を記憶した所で、俺は運転席の男に声をかけた。

「すごいや相澤、女はどうした？ 上手くいつてんの？」

不機嫌そうに頬を膨らませている顔がルームミラーに写る。

「ダメだったか……ふふつ、そりやそうだよな」

警察官であることは証明出来ても、どこの所轄でどの部署か明らかにすることが出来ない男など、信用出来ないだろう。『音楽隊で楽器を拭く係だよ』と言われて、それが嘘だと気づく前に、すでに連絡が途絶えているのは誰しも通る道だ。でも優衣香は理解してくれている。

——友達だから。俺の仕事を探るような、そんなことは一切しない……友達だから。別れ際の優衣香を思い出す。優衣香から求められたキスに、俺は夢中になった。強く抱きしめたせいで優衣香の背骨が鳴り、驚いて身体を離すと、俺が離れたことを恨めしそうに上目遣いで見ていた。そのまま押し倒してしまいたかったが、時間が迫っていた。我慢するしかなかった。

次に来た時、続きをしてもいいか優衣香に問うと、頷いた。それが嬉しくて、また抱き寄せて頬にキスをした。

十五歳の時に一生懸命書いたラブレターは、二十二年の時を経て、やっと夢が叶った。三十七にもなつてこんなな浮かれるのもどうかと思うが、俺は嬉しい。

「松永さん、顔に出ていますよ。いいですね」

そう吐き捨てた相澤は、ルームミラー越しに目を細めている。恨めしそうなその顔に俺はニヤリと笑った。

助手席の男は何の話をしているのかわかっただろうか。俺が女の匂いをさせていることは気づいたようだから、俺が女の所に居たとわかっただろう。

「お前ら腹は減つてねえの?」

優衣香の家に行く前に食事を済ませていたが、この二人は何も食べていないかも知れない。午前五時から会議が始まる。そうなると思えば早く食事は出来ない。

「松永さんがどっか行つてる間に食いましたよ」

また相澤が恨めしそうな目をルームミラー越しに寄越した。助手席の武村雅人は空気を讀んだのか、『お腹すいてます!』と元気に返事した。俺にはそれが微笑ましかつた。

「じゃ、コンビニ寄つて。おごるから」



コンビニの駐車場に停めた公用車に相澤を残し、助手席の武村と俺はコンビニに入った。スーツを着た気弱そうな武村とチャライ俺との組み合わせは異様だったのだろう。店員が目で追っている。

「お前は女いるの?」

「います!」

元気に答える武村は、恋人とは高校生の頃から付き合っているという。俺の口元が緩む。

「早く結婚しちゃえよ、逃げちゃうぞ」

普段、この武村は所属を明らかに出来る警察官だ。今回は事務処理能力を買われてメ

ンバーに加わっている。この仕事をやってる間は、その恋人に会うのは難しいだろう。警察官の恋人となつて六年だから、ある程度の覚悟も経験はあるだろうが、関係が終わつてしまう心配は尽きない。

「ちゃんと連絡はしてる？」

「はい！　してます！」

「そうか。お前も頑張れよ」

「も、ですか？」

ああ、余計なことを言つてしまった。だがいい。『そうだよ、俺もお前みたいに長い付き合いの女がいる』と答えた。笑う武村は目を輝かせた。

会計を済ませて公用車に戻る。嬉しそうな武村を不審そうに見ている相澤に、ジャスマインティーを渡した。

「お前、今でもまだジャスマインティー好きなの？」

「そうですね、悪いですか」

また頬を膨らませる相澤を、武村は不思議そうに見ていた。

公用車はまた走り出す。

この公用車と、優衣香の車は同じ車種で色も同じだ。以前乗せてもらった時に、公用車と同じは嫌だなと呟いたら、これは後期型だから七速なんだよと言つていた。エンジ

ンが変わっただけで外装も内装も変わってないから同じだよと返したら笑っていた。

——次はいつ会えるかな。

キャツプを取り、ヘッドレストに頭をもたげながら考える。

この仕事をしている限り、優衣香を幸せにすることは出来ないと思う。

優衣香は朝行つて夜帰つてくる普通の人と暮らすのが幸せに決まつてる。優衣香が誰かと結婚すれば、俺はこんな悩まなくて済むのに。優衣香を諦めることが出来るのに。

——警察官になりたかったけど、警察官になるんじやなかった。

思わず舌打ちしてしまい、助手席の武村が反応して振り向こうとしたが、相澤に制止されている。

——ごめんね。

署まではあと少し。

またしばらく優衣香と会えないと思うと気が重くなつた。

動物園

十一月十日 午前四時三十八分

神奈川県と接する東京都南部にある町まちざわ沢警察署は喧騒と静寂を行き来していた。

四階の明りの消された廊下の先にある、ぼんやりとした灯りの漏れる会議室へ向かっているのは、俺と相澤裕典あいざわゆうすけ、武村雅人たけむらまさひとの三人。

今日は、十一月十二日から神奈川県横浜市を拠点として数ヶ月に渡る活動をするための初回の会議が予定されている。

この会議室に集まるのは、俺と相澤を含む所轄の違う男性警察官三名と、管理職を含む所轄の男性警察官五名と女性警察官二名の計十名のみ。

会議室にはすでに所轄の四人いて、俺たちが入室した後すぐに、管理職の二人が入ってきた。

午前四時五十三分。予定より早く会議が始まった。



俺は管理職の話聞きながら、会議のメンバーを眺めていた。

ゴリラ、反社、ホスト、熊、もやしっ子、清楚系、ギャルの捜査員に、管理職はチンパンジーとインテリヤクザだ。

どこの所轄でもそうだが、公務員とは思えないメンツを見慣れてしまっている自分が、たまに哀しくなる時がある。

もやしっ子の武村は、一言一句聞き逃さまいと管理職の言葉に耳を傾けている。二十四歳の武村は、この所轄の交番勤務だ。事務処理能力を買われてメンバーに加わっている。

今年で三十四歳になるゴリラの相澤は、ギャルの加藤かとう奈緒なおと同期だ。久しぶりに会ったようだが、加藤が化粧をしていない時の顔を知っているからか、本人だとは信じられない様子でギャルの加藤を穴が空くほど眺めている。

清楚系はギャルを見ているゴリラを見ている。あの目線は色恋沙汰になりそうな気がするが、当のゴリラは全く気づいていない。

そしてゴリラを見ている清楚系とギャルを、熊が交互に見ていた。

なんだこの動物園は。

職場で惚れた腫れたなんて面倒だろう。

——俺がそうだった。だからお前らやめとけ。

俺とデキ婚した奴は俺と同じ所轄の一つ下だった。奴から誘われ、双方共に『遊び』だった。だが何度か体の関係を持った後、妊娠を告げられた。避妊はしていたが失敗したのだろう。

産むか産まないか、両家で話し合いもした。でも奴が産みたい、結婚したいと言ったから、俺は責任を取った。

当時は親父も存命で副署長だったから、結婚式の規模はそれなりのものになった。

子供が産まれた時は幸せだった。子供の顔を見たら、優衣香ゆいかを過去のことだと思えるくらい、それくらい、子供は可愛かった。子供が全てだった。

だが、その子供は俺の子ではなかった。それがわかった時の感情は、人間が抱いてはならない残酷で非情なものだった。

俺は協議離婚ではなく裁判離婚を選んだ。完全に私怨だ。怨みを原動力に金をかけて裁判を起こし、慰謝料請求をした。

確定した慰謝料は五百万円だった。だが奴は親に払わせた。俺と両親に土下座して謝罪した親に払わせた。奴は、俺と離婚した後に警察を辞めた。神経が凶太ければ警察を辞めなかつたらどうが。

裁判離婚によつて、俺に過失のない離婚であることは証明出来たが、戸籍を汚しただけでなく、俺は退官するまで『たくらんまなな托卵松永』と陰で呼ばれる羽目になった。若い奴らはそれを知らないが、悪意を持つてバラす奴はいる。このインテリヤクザがそうだ。だから、この武村は知つてるだろう。

「松永、お前その目つきといい、完全に入り込んで凄いなえ」

「ふふつ、ありがとうございます」

——お前程じゃねえよ、クソが。

管理職のインテリヤクザこと米田よねだから声がかかった。髪型はオールバックで眼鏡をかけ、仕立ての良いスーツを着ている。カフスポタンを付けたワイシャツの袖口に高級時計が見える。

日本人なら誰もが知る高級時計ではなく、興味がない人には何のブランドかわからない高級時計だ。そういうこだわりを持つ面倒くさいインテリヤクザは、眼鏡の向こうにある爬虫類のような目で、いつも俺を蔑んでいる。

——少しは隠せよ。

米田が俺に絡んだことで、会議の合間の一休みとなつた。動物園のメンバーと刑事課長のチンパンジーは睡眠不足で疲れが見えるが、この米田だけは元気そうだ。



資料が配られた。俺が公用車で覚えたあの文字列に追加して覚える文章だ。

制限時間は五分。

皆真剣に文字を記憶している。俺はそんなに苦ではないが、ゴリラの相澤は苦手だ。だいたい俺がいつも確認してやっている。もやしっ子の武村は真剣だ。おそらく大丈夫だろう。

刑事課長の回収の声で武村が資料を集め、バケツに張った水に沈めた。

思ったより時間がかからなかった会議は、午前七時二十分に終了した。

この会議によって決まったことは、俺とゴリラの相澤が女性捜査員とペアを組むことだった。

俺と清楚系、ゴリラとギャル。俺にギャルの加藤奈緒が付いた方が今の外見を変えずに済むのだが、米田には何か意図があるのだろう。

まあいいか。清楚系がゴリラの相澤と恋仲になりたいと真剣に思っているのなら、相澤に相応しい相手かどうか判断するいい機会だ。俺は全力で妨害するけど。

清楚系の名前は野川^{のがわりな}里奈、ここの所轄の二十四歳、武村と同期だ。

会議終了後、俺の元へ近寄ってきた野川は俺の見た目にたじろぎ、小さな声で『よろ

しくお願いします』と言った。俺はこちらこそよろしくと返事をし、一緒に会議室を出た。



暗い廊下を階段に向かって歩いて行くと、野川が俺の前に出て振り返りながら言った。

「あの、お聞きしたいことがあるんですが……」

「どうぞ」

「どうして、私なんですか？ 私は、その……松永さんのことをあまり知らないのですが、なぜ私を選ばれたのか、疑問というか……」

——俺だってそう思ってるよ。

口元を緩めた俺を見て、野川は視線を下に落とす。

「俺より相澤の方がいいんでしょう？ ふふっ」

「ち……違いますっ！」

俺の言葉を聞いて顔を上げた野川は、多分、顔を真っ赤にしている。暗くてよくわからないが。

——わかりやすいな。

この反応を見る限り、相澤に対してまだ本気とまではいつてないようだ。

相澤の見た目はゴリラで十歳も年上なのに、若い野川がゴリラを気に入るのは目が利くんなどとは思うが、俺はこの小動物を見てると不安しかない。

「俺と相澤は官舎で同室だよ。仲良いから。覚えておいて」

「え？」

「じゃ、明後日十時にJ R根岸線の石川町駅で待ち合わせね。今日はゆっくり休んで」

「……はい」

「ああ、俺とペアになった理由は上に聞いてよ。俺が決めたんじやないんだからさ」

俺はそう言つて、野川を四階に残して階段を下りて行く。

二階まで下りた所で駆け下りてくる足音が耳に入る。階上を見上げると相澤が俺を呼んでいた。

「松永さん！ 久しぶりに隣のコンビニでソフトクリーム食べましょうよ！」

相澤は、ジャスミンティーとチョコレートのソフトクリームが好きだった女が忘れられない。だからその女と雰囲気似てる女としか付き合わない。

野川は似てる。だから不安しかない。相澤は同じことを繰り返すから。

「なあ、客で溢れ返る朝のコンビニでソフトクリーム頼むって、バカなの？」

その言葉に頬を膨らませる相澤に、俺は笑いながらため息を吐いた。

伝わる想い

十一月十一日 午後九時二十八分

会議終了後から夕方までの間、俺と相澤裕典あいざわゆうすけはそれまで受け持っていた仕事の引き継ぎをしていた。

帰宅した俺たちは今、自宅で一緒に過ごしている。

官舎は築年数の古い家族寮で、同じ部屋で同居暮らしをしているが、部屋で顔を合わせることは滅多にない。

相澤はキッチンにいる。何か探し物をしているようだ。俺はリビングで横になり、テレビを見ている。

キッチンにいる相澤に、横になったまま相澤の名前を呼ぶと、相澤は面倒くさそうに目を細めながら、『なんですか』と返す。

——ムカつくな。先輩の俺に向かってソレかよ。

「裕くんー！ ごはんはー？」

「ごはんなんて無いですよ」

俺も相澤も、身支度を整えるだけにこの部屋へ戻ってくる生活を何年もしている。

俺が最後にここで寝たのはいつだったか。確か、七月だ。エアコンを入れないまま泥のように眠ってしまい、熱中症になって意識が混濁していた所をこのゴリラに助けられた。

相澤は、水回りの掃除だけはきちんと行っている。その代わりに俺は、煎餅と酒を必ず買って帰るようにしていた。

「煎餅は？」

「食っちゃいましたよ」

「なんだよ、少しは残しとけよ」

頬を膨らませている相澤は、空腹で機嫌が悪くなっていた。

「しょうがねえな、金やるからメシ買ってきて」

「は、」

足取り軽く買い物へ出掛ける相澤の足音を聞きながら、優衣香のことを考える。

今日は明朝八時まで自由だ。優衣香のマンションに行けるから、昨日の会議が終わった後にメールをすればよかったのかも知れないが、なんとなく嫌で送れなかった。

電話は、怖い。優衣香へ電話をするのが怖くて、出来ない。優衣香の部屋で過ごす時

の優衣香しか知らない俺は、電話をしても、電話の向こうの優衣香が何をしているのかわからないから怖い。男がいるんじゃないかとか、そんな不安があつて怖い。

——メール、してみようかな。

ベッドで抱きしめて、初めて知つた優衣香の肌身の柔らかさと温もり。別れ際のあのキス。

もう、これまでの関係ではなくなつたのだから、メールをしてもいいのではないかな。でも怖い。

なかなか勇気が出ず、何度もスマートフォンの画面を見るが、勇気が出ない。

——電話してみよう。メールじゃなくて。

俺は覚悟を決めてスマートフォンの電話帳をタップした。

笹倉優衣香の文字を見つけ、受話器のマークをタップする。

呼出音が一回、二回、三回と鳴る間、俺の心は騒ぐ。

「もしもし！ 敬ちゃん!」

四回目の呼出音が鳴つた時、優衣香は電話に出た。

優衣香の焦つた声が耳に響く。

「優衣ちゃ——」

「もしもし！ どうしたの？ 何があつたの？」

優衣香がここまで焦るのは何故なのか考えたら、俺がこの十三年間で電話をしたのは一度きりだった。しかもそれは親父が殉職したことを告げる電話だった。

それじゃ優衣香は焦るに決まってる。

俺はそれがおかしくて笑ってしまつた。

「ふふつ、優衣ちゃんごめんね、ふふつ」

「えっ！ なに？ なに!？」

「違うよ、何も起きてないよ。ただ、優衣ちゃんの声が聴きたくなっただけだよ。ごめんね」

電話の向こうの優衣香は、安堵する息遣いをしている。それは別れ際に耳元で聴いたあの吐息と同じに聴こえた。

聴き慣れない電話口の優衣香の声をもっと聴きたい。

「今日はね、久しぶりに家において、今、相澤が外出してるから、優衣ちゃんに電話しようと思つたんだよ」

優衣香の優しい声に、俺の心は温もりに包まれた。会いたい。声を聴いているけど、目の前にいないのは寂しい。

「優衣ちゃんに会いたい」

電話口の優衣香も、会いたいと言ってくれた。

次からは葉書ではなく、電話してもいいかと優衣香に言うと、それが普通じゃないかなと至極真つ当なことを言ってきた。

「ふふっ、そうだよね」

それから優衣香は、俺をいたわる言葉が続け、俺は相づちを打ちながら、優衣香の優しい声を聴いていた。

「ああそうだ、優衣ちゃん、今日俺ね、髭剃ったよ」

別れ際のあの激しいキスのせいで、優衣香の顔は髭が当たった部分が赤くなっていた。多分、胸元の肌も赤くなっているのだろう。

「だからもう痛くないよ」

まだヒリヒリするよと優衣香は笑っている。

そろそろ相澤が帰ってくるだろう。優衣香の声を聴いていたい仕方がない。でも、ほんの少しだけでも、優衣香と同じ時間を過ごせたことが嬉しい。

「あの……優衣ちゃん」

「優衣ちゃん、好きだよ……大好き」

電話を切る際に、優衣香から大好きの言葉をもらって、電話を終えた。

優衣香が初めて俺に好きと言ってくれた。それが嬉しくて嬉しくて、頬が緩んでいるのがわかる。そんな自分が恥ずかしい。でもよかった。勇気を出して電話して本当に

よかつ——

「電話、笹倉さんですか」

男の声に驚いて振り向くと、ゴリラの相澤がそこにいた。

「……どこから聞いてた？」

手ぶらで佇むゴリラは、呆れた表情で目を細めて俺を見ている。

「電話切るちよつと前くらいじゃないですかね」

「……そう」

「松永さんの甘えた声を初めて聞きました」

——このまま地球が滅亡すればいいのに。

「……メシは？」

「これから買いに行きます」

「なんでだよ」

「外に出たら寒くて帰ってきたんです」

ゴリラでも十一月の夜に半袖短パンは寒かったのか。当たり前か。

「いいよ、食いに行こうよ」

その言葉にゴリラは目線を外し、首を傾げた。そしてまた俺を見た。そして——。

「大好きな優衣ちゃんに会いたいなら行けばいいんじゃないですか。髭も剃ったから痛

くないし」

——本当に、このまま地球が滅亡すればいいのに。

美容師の弟

十一月十二日 午前九時五十三分

J R 根岸線の石川町駅で、俺は改札口の向こうに野川^の里奈^がの姿を見つけた。

石川町駅は元町側^{もとまち}の改札と中華街側の改札があるが、野川は指定した通りに元町側の改札に現れた。

野川はAラインのピンクの膝丈スカートに白のニットを着て、白いカーディガンを羽織っている。スカートのウエストには黒いリボンが付いていて、カバンとパンプスも黒だ。

パンプスにも頭にもリボンが付いている。

——俺がアレと合わせるの、か……。

野川は、すでに到着している俺を見つけ、小走りになった所で前から来た人とぶつかった。その人に何度も頭を下げて謝罪し、また小走りで改札を抜けてきた。

「おはようございますっ！ 遅くなりましたっ！」

見た目にそぐわないデカい声の清楚系が頭を下げる相手は、青いスリーピースの細身スーツに茶色のベルトと革靴、水色のクレリックのワイシャツを着てる俺だ。

パーマの茶髪を後ろで結んでいる俺だ。

ほぼ直角にお辞儀をする清楚系を壁にもたれて腕組みしながら無表情で眺める俺だ。

——どうしてこのポンコツは目立つことをするのかな。

改札から出てきた人、改札に向かう人、全てがこちらを見ている。小動物のような清楚系と、胡散臭そうなサラリーマン風の俺の組み合わせが特異に映るのだろう。

——お気持ちはわかります。

「おはよう」

「髭を剃ったんですね！ 最初わかりませんでした！」

「あの……行こうか」

「はいっ！」

俺は駅前で待ち合わせしたことを後悔した。今日は弟が勤める美容院で俺と野川の見た目を合わせるために来たが、美容院で待ち合わせすればよかったと心底後悔した。



弟が勤める美容院は駅から徒歩三分。

歩き始めてから俺の左後ろにいる野川は、俺の歩幅について行こうと小走りになっていた。

「ああ、ごめんね、気が利かなくて」

「すみませんっ！ 遅くてっ！」

少し息を弾ませてデカイ声で話す野川に皆振り返る。俺は眉根を寄せて、あと少しだからと野川に言ったが、野川は俺の脇をすり抜けて先を歩いた。

元々背の低い野川の歩幅は狭いし、履き慣れない五センチのヒールで尚更狭くなっていく。すぐに追いつく俺は、『歩調を合わせるから普通に歩けばいいよ』と伝えたが、無視して一生懸命小走りしている。

野川と所轄が同じ加藤奈緒かとうなほは、『野川は頑張り屋ですよ。よくやっています。ポンコツですけどね』と言っていた。確かに頑張り屋さんのようなだ。少しだけため息が出るが仕方ない。

弟の勤める美容院は、一階と二階にテナントがあるビルにあり、中央に踊り場のない階段がある。階段を上がれば左側に美容院がある。

ビルに着いた俺は、エントランスホールでキョロキョロ見回して目を輝かせている野川にため息が出たが、その階段を何の疑いもなく上がろうとする野川に話しかけた。

「あのさ、こういう階段つて下からパンツ見えちゃうけど、そういうの気にしないの？」
目を見開いて俺を見上げる小動物は、口を開けたまま何と返事をすればいいのか悩んでいるようだ。

「いや、俺が見るとかじゃなくてさ」

少し疑いの目を向けながら『それはわかります』と言う野川に、俺はさらに眉根を寄せて後ろにあるエレベーターを指差した。



エレベーターの中で、俺は野川の香りに気づいた。この甘い香りは優衣香と同じだ。二階に到着して野川に訊ねると、商品名を答えた。確かにそれは優衣香のシャンプーに書いてあった商品名と同じものだった。

「会議の時、松永さんからこの香りがしてビックリしたんですよ！ これすっごくいい匂いしますよね！ お気に入りなんです！ 松永さんですか？ お揃いで嬉しいです！」

——びつくりするほどポンコツだな。

でもよかった。ポンコツ警察官で本当によかった。サロン専売品の女性向けヘアケ

ア商品を独身男性警察官が使うと信じて疑わないポンコツ警察官で本当によかった。普通、女の部屋で使ったと思うのが自然だろうに。

だが、この小動物はインテリヤクザの米田《よねだ》の刺客だ。全て筒抜けになるだろう。

無表情でポンコツ野川を眺めながらそんなことを考えていると、ガラスの扉の向こうの人影がこちらを気にしている気配がした。

清楚系と胡散臭そうなスーツ着た男——そんな俺らを不審に思うのは当然だ。

「……兄ちゃんだ」

美容院から出てきて、俺が自分の兄だと確信が持てずにいた弟の声でした。

「おう」

「いらつしやい」

弟に毎回髪型を変えてもらってその時の仕事に合うようにガラリと印象を変えるが、この弟も毎回違う髪型や髪色をしている。今日は不思議な髪色をしていた。

「その頭何色なの？」

「これはチンチラシルバーだよ」

「あ！ 聞いたことがあります！ 綺麗な色ですね！」

「……ああ、こちらは野川だよ」

「はじめまして！ 野川です！ よろしくお願いします！」

ほぼ直角にお辞儀する野川を、弟と顔を見合わせて苦笑いした。



店内では女性美容師が待っていた。女性美容師には野川のカットとヘアアレンジの講習をお任せする。

俺は弟に案内されたシートに座り、鏡越しに弟と顔を見合わせるが、早くもお互いに挫けそうになっていた。

「俺、アレを初めて見た時の格好を見てさ、この胡散臭いサラリーマン風でいけると思ったんだけど、今日のアレ見たら完全に間違ってた」

「あー、方向性は合ってるけど……若干ズレてるね」

「どう見てもホストクラブの客引きと客、もしくは女衞せげんと売られた女だろ」

弟は笑いを堪えて肩が揺れている。

「俺もコレはやり過ぎだったかもと思う……でも、頭にもリボン付けてるの見て挫けたよ」

「……小柄で可愛い子だね」

「今後は普通のスーツにするから。よろしく」

小動物の野川を横目で見て、鏡越しに俺を見た弟のため息が聞こえた気がした。

◇

「午後は加藤さんが来る予定だよ」

ストリートパーマの薬液を手際よくかけている弟から声がかかった。加藤は相澤とペアを組んだから、ギャルから相澤に合わせた髪型にするのだろう。会議で見た加藤はパーマをかけたロングヘアで、グレーっぽい髪色だがハイライトとインナーカラーもしていた。

「ペアは相澤だから。相澤に合わせた髪型にしてあげて。ヘアアレンジもね」

「オツケー。加藤さんは器用だからヘアアレンジを教えてもいつも完璧なんだよね」

その言葉で弟と鏡越しに目が合い、そのまま野川へ視線を動かしたが、多分、二人とも同じことを考えただろう。だが、あえて口にするこゝともないなど目で会話をした。

◇

「今ストリートパーマやって、次はカラーで、最後にカットするよ」

「時間かかるよね？」

「そりゃ。時間になつたらまた来るよ」

普段美容院のこの待ち時間は雑誌を読んでいるが、今日は野川を連れているから野川と美容師の会話を聞いてみようと思つた。

事前に弟経由で警察官であることは伝えてあるから職業や仕事に関することに美容師は触れないが、話を聞いていると若干、危ない気がする。

野川は警察官になつて六年だが、ポンコツ故に危機感がない。こんなのとペアを組むのは本気で嫌だが、仕方ない。相澤とペアを組んだ加藤の方が俺と見た目が合う。年齢もそうだが、何よりも彼女の能力があると俺はとても助かる。

「好きな人がいます」

若い女の子の声なら微笑ましいで済む言葉も、ここで聞くのはよろしくない言葉——。

その声の主である野川の姿を鏡越しに眺める。相澤のことを言っているのだろう。官舎で同室の仲のいい俺に聞かせたいのか。まあ、野川ならそのまま相澤はコロツといくだろうが、俺は反対だ。だってこのポンコツは信用出来ないから。

——裕くんには先約がいるから諦めな。

ピピツとタイマーが鳴って、弟がこちらにやってきた。肩に巻いたタオルで頭を巻き、奥にあるシャワー台へ向かう。

やっと野川から逃れられることに安堵のため息が出た。

「疲れちゃった？」

「いや、アレがもう嫌になった」

「ふふっ！ もう？」

薬液を流している間、弟は優衣香が来店したことを話していた。

「ああ、家にシャンプーがいつもと違うのがあった。ここで買ったの？」

「そうそう。女の子の香りがするシャンプーね」

「ふふっ」

「優衣^{ゆい}ねえは、もう私は女の子って年齢じゃないよと言ってたけど」

弟は優衣香のことを『優衣ねえ』と呼ぶ。歳の離れた弟を優衣香は弟のように可愛がった。弟は幼い時に上手く名前を言えなくて、『優衣香おねえちゃん』を略して『優衣ねえ』と呼んでいた。

「美容師さん。そのシャンプーのあまーい記憶がポンコツ野川に上書きされて、ぼくとても辛いんです」

「ふふっ！ 最悪だ、そりゃ」

野川の席からは女性美容師と仲良く話す声が聞こえる。言葉の端々に相澤のことを言っているのだと思われる言葉が散らばっていた。

それを聞きながらため息をつく、弟は後で炭酸ヘッドスパやってあげるよ、と言った。

幕間 エレベーター

十一月十二日 午後一時七分

笹倉優衣香は町沢署へ向けて神奈川県相模原市内の国道十六号線を運転しているが、信号待ちで着信に気づき、イヤホンのボタンを押して応答した。

「もしもし。笹倉です……ああ、こんにちは」

「……お気にならさずに」

「今、町沢署に向かつてる所なんですよ。もうすぐ着きます」

「間宮さんも署に今いらつしやるんですか?」

「……はい。今日は交通捜査課で送致……検番を聞くだけなんですけど、それが終わったらでよろしければ」

「そうですね、わかりました。そうしましょう」

電話を終えた笹倉優衣香は少し眉根を寄せて、小さく息を吐いた。

◇

町沢署に着いた笹倉優衣香は五階にある交通捜査課へ行くこうとして、一階エレベーターホールで呼出ボタンを押して待っている。

そのエレベーターの横には廊下があり、その廊下から出てきた相澤裕典あいざわゆうすけが笹倉優衣香に気づいた。

相澤裕典は笹倉優衣香に近寄り話しかけようとしたが、エレベーターに乗り込んだ笹倉優衣香は相澤裕典に気づかずエレベーターの扉は閉じられた。

◇◇◇

久しぶりに見た笹倉さんは元気そうだったなと思いつつながら、俺はエレベーターの所在階数のランプを眺めていた。

——五階、か。交通捜査課かな。

五階で用事が終わるのを待つて話しかければいいかと考えて、俺もエレベーターの呼出ボタンを押す。

エレベーターの階数表示を見上げていると、このタイミングでは聞きたくない声が耳

に入った。

「相澤、なにやってんの。階段で行くよ」

——やだよ。松永さんじゃあるまいし。

声の主に振り向くと、そこには派手な服装のギャルメイクの加藤奈緒かとうなほがいた。

加藤は階段を指差していて、俺は顔を顰しかめたが、有無を言わせない顔の加藤に腕を叩かれ、階段で上がって行くハメになった。

「奈緒ちゃんさ、上下二階は階段でって言われてるけど、四階ならエレベーター使っていないだよ？」

「四階なんて大した階数じゃないんだから階段で十分だよ」

「もー！」

「んふふ……」

階段を上りながら会話をするが、体力のある加藤はさっさと駆け上がり、俺は息が上がる。

加藤が四階に着き、廊下に出ようとした所で俺は呼び止めた。

「奈緒ちゃん、俺は刑事課に用があるから先に行つてよ」

「五階に行こうとしたの？」

「そうだよ」

「ならエレベーター乗ればよかったのに」

「もー!!」

「んふふ……」

俺は加藤が四階の会議室に入ったことを確認してから五階に向かった。

五階に着いてそつと廊下を覗くと、交通捜査課の課員が廊下にあるベンチに笹倉さんと並んで座っていた。課員が台帳を膝に乗せてそれを指差している姿が見える。笹倉さんはそれを手帳に書き写していた。

手帳を閉じた笹倉さんは手帳をカバンにしまい、課員も台帳を閉じて二人は立ち上がった。笹倉さんがお辞儀して一步踏み出した所で俺は廊下に出る。

何食わぬ顔ですれ違う交通捜査課員に挨拶をし、エレベーターホールに向かう笹倉さんに声をかけようとしたが、笹倉さんはエレベーターホールにいた誰かと話していることに気づいた。

エレベーターホールをそつと覗くと、笹倉さんが話しているその男を見て、驚いた。

二人は到着したエレベーターと一緒に乗り込んで行った。

——間宮さん、また笹倉さんと話してた。

なぜ刑事課の間宮さんと笹倉さんは親しげに話しているのか。そんな疑問を抱きながら俺は、階段で急いで下りて行った。



笹倉さんの仕事は、保険の調査をしていると言っていた。病院や警察、検察や裁判所にも行くらしい。

警察署には交通事故以外にも盗難事件に関わる調査もあつて刑事課に行くこともあると言っていた。だから刑事課の間宮さんと懇意になることもあり得る。でも、捜査状況は絶対に話せないし、逆に刑事課は笹倉さんみたいな人を煙たがる。入室すら許さな
いはず。

——松永まつながさんは笹倉さんと間宮さんのことを知っているのかな。

笹倉さんのマンションの近くに迎えに行った時の、松永さんの喜びに満ち溢れていた姿と昨夜の松永さんの電話の内容を考えると、笹倉さんはやつと松永さんの気持ちに合ったのだと思う。だから笹倉さんは大丈夫だと思うけど……おそらく、間宮さんは笹倉さんのことを狙ってる。間宮さんは合コンで好みのタイプと真ん中がいた時と同じ顔してるから。

——松永さんに教えた方がいいのかな。

前に笹倉さんと間宮さんを署の駐車場で見かけた時、笹倉さんはパンフレットのよう

なものを間宮さんに見せていて、間宮さんはスマートフォンを持って、二人は楽しげに話していた。

笹倉さんは、間宮さんが担当する事件の被害者なのかも知れない。でも、笹倉さんが被害者になったら松永さんが大騒ぎする。それで俺も知ることになるから違うと思う。

ただ笹倉さんは仕事で間宮さんと関わっているだけなのかも知れない。でも警察から情報を得たいのなら、まず松永さんに言うだろうし、松永さんはそれを受けたら俺を使うと思う。でも俺は何も言われていないし、そもそも松永さんはいくら笹倉さんがそれを要求しても絶対に拒否する。

松永さんの秘密保持は徹底しているし、逆に笹倉さんがそういう要求をしたら、それこそ百年の恋も冷めると思う。それくらい冷酷な時が、松永さんにはある。

松永さんは女にモテるけど、特定の恋人がいたことがない。笹倉さんに恋人が出来るかと自暴自棄になって他の女と関係を持つけど、それは体の関係だし。たまにトラブルになってるけど……。でも笹倉さんに恋人がいない間は、絶対に他の女に見向きもしない。絶対に。

——どうしよう。

ここ数日の松永さんを見ると、多分、伝えたら大変なことになると思う。

てつきり俺は松永さんと笹倉さんは恋人関係で、何かしらの事情で結婚しないだけだ

と思っていた。でも、抱きしめたことはあってもそれ以上のことはしてないと聞いた時、驚いた。

夜遅くに女性の部屋を訪れるのに、何もしたことがないなんて信じられなかった。

十四歳の時に笹倉さんを好きになってから、ずっと想い続けていると聞かされた時は、ただただ驚いた。

昨夜の電話を切った松永さんのあの喜びようは、その二十年を超える想いが伝わったのだらう。そうでないなら何なのか、逆に聞きたい。

だから間宮さんのことを伝えたらどんな状況になるのか、そんなの想像したくない。

——見なかったことにしよう。

俺は、何も見なかった。何も見ていない。

俺は、笹倉さんと間宮さんの秘密を守る。それでいい。



一階に着くと、外に出た笹倉さんの後ろ姿が見えた。間宮さんはいない。一人で警察署を出て右へ歩き出した。駐車場は左なのに……コンビニに行くのかな。そう考えながら笹倉さんの後を追った。

——あ、信号が変わっちゃった。

足止めされた俺は笹倉さんの後ろ姿を見ていると、署の裏手から現れた男に駆け寄っていた。間宮さんだった。間宮さんはデレた笑顔を笹倉さんに向けている。

「笹倉さん……なんで間宮さんと……」

コンビニへ入って行く二人を眺めている俺は二人の追跡を止めて署に戻った。

凍てつく心

十一月十二日 午後十時四十五分

「お店つてこの時間でも営業してるんですか？」

中華街のメインストリートから外れた道を歩く野川^の里^わ奈^りは、美容院でセットしてもらった髪を触りながら俺を見上げている。

「あの子。頭、グズグズだよ」

野川はその言葉に驚いてカバンから鏡を取り出し、髪を直し始めた。

——なんで俺に鏡を持たせるんだよ。

若干ムカつくが、野川のその姿は優衣香と重なる。

十五年前、俺が持つ鏡を見ながら優衣香も髪を直していたから。

◇

優衣香の髪型は昔から変わらないストレートのロングヘアで、肩下十五センチ位だ。たまにパーマをかけることもあるが、だいたいはストレートでいる。

子供の頃から中学に入るまではずっとシヨートヘアだったが、優衣香のお父さんがある時、優衣香にこう言ったという。

『優衣ちゃんはお父さんだから髪は長い方がいいと思うよ。お父さんはそう思うよ』

美容院に行き、耳が出るシヨートヘアにして帰宅した優衣香は動揺する父親からそう言われて、その後は髪を伸ばしている。

そのシヨートヘアがロングヘアになる頃に優衣香の父親が亡くなったが、優衣香はお父さんの好きな長い髪で見送れたからよかったと言っていた。

二十歳のある日、駅前でお父さんを見つけた優衣香に声をかけられたが、俺は目の前にいるシヨートヘアの女の子が優衣香だとわからなかった。

優衣香だと気づいて呆然とする俺を不思議そうに眺める優衣香は、『もしかして敬ちゃんも長い髪がいいの?』と訊いてきた。

俺が優衣香に恋を覚えたのは、優衣香の髪が肩にかかる頃だった。子供の頃から知っているはずなのに、髪が長くなった優衣香が別人みたいで、髪が風に揺れる優衣香に恋をした。

当時、既に警察官になっていた俺はなかなか実家に帰ることが出来ず、優衣香にも会えなかった。

その日は久しぶりに実家に帰るから、優衣香と会えたらいいなどは考えていたが、子供の頃の優衣香そのままになってしまっていたことに少し、がっかりした。

男の人は長い髪が好きなんだねと優衣香は笑っていた。

警察官になってから優衣香に会うことは年に一度あるかないかくらいになっていたが、メールのやり取りはしていて、美容院に行ってきたよとメッセージが届くこともあった。

二十二歳の時、久しぶりに会う優衣香と飲みに行ったが、待ち合わせ場所には髪を茶色に染めてパーマをかけた優衣香がいて、カールする長い髪を揺らせて駆け寄ってくる優衣香に、俺はまた恋をした。

飲みに行った帰り道、優衣香に付き合っただけだと驚いて振り向いた優衣香は、酔って肌が上気していて、その姿に俺は我慢が出来ず、腕を掴んで抱き寄せたが、優衣香は笑いながら『嫌ですよ』と言って俺の肩を押し離れた。

その時に優衣香の髪が乱れて、それを指摘すると優衣香は直そうとしたが、鏡を見た方がいいと俺が言って鏡を持ってあげた。

優衣香は髪を直しながらも俺に視線をやり、ごめんねごめんねと言っていた。



「まだなの？」

髪から飛び出していたピンを外し、口に啜えて髪を直し、そのピンを指先で開いて髪に留める野川を器用だなど思ったが、俺に鏡を持たせておいて何も言わない野川の頭を引つ叩こうかと思っている。

鏡を覗き込み、髪型を直す野川が『あと少しです』と言った時、野川の視線が右に動いた。

「あれっ？ あの人は、間宮さんじゃないですか？」

野川が指差す方向を見ると、階段を下りたスーツの男がいる。

道を挟んだ向こうのビルの階段に、確かに刑事課の間宮がいた。こちらからは階段の半分が手前にある自動販売機に隠れている。

間宮は振り返り階上を見上げて、口を動かした。連れがいるのか。ああ、女だ。ベージュのハイヒールを履いた白い足が見えた。黒のタイトスカートを履いたその女は、あと一段という所で足を踏み外した。

間宮は女を抱き止めた。

女の長い髪が間宮の腕にかかる。

間宮は女の腕を掴み、右手で腰を支えた。

女は間宮の右腕を掴む。

俯くその女の顔を覗き込むように間宮は腰を屈め、笑顔はその女に向けた。

顔を上げて間宮と笑い合う女は――

――優衣香だ。

十一月の寒空の下、頬を撫ぜる冷気よりも、俺の身体は熱を失っていった。

「間宮さん、デートですかね？ ふふつ、見ちゃったー、私見ちゃったー」

野川の声に我に返った俺は、自分に驚いた。目の前で何が起きようとも常に平静でいられると思っていたし、これまでそうだったのに、目の前に優衣香が他の男と一緒にいるのを見ただけで、我を忘れてしまった自分に驚いた。

「松永さんは刑事課の間宮さんを知ってますよね？」

「ああ、知ってるよ。俺の一つ下」

「そうなんですか」

「まあ、間宮は独身だし、女と一緒に問題ないでしょ」

「そうですけど……あっ！」

「ん？」

歩き始めた二人の後ろ姿を見ている俺とは違うものを、野川は見ていた。

「線路の高架橋の向こうって、ラブホテルですよね？」

野川の指差す方向を見ると、高架橋の向こうは確かにラブホテルだった。煌煌としたラブホテルのネオンサインが、二人に見えていないはずはない程に目立っていた。

「ふふ……見ちゃったー。加藤さんに報告しよ——」

俺は、加藤の名前を出した野川の後ろの髪を掴んだ。

髪が引つ張られ顔を上げた野川に顔を近付け、野川の目を見る。俺の前髪が野川の前髪に触れる距離で。

「野川、よく聞け。秘密は魂と同じだ。売り渡すな……わかったか？」

小さな声で『わかりました』と言う野川は、目つきも声も豹変した俺に驚きと恐怖が緋い交ぜになった目をしている。

だが、これは大事なことだ。知り得た秘密は漏らさない。何があっても、だ。

野川から離れた俺は、間宮と優衣香の後ろ姿を見ていた。野川は二人と、二人を見る俺を交互に見ている。

このままこの歩道で横断歩道を渡って、少し坂を登って左に行けば石川町駅だ。だが直進したら、ホテル街だ。

二人の歩む先を見ていたい。だけど、見たくない。

昨日の夜、優衣香は会いたいと言ってくれた。俺のことを初めて好きだと、大好きだと言ってくれた。だから信じてもいいはずだ。

間宮と一緒にいる理由は知らないが、それだけはしないはずだ。だって次会った時はこの前の続きをすると約束したから。優衣香は俺の女になったから。

どうしてだよ。何でだよ。何でこんなことになってるんだよ。何で優衣香が間宮と一緒にいるんだよ。何で間宮が俺の優衣香に触ってんだよ……何でだよ。

「あの……松永さん……」

「あ？」

「いや……」

間宮と優衣香に背を向けて、俺たちは歩き出した。

野川は忠告を守り、一度も振り返ることはしない。

俺にはそれが恨めしかった。

「お店ってまだやってるんですかね」

「ああ」

時計を見ると午後十時五十二分だった。

文字盤に街灯の灯りが届いてカレンダーの数字が目に入る。

——優衣香の誕生日だ。

誕生日に間宮と一緒にいる優衣香。

優衣香の部屋で一緒にいる時の優衣香しか知らない俺。

俺の知らない優衣香が、そこにいた。

—— 第1章・了 ——

第2章

幕間 想いは秘密のまま

十一月十五日 午後八時五十三分

海沿いに続く遊歩道に等間隔に設置された照明灯が、夜の海の海面を青白く照らしている。

ベンチに座る二人がその海面を眺めていると、潮風が女の髪を揺らし、隣にいる男の頬を撫ぜた。見上げる空には雲一つなく、月が眩く輝いている。その輝きに誘われるようにして、その女は口を開いた。

「ねえ……」

女は身を寄せて男の左脚に右手を添えた。身体の温もりが少しづつ伝わるのか、男は横目で女を見ている。男はその女の小さな肩を抱くと、女は顔を上げて真正面を向いている男の首すじに唇を近づけて吐息を漏らした。女の生暖かい吐息は耳朶にも広がり、また男が横目で女を見る。

男は女の肩を抱く左腕に力を込めて、女の身体を強く引き寄せて――
「やめて。ほんとやめて。くすぐりたいよ奈緒ちゃん。マジやめて」

相澤裕典は首を竦めて隣の女に文句を言うが、女に手の甲で頬を叩かれていた。



海に面した公園のベンチで俺たちはカップルに扮して対象者の監視をしている。隣
の加藤奈緒はギャルから割と適当な格好に戻り、寒い海っペリでズボンが履けることを
喜んでいた。

「息すんなってこと？　無理じゃない？」

「そうだけど！　そうだけど！」

「あっ」

「おっと……」

監視対象者がベンチから立ち上がり歩き出した。

「こっち来るね」

「……奈緒ちゃん見といてね」

加藤の肩を抱いた手を腰に移動させて加藤の背中を支えた。右手は太ももに置く。

加藤の視界を妨げないように身体を屈めて加藤の左耳に顔を寄せると、視界の端に対象者が入った。

「あつ見えた」

「……んっ」

「もしかしてくすぐったいの？ ふふっ」

加藤は左腕を俺の背中に回し、指先で首すじをなぞりながら、耳朶にそつと触れた。

「痛たたたたたっ！ やめて奈緒ちゃん！ 爪！ 食い込んでる！ 痛いよっ

！」

加藤は『痛いのは嫌なのね……なら……』と声音を変えて俺の左耳を食んだ。舌が触れた感覚がして首すじがぞわりとした。吐息が耳に流れ込む。

加藤が纏う香水を強く感じた時、加藤の背中を支えていた左腕の熱は奪われて、その代わりに加藤と合わせる身体が熱を持った。加藤は左手で後頭部の髪を撫でて、そして耳朶にそつと舌先を這わせた。

「ほら行くよ」

加藤はまた手の甲で俺の顔を叩き、身体を振らせて立ち上がった。呆気にとられたが、俺もすぐに立ち上がり加藤の手を繋ごうとした。だが加藤は左腕に腕を絡ませてきた。

手を繋がずに絡ませているのはなぜだろう。

腕に奈緒ちゃんの胸の感触がある。

意外と大きい……かな。多分そんな気がする。

でも今の何……なんだったの……びっくりした。

奈緒ちゃんは今までこんなことしなかったのに。

しなだれかかると加藤は左手も腕に添わせてきた。その手に力が込められて、顔を上げた加藤が口を開いた。

「ねえ、相澤」

「……うん？」

「あんた動揺してるでしょ？」

「うっ」

「バカなの？」

大きいため息を吐いた加藤は語り始めた。松永さんとペアを組んでいる野川が俺のことが気になっていられるらしいと。俺と同期である加藤に、俺のことを聞き出そうとしている姿は若い女の子として考えたら可愛いが、どうにも加藤は気に入らないという。

「野川って、あんたタイプでしょ？」

「あー、うん……」

「……あのさ、ベンチでやったのとコレ。私じゃなくて野川だったら、あんたコロツとい
くでしょ?」

「うん」

「バカなの?」

「何度も言わないで! わかってるよ! もう!」

実は松永さんからも野川の件は言われている。松永さんはペアを組んで毎日観察し
ているが、どうにも信用ならないと。それは仕事ではなく、彼女個人が信用ならないと
言っていた。

「十歳も歳が離れてるゴリラを好きになるなんて天変地異でも起きるのかなと思っただけ
ど、ちよつと私は……あの子はおすすめ出来ない」

「天、変、地異」

「ゴリラには触れないの?」

「ゴリ……いいよ続けてよ、ゴリラは事実だから」

「……野川がさ、刑事課の間宮さんが女とラブホに行く所を見たって言うんだよ」

心臓を鷲掴みにされたみたいになった。

頭に浮かぶのは笹倉さんの顔、そして笹倉さんの車の脇で楽しげに話す二人、間宮さ
んに駆け寄る笹倉さんの後ろ姿。

「……いつの話?」

「えっ……あー、十三日の午前中に連絡来たから十二日じゃないかな」

——署で笹倉さんを見た日は十二日だ。

「それで?」

「ああ、その時、一緒にそれを見てた松永さんにマジギレされたんだった」

——松永さんも見たんだ。

「……なんで?」

「私にバラそうとしたから。だから秘密は守れ、秘密は魂と同じだってマジギレされたんだった」

「ああ、だろうね。でも結局それ含めて奈緒ちゃんに喋っちゃってる、と」

「そうそう」

「奈緒ちゃんも俺に喋ってるよ?」

「私は一度流出した情報は全力で拡散するけど?」

「奈緒ちゃん!」

「ふふっ、私が見たんなら誰にも喋らないよ」

その後も加藤は野川の懸念材料を話していた。

松永さんから言われたことや素行、服装、ヘアスタイル、使っているスタイリング剤

までも話していると。

「そういうの米田に全部筒抜けだよ」

「えっ?」

「そういう魂胆でペア組ませたんじゃないの? 野川と松永さん」

「……なんで?」

「私は情報漏らさないから」

「ああ……」

「まあ、多分、女関係とか、弱点を知りたいんじゃないのかな」

聞いたことある。

米田さんが本気で惚れた女は、実は松永さんが結婚しちゃったから諦めて米田さんと付き合ってたらしい。その女は、松永さんの離婚を知って米田さんをさっさと捨てた。それをいまだに恨んでいると聞いたことがある。

「そういうえば相澤って同業に手を出したことはないよね、確か」

「うん、ない」

「それがいいよ」

監視対象者を視界に入れて端にいる加藤を見るが、そんなことを言われてしまうと、なんとなく、加藤がずっと身体を寄せたままでいることに居心地の悪さを感じてしま

う。そつと離れたが、それを横目で見た加藤が舌打ちした。

「え、何?! 　なんで舌打ちしたの!？」

「寒いから」

そういうことかと納得し、俺はまた加藤に身体を寄せた。だが加藤は身を躲した。確かにここは寒い。街中でなら問題のない服装だが、海つペりのここでは少し寒いと思う。だから加藤は寒くて俺の腕にしがみつくようにしていたのか。加藤に悪いことをしてしまったと思つて、俺はまた同じようにするよう加藤に言ったが、加藤は『嫌ならいい』と言つて体を寄せてこなかった。

「嫌じゃないよ」

「いい」

「奈緒ちゃん」

「いいの」

加藤は腕を解いて後ろに下がり、カバンを右に持ち替えた。横目で見る加藤は少し不機嫌そうにしている。このまま押し問答を続けると手の甲で頬を叩かれるか腕を叩かれるか新技を披露されるかだから本当は言いたくないけど、持ち替えたカバンの取手からギョツと握りしめて、潮風で髪が揺れると首を竦ませる加藤をそのままに出来ない。

「奈緒ちゃん、寒いんでしょ?」

「さうの」

腕を組まないのならと手を差出すと加藤は少し躊躇してから手を繋いできた。加藤は背が高く痩せていて、手も細い。俺は握る手と指先に力を込めた。でもいつまで経っても加藤は俺の指を握り返してこなかった。重ねた加藤の手は冷えたまま。

「……奈緒ちゃん、こっちはおいで」

絡めた指先と手はそのまま、後ろ手で加藤の手首を掴んで繋いだ手を解く。強く腕を引き、加藤を俺の右側に移動させた。怪訝な顔をする加藤の背中に腕を回し、二の腕を抱き寄せて俺の身体に密着させた。

「寒いんですよ？」 奈緒ちゃん」

意図がわかった加藤は声を出さずに笑う。

「野川が相澤を好きになる理由もわかるよ」

「え？」

「裕くんは優しいから」

「そうかな？」

「早く結婚しなよ、ふふっ」

二年ぶりに会った加藤はギャルメイクで、最初は加藤だとわからなかった。でも今は殆どメイクしていない見慣れた顔の加藤で、いつもの目鼻立ちの整った美人だ。美人な

のに今だに独身で不思議に思うけど、中身が狂犬だとバレてるから難しいのだろう。

松永さんからは、裕くんは結婚したいなら加藤とすればいいと言われている。家に帰って加藤がいるのは嫌ですといつも答えているが、松永さんは裕くんみたいな男は加藤がいいんだよと言っていた。

加藤は美人なんだけど、俺は小柄で可愛いタイプが好きだから、加藤はちよつと苦手だ。中身は狂犬だし。

「ねえ、今から話すことは秘密にして欲しい」

「うん、秘密は守るよ」

加藤をちらりと見るが、目を伏せたままで返ってこない。何だろうと思って顔を覗き込もうとした時、加藤は俺を見た。

「なに？ 話して」

「私は裕くんがずっと好きだった」

「はっ!？」

「秘密だよ。守ってよ」

加藤の身体が少し震えている。

多分、寒いからじゃない。

ああ、そうか。松永さんが言う加藤と結婚ってこのことだったんだ。それに加藤は

ギャルの格好から普通の格好になったただけだと思っただけど、よく見たらリボンの付いたアンサンブルを着て、真珠のピアスをして、リボンの髪留めでハーフアップにしている。毛先がカールしてる。メイクだっていつもと……こう……うん、なんか違う。よくわからないけど可愛い格好してるんだ。

——俺のためにそうしたんだ。

そう思ったら加藤も女性なんだと初めて認識して、好きと言われてびっくりしたけど嬉しくて、加藤の二の腕を抱いた手に力を込めた。

視界の横にいる加藤を見ると、加藤は少し驚いていたが、俺を見て——
「痛つつつたんですけど!!」

そう言い切らないうちに加藤の肘は俺のみぞおちにめり込んでいた。

——やっぱり家に帰って加藤がいるのは嫌だ。

三人組の恋路

十一月十七日 午前十一時三十六分

バルコニーに面した窓から差し込む陽の光が室内を明るく照らしている。その光を受けるようにして椅子に座って、いつもの資料に目を通してしていると玄関が開いた音がした。

「お疲れ様です……あれ、松永さんだけですか？」

捜査員用のマンションに戻った加藤奈緒がリビングの扉を開けて部屋を見回している。

加藤はグレーの髪色から濃い目のブラウンになっていた。前に入れたハイライトとインナーカラーの部分はそのうち色が抜けていくのだろう。

ハーファツプにした髪型は毛先が揺れていて、パールのピアスをしている。ギャルから清楚系のスタイルになった加藤は、どんな格好をしても似合う女性捜査員だ。

「ああ、お疲れ。一人だよ。相澤は？」

「官舎に戻ったようです。夕方には戻ります」

加藤は、部屋に入ってから俺を視界に入れて見ていない目の動きを止めた。俺は椅子の背もたれに体を預けて右脚を左脚の膝に乗せているが、それを窺めるような目線で真つすぐ俺を見据えて、少し首を傾げた。

「体調がすぐれないご様子ですが」

「正解。さすがだね……って、見ればわかるか。ふふつ」

「睡眠不足でしょうか」

「それもあるけど、ほら夏は……大変だったでしょう？　そのツケを今払ってる感じだよ」

「あー……なるほど」

テーブルに来た加藤は俺の斜向かいに座った。視界の右上方にいる加藤を見ながらも資料を読む。

会議でギャルメイクだった時は思わず二度見したが、今日のメイクは桜色に上気した肌のような艶のあるメイクで、柔らかな女性らしさのあるものだ。

資料をテーブルに置き、俺は腕を組んで加藤の顔を見た。

「相澤もそうだったけど、あいつはどう？　元気にしてるの？」

「ゴリラはいつも元気です」

「ふふっ……そうだね」

加藤は会議の時より雰囲気が少し変わっていた。それは髪型やメイクのせいではない。何かはわからないが、変わったのは事実だ。

「相澤と仕事するのは二年ぶりだよね？　どう？　毎日幸せ？」

「それはどのような意味でしょうか」

「ペア組んでる間にどうにかしちゃいなよ」

「松永さんは何のお話をされているのでしょうか」

加藤はずっと俺の目を見て話しているが、口元に笑みを浮かべながらも目が全く動かない。

——どうしよう。わからない。

「もー！　わからないよ！　相澤と何かあったんでしょー？　教えてよー！」

「何のことですか？」

「ふふっ……いいよ、相澤に聞く」

この加藤は信頼出来る捜査員だ。秘密があっても表情ひとつ変えずにのらりくらりとかわ躲かしてしまふ。

「今のうちにシャワー浴びますね。ああ、そうだ。野川はどちらへ？」

「コンビニだよ。ちようど行き違いだったと思うけど、会わなかった？」

「姿が見えたので隠れました」

「ふふっ、なんでだよ」

「……野川はどうですか？」

「仕事は、よくやってるよ」

言外の意味を含めたが、それに気づいた加藤は睨めるような視線を送ってきた。俺は目を大きく開いて歯を見せた笑顔であしらう。

「……お疲れなのは野川も原因の一部でもある、と？」

「だってさ、すごいポンコツなんだよ？」

「ふふっ」

野川が原因の疲れなど微々たる——いや、二割程だが、大きい原因は——睡眠不足の原因はそうじゃない。それを加藤に見透かされても、加藤は何も言わないし何もしない。だが、俺は知られたくない。自分でどうにかしないといけないから。

俺は座り直して肘をテーブルにつき、組んだ指に顎を乗せた。加藤を真つすぐ見据えて声音を変えて話しかける。

「なあ加藤。シャワーは野川が帰って来てからにしな」

「なぜでしょうか？」

「今、俺一人。よくないよ」

「松永さん以外でも、他の男性捜査員が一人の時にもシャワーを使うことはあります。問題はないかと思いますが」

「俺には、ある」

「と申しますと?」

「俺にとつての奈緒ちゃんは、相澤からの預かりものになった、から」

加藤の眼球がほんの数ミリ動いた。

ここまで感情を露わにするのはあの日以来——加藤の相澤に対する恋心を指摘した日以来だ。



七年前、俺は加藤とペアを組んでいた。

夜、観光地の遊歩道を手を繋いで歩いていると、繋ぐ手に微かに力が加わり、どうしたのかと思つて加藤を見たが、体が微かに震えているもの特に表情からからは異変を感じなかった。

その時、視界の端に相澤がこちらへ歩いてくるのが見えた。

相澤はこちらに気づかなかつたが、相澤は野川のような『小さくて可愛い』を体現し

たような女と手を繋いで歩いていった。

相澤が今でも忘れられない、ジャスミンティーとチョコレートのソフトクリームが好きな女だった。

相澤がプライベートであることは一目瞭然で、チョコレートのソフトクリームを相澤が持ち、女に食べさせていた。女の口に溢れたソフトクリームを見た相澤は、繋いだ手を解いて女の髪に触れ、頭を自分に向けさせた。そして相澤は女に顔を近づけた。その後にするのはひとつしかない。

俺は加藤と繋いだ手を解いて腰に回して遊歩道の欄干に加藤を押し付け、肩に手を置きながら耳元で『ごめんね、見たくない』と笑いながら言うと、加藤は『そうですね、私もです』と返してきた。

声音はいつもの加藤だったが、俺のジャケットを掴んでいた。加藤はこの状況だと俺の背中に腕を回すか前から肩に手を乗せるのに、この時の加藤はジャケットのポケットの上を、震える手で強く掴んでいた。

相澤が通り過ぎたことを確認してから加藤と体を離れたが、加藤の視界に相澤と女が入ってしまったようだった。その時の加藤は相澤を目で追っていて、唇をギュツと噛んでいた。

俺が加藤の恋心に気づいたのはその時だった。

『正直に言うけど、お前が相澤を好きなんて意外だ』

俺のその言葉に加藤は目をそらしていた。

◇

「奈緒ちゃん顔に出てる」

相澤とペアになつて一週間で何かあつたのだろう。加藤にとつては特別なことが相澤にとつてはどうかは知らないが。

「奈緒ちゃん、長かったね」

俺と加藤の共通点は、同じ相手をずっと想い続けていることだ。彼女は優衣香の存在を知らないが、何も言わないだけで気配くらいは察しているだろう。

折に触れて相澤に付き合うのは誰でもいいが結婚は加藤としろと言つてある。それがどんな意味なのか全く考えたこともない様子だが、やっとその意味を知つたのだろう。

長い沈黙の後で、加藤は口を開いた。

「先も長いと思います」

やっぱり加藤は何かを伝えたけど、相澤はわかつてないんだな。あのゴリラめ。

「そう。なら俺はこれから何をすればいい？」

「何もなさらずにいてください」

「えー！ 便所スリッパでゴリラの頭を叩きたいんですけどー！」

「ふふっ。それはお好きなように」

そこにいつもの大声が響いた。『ただいま帰りました』と野川の声が玄関から聞こえる。

「もう一人、便所スリッパで頭叩きたい奴が帰ってきた」

「んふふ……」

リビングのドアを開けた野川は加藤の姿を見て目を見開いた。加藤は座ったまま野川に向き直し両手を挙げて野川を出迎えている。

そこへ野川は飛び込んで加藤は野川の背中を抱いた。二人は笑顔になって顔を寄せている。

野川は加藤の炭酸水がなくなっていたから買いに行っていたようで、加藤は『えらいえらいありがとう』と言いながら野川の頭を撫でた。

野川も不安だろう。ペアが俺だし、米田からは何かを命令されている。だがポンコツとはいえ仕事はよくやっている。真面目に倦むことなく取り組んでいる。野川が心折れずにやれているのは加藤の的確なフォローがあるからだ。

加藤の後輩を思いやる気持ちを有難く思うが、この有能な捜査員は夢が叶ったら警察を辞めるだろう。

『ゴリラはいつになったらアイロン掛けが上達するんでしょうね』

スーツを着る相澤を見て眉根を寄せた加藤が願った自分の未来は、今の自分ではない。

それだけ愛情深い彼女の気持ちを十六年も気づかなかった相澤はバカだと思うが、そもそも気持ちを気取られないようにしていた加藤がバカだと思う。

俺が加藤の恋心を指摘した日、加藤はこう言った。

『相澤が結婚したら諦めます』

と、どっかの誰かと同じことを言っていた。

幕間 あなたののために

十一月十七日 午前十一時三分

人の少ない住宅街で見上げる空は透き通るように青くて、吸い込まれてしまいそうな錯覚に陥る。頬に当たる風は冷たい。

——あの日もそうだったな。

結婚を反対した交際相手の母親を刺殺した上、家に火を付けた事件があった。

今日はそのご遺族の元を訪ね、お線香を上げさせて頂く。年に一度、命日の前に行くようにしているが、昨年はどうしても命日前に都合がつかず十二月になってからの訪問だった。

オートロックのエントランスを経てエレベーターで部屋へ行き、玄関のインターホンを押す。

解錠を待っている間、ふと松永さんのことを思い出して、小さくため息を吐いた。

このお住まいは被害者の一人娘で、容疑者の交際相手だった女性の住むマンションだ

から。

◇

「相澤さん、お久しぶりです。お元気そうですね」

約一年ぶりにお会いしたその女性は、以前より痩せたような気がする。頬が少しやつれて、手首の尺骨が以前より目立つ。礼服のワンピースの上に白いカーディガンを羽織っているが、ワンピースの中の体は泳いでいる。

お仏壇のある部屋に案内され、お線香を上げさせて頂く。遺影の写真を変えたようだ。夫に寄り添って優しく微笑んでいる写真に変わっていた。

俺にとつての年に一度のこの日は、事件と共に警察官になって一番怖かったことを思い出す日でもある。

傍らに正座する女性はいつも座布団を当てない。俺は仏壇の座布団から下りて頭を下げた。この後は本来であれば被害者のお話やご遺族様の近況をお話をするが、今日は違う話をしなければならぬ。

「笹倉さん。今日は個人的なお話があります」



四年前、笹倉さんの実家が火事になったと、松永さんは母親から連絡が来たという。何せ松永さんの実家の隣の家だ。その後、笹倉さんのお母さんが殺されていた、容疑者もその場で死んでいた、その容疑者は笹倉さんの交際相手だったと状況がわかるにつれ、その都度母親からメッセージが入っていたそうだ。

五個目のメッセージは、『優衣ちゃんがうちに来て取り乱してる。今から来れないか』だったという。松永さんが母親から送られた全てのメッセージを読んだ日は、最後のメッセージを受信した三ヶ月後だった。

当時、松永さんは個人所有のスマートフォンをみるどころかニュースや新聞すら見ることが出来なかった。松永さんは情報を完全に遮断されていた。

松永さんは事件発生から約半年も経ってから、笹倉さんの身に起きたことを知った。俺は事件前、松永さんの実家に招かれたことがあって、隣家の笹倉優衣香さんが松永さんの幼なじみで今でも好きな人、と教えられた。

松永さんは、中学生の時に撮った松永さんの三兄弟と笹倉さんの写真を見せてくれたが、そこには不貞腐れて弟を見ている坊主頭の松永さんがいて、セーラー服で笑顔の笹倉さんは、松永さんの歳の離れた弟を後ろから抱きしめて顔を寄せていた。

「笹倉さんとは直接の面識はなかったが、実家の南面が笹倉家だという記憶だけは残していた。」

火災発生後、臨場した消防隊員が部屋の中で自らの腹を刺している男を発見し、当時松永さんの実家のある所轄にいた俺は臨場した。

現場で松永さんの母親から声をかけられ、松永さんに連絡が取れないと言われたが、『誰であつても無理です』の一言で松永さんの母親は全てを察した。

事件後、笹倉さんの担当は俺になった。

多分、警察官になってからの松永さんが笹倉さんと会った回数は俺の方が多いと思う。

笹倉さんはいつまでも松永さんに連絡が取れない、来ない日々は続いたが、目の前でうちひしがれる笹倉さんに、『松永さんと同じ官舎です。同室です。あなたのことは松永さんから聞いています』と言いたくても言えなかった。今、あなたが一番頼りたいであろう男性は、『どこで何をしているかわかりません』なんて言えなかったから。

ある日、刑事課にいた俺は廊下が騒がしくなったことに気づいた。何人もの人の走る足音、怒号と唸り声、悲鳴、物が倒れる音。それが刑事課に向かつてることは明らかだった。

廊下に出た俺は、警察官の制止を振り切り、廊下を走ってくる背の高い痩せた男と目

が合った。

警察官としていろいろな経験はしているが、その時の松永さんの目は今でも夢に見る。

◇

リビングに通された俺は部屋の全体を見た。昨年よりも物が減った気がする。

——引越しを念頭に行っているのかな。

ソファに座るとテーブルの上の薔薇が目に入る。深紅の薔薇九本。そこから右に視線を移し、笹倉さんに話しかけた。

「私と笹倉さんの間の個人的なこととして、私は秘密を守ります。お聞きしたいことがあります」

カップに淹れたお茶を俺の前に置いた笹倉さんは、何の話なのかわからないといった顔で困惑したが、俺の目を見て頷いた。

「では単刀直入に申し上げます。笹倉さんと間宮さんはどういったご関係ですか」
笹倉さんは間宮さんの名が出た瞬間に後ろめたさを隠す目の動きをした。

——マジかよ。

右側の一人用ソファに座る笹倉さんは、しばらく思索して語り始めた。

最初、笹倉さんは署のエレベーターで先にいた間宮さんの顔を見て、どこかで会った気がして二度見したと。それを不審に思った間宮さんはエレベーターを下りた笹倉さんに声をかけたという。

詫びる笹倉さんは、間宮さんと話している間にどこで間宮さんを見たのか思い出した。それは署の近くにある企業に勤める友人が笹倉さんの車に置いていった社内報に、間宮さんが載っていたのだと。

社内報には町内会主催の防犯講話をその会社の講堂で行った時の記事があり、間宮さんは刑事課の須藤さんの代理で講話を行い、その社内報に顔写真が載っていたという。そこで笹倉さんは、車にその社内報があるからご覧になりますかと間宮さんに言つて、二人は一緒に駐車場へ行つた。そこでの二人を俺は見えていたわけだ。

二回目に間宮さんに会つたのは、交通捜査課へ仕事で行つた時。刑事課と交通捜査課は同じ階にあり、廊下で間宮さんが笹倉さんを見つけて、間宮さんから声をかけた。その時に連絡先を交換したと。これは俺が二人を見た日よりも前のことだった。

何度か間宮さんから誘いの電話があつたが、笹倉さんは断つていた。だが、何度も連絡があり、断り切れなくなつていた。こんなことは松永さんに言えないし、悩んだ末に一度だけ飲みに行つたと。それが十二日だったという。

——不審な点はない。

「ありがとうございます。では次の質問です」

「はい」

「松永さんのことは好きですか？」

驚いた表情をした笹倉さんからなかなか答えが返って来なかった。手を握りしめて、テーブルの上にある薔薇を見ている。

「……好きです。えつと……この前……この……」

「笹倉さん、詳細は結構です。私はその日に松永さんを近くまで迎えに来ました。笹倉さんと何があったのかは、ある程度は察していますから」

その言葉に耳を赤くした笹倉さんは下を向いてしまった。

「……間宮さんとその後？」

「連絡はありません。あの……交際の申し出がありましたがお断りしました」

「そうですか」

間宮さんとラブホへ行ったのか、それは間宮さんからは聞けばいい。笹倉さんに聞くことではない。

「笹倉さん、お話をありがとうございます。秘密は守りますから。ご安心を」

「あつ……いえ……私が悪いんです。すみませんでした」



「あの……相澤さん」

「はい」

「お茶、冷めちやいましたから新しく……」

「ああ、お構いなく」

手を付けていなかったティーカップを手に取ると、香りに一瞬戸惑った。その俺の姿を見ていた笹倉さんはジャスミンティーだと言った。

「相澤さんはジャスミンティーを好むと松永さんから聞いたことがあります……」

「ああ、お心遣いありがとうございます」

昔付き合ってた女性が好んだジャスミンティーを俺はずっと好きでいる。飲んでる間だけ、その女性を思い出すために飲んでいるだけだ。本当はジャスミンティーは好きではない。

「香りが好きなんです。たまに飲みます」

「そうなんですか」

「最近炭酸水を飲んでます。松永さんはいつもお茶かミネラルウォーターを飲んでますよ。甘い物は好きですけど、甘い飲み物は好きではないようですね」

こちらを向いた笹倉さんは、少しだけ口元を緩ませた。

毎年お線香を上げに笹倉さんのマンションに伺っているが、笹倉さんは松永さんの話を一切しない。俺と松永さんが同じ官舎で同室なのも知っているし、仲がいいことも知っている。松永さんからも俺を信用していいと笹倉さんに伝えたと言われた。それでも笹倉さんは松永さんの話を一度もしたことがない。

訪問後に松永さんから笹倉さんのことを聞かれて、笹倉さんの状況や状態は見たまま聞いたままを話すが、松永さんのことは何も聞かれていないと話すと、松永さんは毎回不満そうな顔をする。

笹倉さんは、本当は松永さんの一番近くにいた俺にいろいろと聞きたいのだろう。だが、言えることと言えないことがある。聞かれたら言えることだけは答えるのに、何も聞いてこない。

「笹倉さん」

いつもの俺とは違い、まるで取調べのような訪問になり、不安そうな顔をする笹倉さんに申し訳なく思った。言う必要はないだろうが、少しでも元気になって欲しくて俺は松永さんのことを話し始めた。

「十一日の夜、松永さんは笹倉さんに電話しましたよね。その電話を切った後の松永さんなんです——」

自分の知らない松永さんを知ることはないであろう笹倉さんは、不安と好奇心が綱い交ぜの目をしている。

「笹倉さんは電話を切る際に松永さんへ何と言ったか、覚えてますか？　松永さんは顔を赤くしていたんですよ。顔を手で抑えて、足をバタバタさせて何か言っていました。きっと、笹倉さんから言われたその言葉が嬉しかったのだと思います」

何を自分が言ったのか、思い出した笹倉さんはあの時の松永さんと同じ顔をした。

「笹倉さん、松永さんは元気にしていますよ」

笹倉さんはテーブルの上の薔薇を見て、頬を緩ませていた。

欲しいもの

十一月二十一日 午後九時二十分

駅を出て歩き始めてから二十分以上経つだろうか。俺はただ黙々と歩いてきた。道の両脇にある家の窓は暗く閉ざされていて、時折、外灯だけが夜道を照らしている。

冷たい風が頬に触れ、思わず身震いしそうになった時、俺は路地を曲がり路駐してあるワンボックスカーに身を隠した。

——ここで、終わらせる。

足音が近づいてくる。

足音が通り過ぎる。

俺を見失ったことに気づいて元の道に戻ろうとその足音の主が振り返った瞬間、俺は車の影から出て立ち塞がった。

「こんばんは、お嬢さん」

立ち塞がる俺を見上げているのは野川里奈だ。逃げることも出来ず体が硬直してい

る。

官舎に戻ると言つてマンションを出た後、すぐに野川の尾行に気づいた。

電車に乗り、官舎の最寄駅がある路線の乗換駅で俺が降りなかった時、野川は誰かに連絡していた。おそらく米田だろう。

俺が官舎に戻ればお役御免だったのかも知れないが、俺は優衣香のマンションの最寄駅で降りた。そこでは連絡をしていなかったから、野川は俺の女のマンション最寄駅を事前に教えられていたのだろう。

駅を出て、優衣香のマンションに向かうフリをしながらどこで野川を捕獲するか思案していた。同時に、相澤に連絡して公用車で迎えに来るように手配もした。

「相澤と加藤が迎えに来るよ」

恐怖に身を竦ませる野川は、俺を見上げたまま何も言わなかった。口を開けるが声が出ないようだ。目には大粒の涙が溢れ出てきた。

「あのね、俺は、怒つてない。大丈夫だから。加藤がすぐ来るから」

その言葉を聞いて唇を噛み締めたが、涙は止まらない。ハンカチを手渡すが、手も動かせられないようだ。仕方なく俺は野川の涙をハンカチで拭つてやった。

「お前はよくやつてる。お前は勉強して、出世しろ。偉くなって、こんなことを若手にやらせるクズを片っ端から潰していけ。お前なら、出来る」



ヘッドライトが道を照らして、消えた。

野川の涙が止まる頃、後ろに車が止まった。

ドアを閉める音が二回。

走る寄る足音は二人。

「お待たせしました」

相澤のその声より早く加藤は野川を拘束していた。加藤は目礼をしただけで野川を車に連れて行く。そこで初めて野川が嗚咽を漏らした。しゃくりあげるその声は遠ざかり、ドアを閉める音が聞こえた。

「松永さん、この後……」

「帰る」

今日は官舎に戻るつもりでいた。野川の尾行に気づいたから仕方なく優衣香のマンションの近くにいるだけで、優衣香に会う気は最初から無い。

「えっ……でも……」

「なに？」

「いや、せっかく近くまで来たのに……」

「時間遅いよ? 連絡してないし」

そうですかと言った相澤だが、せっかくだから連絡してみればいいと言う。『そうだな』と答えると笑顔を見せた相澤へ野川のことを指示した。そして最後に付け加える。

「ねえ、裕くん。野川に優しくしちゃダメだよ。いい?」

俺の言いたいことを汲み取った相澤は頷いた。

◇

午後十時四十四分

町沢署の最寄り駅のタクシー乗り場に着いた。

タクシー乗り場は並ぶ列もなく、ロータリーにはタクシーは何台も止まっている。

俺は先頭のタクシーに乗り込み、運転手に町沢署までと伝えると、運転手は意味ありげな目線をルームミラー越しに送ってきた。

走り出したタクシーは五分も経たずに町沢署の裏手に到着し、タクシーを降りた俺は一階にいた当直員を見て、歩きながら手帳を見せて階段に向かった。

階段下で俺は目を閉じて深呼吸をする。そして階段を二段飛ばしで一気に駆け上

が
つ
た。



この時間も署に武村がいることは相澤から聞いている。

優衣香のマンションの最寄駅を知っているのは相澤だけだったが、武村はあの日俺が女の匂いをさせていたことと、長い付き合いの女がいると話したことを米田に話したの
だろう。だが、武村が話していようといまいと、野川に俺を尾行させて優衣香のマン
ションを突き止めようとするに違いない。

——そんなことやらせんなよ、クソが。

四階を過ぎた時に臨場服を着た交通捜査課員が降りてくるのが目に入った。『どけ』
と睨みながら階段を上る俺を見て、交通捜査課員が怯んだ。

五階に着いた。

照明が最小限に絞られた廊下の先に刑事課の室内灯が漏れ出している。

歩きながら両腕を上げ背筋を伸ばし、首を回し、肩を回す。

刑事課のドアを前にして小さく息を吐く。そしてノックもせず俺は扉を開けた。

突然の俺の入室に刑事課員は皆驚いていたが、その中でも一番驚いた顔でこちらを見

た奴がいた。

俺はそいつの机まで行くと、足元にあつたゴミ箱を蹴飛ばした。ガンツと大きな音を立てたゴミ箱はキャビネットに当たつてまた大きな音を立てている。中身がそいつの足元に散らばるが、そいつは俺から目を離せなくなっていた。

「こんばんは、坊や」

驚きと恐怖の目で俺を見つめる武村の頭越しに刑事課長の須藤さんから『敬志！

何やつてんだよ!!』と声がかかった。

その声に反応した武村は視線をそちらに動かしたが、すでに俺は武村の胸ぐらを掴んでいた。椅子から引き摺り下ろし、そのままドアに向かう。

須藤さんの声はしない。

武村が座っていた椅子のキャスターが空転する音だけが聞こえた。

武村を廊下に放り投げ、『坊やに話があるんで邪魔しないで下さいね』と言つて俺は扉を閉めた。

◇

「あ？　　歩けねえの？　　歩けんだろ？　　ほら、歩けつつつてんだろ」

胸ぐらを掴まれた武村は俺に引き摺られている。

階段の踊り場の隅に武村を放り投げ、その前に俺は座った。

「武村さん、お疲れ様です」

初めて武村に会ったのは優衣香のマンション付近に迎えに来た車の中だった。一緒にコンビニへ行き、会議でいくつが会話をしただけ。

あの時の俺は髭を生やして茶髪パーマのチャライ姿だったが、今は濃紺の細身のスリーピースに髪は黒で長めのストレートだ。

髪をかき上げながら武村を見ると、体が震えていて顔を上げられずにいる。

「怖い？　ぼく、真面目なサラリーマンって感じだと思っけど？」

武村の顎を掴み、上を向かせる。

目を合わせ、口元を緩ませて、俺は武村に優しく語りかけた。

「秘密は魂と一緒になの。だから売り渡してはいけないの。わかった？」

武村は何か言おうとするが、声が出なかった。何の話をしているのかすら、おそらく武村はわかっていないだろう。武村の喉仏が大きく上下した。

「それだけ。じゃ、お仕事頑張ってね」

立ち上がり、ジャケットの内ポケットからスマートフォンを取り出して刑事課長の須藤さんに電話をかけた。

「武村は階段にいますから」

電話を切り、階段を降りた。

踊り場の窓は上下にあり、真ん中は鏡だ。

俺は武村にもう一言伝えようとして、俺の姿を壁にもたれたまま目で追っていた武村に鏡越しに声をかけた。

「彼女と早く結婚しなよ。お前は、幸せになれ」

武村の返事は聞こえないが、頷いたような気がした。

◇

十一月二十二日 午前二時二分

深夜の官舎で一人きりになると、途端に外の世界との隔絶を強く感じた。とつとつと寝よう、そう思いながら布団に潜り込んだものの、なかなか眠りにつくことができなかった。理由はわかつている。

——優衣香と間宮。

さつき、刑事課には間宮がいた。

間宮を呼び出して話を聞けば問題は解決するのに、俺は出来なかった。俺は逃げたん

だ。

——真実を知るのが怖い。

真実を知って、それが悪い結果だったらどうするのか。状況としては優衣香に新しい恋人が出来た時のようなものだ。それは何回も経験してる。でもこんなことを考えたことは今までなかった。俺はどうしたいんだろうか。

——自分の気持ちかわからない。

そんなの優衣香のことが好きか嫌いか、すぐに答えは出る。優衣香が好きだ。優衣香を嫌いになるなんて考えたこともない。でも、優衣香は俺以外の男に身体を触られて笑顔だった。優衣香はあのように後に関係を持ったのかも知れない。なら、俺を裏切った優衣香を嫌いになったということなのか。

そんな堂々巡りをずっと繰り返していたら、アラームが鳴った。午前六時だ。

結局一睡もせずになっていたのか。大きいため息をつくとき、俺はベッドから抜け出して浴室に向かった。

脱衣所に入って服を脱ぎ捨てて浴室に入る。頭上から降り注ぐ熱いシャワーを全身で受け止めながら、ふと思った。

——友達のままでもいいのではないか。

俺は優衣香の体が欲しいのではない。

俺にだけ向けられた笑顔が欲しいんだ。

二十二年前のラブレターに込めた想いは今でも変わらない。

——優衣ちゃんの写真が大好きです。

ただ、それだけなんだ。

3分で大惨事

十一月二十二日 午前十一時五十八分

雲に覆われた空がここから見える。今にも雨粒が落ちて来てもおかしくないような天気だ。

昨夜は野川を捕まえて、それから署に行つて武村を説教した。だが、米田からは連絡が無い。

——なんでかな。

◇

捜査員用のマンションのリビングルームには長机三つが合わせて置いてあり、大きいテーブルのようにセットしてある。椅子はパイプ椅子で十脚。

俺はバルコニーに一番近い椅子に座り、ノートパソコンを眺めていた。

——目がしよぼしよぼする。

対角線上の椅子に座って同じくパソコンにとらめっこしているのは、俺と相澤とは違う所轄から一人でやって来た捜査員だ。

コイツはゴリラの相澤より背が高く体格もいい。だが、身のこなしが柔道をやっていたそれではない。俺はてっきり刑事課所属かと思っていたが違った。生活安全部だという。いるよね、こういうタイプ。

——熊。ちよつと方向性の違う熊。

初回の会議で、ゴリラの相澤を見ていた野川を見ていたのがこの熊だ。相澤は熊と同じ所轄だった時もあり、久しぶりに会って二人は楽しそうにしているが、俺はコイツと初めて会った。

熊とゴリラが一緒にいる姿は見ていっただけで暑苦しいが、寒い今なら丁度いいかと思つて『ぼくもキミと仲良くしたいな』と今朝からずっとコイツに念を送っている。だが、コイツは俺に怯えて目も合わせてくれない。

——ぼくかなしいな。

とりあえずコーヒーでも淹れてやろうかと思ひ、『なあ、葉梨』と熊の名前を呼んだが、言い切らないうちに葉梨は既に立ち上がっていた。

「コーヒーは飲——」

「コーヒーですね！　淹れます！」

「……ありがとう」

俺がまず熊の葉梨がコーヒーを飲むどうかを聞いて、飲むなら俺がコーヒーを淹れてあげて、それから交流を深めてキャツキャウフフしようとしたのにどうして。

「お砂糖とミルクはどうしますか!?!」

——熊がお砂糖とミルクって言った！　可愛い！

「ミルクは二つで。砂糖はいらないよ」

「はいー」

そこに加藤奈緒が外出から戻ってきた。

昨夜と同じ格好のまま。メイクは綺麗にしているが、疲れが隠せていない。

リビングのドアを開けた加藤はいつもの目をして、すぐにやめた。そして俺を見て眉根を寄せている。

「お疲れ様です。なんだか楽しそうですね」

「お疲れ。そうでしょ？　葉梨と楽しく過ごしてるよ」

俺と加藤のやり取りを聞いていた葉梨は驚いた顔をして俺と加藤の顔を交互に見たが、『加藤さんもコーヒーいかがですか?』と加藤に声をかけ、加藤は『ありがとう、頂きます』と言いながら、俺の右隣の席に着いた。

——話があるんだな。

横目で見る加藤は優しい笑みを葉梨に向けている。何もなければ、対角線上に座る俺と葉梨のどちらかの前に座るはずが、俺の隣に加藤は来た。

加藤はテーブルに肘をつけて手のひらを見ながら親指以外の指を閉じたり開いたりしている。それをコーヒーの仕度をしている葉梨がチラッと見た。

葉梨はコーヒーを置いた。加藤は三グラムのスティックシユガーの残り半分とミルク一つ。俺は葉梨に伝えた通りだ。

「下の自販機に行つてきます」

葉梨はそう言うと、コートを着てリビングを出て行つた。

玄関ドアが開き、閉じる。

施錠する音が聞こえて、施錠確認の大きな音がした。

「教育が行き届いてて何より」

「葉梨は物覚えがよくて柔軟な対応が出来ます」

手のひらを見ながら親指以外の指を閉じる。それは『五分以上はかからないが四分以内に帰つて来るな』というハンドサインだ。加藤と相澤の同期である岡島直矢おかしまなおやが葉梨と官舎で同室で、四人で飲みに行った時に加藤が見込んだと言っていた。

「で？　話は？」

「野川はボイスレコーダーで米田さんとの会話を全て録音していました」
「おっと……」

昨夜、優衣香のマンション付近で野川を回収した後の話だった。

咽び泣く野川が落ち着いたのは三十分ほど経った頃だったが、野川はカバンから取り出したボイスレコーダーを加藤に見せたという。野川は音声を全て書き起こしていた。そのメモも加藤に見せて、どうすればいいか聞いてきたと。

加藤はその音声データをその場で複製し、野川に実家に帰るよう説得したという。

加藤はすでに帰宅していた米田に連絡をして、優衣香の最寄駅の駅名を告げ、『泣きじゃくる野川を保護した。何があったのか言わない。実家に帰りたいと言っている。このまま送ってもいいか』と米田に指示を仰いだ。

野川に電話を代わるか否かを問うが、米田は躊躇していたようだ。そりやそうだ。電話の声は漏れる。相澤と加藤に聞かれてしまう。有給取得を許可した米田との電話はそこで終わった。

三人は官舎に行き、加藤と野川は荷物をまとめるために野川の部屋へ行った。相澤はそのボイスレコーダーのマイクロSDカードを『詳細はわからないが野川が泣きながら米田さんに渡して欲しいと言っていた』と、刑事課の課員が揃う中で武村に渡した。その後、仕度の済んだ野川をまた乗せ、実家に送り届けたと。

——すごい。奈緒ちゃん完璧。さすがー。

「ま、コーヒー飲もうか」

砂糖とミルクを混ぜながら、加藤は『ボイスレコーダーを持たせたのは私です』と言った。

「俺との会話も全て録音してんの？」

「さあ、どうでしょう。私は米田さんとの会話だけを指示しました。何か不都合なこともありませんか？」

野川にその素振りはなかった。毎日観察しているが、ボイスレコーダーに限らずその他の機器類を持っているような素振りもなかった。そもそも俺はそんなものは想定内だ。

だが、美容院に野川を連れて行った時のことをふと思い出して、視線を彷徨させた。それを加藤はコーヒーを飲みながら横目で見ている。

「ヤバいな……俺、野川に出会って三分でパンツ見えるよって言っちゃった」

「ブフーツ！」

加藤が噴き出したコーヒーは見事な放物線を描いた。コーヒーは一番向こうの長机まで飛び散っている。加藤は背中を揺らせてむせている。

「びっくりした。リアルで噴き出した人を初めて見たよ」

——あ……狂犬の顔してる……。

怖くなって加藤から視線を外した。

マズい、怒らせてしまったようだ。とりあえず落ち着かないかと思つてコーヒーを口に含んだが、耳に流れ込んだ、『まあ、出会つて三分でハメなかつただけ評価しますよ』に、俺も盛大にコーヒーを嘔き出してしまった。

「……大惨事だ」

「ホントにね！　誰のせいですかね！　もうー！」

そう言うに加藤はキッチンに布巾を取りに行つた。その時、玄関が開く音がして、大きな声が聞こえた。それを聞いた加藤が『おかえり』と言ひ、足音を大きく立ててリビングに葉梨が入つてきた。

「えつ……俺やります！　加藤さん、俺やりますからー！」

テーブルの大惨事を布巾で拭こうとしている加藤に葉梨が声をかけるが、振り返つた狂犬の加藤の顔を見て後退りした。

——わかるよ、狂犬の加藤は俺も怖いから。

「葉梨、おかえり。コーヒー美味しく頂いてるよ。ありがとうね。ちよつと溢しちやつたけど」

コーヒー皿を持ち、カップを上上げて口元にエレガントな笑みを浮かべて葉梨を見

たが、俺の視界にはテーブルを拭きながら狂犬度を増した目で俺を睨んでいる加藤もいた。

——あ、土下座。パターンだこれ。

テーブルを拭き終わった加藤はキッチンへ行き、布巾を洗い始めた。葉梨は加藤を気にかけてながらも椅子に座り、またパソコンとにらめっこを始めている。

布巾を洗う水音だけがするこのリビングで、時折葉梨と目が合い、ほほえみ返しをした。

——今、ぼくは熊と心が通じ合ってる。

そこに加藤が戻ってきた。狂犬のまま。

元の席——それは、俺の隣——。

葉梨は俺に憐憫の眼差しを送っている。

隣に座ってコーヒーを飲み始めた加藤に俺は『お昼を一緒にしませんか』と誘ったが、『既に済ませましたので』と言われた。もうアウトだ。

「何をお召し上がりにな？」

「ラーメンと炒飯と餃子とサービスで唐揚げを頂きました」

——相変わらずよく食うな。

「まあ、それはいいですね」

ダメだ。何とか加藤の機嫌を取ろうとしたけど完全にアウトだこれ。だが、そこに救世主が現れた。

——救世主、その名は葉梨將由^{はなしまさよし}、三十二歳、見た目は熊。

部屋に戻ってきたものの、狂犬加藤を見たせいで存在を忘れていた買った飲み物を思い出し、それをコートのポケットから取り出した救世主のお告げはこうだった。

「下の自販機にいくつか新しいのが入ってたんですよ！　加藤さんには強炭酸です！

どうぞぞ！　それと相澤さんにはジャスミンティーを渡して下さい！」

——あー、それ今一番やっちゃダメなやつ……。

俺は三年ぶり六回目の土下座の準備を始めた。

それぞれの思惑

十一月二十二日 午後一時三分

俺は今、捜査員用のマンションの廊下で土下座している。

「私の不徳の致すところにより、加藤様にご迷惑をおかけしたことを深くお詫び申し上げます」

俺が何も考えずに言った言葉に反応した加藤が悪いんだ、俺は悪くない、と言いたいが、そんなことは言えるわけもなく。

「謝罪があつた、という事実は覚えておきますので、どうぞお立ちください」

——あ、これ許すとは言っていないやつだ。

見上げるとそこには仁王立ちする加藤がいた。ノーメイクで髪の毛を下ろしてジャージを着ているせいかな、いつもよりちよつと怖い。

彼女のことを何も知らない人が見たら上品な笑みに見えるが、狂犬加藤を知っている俺にとっては怖くてたまらない。

「私が留守番をいたしますので、葉梨と食事に行けばよろしいかと思えますよ」
「あ、はい。そうさせて頂きます、スミマセン」

◇

「加藤さんはなぜ怒ってらしたのでしょうか」

加藤から許可が下りて逃げるように葉梨とマンションを出て、すぐに葉梨は聞いてきた。
た。

男同士の会話だからそのままを言ってしまうが、加藤の返しを言うべきか悩む。俺よりも段階を上げた加藤の返しは、加藤自身の品位に関わることだ。いや、自分で言っていたのだから品位も何もないが。

「うーん……」

「あ、いえ、いいんです、いいです、聞きません」

「いや、話すよ」

葉梨にコーヒーを嘔き出した一件を話した。加藤の返しは言わず、俺が言った言葉だけを言ったのだが、葉梨の反応が想定外だった。

——なんで耳赤くしてるの？

「あの……見えてはいなかったんですね？」

「えっ？」

——もしかして野川のパンツ？

「あ……うん、見えてないよ。エレベーターで上がったし」

「そうですか」

俺は思い出した。そうだった、この熊は野川のことを気になっているんだった。

◇

美容院の帰り、野川はエレベーターを使わずに階段を下り始めたが、俺はそれを横目に見送りに来た弟と話していると、残り三段の所でポンコツ野川が足を踏み外して転げ落ちて行った。

俺は急いで駆け下りて野川に手を貸したが、『大丈夫です』と大きな声で言うものの、膝から若干の血が出ていた。立ち上がった野川は辛そうにしている、歩かせるより俺が野川をおんぶしようかと思っただが、日中の元町商店街や中華街の外れでそれをするのも出来ず、野川は五センチの履き慣れないヒールに怪我した足でどうにか捜査員用のマシオンに行った。

その時、マンシヨンにいたのは野川と同じ所轄で刑事課の反社ヅラの本城昇太と、この熊の葉梨はなしまきよし将由だった。そこに胡散臭いサラリーマン風の俺だ。

まるで組事務所を訪れた女衞と売られた女の様相だったが、二人は野川の怪我を知ると甲斐甲斐しく世話を始めた。

熊はマンシヨンを飛び出してドラックストアに行き、数日間着けたままで傷の治りを早めるタイプの高い絆創膏を買ってきた。

戻つて来た葉梨は椅子に座っている野川にひざまず跪き、水を張った洗面器を傍らにタオルで傷口を洗おうとしたが、伝線したストッキングをどうするか躊躇した。

それを見ていた野川が、『ストッキング脱ぎますー！』と高らかに宣言し、椅子から立ち上がりおもむろにスカートの中に手を入れたのだ。

その至近距離にいた熊の葉梨は立ち上がって野川に背を向けた。もちろん俺もそうしたし、反社の本城は手のひらで高い絆創膏を温めながら背を向けた。

組事務所に来た売られた女という設定のはずなのに、脱ごうとする女に反社と組員と女衞が背を向けるとはどういうシチュエーションなんだと俺は思ったが、この葉梨は耳を赤くしていた。



「葉梨は清楚系が好きなの？」

「えっ……まあ」

葉梨は相澤よりも背が高い。身長一メートル八十五センチだという。俺よりちよつと低いけど、体格はいい。どうして相澤も葉梨も『小さくて可愛い』タイプが好きなのだろうか。俺は小柄な女性は苦手だ。視界から消えるから。

「野川はお前みたいいな体格がいい男が好きみたいよ」

「えっ……そうなんですか」

その言葉に少し頬を緩めた葉梨だが、聞き捨てならない言葉を続けた。

「でも俺は加藤さんみたいな女性がいいです」

——マジかよ。狂犬なのに。

だが俺は加藤と相澤をくつつける為に七年も苦心して来たのに、葉梨という思わぬ伏兵に愕然とした。

「加藤が好きってこと？」

「えっと……そうですね。特にスーツ着てる時の加藤さんが好きです。さつきのジャージ姿もカッコいいと思いました」

「……そうなんだ」

——強い女が好き。

庇護欲を掻き立てられるような弱い女じゃなくて自分と対等な女がいいと言うことか。

葉梨と加藤の出会いとは二年前の飲み会だった。その際に加藤は葉梨の仕事ぶりを認めたと言っていた。

だがこれまで狂犬加藤を畏怖の対象にすることはあっても恋心を抱くチャレンジャーなどいなかったのに、葉梨は加藤を好きになったのか。さっきの狂犬加藤には後退りしてたのに。

相澤と加藤はこの前何かがあった。相澤はどうするのだろうか。

俺がこの七年にやって来たことは、相澤に女が出来ると会う時間を減らす妨害をするだけだった。加藤から何も言うな、するなと言われている以上、俺がやってやれることはそれぐらいだった。だが、俺はもう疲れた。

俺は托卵したあのクソ女からぶん取った賠償金の五百万はその妨害に使ってきた。その金はそろそろ尽きる。加藤がどうにかしないのなら、相澤がどうにもしないのなら、もう俺は手を引く。

「ならば、加藤とデートしてきたら？　俺が言っておくよ」

「えっ!？」

「あいつは男いないし、お前なら問題ないよ」

「えつと……」

「ん？ 嫌なの？」

「嫌ではありません」

「そう。なら加藤に言っておくよ」

喜色を隠しきれない葉梨が微笑ましいなど思ったが、加藤はどう思うのだろうか。まあいいか。俺はお膳立てするだけだ。

◇

マンションから徒歩五分の所に中華屋がある。そこは中華街の中心部だが入り組んだ路地の先であり、昼のピークタイムでも客は少ない。

カウンター席六席とテーブルが三つの店で、加藤が気に入って俺に教えてくれた店だった。

入店してテーブル席に案内され、日替わりランチを注文して待っているが、コップに注がれた水を飲み干すと、すかさず葉梨が注いでくれる。

「加藤とデートだけど、葉梨はしたい？ 言い出したのが俺で仕方なくって思ってるなら、俺は加藤に言わないけど」

「いえ、嬉しいです。お願いしたいです」

——嘘はついていない。

加藤は相澤を警察学校時代に好きになった。だが、相澤が『小さくて可愛い女』が好きだと知り、ずっと恋心を悟られないようにしていた。

俺は加藤の恋心を知った七年前から、相澤に女が出来ると加藤に知らせていた。そうすると加藤は何かしていたようだが、何をしていたかは知らない。

それから七年経っても二人は同期の関係以上になつていないから、作戦は毎度失敗しているようだ。

加藤には幸せになつて欲しい。だが、それが相澤では無理なら、この葉梨でもいいのではないか、俺はそう思う。

加藤が男性捜査員を見込むのはこれまでになかったことだ。もしかしたら加藤にとっては、何か考えがあつたのかも知れない。俺はこの熊を直接は知らないが、有能な捜査員だと聞いている。

「加藤のことをいいなつて思つたきつかけつて何？」

その問いかけに葉梨は一瞬目線を彷徨させたが、話し始めた。

葉梨は二十一歳の時に大学一年生の女の子を紹介されて付き合い始めたが、その付き合いは十年を迎える頃に終わった。

彼女が大学を卒業して民間企業に就職後、何度も葉梨は結婚の話をしたが、彼女は仕事を理由に先延ばししていたという。そのうち彼女の心が離れていると気づき、葉梨は関係を終わらせたという。

「加藤さんは美人ですから、初めてお会いした時はびっくりしましたけど、その時はまだ彼女と付き合っていたので何とも思わなかったです。でも別れた後、加藤さんが俺のことを『いい男』だと言ったんです」

「二人の女と十年付き合った男だから？」

「ああ……加藤さんには彼女の詳しい話はしてません。ただ別れたとだけ言いました」
「………ん？」

「俺もよくわからないんです。でも、加藤さんにいい男だと言われて嬉しくて……」

加藤が葉梨をいい男だと言った理由は何だろうか。まあいい。加藤に聞けばいいか。



マンションに戻ると、身支度を終えた加藤が女性捜査員用の部屋から出てきた所だった。

「ああ、おかえりなさい」

「ただいま戻りました！」

「……戻りました」

廊下の右手にあるその部屋を出た加藤は、相澤好みの清楚系ではなく、葉梨好みの服装をしていた。

黒のジャケットに白いシャツ、黒のタイトスカートで黒のストッキングを履いている。大ぶりのゴールドのピアスをし、髪型は夜会巻きだった。

その姿に俺は視線を彷徨わせてしまい、それを見た加藤は目を細めて『なんですか？』と言うが、正直に答えたらまた土下座することになるから黙っていた。

だがその時、 またもや救世主、はなしまきよし葉梨将由が降臨した。

「加藤さん！ キヤリアウーマンみたいでカッコいいですね！」

——救世主ナイス！ 人類は救われた！

「松永さんは違うモノを想像していたご様子ですが」

「……そんなことはありませんよ、何をおっしゃいますか加藤さん。デキる女、といった雰囲気です。私も、加藤さんのお姿が素敵だと思つていますよ」

「……そうですか、ありがとうございます。相澤はこの姿を見て、『女教師モノ』と言いましたけどね」

——マジかよ、あのゴリラ最低だな。俺もそう思つてるけど。

幕間 秒で終わる恋

「お待たせいたしました」

目の前に置かれたカップから立ち上る湯気の向こうで彼女が笑う。

——今日も、可愛い笑顔だね。

店内を流れるジャズピアノの曲を聴きながら、慣れた手つきで俺の前に皿を置く彼女を見ていた。俺はいつも通り、ブレンドコーヒを口に含んでその味を楽しんだ後、サンドウィッチに手を伸ばす。卵とレタス、トマトを挟んだだけのシンプルなものだけだ、それが一番美味しい食べ方だと彼女が教えてくれた。

パンの端をかじり取り、口の中に広がる瑞々しい野菜の食感を感じながら、俺はゆっくりと咀嚼して飲み込んだ。満足感に浸りつつ、再びコーヒを口に含む。

窓の外を見ると、街路樹が色づいていることに気がつき、季節の移り変わりを感じた。そっと視線を上げれば、窓から見える景色の中に彼女の姿があった。店の幟のぼりが倒れたよ
うで、直しているよう——

「痛たたたたっ!! やめっ! 痛っ! やめて!」

「本城さ、あんた私のことガン無視してない?」

隣にいる女性は加藤奈緒、俺の先輩だ。俺のサンドウィッチを食べながら俺の耳をつねっている。

昼時の客足が捌けたこの時刻を狙って俺は彼女に会いに来店しているが、今日は加藤さんがなぜかついてきた。念のため言っておくが、俺は誘っていない。絶対に。

「耳つねるのやめて下さい」

「じゃあ無視しないでよ」

「あの、なんで隣にいるんですか」

「ついてきたから」

「なんでついてきたんですか」

「本城はあの子のこと気になってるんでしょ?」

なぜバレているのだろうか。なぜバレているのだろうか。あまりに動揺しすぎて俺は同じ言葉を二度も心の中で言ってしまった――。

確かに彼女は気になっているけども……。

そんな俺の心を見透かすように加藤さんはニヤリと笑った。加藤さんは笑わない方がいいタイプの美人――。

「あんた今何考えてた？」

「何も考えてないです何も考えてないです」



加藤さんは俺がこの喫茶店から署に戻って来ると、顔つきが違うから何かあるのだと思っただけという。

「デレた顔じゃマズいからキリツとした顔して誤魔化してるつもりだろうけど、デレてるよ」

彼女との出会いは三ヶ月程前だった。

署の隣にはコンビニがあるが、サンドウィッチを買いに行ったらなかった。悲しかった。

サンドウィッチが食べたくなって行ったのになかったから、昆布のおにぎりを買って出てきた。悲しかった。

でもやっぱりサンドウィッチが食べたくなって、署から徒歩数分のこの喫茶店に初めて入った。

店内は落ち着いた雰囲気、見た目が反社の俺が入店すると彼女はびっくりした顔を

していた。

反社ヅラの俺にとつては日常茶飯事だが、カウンター席に通された俺は笑顔でサンドウィッチとコーヒーを注文すると、彼女が笑った。

キミの瞳を、逮捕する――。

その瞬間、俺は恋に落ちた。

それから俺は週に一度のペースでこの喫茶店に通っている。

彼女は俺と同じくらいの歳だと思う。左手薬指には指輪をしていない。独身だ――。

いつかデートに誘ってみようと思うが、そんなことを言い出せるわけもなく……。

彼女の名前すら知らない俺は、淡い恋心を抱いて今日も彼女へ会いにこの喫茶店へ来た。なのに加藤さんがついてきた。それに加藤さんは時間のかかるグラタンを注文したから俺のサンドウィッチを食べている。

「無くなっちゃうじゃないですか」

「もう一個頼めばー?」

「……そうですね」

店内に戻って来た彼女は、カウンターの向こうで手を洗っていた。

「すみません、サンドウィッチをもう一つ下さい」

振り向いた彼女は笑顔で応じる。

キミの可愛い笑顔を再逮捕——。

隣に加藤さんの視線が突き刺さる。俺は緩む頬に力を入れて、伝票をキッチンに持っていった彼女を見ていたが、グラタンを持ってカウンターに戻って来た。

「お待たせしました。熱いので気をつけて下さいね」

「はい。あの湯川さん、聞きたいことがあるんですけど」

「えっ？　はい、なんででしょう？」

——加藤さん、なんで彼女の名前を知ってるの？

「ご主人は元気にしてる？」

「ええ、おかげさまで」

——俺の恋が秒で終わった。俺の恋が秒で終わった。

俺の恋が——。

彼女は既婚者だったのか。シヨックだったが、『彼女が幸せならオツケーです』をモットーに生きている俺は、いいじゃないかと思ひ直すことにした。

——既婚者じゃ、どうにもならねえよ。

俺は女衞ぜげんと陰で呼ばれている先輩の間宮さんに合コンをセッティングしてもらおうと思つた。



テーブル席の客がレジに行き、彼女がその応対のためにカウンターから出ていったのを横目に、加藤さんに話かけた。

「あの、加藤さん」

「なにー？」

「なんで彼女のことを知ってるんですか？」

「従兄弟の奥さんだから」

——マジかよ。うっかり手を出さなくて本当によかった。あぶねー！

加藤さんは彼女の出勤日を把握していて、時間があれば来ていたという。俺が初めてここに来店した時、窓の外から加藤さんは俺を見ていたそうだ。

「もうさ、一瞬で恋に落ちたってわかったよ」

笑いを堪えながら話す加藤さんに俺は何も言えなかった。あの日俺はサンドウィッチが食べたかっただけなのに——。

「あんたが彼女に変なことしないか心配してたけど、あんたは何もしなかったね。えらいえらい」

「あー、まあ……ねえ？」

「んふふっ……」

俺をちらちら見ながら笑う加藤さんはまだ何か隠してる、俺はそう思った。

「……なんすか?」

「彼女、元同業だよ」

「えっ!?! 警視庁ウツチですか?」

「ううん、違うよ」

加藤さんの従兄弟は農林水産省勤めで、ご主人の転勤に伴い彼女は警察を辞めたそう
だ。

「もうね、辞めて五年だから、警察官ウツカンの雰囲気はほぼゼロになったし、あんたが気づかなか
ったのも仕方ない」

「そうですか……」

その時、彼女がサンドウィッチを持ってカウンターにやって来た。

「湯川さん、こいつに言つといたからね」

「えっ、あー、ふふっ」

——彼女に俺の恋心はバレていたのか。

「すいません……」

「えっ、いいんです! ああ、でも……」

言い淀んだ彼女に、加藤さんは促した。

「私が元同業だと気づかれなかったことが嬉しかったです」

彼女は、警察官に元同業だと気づかれなかったことで、やっと警察から開放されたのだと思つたそうだ。

——大変だつたんですね、わかります。

警察官には向き不向きがある。それは体力の話ではない。市民はニュースになった事件事故しか知らないが、全ての事件事故を知る俺たちはメンタルが削がれる。そこで脱落する者もいる。それに警察は組織だ。組織を守るために目を瞑る必要もある。正義感を持つて警察官を拝命しても、その現実に耐えられない者もいる。

彼女はこういう意味でそう言ったのかはわからないが、彼女はやっと開放されて、『普通の女性』に戻れたわけだ。

そして、警察官のままの俺は失恋した、と。あの日は俺はサンドウィッチが食べたかっただけなのに——。



喫茶店からの帰り道、加藤さんは交通捜査課の福岡が合コンで一人足りないと言つて

いたと言った。

「加藤さんって、そういう情報よく持ってますよね」

「うん」

「なんでなんですか？」

「言えな—い」

誤魔化す加藤さんは早歩きで俺を置いていくが、署の隣のコンビニ手前で立ち止まった。

「どうしました？」

「ほら、間宮さん……ふふつ、間宮さんも合コンの手持ちはいくつかあるし、間宮さんに相談しなよ」

——なんで手持ちの合コンまで知ってるんですか。

あの日、俺はサンドウィッチが食べたかっただけに恋が秒で終わり、そして先輩に合コンを把握されている——。

——警察官になりたかったけど、警察官になるんじやなかった。

誰にも知られない恋をしたいと、俺は思った。でも交際の報告はしなきゃいけないから絶対に、無理——。

第3章

誘導尋問

優衣香を十四歳の時に好きになって、十五歳の夏にラブレターを渡したと相澤に話したのは九年前だった。

実家に招き、リビングから見える優衣香の家を指差して、隣の幼なじみの優衣香のことが今でも好きだと言った時の相澤の驚いた顔が面白かった。

優衣香が一人暮らしするマンションに訪ねることも、着替えが置いてあることも、体の関係がないこともその時に言った。

それからしばらくして、俺が複数の女と同時進行で関係を持つ時は優衣香に男がいる時だと気づいた相澤から、『なぜ笹倉さんは松永さんと付き合ってくれないのか』と聞かれて、俺が警察官だからだよ、と答えた。

あの事件が起きた時に、優衣香が家に来ている、俺はどこにいるのか、俺に会いたいと優衣香が泣いている、今から来れないかと母から連絡が来ても、俺は仕事で優衣香の

元に行けなかった。

優衣香を守れない俺は優衣香を幸せに出来ない。

あの事件の後、優衣香は誰とも交際していない。『怖い』ただ一言、そう呟いて俺の腕の中で震える優衣香を見て、俺は警察官にならなければよかったと心底後悔した。

でも、事件後に初めて会った時、優衣香は俺を心の支えだと言ってくれた。俺だってそうだ。優衣香が笑顔で迎えてくれるから、俺は俺でいられる。優衣香の前でだけ、俺は俺でいられる。

——だから、今のままでも、いい。



十一月二十七日 午後四時十三分

三日間の有給休暇を終えた野川はこのマンションに戻ることなく、署で事務処理をすることになった。武村は交替でマンションへ来ているが、同じ所轄の反社の本城とペアを組んでいてマンションに戻ることは少ない。

昨夜、野川から電話が来た。実家で休息をすっかり取れたのだろう。元気な声で『相澤さんよろしく伝えて下さい！』と言っていた。だが、俺に詫げる言葉は小さな声で

目眩がした。

「松永さん、もしかして起きてます?」

今、仮眠室で俺は窓際のベッドに横になっっているが、ドアが開いて、入ってきた相澤が俺に問いかけた。最近俺が寝ていないこと心配しているようだ。

「松永さん……笹倉さんのことでそんなことになってるんですよね?」

——そんなことって何だよ。

そう思っつて顔を相澤に向けたが、仮眠室のドアを閉めてこちらに近づいて来ていた相澤は、俺の顔を見て立ち止まった。

「そんなことって何?」

相澤が言うには、俺は目が落ち窪んで頬もコケていると。顔色が悪くて髪に艶もなく、唇がガサガサだと。細身スーツのスラックスのウエストにシワが寄つてると。ワイシャツも首周りに隙間が出てると。脇腹のワイシャツにシワが寄つてると。

「そんな俺らいつもだろ。まともな生活出来ねえんだし」

「松永さん、メシ食ってます? 寝てます?」

「てかさ、お前、何で優衣香が原因って思ったの?」

その言葉に相澤は目をそらした。

このゴリラの相澤は秘密は守る男だ。俺が叩き込んだ。だが、このゴリラは秘密があ

ることがすぐ顔に出てしまう。

——何か知ってるな。

窓際から体の向きを変えて、床に足をつけてベッドに座った。

自分に向き合った俺に、相澤はそこから一步踏み出したが、髪をかき上げた俺の顔を見るとまた立ち止まった。

俺は立ち上がって相澤の顔を見ながら近づいた。

美容院でストレートパーマをかけた髪は口元まで伸びている。髪が視界を塞ぐが、相澤の顔ははつきりと見える。

立ち止まった場所で体を強張らせている相澤の前に立った。拳ひとつ分も離れていない距離で。

相澤は俺の顔を見ようと顔を上げた。

「知ってることを全て話せよ」

「言えませんが」

「言えないってことは言えないことがあるってことだけど、意味わかってんの？」

その言葉にハツとした相澤は目をそらした。

薄墨を刷いたような空の色。

薄暗い仮眠室に俺と相澤。

バルコニーに激しく打ち付ける雨粒の音と遠くに雷鳴が聞こえる。

「……言います」

相澤は、俺が水しか飲んでない、食事を取らないと葉梨が心配していたという。他の捜査員も気づいているから上にも報告が上がったが、インテリヤクザの米田は松永は女に振られたんだろと言っていたと。だから笹倉さんと何かあつたんだと思つたと言つた。

「で？」

「……それだけです」

——んなわけねえだろ。

相澤に体を寄せた。

膝を当てると相澤は後退りしていく。

そのまま仮眠室の扉を背にするまでの一メートル五十センチを相澤の目を見ながら追い詰める。

怯えた相澤の逃げ道は仮眠室の扉が塞ぐ。

肘を相澤の肩に乗せて右手で髪を掴み、左手で額を押し顔を上げた。

相澤の顔を覗き込む。

前髪が相澤の頬に垂れ下がる。

「相澤」

俺と相澤は十五センチの身長差がある。だが、柔道のゴリラと剣道の俺では近接戦に強い自分の方が優位だとわかっているはずなのに、このゴリラは怯えていた。

「話してよ」

激しい雨の音が聞こえ出した薄暗い部屋で、時折通り過ぎる稲光と雷鳴が映し出すのは、怯えた相澤の表情だった。

「さっ……笹倉さんは松永さんが元気にしていると聞いて安心してました。だっ……だから笹倉さんは大丈夫です」

「優衣香と会ったの？」

「はい」

「ああ……そっか。でも何で、優衣香はお前に俺の話をしたの？ お前から話したの？」

初めてだよ、優衣香とお前が俺の話するの」

相澤は目をそらす。どうしてコイツはここまでわかりやすいんだ。

「まあいいや。で、大丈夫って何が大丈夫なの？」

「えっと……」

「何が大丈夫なの？」

「……松永さんが元気にしていると聞いて——」

「相澤、そうじゃなくて。俺はね、相澤が大丈夫だと思いつた原因と経緯を聞いてるの」

相澤は視線を彷徨わせていたが、俺の目を見ると覚悟を決めたのか口を開いた。

「笹倉さんは松永さんだけを想ってます！」

松永さん！

安心して下さい！ お

願いですからメシ食って下さい！」

——こいつは優衣香と間宮の関係を知ってる。

俺は全身の血が沸き立つのがわかった。

相澤の肩に乗せた腕を離して、その肩を軽く押した。上半身は揺れたが、相澤はすぐに俺の顔を見た。その目は真つすぐ俺を見据えている。

——こいつはこれ以上のことは話さないと決めたな。

俺が叩き込んだ秘密保持を守る相澤を頼もしく思うと同時に、憎たらしくも思った。そう思うと口元が緩む。

俺は相澤に背を向けてベッドへ戻った。

天井を見上げると、扉の前で立ち尽くす相澤が視界に入るが相澤は動かない。

相澤は下を向いている。

また雷鳴がした。

俺は天井を見上げながら、頭の中で考えていたことを声にした。

「俺さ、この前初めて、優衣香をベッドで抱いたんだよ。ああ、いや、抱きしめたんだよ。それ以上のことはしてない。けど、初めてキスしたんだよ」

相澤は何も言わない。ただ、俺の話を聞いている。だから俺は続けた。

「キスしたら止まらなくなつて、何度もして、優衣香は俺の女だ、やつと俺の女になつたんだつて、そう思った。そう思つてたんだよ」

「だから！　笹倉さんも松永さんを好きですよ！」

「ああ」

「だったら——」

「でも間宮と一緒にいるのを——」

「それは——」

「間宮ならいいかって——」

「だから違う——」

「ふふっ……やつぱりお前、優衣香と間宮のことを知つてんだな。ふふっ」

雨粒の音が激しくなる。

その音は、俺の鼓膜を、俺の心を震わせる。

——相澤にカマかけたつもりだったけど、違つた。俺は思い違いしてた。

俺は優衣香が他の男と一緒にいたことが許せなかつたんじゃない。

俺は優衣香に捨てられることが怖かったんだ。

俺は優衣香に忘れられることが怖かったんだ。

——あの時の恐怖と同じだ。

「でも裕くんありがとう」

そう口に出たような気がしたが、言っていないかも知れないなと思いつつながら、俺は眠りに落ちた。

幕間 始めたら終わりがある

嫌な予感はしていた。

加藤から、刑事課の間宮さんが女とラブホに行く所を野川が見たらしいと言われた時、相手は笹倉さんじゃないか、松永さんはそれを見て冷静でいられたのか不安になった。

でも、笹倉さんの自宅に伺った時に聞いた話と、間宮さんから聞いた話に矛盾は無かった。ラブホにも行ってない。だから二人の間に何も無かったのだから、もう俺は関わらないでいいと思っていた。

このところ松永さんに会うことは無くて、今日会ったら、松永さんが痩せていた。生気の無い目をしていた。長めの髪をちゃんと手入れしなくて髪がパサパサだった。葉梨は松永さんが食事を取らないと言っていた。

野川を笹倉さんのマンション付近で回収した後、松永さんは笹倉さんに会いに行ったと思ってたけど、行ってなかった。その足で署に行って武村に説教していたと間宮さん

が教えてくれた。

だからあの日以来、笹倉さんに会いに行っていないんだ。

笹倉さんに恋人が出来て自暴自棄になっても、こんなことになったことなんて今まで一度も無かったのに。

やっぱり、笹倉さんのことでこんなに思い詰めてるんだと思った。

俺が言えよよかったんだ。

俺があの日、松永さんに言えばよかったんだ。

そうすれば松永さんは笹倉さんを行かせなかった。

そうすれば松永さんはこんなことにならなかった。

◇

十一月二十七日 午後五時二十九分

松永さんが寝息を立てて眠る姿を俺はあれからずっと見ている。眠いけど、今日は松永さんを見たいと見ていた気持ちになった。

松永さんはあのまま寝てしまった。

雨は止んで日が落ちて、街の明かりがカーテンから漏れて、松永さんを照らしている。

——ちやんと寝てる。

髪を掴まれた時の松永さんの目はすごく怖かった。

あの目を見たら足が竦んでしまった。だってあの日の松永さんと同じだったから。

あの目で凄まれたら、全てを話さないと殺されると思った。

でも、俺は話さなかった。

でも、松永さんは勘づいた。

でも、裕くんありがとうって言った。

——これでよかったんだ。

◇

笹倉さんのお母さんが殺されたこと、家が放火されたこと、交際相手がその場で自殺したことを、半年近く経ってから知った松永さんが刑事課の俺の所に来た日の松永さんのあの目はもう二度と見たくないと思った。思ってたけど、また見てしまった。

生存を脅かされる極限に置かれていた人間の目。

半年以上も単独行動で情報を遮断されていた松永さんを、署の誰もが松永さんだと気づかなかつた。それくらい、松永さんは変わり果てていた。

松永さんを暴漢と誤認した署員が制止しようとしたけど、次々と倒されて廊下に転がっていた。壁や床には血液が飛び、追いつめる署員の手は空を切り、怒号と唸り声と悲鳴だけの廊下だった。

悪夢を見ているようだった。

俺を見つけた松永さんは凶暴な目をしていて、今まで見たことのない人間の目で俺だけを見ていた。

俺は殺されると思った。

松永さんは俺の前に来て、俺の腕をものすごい力で掴んだ。それから何かを言いたかったのだろうけど、声が出なかった。掠れた空気の音だけが聞こえた。

やっとそこで俺は松永さんだと気づいたが、俺もその時にはもう何も考えられなくなっていて、なんとか絞り出した言葉は『事実です』だった。

その瞬間、松永さんが強く掴んだ俺の腕は開放されて、松永さんはそのまま膝から崩れ落ちた。

松永さんは力の入らない腕で俺の胸を叩き、嗚咽を漏らしながら笹倉さんの名前を呼んでいた。

『優衣ちゃん……優衣ちゃん……』

俺の腕の中で、声にならない声で、笹倉さんの名前を呼び続けていた。

松永さんは、大切な人が全てを失って暗闇の中にいることすら知らなかった。松永さんの心の中はわからないが、自分の存在が否定された気持ちになったのだと思う。友達ですらない、と。笹倉さんにとって自分はいなくてもいい人間だと思ったのだと思う。

松永さんは笹倉さんを二十年以上想い続けて、この前やつと手に入れた。でも手に入れたと同時に手にするものがあるということを知った。松永さんは知らなかった。

多分、それを知ったから怖かったんだろ。だって松永さんは恋愛経験ゼロだから。笹倉さんは恋人じゃなくて幼馴染みで友達だから。

笹倉さんに恋人が出来ても別れるまで待つてただけ。笹倉さんがいつまでも結婚しないから、松永さんは失恋を経験しようにも出来なかった。

始めたら終わりがあ、松永さんは知らなかった。

松永さん。恋い焦がれる笹倉さんの気持ちから自分から離れてしまうのでは、と思いつむのは辛かったでしょう？ 怖かったですよ。でも二回目じゃないですか？

あの時と同じように自分にかするしかないですよ。

でも松永さん、笹倉さんはちゃんと間宮さんの交際の申し出を断ってましたよ。

『心に決めた男性おとこがいるんです』

そう間宮さんに伝えたそうですよ。

あの日、間宮さんと笹倉さんが一緒にいた理由は、間宮さんがどうしてもお願いし

たからでしたよ。

あんな熊とゴリラの間の^{あい}子みたいな間宮さんの誘いを断れる女性は狂犬の加藤ぐら
いしかいませんよ。

ゴリラ単体の俺ですら面識があるのに今でも笹倉さんは怯えますからね。

フラれた間宮さんは落ち込んでましたよ。

笹倉さんは間宮さんの好みのタイプど真ん中でしたからね。

でも間宮さんは俺と松永さんの三人で合コンしようって言ってきましたよ。

あの熊とゴリラの間の子は挫けませんね。

どうしますか、松永さん。

笹倉さんにヤキモチを焼かせるために合コンに行ったらダメですからね。



ベッドに置いたスマートフォンが震えた。

画面を見ると加藤からのメッセージを受信した通知だった。

ベッドに座り、加藤のメッセージを開くと、『服はスーツでいいの?』とある。

あの日以降、加藤はスカートを履く日が多くなった。寒いのに我慢している気がす

る。加藤がズボンでも俺は何とも思わないのに。

『スーツにしよう。ズボンね。暖かくして』そう送ると加藤からすぐに返信があった。

『ありがと。了解。なんで起きてんの？ 寝たら？』

加藤はリビングに一人でいる。松永さんは寝ているからリビングに行って話せばいいのだけど、あの話をしようとする、加藤は手を出してくる。

『話がある』

『なに？ 寝な』

『この前の話』

『やめて。寝な』

『ならいつ話せばいいの？』

『その話したら殴る。早く寝な』

——始めたら、終わりがある。

奈緒ちゃんはわかっているのかな。俺と関係を持って、終わったら元には戻れないと。

それでもいいと、奈緒ちゃんは思っているのかな。

——奈緒ちゃん、俺は嫌なんだよ。

奈緒ちゃんは、俺の中でずっと同期の奈緒ちゃんでいて欲しいんだよ。

美人でカッコよくて足が速くていつも俺をぶつちぎっていく後ろ姿を見ていたいんだよ。

俺は、奈緒ちゃんを失くしたくないんだよ。

——始めたら、終わりがあある。

——だから、今のままで、いい。

つながる心

十一月二十八日 午後十一時三分

「もしもし」

「うん、あー、あの……優衣ちゃん」

「こういうのはあんまりよくないんだけど……今近くについて……あの……これから行ってもいいかな」

「少しだけなんだ。時間あんまり取れなくて……ごめん」

「うん、ごめんね、すぐ行く」

◇

あれから、相澤から優衣香のことは何も聞いていない。ただ、相澤の言う『大丈夫』だけを頼りに、俺は優衣香のマンションへ来た。

でもやっぱ怖い。

電話も怖くて出来なかった。

優衣香が来てもいいと言ったからマンションへ来たが、この扉が開いても、目の前にいる優衣香を見るのが怖い。

相澤が大丈夫だと言ったから大丈夫なんだろうが、部屋のインターフォンのボタンを押そうとして押せなくて、さつきから躊躇している。

でも、今日は行かないといけない日だから……。



インターフォンを鳴らしてすぐ、解錠する音とチェーンロックを解除する音が聞こえた。

——扉の向こうで待ってたんだ。

扉が開くと優衣香の姿があった。

ネイビーのフリースジャケットを着て、黒のストレッチパンツを履いている。グレーのレッグウォーマーをして、髪の毛は変わらないストレートのロングヘアで後ろでまとめられている。

「いらつしやい」

そう言う優衣香は俺の目を見ない。顔は見ているが目線を合わせない。

「……夜遅くにごめんね。今日来たくて」

優衣香はサンダルを脱いで上がった。俺も靴を脱いで揃えて、目の前にいる優衣香を見た。

「ぎこちない笑顔の優衣香――」。

俺はそれから目をそらした。

「手を洗ってからお参りさせてもらうね」

そう言って、洗面所に向かった。

左の手前がトイレで、その奥のドアが洗面所だ。

洗面所で手を洗っている時、脇にあるポプリが目に入った。

――あの時の薔薇かな。

鏡に映る俺の顔は、少し頬が緩んでいた。

鏡越しに見る洗面所の風景を見ると、違和感を覚えた。物が減った。なぜだろう。優衣香の家の中はいつも片付いているのに。洗面所でこれなら、リビングやキッチン、寝室や書斎なども物が減ったのか。

洗面所のドアの正面は四畳半の和室。

そこにはお仏壇がある。

——今年は命日に来れてよかった。

お仏壇にある座布団には、いつも俺は座らない。

座布団を除けて正座する。

——写真が変わってる。

おじさんとおばさんが寄り添っていて、笑ってる。

俺が高校生の頃に見た二人の姿だ。

おじさんが入院する前に見た元気な姿だ。

——お嬢さんを守ることが出来なくて申し訳ございませんでした。

線香を立ててから、俺は土下座をする。

ここに来る度にいつもやってることだ。ずっと、お詫びしている。

許される日は来ないけど、俺にはそれしか出来ないから。

◇

和室から出てリビングの扉を開けると、優衣香は一人用ソファに座っていた。こちらを見ているが、やはり目をそらす。

——やっぱり物が減ってる。

リビングの全景を視界に入れながら一人用ソファの左手にある二人用ソファに座ろうとした。だが、優衣香が立ち上がって俺の行く手を阻んだ。

口を開こうとしている。

俺は優衣香の体を引き寄せて頭を抱え込んだ。

「敬ちゃん、話——」

俺は優衣香の口を塞いだ。

唇を舌でなぞると優衣香が唇を開けた。

優衣香の身体から力が抜けるまで、俺は口を塞いでいた。

——聞きたくない。言わないで。お願い。

優衣香が目を開けて、俺と目が合った時、優衣香の目から涙が零れた。

——それは何の涙なの。

優衣香の涙を手のひらと唇で拭いてやった。

——やつれてる。

優衣香は厚手のフリースを着ているのに、中にだって服を着ているのに、痩せたことがわかるほどだった。

——優衣ちゃん、どうしたの。

「敬ちゃん、あの……私……相澤——」

「言わないで」

「でも……私がい——」

「言うな!!」

大きな声を出した俺に優衣香は目を見開いて、身体が硬直してしまった。

「優衣ちゃん、ごめんね。俺の話を聞いて欲しい」

優衣香の頭を撫でながら、優しく優衣香に話かけた。

「相澤は秘密を守ると言ったはずだよ。相澤は秘密を守ってる。だから優衣ちゃんも相澤との約束を守ってあげて欲しい」

優衣香は目を伏せて、また俺の目を見たが、体から力が抜けてまた涙が溢れ出てきた。

——優衣ちゃん、笑って。俺に笑顔を見せて。

優衣香の泣き顔を見ていたら、俺も涙が頬を伝うのがわかった。それを見た優衣香の唇が震えている。

「優衣ちゃん……俺のこと好き?　大好き?　優衣ちゃん、優衣ちゃん……俺と

……ずっと……優衣ちゃん……俺……好きなんだよ優衣ちゃん……」

俺は優衣香を腕に抱きながら、優衣香が嗚咽を漏らしながら途切れ途切れに好きと言う声を聞いていた。



午後十一時五十四分

迎えの公用車が見えた。

俺は走った。全力で走った。

だが予定より四分も遅れてしまった。

助手席のドアを開けてシートに滑り込むと、相澤は俺をくまなく観察した。

「ごめんね、遅くなった」

そう言った俺の顔を見たが、視線が左右に動いている。何だろうか。だが相澤のおかげで優衣香と話し合えたから、お礼を言わないとならない。

「裕くん」

シフトレバーをドライブに入れ、サイドブレーキを解除した相澤に声をかけた。

「ありがとう」

何についての感謝なのか、言わなくてもわかってもらえる。相澤は、『いえ』と、ただそれだけを言って、発車した。



優衣香は引越しを考えていて、物を減らしている途中だと言っていた。俺としても、優衣香のマンション付近を野川に知られてしまった以上、今まで以上に気を遣う必要があり、『いいかもね』と優衣香に伝えた。

『もう少し広いところにしようと思ってるから、敬ちゃんの荷物を、もつと置けるからね』

優衣香は俺との未来を見ていた。

嬉しかった。

でも荷物と言っても、俺は物を持たないようにしているから服くらいしかない。

俺は優衣香さえいてくれればいい。

そんなことを考えていると、相澤の声が耳に流れ込んだ。

「松永さん、顔に——」

「言うな。わかってる」

「いいですね、幸せそうです！」

「裕くんのおかげですよー」

公用車の中で、二人で笑い合いながら、俺は相澤の幸せが何なのか、知りたいと思っ

た。

暗闇の抱擁

十一月二十九日　午後六時三十二分

今日、加藤と葉梨はデートしている。

加藤は午後四時から明日の午前九時まで、葉梨は午後六時から明日の午前八時まで二人に時間を空けてやった。

今日は葉梨の誕生日らしい。誕生日に憧れの加藤とデート出来るなら、いい思い出になるだろう。

加藤に葉梨のことを言った時、加藤は『年下の男に言い寄られるなんて、私もまだまだいけるんですね』と、口元に笑みを浮かべて俺の目を真つすぐ見ながら言った。その後二人はデートの約束をしたことをおくびにも出さず、相澤は何も気づいていない。

今日はペアの加藤が不在だからと相澤は俺と一緒に外に出ているが、加藤と相澤の関係を聞き出しても相澤は頑として口を割らない。

俺は相澤が着るコートの袖口を摘んで左右に揺らした。それを面倒くさそうに相澤

は横目で見ている。

「ねえ裕くん、この前奈緒ちゃんと何かあったんでしょ？」

「何もありません」

「でもー、奈緒ちゃんは裕くんと何かあったって顔に出したんだよー？
だから教えてー」

「何もありません」

——なにさー！ ゴリラのくせに！

相澤は目の色ひとつ変えず、あしらわれる俺はゴリラにカマをかけるタイミングを見計らっていた。

「あ、そういうえば、また加藤に土下座したそうですね」

「うん！ したよ！ 三年ぶり！ だから教えて！」

「何もありません。で、何したんですか？」

「えっ、聞いてないの？」

「聞いてないですよ。加藤は『土下座された』とだけ毎回言います」

「そうなんだ！ なら俺も言わない！」

「……加藤に土下座するって、口クでもないことをしたってことですよね？」
「うん！」

「……もう五回目ですよね？」

俺は土下座なんてしたことないのに」

——五回？

自慢じゃないが、俺は過去に六回土下座したことがある。その都度加藤は相澤に話しているのだろうが、その抜けた一回は何なのだろうか。理由を言わないのなら六回と言うだろうに。

加藤に初めて土下座したのは七年前だった。

捜査で借りているマンションでシャワーを浴びている間に、加藤の存在をすっかり忘れた俺はバスルームから全裸で加藤の前に出てしまった。

お互いに視線を動かさずにいたが、俺は『とりあえずパンツ履いていいかな』と言った。それだけならパンツ履いた後に直角に頭を下げて謝罪すれば済んだのだが、『どうせ見るなら相澤のがよかつたでしょ』と余計なことを言ってしまった。

俺はその時に初めて狂犬になった加藤の姿を見てしまい、怖かった。その後、パンイチで加藤に土下座をした。人によってはご褒美だが、あいにく俺にはご縁のない性癖だからただただ許してもらうことだけを考えていた。

二回目、三回目、四回目と思い出していくと、本当に俺は加藤にロクでもないことばかりしていて気が遠くなりそうになったが、相澤が知らない一回でカマをかけてみることにした。

「五回……？　そう……ふふっ」

横目に相澤を見て、目が合った時に俺は口元を緩めた。相澤の顔を下から上、上から下と視線を動かして、正面を向いて小さく鼻を鳴らした。

「あー、そうだね、仕事でなら……確かに五回だ。ふふっ」

プライベートで加藤と俺の間に何かあった、それを匂わせた。相澤は知っている。優衣香に男がいる間に俺が手を出す女は皆、スーツを着た時の加藤のようなキツイ女ばかりということ。背が高くて髪の毛の長い痩せた女だ。

相澤は一瞬だけ目を動かしたが、すぐに目を細めて呆れた表情をした。

「家に帰って加藤がいるのは嫌ですよ」

加藤との間に何が起きたのかは絶対に言わないが、結果を言うから察してくれ、ということか。ならば葉梨のことは伏せて加藤に男の影があることを匂わせるか。

「もう長いこと、加藤に言い寄ってる男がいるんだけど——」

どうする、と言った時に相澤の顔を見たが、思いがけない相澤の目に俺は目が離せなくなつた。

——何その目。

相澤のこんな目を今まで見たことがない。相澤は手を握り締めている。目が微かに動いた後、その握った手を隠すようにコートのポケットに入れた。

相澤は『どんな人ですか?』と言ったが、さっきの目は消えていて、いつもの目に戻っている。

「知らない。でも加藤はいい男だつて言つてた」

「いい男?」

「……ねえ裕くん、奈緒ちゃんの恋をきちんと終わらせてあげるのも、いい男だと思うよ」



十一月二十九日 午後八時四十二分

船舶内のような内装のバーにバーテンダーと男性客が二人いる。長身の男は店の奥の壁にあるハードダーツボードに向かってダーツを投げている。もう一人は点数を紙に書いていた。

入口のドアには船舶用の丸い窓が嵌め込まれていて、その窓の向こうに女の顔が見えた。その後ろに男がいるようだ。

カランカランとドアにつけたベルの音がして、その男女は店内に入った。男性客二人はそれを一瞥しただけで、またダーツボードを向く。

女はカバンをカウンタージェアに置き、男は女が脱いだコートを受け取るとハンガーにかけ、壁にあるフックにかけた。男がコートを脱ぐと女はそれを受け取ろうとするが、男は優しく微笑み『大丈夫ですよ』と言い、自分でハンガーにかけてフックにかけた。

女は白いキャミソールの上に白いシャツを胸の中程までボタンを開けていて、ブルーのデニムを履いている。ブラウンの髪は大きめのカールで女の美しい顔を華やかに彩っていた。

ピアスもネックレスも大ぶりなものを身に着けているが、指輪は着けていない。女は七センチのヒールを履いているが、男の口元程の背丈だ。男は長身で体格もいい。ダークブルーのデニムを履き、黒いヘビーウエイトの長袖Tシャツを着ている。袖口にブランド名が刺繍されたそれは、経年変化で彼の身体に馴染んでいるものだった。

カウンタージェアを男が引き、女は座る。男はその右隣に座った。

『いらつしやいませ』と、バーテンダーが二人に声をかけ、男はモスコミュールを注文した。バーテンダーは男から女に視線を動かして視線を下にやり、女の両手を見てから女の目を見た。

女がバーテンダーと目を合わせ、『ターキーソーダを』と言った時、バーテンダーは微笑かに目を動かした。



女が三杯目を飲み始めた時だった。

アルコールが進み体温が上がったのか、男が腕まくりをした。それは腕の中程までだが、鍛えられた太い腕が露わになり、女はそれを見て口元を緩めて袖口と腕時計の間あたりをそっと触れた。女は指先に力を込めてからその手を男の脚に手を添わせる。

男は横目で女を見て、カウンターのの上に置いていた左手を自分の脚にやった。

女の細い指先が男の手の甲に触れて、指がゆっくりと手の甲をなぞっていく。指と指とが重なると、男は指を開いて女の指の動きを止めた。

男が親指で女の小指をそっと撫ぜると、女は膝を寄せる。男の親指と人差し指は女の小指を包み、中指は小指の先を優しく撫ぜていた。

男が親指と中指を離した時、女は男がいる方へ顔を向けた。だがすぐに男の人差し指は小指を指先から手のひらへと撫ぜ始める。

親指が女の手首を掴む。

人差し指は手のひらを経て手首へとなぞっている。

女の手はいつの間にか反転していて、男の指先が手首から撫ぜ始めていた。ゆっくり

と、男の爪が女の手のひらを這っていく。

そしてまた、指先と指先とが重なった。

カウンターの下の暗闇で、絡めた二人の指は互いを求め続けていた。



女がジャックローズを注文すると、バーテンダーはキッチンへ行った。

それを目で追った後、女は目線を男の唇から目に移動させて、仄暗い店内の照明の灯りを受けた、濡れて輝く唇を動かして何かを呟いた。だが男は聞こえなかったようで、少し首を傾げてから、耳を女の唇に近づけた。

女は耳元で何かを囁くと、男の目が動いて女を横目で見た。そして女は、耳朶にそつと唇を落とした。

バーテンダーがキッチンから戻ると女は化粧室へ行く旨を男に伝えた。その間にバーテンダーはジャックローズを作り始める。

一人になったその男に、笑みを浮かべながらバーテンダーが話しかけた。

「奈緒さんが男性と来店されたのは初めて、ですね」

その男、葉梨はなしまきよし将由は『そうなんですか』と言い、頬を緩ませた。



加藤に葉梨のことを言った時、なぜ葉梨をいい男だと言ったのか聞いてみた。見た目の話では無いことはわかっている以上、加藤が考えるいい男とは何なのか気になったからだ。

加藤と葉梨が出会ったのは二年前で、能力を見込んだ加藤が月に一回以上は必ず会い、その他は電話やメールでやり取りをしていた。

一年が過ぎた頃、葉梨の変化に気づいた加藤が初めて葉梨のプライベートの話聞いたという。そこで葉梨は恋人と別れたと話した。詳細は言わず、ただ別れたとだけ。加藤は葉梨の変化がそれが原因かとわかり、葉梨はいい男だと思っ、葉梨にそれを伝えたそう。

それを聞いた俺は大きく首を傾げた。そんな俺に加藤は笑いながら、『葉梨は恋人と別れたから、私に男を見せたんですよ』と言った。

『恋人以外の女には男を消す男って、いい男だと思いませんか』

重ねて加藤は、『松永さんは、いい男の時とただの男の時の振り幅が酷すぎる』と笑う。ならば今はどうなのかと聞くと、睨めるような目で『どちらでもない男』と言った。

それを聞いた俺は眉根を寄せながら口を尖らせ、『四回目の土下座で反省したんですよ』と言うと、加藤は肩を揺らせて笑い始めた。

『一人の女だけを夢中にさせる男は、いい男なんですよ』

最後にそう言った加藤は唇を少しだけ引き結んで、目を伏せていた。

もう一つの居場所

十一月三十日 午前三時五十分

カランカランと、ドアについたベルが鳴る。

キッチンの暖簾の隙間からバーテンダーの望月奏人^{もちづきかなと}が俺を見ると、望月は驚きつつも嬉しそうに顔を綻ばせた。

「おおっ！ いらっしやい。松永さん、久しぶりだね」

俺のいつもの場所――。

カウンターの隅の定位置に座ると、望月はコースターを置き、おしぼりを手渡しながら、俺の髪型を見た。

「その髪型って、寒くないの？」

「ふふっ……すっごく寒いよ」

昨日の昼、俺は弟の美容院へ行った。

耳の上の三センチ上から下の髪を刈り上げ、上の髪は後ろで結んでいる。髪の手入れ

が大変だと弟に相談したらこうなった。

「何をお作りします?」

望月は俺の髪型を見て笑いながら注文を聞く。俺も笑顔で『ロングアイランドアイスティーで』と言うと、俺の手元に視線を落とし、また俺の目を見て『かしこまりました』と答えた。

◇

このバーテンダーの拠点は元々都内で、七年前まで俺の情報提供者だったが、彼の持つ情報が不要になった今でも俺はこの店に来ている。横浜中華街の外れにあるオーセンティックなバーだ。

——自分が自分でいられる場所。

仕事中にふらつと訪れることもあり、ノンアルコールのドリンクを注文する際のハンドサインを決めてある。

ここには加藤も連れて来たこともあり、たまに訪れるようだ。多分、加藤は葉梨とここに来たと思った。なぜかはわからないが、なんとなくそんな気がして、今日はこの店にやってきた。

「今日はダーツはやる？」

「いや、今日は……まだいい」

ロングアイランドアイステイリーのノンアルコールは濃いめに淹れた紅茶に炭酸水を混ぜたもの。それを彼がコースターに乗せた時、彼が口を開いた。

「奈緒さんのことは黙秘しますよ」

「まだ何も言つてないけど？」

——やっぱり来たんだ。

彼自身も、ここでの加藤の振る舞いに驚いたのだろう。加藤は男とこの店に来ると、指輪を着けている指と目配せで連れの男がどういう関係かを彼に知らせる。そして男のドリンクのアルコール度数の増減をハンドサインで行う。

「奈緒さん、自分のドリンクだけアルコール増やすサインをした」

「……マジで？」

「初めてのことでびっくりしたよ」

加藤は面倒な男の場合、『ちゃんと帰宅出来る』レベルまでさつさと追い込む。友人などの場合は、初めから目配せで知らせてあるから彼は何もしない。

「アルコール度数を増やしても酔わないのにな」

「ふふっ、そうだね、確かに……でも——」

にんまりと笑う彼は、来店時の加藤のサインと目配せは『要注意の男』だったが、指輪をしていないことを不思議に思っていて、加藤が二杯目から自分のみアルコールの度数を増やすサインを送ってきたことに驚き、加藤を注意深く見ていると、加藤が今まで見たことの無い振る舞いを葉梨にしているという。

「奈緒さんの本命なのかと思っただけど……どうなの？」

「ああ、連れの男は同業で、俺がデートをセッティングしたんだよ」

「ああ、そうなんだ。なら……ねえ」

「ん？」

「ふふっ……奈緒さん美人だし、あんな目で見られたら男はみんな落ちるよ」

彼のその言葉に、加藤に四回目の土下座をした理由を思い出した。加藤と彼が結託して、俺を潰しにかかったのだ。

「やめて。思い出しちゃうから。やめて」

「ふふっ……あれはよくなかったね」

ノンアルコールのロングアイランドアイステイーを飲み干し、店の奥にあるハードダーツボードを見ていると、それを見ていた彼からダーツを渡され、『さあ、どうぞ』と離席を促された。



ダーツは父がやっていた。父の書斎と称した二階の四畳半の和室は普段は鍵がかけてあつて入室禁止だったが、たまに部屋に入れてくれることもあつた。

部屋の壁にはハードダーツボードが掛けてあり、スローラインには養生テープが畳に貼られていた。約三十三センチのボードに向かい、父は投げ方を教えてくれた。

——お父さん。

父はすぐく優しくかつた。母が躰に厳しくて俺ら三人は父の帰宅を待ちわびた。だが刑事課の父はあまり帰つてくることは無かつた。そんな中でも、どうにかして時間を作つて、ほんの数分だけの時もあつたが、俺ら三人と関わる時間を作つていた。

警察官になり、父を知る人達からは厳しく育てられたと思われていたことが不思議だつた。確かに兄は柔道をやり、俺は剣道だつたから、警察官の息子として厳しく育てられたと思われるのも仕方ない。父とは同じ所轄になることは無かつたが、俺の仕事ぶりは筒抜けだつたようでも、父から叱られることもあつた。

——お父さん、会いたいな。

父が署長になつてすぐだつた。俺は須藤さんから連絡を受けた。

『おじさん……松永署長が刺されて重傷だと。すぐ迎えに行くから』

俺は呆然としてしまい、迎えの公用車に押し込められた記憶があつて、その次の記憶は手術室の前で先に到着していた兄と兄嫁の顔を見た時だった。

——お父さん、隣の優衣ちゃんがね。

俺の離婚が成立した後、父と二人で飲みに行った。

その時に初めて、中学の頃から優衣香が好きだと言った。結婚前に優衣香の前で泣いたことも話した。

父は驚いていたが、父と母の馴れ初め話を教えてくれた。

『十二本の赤い薔薇の花束をデートの度に贈つて、毎回プロポーズした』

父の一目惚れから始まった恋は、初回のデートからプロポーズだったという。俺は母から友達の話だと聞かされていたから驚いた。

母は、警察官の妻として自分を律することも、息子三人を厳しく育てることも完璧にこなした。

夫婦関係はどうなのかと思ひ返せば、そもそも父が家にいなかったから、仲が良かったとは思えない。かといって冷え切った関係でもない。普通の夫婦なのだろうと思つていた。

でも、父が治療の甲斐なく亡くなった後、母は父の匂いが残る枕を抱いて、声を押し殺して泣いていた。

『敬志も、一番好きな人と結婚すればいいよ』

——お父さん、優衣ちゃんが俺を好きって言うてくれたんだよ。

ダーツをする時は、父を思い出す時。

実家にはあまり帰れないけど、ここには来れる。

——お父さん、俺、いつか優衣ちゃんにプロポーズするよ。

◇

「ねえ、ブラッディーマアリーお願い。胡椒いっぱい」

「かしこまりました」

席に戻り、ブラッディーマリーのノンアルコール——ただのトマトジュース——を

飲む。

「あのさ、今度彼女を連れてくるから」

「ん？　奈緒さん？」

——ここは俺の居場所だから、優衣香に男がいる時に手を付けた女は連れて来たことがない。俺が連れて来た女性には加藤だけだ。

「違うよ、俺の恋人だよ」

「えっ……」

「なんでそんなに驚くんだよ。ふふっ」

酒を飲んだ優衣香は、十五年前に見たことがある。酔って肌が上気して、少し眠そうな目に見つめられて、俺の心臓はトクンと跳ねた。

優衣香とはいろんな所に行きたいと思っている。

まだ手も繋いだこともないから、手を繋いで歩いてみたい。だから、手を繋いでここに来ようと思う。

——優衣ちゃん、ここは俺の好きな場所なんだよ。

「松永さん、顔が……あの……」

「うるさいな、いいだろうが」

「えー、奈緒さんも松永さんもどうしちやったのよ」

会計を済ませて席を立ち、ジャケットとコートを着ていると、彼が話しかけてきた。

「今ので百万超えたけど……」

この店がある地域は、慣例としてチャージを取らないが、ノンアルコールのドリンク二杯で一万円を払うのは多すぎる。だが、情報提供者として出会った以上、これは必要なことだ。

「いいよ、取っとけよ」

「でも……」

「じゃあさ、加藤がこの前の男とまた来たらさ、濃厚なロングアイランドアイステイーを男にご馳走してやってよ」

「嫌がらせ？」

「お前から俺に飲ませただろうが」

「まだ根に持つてるの？」

お互いに笑い合いながら、『またね』と俺はドアを開けた。冷気が頬を撫ぜ、首を竦めた。

「この頭、すっげ寒い」

彼の笑い声を聞きながら、ドアを閉める。

——優衣香もこの店を気に入ってくれるといいな。

幕間 ここから始まる二人（前編）

この店ではハンドサインと目配せ、私の十指のどこに指輪をしているか、それに注文するカクテルの種類で意図が伝わるようにしてある。

松永さんにここへ初めて連れて来てもらったのは六年前だった。この四十を少し越えた位のバーテンダーの望月さんと松永さんの関係は知らない。だがおそらく、彼は情報提供者だ。それも関係が長い。

私が払う会計は通常料金だが、彼が受け取るべき手間賃は、松永さんが私の分も支払っているのだと思う。

私がジャッククローズを注文する時のサインは、連れの男の視界から見えない所へ行つて欲しいという意味と、もう一つ、他の意味がある。

「ジャッククローズをお願いします」

葉梨はペースが早い。私は今四杯目だが、彼は六杯目だ。最初にモスコミュールを注文し、その後はビールだった。サーバーのゴールドの注ぎ口から注がれるビールが楽し

かったのか、嬉しそうに眺めていた。

葉梨の脚に置かれたままの私の手は、葉梨の指に翻弄されている。優しく執拗に、緩急を織り交ぜた葉梨の指先は、私の体をも熱くさせている。

手を引つ込めたい気もするが、このまま葉梨に委ねたままでもいいとも思う。パーテンドーが消えたら私は葉梨の耳元で囁くのだが、どうしようか。

◇

「加藤さん、本当に……誕生日に……デートしてくれるんですか？」

「嫌なの？」

「違いますっ！ けど……」

「なに？」

「すみません、嬉しくて……すごい嬉しいです」

耳を赤くして恥ずかしそうにそう言った葉梨が可愛いなと思った。『私も嬉しいよ』その言葉を笑顔で言えるなら、可愛く素直に言える女なら、今頃私は相澤と結婚していで、警察を辞めていて、ちびゴリラの母になっていたと思う。

この前、『小さくて可愛い野川』に相澤を取られると思って、相澤に言ってしまった。

なぜか言ってしまった。

『裕くんのがずつと好きだった』

そう。好きだった。私は相澤が好きだった。

警察学校の廊下で貧血で倒れた時、近くにいた相澤が私をお姫様抱っこをして医務室に運んでくれた。

「奈緒ちゃん！ 奈緒ちゃん！ 大丈夫だよ！」

初めて会った時から、なぜか嫌な気持ちにならなかつた相澤にお姫様抱っこされて私は恋に落ちた。

まるで少女漫画のようなシチュエーションだ。オノマトペは胸が跳ねる『トクン』だろうか。しかし実際はそんなものはなく、ただ私は相澤に恋をするのが当たり前だと思っただけだった。

ゴリラがイケメンに見えたのではない。ゴリラはゴリラだった。ゴリラが私をお姫様抱っこして一生懸命走っていた。自分で走った方が速いだろうなど、薄れゆく意識の中で私の名を呼ぶゴリラを見ていた。

いつか私の恋心を相澤に伝えようと思っていたが、勇気が出ずにいつまでも言えなかった。

ある時、相澤が『いろいろあつて美女が野獣に恋するアニメ』のDVDを彼女の家で

観たと聞いた時、私は今がチャンスだと思った。勇気を出して、『美女は野獣が元イケメン王子だから恋したんじゃないよ、野獣に恋をしたんだよ』と言った。

私の中では、勇気を出してかなり踏み込んだ相澤へのラブコールだった。だが相澤は気づいてくれなかった。

七年前、松永さんに私が相澤を好きだとバレた時にその一件を話したのだが、松永さんから『バカなの?』と呆れられた。

この片思いは十六年も続いている。

相澤が結婚するまで片思いしていればいいと思っていた。相澤が結婚したら諦めようと思っていた。

私はあまり男が好きではない。

それは性的指向の話ではなく、実際に至るプロセスや交際が面倒だと思っていて、私は相澤が恋人なら、夫ならいいなどだけ思って、片思いを続けていた。

そんな中、同期の岡島直矢わかしまなおやから官舎で同室の葉梨と相澤と四人で飲もうと誘われた。私は相澤がいるならいいいつも通り伝えて承諾した。

葉梨は背が高くくて体格のいい熊だった。性格も温厚で、見た目と中身が合わないのはゴリラの相澤と同じだなとその時は思った。

その後は葉梨と個人的に連絡を取るようになり、月に一度は必ず会って仕事を教えて

いった。

葉梨は私を女として見なかった。私には都合がよかった。

ある日、葉梨が変わったと思う日が訪れた。

次に会う日を電話で話しながら決めていた時、葉梨が指定した日は私の誕生日だったから、その旨を葉梨に言うとう、『加藤さんのお誕生日当日の夜に会う男が俺でいいんですか？』と答えた。いつもの元気のよい声ではなく、落ち着いた男性の声だった。私は何も考えずに承諾した。

約束の日の数日前、葉梨は電話をしてきた。葉梨はホテルのレストランで食事をしましよう。せつかくの誕生日なのだから、と。

当日、私は指定されたホテルのランクに合うワンピースを着て、ヘアメイクを整えて待ち合わせ場所に行くと、そこには普段のスーツよりも上質なスーツを着た葉梨がいた。髪も切ったのであろう、小綺麗な熊がいた。

そのホテルは高級ホテルだったが、葉梨は場慣れしていた。なぜなのか。私はただ、それが気になった。

ホテルでは、私の誕生日とはいえ会う理由は仕事を教えるためなのだから、フレンチを食べながら仕事の話をした。ただ、熊がフレンチを食べている姿は面白いなと思つて、いつもより笑顔だったと思う。葉梨はそんな私を見て、笑顔になっていた。

あの日は、後輩が誕生日祝いをしてくれたことが本当に嬉しくて、楽しく過ごしていた。だが、食後にパーラウンジで窓際のカウンターから夜景を見ながらカクテルを飲んでいた時、いつもより酔っていた葉梨が、私に体を向けて目を見ながらこう言ったのだ。『俺の誕生日も一緒に過ごしてくれますか？』

その時の葉梨の目は男だった。

まさか葉梨からそういう目で見られるとは思っていなかったから、私は露骨に不機嫌になったのか、私を見た葉梨は焦ってすぐに謝罪をした。

ホテルを後にして、さすがに私の誕生日祝いであろうとも料金が高額であるからお金を払うと葉梨に伝えたのだが、葉梨は受け取らなかった。『彼女と別れて金の使い道がないんです』と言いながら。

私はその時、女と別れたから葉梨は男を見せたのかと納得した。

『葉梨はいい男だ』

私は思ったままを口にしていた。

葉梨は『えっ』と言ったまま固まっていたから、言葉足らずで申し訳ないと詫びて、誕生日を祝ってくれたことについてではなく、葉梨を一年以上見て来た上で、私は葉梨がいい男だと思ったと伝えた。その時の葉梨は耳を赤くして可愛いなと思った。

その後はいつも通りに月に一度は会い、電話やメールで連絡を取っていた。会うとた

まに男を見せる時もあったが、私は気にならなくなっていたし、それよりも男を見せない時の方が気になった。

私は葉梨のことを気になり出したのだろう。

相澤にお姫様抱っこされた時とは違う感情を、私は葉梨に抱いていたから。

◇

バーテンダーはキッチンへ行った。約束通り一分は戻って来ない。私は彼を目で追った後、葉梨の唇を見てから目を見た。

「ねえ、葉梨」

私は口を開けて、小声で言った。もちろん葉梨には聞こえないから、葉梨は少しだけ首を傾げ、耳を私に寄せた。

「私を抱いて」

葉梨は明らかに動揺している。そして横目で私を見た。私はそれを見て口元を緩め、葉梨の耳朵にそつとキスをして、カウンター下で絡めたままの指先に力を込めた。ずつと葉梨に翻弄されている私の意志表示だ。



私がラストにジャックローズを頼む時の連れの男は本命だ、というサインはずいぶん前にバーテンダーの彼とふざけて決めたことだった。

私が化粧室にいる間、彼は葉梨に何か言うだろう。

洗面台の鏡に映る自分の唇に目を落として、口紅を塗り直した。そしてグロスを重ねようとした時、私は手を止めた。

——グロスはやめよう。

開けかけたリップグロスを閉じて、ポーチにしまった。

幕間 ここから始まる二人（後編）

頬に触れる風は氷のように冷たい。

襟の詰まったコートにマフラーを巻いているが、ストールにすればよかつたと思つた。そんな中でも葉梨はいつも通りの調子で歩いている。スタンドカラーのコートでマフラーはしていない。

バーを出てから少しして、葉梨は私の手に触れてこちらを見た。『手を繋いでもいいですか』と言ひ、私は承諾した。繋いだ手は、葉梨のコートに収まっている。

「あの、加藤さん……さっきの、加藤さんが言つた……あの……」

「あー、うん、どうする？ ホテル行く？ 嫌ならいいよ」

葉梨が少し、眉根を寄せた。

どうして私は可愛く出来ないのだろうか。

葉梨の指の優しく執拗な愛撫の続きを、私の体は求めているのに。葉梨に抱かれてもいいと、抱いて欲しいと思つているのに。

そう思っていると、葉梨は街路樹で街路灯の光が届かない暗がりへ私を引き込んだ。繋いだ手は解かれた。

「ものすごく失礼な言い方であることを先にお詫びしますが、どうしても聞きたいことがあります……」

「なに？」

「……俺で、性欲の処理をしたいんですか？」

「はっ!？」

「すみません」

「あー、そういうわけじゃ……ごめんね、私の言い方が悪か——」

「聞いてください、加藤さん」

葉梨の顔を見上げると不安そうな顔をしていた。

「そうなのであれば、俺も加藤さんをそう扱います。でも、俺は加藤さんが好きです。愛したいんです。あなたの体を、愛したいんです」

——葉梨が、いい男だ。

私は背伸びして、葉梨の頬にキスをした。葉梨の肩に手を触れた時、コートの質の良さが指先から伝わった。

葉梨はびつくりして、恥ずかしそうにはにかんでいる。可愛いな。

私の顔を見ることが出来ず、唇をキュツと結んでいる葉梨を、本当に可愛いと思って、私は葉梨の手に触れた。葉梨は手を繋いできた。

私の顔は緩んでいる。恥ずかしい——下を向いているのは見られたくないからだ。多分、これが恋なんだろう。

葉梨の言葉に私の心臓が跳ねたのだから。

同じ意味の言葉は過去に何度も言われた。だが、葉梨が言ったその言葉は、葉梨が言ったから、私にとって特別なものになった。

少女漫画にある、恋をした時の『トクン』というオノマトペがこの世に本当に存在するのだと、私は今、初めて知った。



私の鼓動はだんだんと落ちてきてきたが、手は繋いでいるものの、私達は言葉を交わさなくなってしまった。二人共恥ずかしいのだから、無言でもよいだろう。だが私は葉梨と言葉を交わしたいと、葉梨の声を聴きたいと思った。

「ねえ、プライベートで二人きりの時は奈緒って呼んでよ」

「えっ!?! 呼び捨てですか?」

「そうだよ」

「無理です」

「なんで？」

「無理です」

「だからなんでよ？」

押し問答を続けても、無理なものは無理だと引かない。頑固なところもあるのだな、と新しい一面を知って嬉しかった。

「他の男は呼び捨てなんだけど」

私はそう言つて、繋いだ手を解いた。不機嫌になれば、名を呼び捨てで言つてくれるだろうと思つた。そう思つたのだが、葉梨は押し黙つたまま、私の顔を見ない。

葉梨の顔を見ると、頬に力が入っているように見えた。歯を食いしばっているのだろうか。怒っているのだろうか。真つすぐ前を見たままで、横目で私を見ることもしない。

——ああ、言わなきゃよかった。

二人で道の先をただ見て歩いていただけの空間から私は逃げ出したくなった。言わなきゃよかった。だが、葉梨が小さく息を吐いた音が聞こえた時、葉梨は私の肘を掴んだ。

強い力で、葉梨は私の体を自分の正面にやり、膝で私の足を押し後退りさせた。背後は建物の外壁だ。私はこういう状況で逃げる術を知っている。相手の体のどこをどうすればいいか知っている。だが、葉梨も警察官だ。葉梨ももちろんそれを知っている。私が次にする動きを知っているのだ。背も高く体格のいい、腕の長い葉梨から逃れるのは無理だ。

見上げた葉梨の顔は、これまで見たことのない顔をしている。仕事の時の顔だろうか。葉梨とは同じ所轄になったことはなく、仕事ぶりを直接は知らない。ただ、漏れ聞こえる彼の有能さだけを知っている。

「ごめんね、変なこと言ってる」

私がそう言うと、少しだけ体から力が緩んだように見えた。だが、葉梨の目の奥の色は変わらない。

「他に、男がいるのか？」

男の声がした。怒気と優しさが混ざり合う声音に、私は動揺した。

「いや、いないよ。ごめん……ごめんなさい」

頭に浮かんだのは相澤の顔だった。でも私はもう……。

また葉梨が小さく息を吐いた音が聞こえて、優しいが、ほんの少しだけ怒気を孕んだ声で、『魅力的な加藤さんに、他の男性がいないわけですね』と言った。

私はどうすればいいのだろうか。私は葉梨を好ましく思っている。でも、このままなら離れていってしまう気がして、葉梨の腕を掴んだ。正直に話さないといけないと、私は思った。

「いる。いる、けど……でも、もう……」

葉梨の顔を見ることが出来ず、私は下を向いてしまった。葉梨がまた小さく息を吐いて、私の顔に手を触れた。その手は顎に添わせて、少し力を込めた。

身を任せると、葉梨の目はまたあの怖い目をしていて、殺気、怒気、仕事をしている時の目なのか。そう思っていると、思いがけない言葉が落ちてきた。

「奈緒」

名を呼び捨てにされて驚いて目を伏せてしまった。『奈緒、俺を見て』とまた呼び捨てにされ、ゆっくりと葉梨の目を見た。

「俺を、好きになれるか？」

私は頷いた。

それを見た葉梨は少だけ口元を緩ませてから、私の唇にそつと唇を重ねた。

——嫉妬だ。

葉梨のこの目は嫉妬している目だ。

私に男の影があつて、葉梨は嫉妬したんだ。

「今日は、帰りましょう」

そう言つて手を繋いで歩き出した葉梨は少し先にいる。どんな顔をしているのか、私にはわからなかった。

一人の女だけを夢中にさせる男は、いい男――。

私は、葉梨に夢中になると思った。

傾く心

十一月三十日 午前六時十一分

捜査員用のマンションのリビングに俺は一人だった。ペアの加藤奈緒が不在の相澤裕典は一人で外出している。

玄関扉に鍵が差し込まれた音がして、ドアが開いて閉じられた。施錠されて靴を脱ぐ音がする。

俺は右手にあるリビングのドアを視界に入れながら書類に目を通していた。

「ただいま戻りました」

リビングの扉を開けた加藤奈緒はベージュのスカートスーツに黒のインナーを着ていて、大きくカールした髪を一つにまとめて横に流している。

——声が、弾んでるな。

加藤は俺の姿を見て目を細めた。

「おはよう。ずいぶん早いねー」

「……何をしたらっしやるんですか？　ああ、髪型も変わってますね」

俺はパイプ椅子を後ろにして立ち、片脚を座面に乗せて脚を曲げたり伸ばしながら書類を読み、コーヒーを飲んでいる。

「ブルガリアンスクワットだよ」

「……ええ、そうですね」

「この前、署の階段を二段飛ばしで五階まで上がったたら脚がプルプルしてき、鍛えてるんだよ」

「そうですね」

「髪は弟の所に昨日の夜行ってきたよ。頭がすっごく寒い」

「んふふ……」

俺はコーヒーをテーブルに置き、書類を加藤に手渡そうと右手に持ち替えて手を伸ばした。それを俺の前に来て受け取ろうとした加藤が手を出した所で、俺は引っ込めた。

「どうだった？　早い出勤って、どう解釈すればいいのかな」

「仕事熱心だと解釈なされればいいかと」

——なるほどね。

「俺はもう手を引くから」

「えっ？」

「俺は相澤に、『奈緒ちゃんの恋をきちんと終わらせてあげるのもいい男だよ』って、言つたからね」

加藤は目も口も、何一つ動かさない。参つたな。なら畳み込むか。もう加藤は心に決めたはずだ。

「何だつたら、俺が奈緒ちゃんの第三の男になろうか?」

加藤の目が微かに動いた。やっぱり決めたんだ。

「ふふつ、どうしたのよ。あー、でもいいや。聞かない。後は自分で決めなよ。ね、奈緒ちゃん」

加藤に書類を渡し、加藤が下がったところで俺はまたブルガリアンスクワットの続きを始めた。そして話も続ける。

「ここんとこ続けて彼女に会つたけど、二回連続でおあずけ食らつてき、ただの男になつてるでしょ、俺。だから第三の男を演じるのも迫真の演技が出来ると思うよ。だから、どう?」

その言葉に加藤は目を見開いて驚いている。

「彼女……? えっ……?」

「俺の恋人だよ」

「……あの、松永さんは特定の恋人を作らない方だと……」

加藤は明らかに動揺している。珍しいな。そう思いながら俺は続けた。

「彼女に男がいる間はただの男。でも、彼女がフリーの時は、俺だっという男なんだよ」
回りくどい言い方に加藤は眉根を寄せて考え込んでいる。

「奈緒ちゃん。話するから座つてよ」

そう言つて俺は後ろの脚を下ろし、太ももをさすりながらキッチンへ向かった。

◇

加藤の前にコーヒーを置いた。スティックシュガーとミルクも。

俺は加藤の正面に座る。

「この話は、相澤だけ知ってるし、相澤だけが俺の彼女と会ったことがある」

いつか加藤に優衣香の話をしようと思っていたが、今日すべきだと俺は思った。加藤は葉梨に気持ちいが傾いてるから。

「俺ね、十四歳の時に好きになつた同級生の女の子のことが今でも好きなんだよ」

「……じゆう、よん？」

「そう。中二だよ」

優衣香と実家が隣同士であることは伏せて、優衣香と俺のことを話し始めた。

十五歳の時にラブレターを渡したこと、警察官になってからはなかなか会えなかったけど、ずっと好きでいて、二十二歳の時にもう一度告白したけど優衣香に恋人がいてまたダメだったこと、俺がデキ婚する時に優衣香の前で大泣きしたこと、優衣香に恋人がいても遊びに行っていたこと、恋人と別れたら口説いて、それを三十七歳になった今でも続けていることを話した。

「奈緒ちゃんって、そういうリアクションするんだね。本気でびっくりしてるね」

「……当たり前じゃないですか」

「ふふっ、そうだよね」

目を丸くしたり、口を開けたままで目が動くななど、初めて見る加藤の顔が面白い。

「この前ね、彼女が初めて俺を好きって言ってくれた」

「えっ?」

「彼女に男がいない時だけ彼女の体に触れるけど、強く抱きしめたのはこの前が初めて」

「えっ……」

「キスもこの前初めてした」

「……そうなんですか」

「ふふっ。十年前から定期的に彼女の家に行って、風呂入って、着替えも置いてあるのに、この前初めて彼女のベッドで寝たんだよ」

「……そう、ですか」

「あ、何もしてないよ。彼女が腕枕してくれたから、そこで初めて強く抱きしめた。でもそれ以上のことは何もしてない。おあずけ食らってすつごく辛い。ふふっ」

加藤は『いい男とただの男』の時の俺を知っている。それとの整合性を脳内で取っているのだろうか、何かに気づくと小さく頷いている。

「俺はね、彼女が結婚したら潔く諦めようとしたけど、いつまで経っても彼女が結婚しなかった」

俺のその言葉は、七年前に自分が言った言葉と同じだと気づいたのだろう。小さくため息を漏らして、『だからお話してくれたんですね』と言った。

「もちろんそれもある。でも、俺が言いたいのはね、俺は二十三年も彼女だけを想い続けた。奈緒ちゃんも長いよね。だから奈緒ちゃんがどうにかすれば、相澤だって気持ちはず動くってことを言いたい」

加藤の目の動きが止まった。やっぱりな。

「それと、奈緒ちゃんは自分を愛してくれる男って今までいたことないでしょ？ 自分分のことを真剣に考えてる男って意味だよ。そんな男が自分を求めてるって……どう、だった？」

加藤は動揺している。何があったのかはわからないが、葉梨は昨夜もいい男だったの

だろう。

「俺は、一人の相手を長く想い続けた者同士としてね、奈緒ちゃんも幸せになつて欲しい」

顔を上げて俺の目を見た加藤は、頬を緩ませた。

「奈緒ちゃん、葉梨とのこと、話してくれたら嬉しいな。出来れば生々しい話」

「また土下座したいんですか？」

「したくないです。スミマセン」

加藤と笑い合ったが、加藤の笑顔は今まで見たことのない笑顔をしている。笑うと片方にエクボが出来るとは知らなかった。

『一人の女だけを夢中にさせる男は、いい男ですよ』

そう加藤は言っていたが、葉梨は加藤を一晚で夢中にさせたのか。美女が野獣に恋をしている。

「じゃ、葉梨に聞くよ」

「お好きにどうぞ」

「で、バラすような男なら損切りする、ということでもいいのかな？」

「ええ、そうです。さすが松永さん」

「ふふっ。いい男を損切りは惜しいんじゃないの？」

口元を緩めた加藤の目は、今まで見たことのない目をしていた。初めて見る幸せそうな加藤が微笑ましく、俺の頬も緩んだ気がした。

— 第3章・了 —

第4章

野獣二人

長い髪の手入れが面倒くさいと伝えて弟に任せたこの頭は、結んだ時の髪型を『マンバン』と呼ぶのだと教えられた。『毛量が半分になって手入れが楽になるよ』と弟は言っていたが、『違う、そうじゃない』とは言えなかった。兄も俺も歳の離れた弟を可愛がり、今でも兄弟仲はいい。以前、兄も『違う、そうじゃない』と言いたくなくなった髪型にされたことがあったそうだが、可愛い弟には言えなかったと言っていた。

前の茶髪。パーマの時から髪が長く、後ろで結ぶこともあったが、今は頭の下半分が刈り上げてあつてすごく寒い。そのうち風邪を引きそうだから、午前中に署へ行った相澤が官舎に寄つてから戻るといふので、俺の部屋からマフラーを持ってきてもらおうよう頼んでおいた。多分、ゴリラは忘れるだろうと思つていたら、やっぱりゴリラは忘れた。

「もうっ！　寒いんだけど！」

「すみませんでした」

——あれ、なんか変だな。いつもなら言い訳するのに。

◇

十二月一日 午後二時四十分

掛時計の秒針だけが聞こえる。

連絡所兼仮眠室として借りているマンションのリビングで相澤の隣に座って顔を突き合わせているが、物覚えの悪い相澤にさつきからため息だけが出ている。

単語を組合せて解読する書類。これにいつも手こずる相澤は、今回は特に物覚えが悪過ぎると思った。

「どうしたの? いつもならもうちよい覚えられるよね?」

眠いわけではない。相澤はさつき一時間の仮眠を取った。正味四十分程だが、十分とは言えなくともある程度の復活はしている。

「裕くん、どうしたの?」

相澤はテーブルに右肘をつけて手をこめかみに当てていたが、椅子の背もたれにもたれて腕を組んだ。ため息を吐き、腕を解いて俺を見て、『加藤のことです』と言った。

「……どうした」

「加藤が俺を好きなことを、松永さんは七年前から知ってたんですよね？」
「そうだよ」

相澤としては、加藤は美人だけど好みのタイプではないし、手を上げてくる狂犬だし怖いとしか思わないが、加藤が自分をそんなにも長く好きでいてくれたのなら、加藤の気持ちに応えてもいいという。

「そうなんだ。ならそう奈緒ちゃんに言えば？」

「この話をしようとするのと殴るって言うんです。この前は頬を叩かれました」

「かわいいそうな裕くん」

加藤は相澤に想いを伝えたのか。だが、あの時の加藤は『先も長いと思います』と言っていた。だから俺はこれまで通りの片思いが続くのだと思っていたが、まさか葉梨という伏兵の存在があるとは思ってもみなかったし、デートさせたら美女が野獣に恋してウツキウキになるとも思わなかった。

——やだっ大変！ このままだと裕くんは恋が始まってないのに失恋しちゃう！

「あのさ、間宮から連絡あったんだけどさ」

「えっ……」

「ん？」

ああ、相澤は俺が優衣香に会い、機嫌良くしていたから関係に問題ないと思っている

が、間宮のことを優衣香から聞いたのかどうかを聞きたくそうにしていたんだった。

「優衣香と間宮に何があったのか、俺は優衣香から聞いてないし、間宮からも聞いてないよ」

「そうですか……」

「お前は優衣香に秘密は守るとか、言ったんだろ？」

「はい」

「優衣香は俺に話そうとしたけど、相澤との秘密を守れて、俺は言ったよ」

俺としては、優衣香の心が俺に向いていることがわかったから、もうそれだけでいい。

「合コンの話だよ」

「あっ！」

「お前にも連絡あったろ？」

「ありました」

「間宮は三人でつて言うからさ、俺と裕くんで行こうよ」

「はっ!!? 笹倉さんいるのに!?!」

「お持ち帰りしなきゃいいんだろ？」

「違う! そうじゃない!」

相澤は、恋人がいるのに合コンに行く男はクズだと言う。確かにそうだが、俺として

は相澤に新しい出会いがあればいいのだから、俺が人数合わせで出席すればいいと思つたのに、ぼくは裕くんに怒られた。

——なにさ！　　ぼくの気持ちも知らないで！

「わかつたよ。行かないよ」

「当たり前ですよ！」

「ならもう一人は誰にする？」

「葉梨はどうかかな」

——それはやめて。戦が始まっちゃう。

「葉梨、か……」

「だって今アイツ女いないし、アイツは合コンに誘うといつも来ますよ」

「いつもって？　　ここ一年の話？」

「いや、ずっとです」

相澤は二十四歳の時に葉梨と同じ署になり、そこで仲良くなった。相澤は恋人がいる時は合コンに行かないが、別れた後の合コンにはたいてい葉梨がいたという。

——それって先輩の誘いだから断れないだけじゃないかな。

「なら葉梨もクズだろ」

「葉梨は人数合わせだしお持ち帰りしません」

「俺だつて人数合わせだしお持ち帰りしないって言つてるだろ」

「ダメです。笹倉さんにバラしますよ!」

「やめて。裕くん、それだけはやめて」

俺はどうすればいいのだろうか。葉梨と加藤の關係を守るために相澤に新しい出会いを提供しなきゃならない。でも俺が合コンに行く結果として優衣香を裏切ることになる。

俺が合コンに行かないとなると葉梨に声がかかり、先輩には逆らえない葉梨は結果として加藤を裏切ることになる。

この合コンのことは俺も知っていたと加藤にバレると加藤は俺にキレるだろう。七回目の土下座はしたくないし、恋する奈緒ちゃんを守つてあげないといけないとも思う。なら——。

「あのさ。熊とゴリラの間の子あいと単体の熊とゴリラの三人つて濃いよ。女の子が可哀想だから葉梨以外にしなよ」

「うーん……」

その時、男性捜査員用の仮眠室の扉が開いた。足音が聞こえて洗面所の扉を開ける音がする。葉梨が起きて顔を洗うのだろう。早く決着を付けなければならない。この後、葉梨はリビングに来るから。

「葉梨はやめとけよ」

「何でですか？」

俺が言った加藤の『いい男』が葉梨だとは相澤は気づいていない。この先も加藤も葉梨も関係は悟られないようにするだろう。俺はどうすりやいいんだよ。

「……なんとなく。濃いから」

「意味わかんないです」

「お疲れ様です！」

葉梨がリビングに来た。コーヒーを淹れてくれるという。相澤も俺もお願いをして、葉梨はコーヒーを淹れにキッチンへ行ったが、同時に玄関の鍵を開ける音がした。

扉が開いて、閉じる。施錠して、靴を脱いでスリッパを履いたのは……加藤だ。ヒールの音がした。

これはマズい。相澤に葉梨へ合コンの誘いという名の強制連行の通達させないようにならなければならない。俺は隣にいる相澤に顔を近づけて言った。

「葉梨を誘うな」

「だから何でですか」

「濃いから」

「ただいま戻りました」

加藤はドアを開けていつもの目でリビングを見回しているが、相澤の肩に腕を回し、耳元で囁いている俺を眉間にシワを寄せて見ている。『どうしましたか?』と言うが、俺は何と言いつてもしようかと考えていると、相澤は加藤の異変に気づいた。

「奈緒ちゃん! どうしたの!？」

よく見ると加藤は足をケガしていた。膝と足の甲に擦り傷がある。すぐさま相澤は加藤に駆け寄り、跪ひざまずいて加藤の足を見た。

相澤の声でキツチンにいた葉梨もリビングにやって来たが、『女教師モノ』の姿の加藤が跪ひざまずいている相澤の足にケガをした足に乗せ、相澤が足を眺めている姿に若干引いている。

加藤がケガしたとわかると葉梨も加藤に近づいたが、それよりも早く相澤が加藤をお姫様抱っこした。

軽々と加藤を抱き上げた相澤は椅子まで加藤を運んだ。たかだか五メートル程度なのに相澤はお姫様抱っこした。こういう優しさに加藤は恋をしたのだろう。加藤はびつくりした表情をした後、口元を緩ませて相澤を見上げていた。

椅子に座った加藤は、段差ですつ転んだと言い、『最近、ハイヒールを履いてなかったから慣れようと思って』と続けた。

「もう! 奈緒ちゃん昨日も転びそうになつてたでしょ! あんな高いハイヒール

なんて履くからだよ！」

相澤は頬を膨らませて加藤に怒った。それを見た加藤は笑っている。葉梨は野川のケガに使った高い絆創膏を救急箱から取り出して、洗面器を取りに行つて戻つて来た。

——あ、これ既視感あるな。

俺は高い絆創膏を手のひらで温めながら、この後に加藤はストッキングをどうするのか眺めていた。膝は打つただけだが足の甲はそこそこの傷で、ストッキングは脱がないといけない。

椅子に座つた加藤に跪くゴリラと熊——。

——美女と野獣二人、か。

暑苦しいラブストーリーだな、と思つたら笑つてしまった。加藤がこちらを向いたが、加藤も笑っている。野川が葉梨の前でストッキングを脱いだことを知っている加藤は、跪く野獣二人の前に立ち上がつてこう言った。

「私、ストッキング脱ぎます！」

そう言つてスカートの裾に手をやつた加藤を見て、野獣二人は目を見開いてすぐさま立ち上がり加藤に背を向けた。

俺は手のひらで絆創膏を温めながら、その姿を見ている。野川はフレアースカートだったが、加藤はタイトスカートだから。

——パンツ全部見える！

背を向けない俺を見た加藤が『松永さんは？』と言って、葉梨も相澤も俺を見た。

「奈緒ちゃんのパンツ見たら土下座しなきゃだめだよね？」

「そうですね」

「なら俺は土下座する。奈緒ちゃんのパンツ見たいから」

「バカなんですか？」

俺は笑いながら腕を伸ばしてテーブルに突っ伏した。それを見た加藤は声を出して笑っていたが、すぐに加藤が『もういいですよ』と言って、加藤を見ると、加藤は座つて足を上げ、太ももから黒いストッキングを破いていた。

——ぼくパンツよりこつちが好き！ しかも黒ストだもん！

振り返った相澤は目を細めて呆れた顔をしている。加藤の女性らしからぬ素行と大雑把な性格をよく知っているからだろう。だが、葉梨はどうだと見ると、やっぱり耳を赤くしてした。そうだろう、女教師モノでストッキングを破いているのが加藤だもん。自分が破りたいよね。俺も破りたいもん。

「奈緒ちゃん！　　そういうのは良くないよ！」

「なんでよ？」

「奈緒ちゃんは女の子なんだから！」

「もう三十越えてるよ？　別によくない？」

「違う！　そうじゃない！　もうっ！」

頬を膨らませてまた加藤に怒っている相澤と、その隣で耳を赤くしている葉梨を見下ろしながら肩を揺らせて笑いを堪えている加藤。

——たのしい動物園なこと。

手のひらで温めた高い絆創膏を葉梨に手渡しながら、俺も笑いを堪えていた。

君のために7回目

十二月六日 午後二時二十八分

捜査員用のマンションがある横浜市中区から都南部の町沢署へは、首都高と保土ヶ谷バイパスを使えばほぼ最短距離で行けるようになっていた。

公用車は葉梨が運転して俺は助手席に座っているが、事故渋滞している上に眠気と戦う葉梨はたまに太ももをつねっていた。

「シャーペンあるよ？ 刺す？」

「はいっ！ 次、刺します」

ここ数日、仮眠もまともが取れない日が続いている。相澤も加藤ももちろんそうだが、眠気覚ましのシャーペン刺しは誰もがやっていることだ。

相澤は加藤から頬を叩かれたりして目を覚ましてはいるが、加藤は狂犬の顔で太ももを刺している。俺はその姿を見て目が覚める時もある。

帰りは俺が運転すると葉梨に伝えるが、遠慮する。先輩に運転をさせるわけにはいか

ないと言うが、現時点で集中力が途切れがちで運転が危険になっている。ならば答えづらい質問を繰り出せば眠気が覚めるかと思ひ、質問してみることにした。加藤とも約束したのだ。バラすような奴なら損切りする、と。

「なあ、加藤とヤツた？」

「ええっ?!　してませんよ」

「なんだよー、せっかく朝まで時間作つてやったのにもつたいねえな」

「そんな……無理ですよ」

翌朝の加藤を見ても関係は持つていないとは思つていたし、特に葉梨は嘘を吐いているようには見えなかった。だが、次の質問で微かに目の動きがあった。

「加藤とデートはどうだったの?　どこ行つたの?」

「バーに行きました。マンション近くにあるバーでした」

どこのバーかと聞くと、望月のバーの場所と店名を答えた。

「一発目からバーだったの?　メシは?」

「そのバーで軽く食べましたよ」

あのバーは料理も美味いから、夜のデート一発目でもまあ問題はないだろう。

「楽しかったです。加藤さんが俺とデートしてくれるつてだけで嬉しかったんで」

葉梨は嘘は吐いていないが、なんだろうか、この妙な目の動きは、『次のデートの日は

約束したの?』と聞くと、していないと答えた。

「なんでよ? まあ今はちよつと仕事のアレだから難しいだろうけどさ」

「まあ、今は加藤さんと一緒に仕事してますし、その時に約束はしなくてもいいかと思つて……」

恋する奈緒ちゃんと葉梨とじや熱量が違う。

何かあつたのだろう。恋する奈緒ちゃんはウツキウキだったから、葉梨自身に問題があるようだ。

「あのさ、お前、顔に出てるよ?」

「あー……もう松永さんにはわかつてますよね」

「うーん、お前が俺に話していいと思うなら話してよ。秘密は守る」

——返答次第では戦が始まる。ぼく聞きたくない。

「三つあります。まず一つ目は、あのお店は加藤さん以外の誰かの息がかかっていると思ひまして、ちよつとそこで……加藤さんは俺を試してるのかな、と」

——ぼくも奈緒ちゃんもいきなり大ピンチ!

「なんでそう思つたの?」

「結論から言います。あのお店は松永さんの息がかかっているお店ですよ?」

「ふふつ。否定も肯定もしません」

この今回の仕事でメンバーとなった葉梨とは面識はなかったが、どういう人間なのかは調べてある。加藤が見込む程の捜査員だ。調べるうちに確かに有能だと思った。加藤はあのバーに連れて行って、息がかかっている店かどうかを気づくか試したのだろう。葉梨は生活安全部所属だ。情報提供者と関わる際の店は複数持つのは当然のこと。それにしても、俺の息がかかっているとはよく見抜いたなと感心した。

葉梨はバーテンダーと加藤の仲に違和感があったという。誰か一人、介在していると感じたそう。葉梨はカマをかけるつもりで俺の手引きがあつてここ使うようになったのかと聞いたら、加藤が一瞬、仕事の時の目をしたからそうなのだと思つたそう。——だから警察官つて嫌なのよね、可愛げがなくて。

「俺の息がかかっている店で嫌だった？」

「いえ、信用は出来るなど判断したのでそれは気にしなさいです」

「今度さ、一緒に行こうよ。オススメのカクテルがあるんだよ」

「えっ……ありがとうございます」

葉梨は加藤が注文した飲み物を記憶していた。加藤の目の動きとハンドサインももちろん見ている。それは葉梨が同業だから気づいたのであつて、加藤が失敗したのではない。ただ、バーテンダーが加藤の意図が汲めずに動揺したから気づいたのだろう。

「二つ目は、バーテンダーの方が、『奈緒さんが男性と来店されたのは初めてです』と言

いまして、それも加藤さんが言わせたのだらうと思ひまして……加藤さんはどういう意図があったのか、気になってます」

「ふふっ、あいつはそんなことを言ったのか」

渋滞も徐々に解消し始め、眠気も覚めてきた葉梨は運転に集中している。

「あのな、それは嘘でもあるし、本当のことでもあるよ」

「えっ?」

「加藤はジャックローズを頼んだんだろ?」

「ああ、そうですね、ジャックローズでした……カクテルに符牒がありそうだな、とは思ひました」

「もしかしてさ、最初はターキーソーダで、ラストにジャックローズだった?」

「はい、そうです、けど……何か?」

「ふふっ……ふふふっ」

俺が笑ったから気になるのか、車は流れているのにこちらを向こうとする葉梨に、『前見ろよ』と言いながら葉梨の太ももにシャーペンを刺した。

「痛っ!! すいません!!」

「ふふっ……あのな、確かに加藤はあの店に男は連れて行ってる。でもな、ラストにジャックローズを頼んだ時の連れの男は、お前が初めてなんだよ」

「えっ……」

「最初にターキーソーダを注文した時点で、あのバーテンダーは動揺したからお前が符牒に気づけたんだよ。ふふっ」

「えっ、えっ？」

「ジャックローズを頼む前、加藤はお前に何をした？ 何を言った？ 店出してから

加藤はお前に何を言った？ 何をした？ 思い出せよ、それが答えだ」

葉梨はそれを思い出したのだろう。耳を赤くして頬を緩めていた。

「ごちそうさま」

「あー、そういうことだったんですね。ははっ」

「で、何したの？ 教えてよ、生々しい話」

「まあ、それは……」

「なんでやらなかったんだよ、もったいなえな」

「まあ……。あ、あの三つ目ですけど……」

葉梨は加藤に男がいるのではと聞いてきた。俺が加藤には男がいらないと言っていたのに、加藤には男がいそうだと。だから加藤は『俺が奈緒ちゃんの第三の男になるうか？』と言われて動揺したのか。

「いないだろ。聞いてないし。え、いるの？」

「いそうです」

「だからお前は浮かない顔してたのか」

「あー、はい……」

「だから次のデートの約束しなかったのか」

「……はい」

なのに翌朝の奈緒ちゃんは恋する奈緒ちゃんてウツキウキだったのはなんでなんだろうか。

「……お前が俺に聞きたい加藤のことってある？」 答えられることだけ答えるよ」

運転しながらで余計に思考がまとまらないのか、ずいぶんと時間が経ってから葉梨は口を開いた。『加藤は俺で本当にいいと思ってるのか』と。

加藤は美人で、月に一度の仕事を教えてもらおうと待ち合わせ場所にいる加藤はナンパされていたり、一緒に歩いていると加藤を見た男は自分を見て見比べるし、女が加藤を見て連れの自分を見ると鼻で笑うという。

加藤自身は葉梨で本当にいいと思ってるのか、美人な加藤はイケメンと歩きたいと思ってるのではと言う。

——大丈夫だよ、相澤もゴリラだし。

「加藤は美人だけど中身は狂犬だよ？」

同僚の前でストッキング破るような女だよ？

相澤を引つ叩く女だよ？ 先輩の俺に何回も土下座させる女だよ？」

「いや、まあ、それはそうですが……」

「バーを出た後に何したよ？ 大丈夫だよ」

「うーん……」

「ふふつ。翌朝、加藤は恋する乙女だった、とだけ言つとく」

俺から見えない場所で何をしているかはわからないが、仕事中の二人はデートした後の男女とは気取られないようにしている。

加藤はいつも通りでストッキングを自分で破いていたし、葉梨の凡ミスに舌打ちして葉梨は恐怖の面持ちだったし、睡眠不足が起因のミスに加藤が手を出した時、葉梨が防御の体勢を取ったせいで狂犬加藤になった姿を見た葉梨はまた後退りしていたし。

——奈緒ちゃん、葉梨くんは怖くてデートに誘えないみたいよ？

「ああ、そうだ。加藤が怪我した時、ハイヒール履いてたからすつ転んだら？」
「はい」

「加藤がハイヒール履くとペアの相澤より背が高くなつちやうから履かないんだよ。なのになんで履いたんだろうな」

「……何ででしょう」

「加藤がハイヒール履いても、お前より背が高くないからだよ」

「あつ……」

加藤の身長は一メートル六十八センチだ。七センチのヒールを履いても、一メートル八十五センチの葉梨の背を超えない。加藤は俺と歩く時にハイヒールを履けることを喜んでいた。本当はハイヒールが好きで履きたいが、ペア次第では履けないとこぼしていた。

「お前と並んで歩きたいんだろ。そのために練習してすつ転んだんだよ」

合点がいき、それが自分のためだったと知った葉梨は嬉しそうに顔を綻ばせた。

——葉梨も笑うとエクボが出来るんだ。

「お幸せに」

その言葉に元気に答えた葉梨はこっちを向いた。

「前見ろよ」

「痛っ!!」

公用車で事故るといろいろと大変なんだよ、しかもまだここ神奈川県だし、と思いなから俺は葉梨の笑顔を眺めていたが、あることを思い出した。

「相澤から合コンの話はあつた?」

「……ありました」

「断れないだろ?」

「……はい」

「いいよ、加藤にバレたら俺のせいにして。責任取ってやる」

——このまま地球が滅亡すればいいのに。

七回目の土下座を考えていたらため息が出た。

そよぐ風は恋を運ぶ

十二月九日 午後五時三十二分

笹倉優衣香は松永敬志の弟が勤める美容院にいた。

席に座る優衣香に、松永の弟は兄が続けて二回来たと言うと、優衣香は口元を緩めた。優衣香も弟に『私も二回続けて会ったよ』と言うと、彼は一瞬目を彷徨させたが、何かに気づいたようで頷いた。

「この前はわざわざ来てくれてありがとうね。おばさんの所に御礼は送ったから、理志くんも実家に帰った時に頂いてね」

毎年、松永敬志の母は優衣香の両親の命日前後に優衣香のマンションを訪問して、今回の訪問は三男の理志さとしを伴ったものだった。

「兄ちゃんも行けたんだね」

「そうなの、夜遅くだったけどね」



カラーの調合を終えた松永理志は優衣香の席にやって来た。『久しぶりに明るくするよね』と優衣香に問うと、優衣香は『何となくイメチェンしたくなっただよ』と答えた。

優衣香の顔を鏡越しに眺めた理志は、口元を緩めて、『兄ちゃんは茶髪でパーマかけた優衣ねえがお気に入りだもんね』と言うと、優衣香は目を見開いた。知らなかったようで、『えっ』と言ったまま次の言葉が出て来る様子はない。

「えっ、知らないの？ 兄ちゃんは言っていないの？」

「……聞いたことないよ」

「なら兄ちゃんから聞いてね。ふふふ」

「そうだったんだ……」

「今日の優衣ねえの予約はカラーとパーマだったから、てつきり兄ちゃん好みのヘアスタイルにするのかと思ってたよ。さつき色見本見せた時も迷わず茶系を選んでたから」
初めて聞かされた敬志の好みを知り、目を彷徨わせて考えていた優衣香だったが、思いついたことがあったようだ。

「ゆるふわカラーで愛され女子、みたいなヘアスタイルかな？」

「そうそう」

「あー、確かにあの時、敬ちゃんは嬉しそうにしてた」

優衣香は理志と相談し、松永好みのヘアスタイルにすることになった。



「理志くん、敬ちゃんのヘアスタイルなんだけどね……」

ロッドを手際よく巻いている理志に優衣香が問いかけた。敬志のストレートパーマをかけた、黒髪の長めの髪型は何と言う名前なのかを理志に聞いたが、ツープロツクで刈り上げた今のヘアスタイルではないことはわかってはいる理志は、『特に名前はないよ』と答えた。

「そうなんだ。敬ちゃんにも聞いたの。でもわからないって言うてて」

「ん？　なんかあつた？」

「敬ちゃんに『そのおかつぱ頭は何て言う髪型なの？』と聞いたの」

「おかつぱ!!」

肩を揺らせて笑いを堪える理志につられて優衣香も笑い出した。

「ああ、そういう……そうか……んふっ」

「ん？ なに？」

「今はもう兄ちゃん髪型変えたよ。手入れが大変だからって……なんだ、そういう意味だったんだ……」

「ん？ 髪のを短くしたの？」

「んふっ……いや、まあ、毛の量は半分になったのは確かだよ」

「んん？」

理志は優衣香に、『兄ちゃんに会った時のお楽しみってことにしておいて』と言い、鏡越しの優衣香に笑いかけた。



十二月九日 午後九時三十三分

冬の夜道を一人で歩いているが、不意に吹いた冷たい風に思わず首を竦めた。俺も相澤も官舎に帰るところが寄ることすら出来ず、相変わらずマフラーのない日々は続いている。ワイシャツを着ているからある程度は首の露出部分を隠しているが、いかにせん頭の下半分が寒い。

チエスターコートのポケットに入れていた手を出し、指先へ息を吹きかけ温めている

と、視界の端にちらちらと煌めく光が映った。見上げた視線の先には、イルミネーションによって彩られた街路樹がある。冷えた体に温かな気持ち広がるのを感じつつ、いつものバーに寄ろうと少し早歩きになった所で、バーテンダーの望月奏人もちづきかなとが女性を店外まで送りに出ているのが見えた。

その女性は望月とほぼ変わらぬ背丈だ。ヒールは七センチ程だから背丈は一メートル六十五センチといったところか。

——隠れた方がいい気がする。

俺は望月奏人もちづきかなとからは見えない建物の陰に隠れた。

店外に見送りなんて珍しいな、どういふ関係なのかと二人を見てみると、女がお辞儀して、望月も同じようにして女が振り向いた。

——優衣香だ。

少し歩いて自販機の蛍光灯に照らされた優衣香はまた望月に振り返り、まだ見送っている望月にまたお辞儀した。

あと十メートルで優衣香は俺の前を通るが、望月が店に入らない限り声をかけられないし、優衣香に気づかされてもいけない。

あと八メートル。

まだ望月は優衣香の後ろ姿を見ている。

優衣香は望月の店に一人で来ていたのだろうか。
あと五メートル。

角を曲がって俺とは反対側に行った優衣香を見て、望月は店内に入った。

——優衣ちゃん！ 待って！

一方通行の幅員六メートルの道を渡り、キャメル色のコートを着る優衣香の後ろ姿を見ながら追いかけた。

優衣香は自分に迫り来る足音に気づいて振り向いて俺と目が合ったが、俺とは気づいていない。

「優衣ちゃん」

「ひいっ……」

「優衣ちゃん」

驚いて目を見開いている優衣香は、やっと俺だと気づいてくれた。

「敬ちゃん！　びっくりした！」

「俺もだよ。ふふっ」

「えっと、仕事中……？」

「うん、そうだよ」

優衣香は何かを言いかけたが、やめた。仕事に関わることだから聞いてはいけな

思ったのだろう。そんなの優衣香に申し訳ないと思うが、俺を思いやってくれることが嬉しかった。

「あの店はよく来るの？」

「たまにね、いつも理志さとしくんの美容院の帰りに寄ってる」

「そうなんだ」

美容院と言われて、髪型が変わったことに初めて気づいた。パーマをかけたのか。風がそよぐといい香りが優衣香から漂う。ポンコツ野川に記憶を上書きされたシャンブーとは違う香りだ。

「敬ちゃんは短くしたんだね」

「ん？ ああ、後ろで結んでるんだよ。長さは変わらないよ」

優衣香はなぜかクスクス笑っている。どうしたのかと問うても、理由を言わない。まあいいか。優衣香が笑っているから。

「今日、パーマをかけて、髪色も変えたんだよ」

髪色は暗くてよくわからないが、パーマは大きなカールだった。肩に乗る髪の毛が風に揺れていた。

風に揺れる優衣香の髪、俺はそれが好きだ。

「優衣ちゃん、可愛いね」

「んふっ」

「なに？ どうしたの？」

笑いながら優衣香は『ありがとう』と言う。

そんな姿が俺には嬉しくて、ここで会えたのも嬉しくて、優衣香を抱き寄せた。だが、優衣香は腕を俺の胸にやり、抱き寄せても密着しないようにした。

「えっ……優衣ちゃん、だめ？」

「違う違う。メイクがコートとかワイシャツに付いちやうから……」

ああ、そうか。いつも俺は夜遅くに優衣香のマンションで会う。その時メイクはたいてい落としている優衣香を抱き寄せているから、服にメイクが付くことなど気にしたことはなかった。

「ああ、そうか。ごめんね、気遣ってくれて」

メイクが付かないように優衣香は顔を上げて、俺に身体を寄せてきた。

「優衣ちゃん、キスしてもいい？」

「口紅が付いちやうよ？」

「ああ……でもいい、少しだけ」

後であのバーに行くから、そこで落とせばいいと思った。優衣香は『いいよ』と言って、俺の目から唇へと視線を落とした。

触れる触れないか、でも触れるくらいで優衣香にキスをした。唇を離すと、優衣香ははにかんでいた。

「優衣ちゃん、もう帰る？　もう少しだけ時間あるかな？」

「うん、大丈夫だよ」

「あの店、俺も長いこと行ってるんだよ」

「えっ!!　　そうなの？」

聞けば、優衣香は以前勤めていた会社の同僚と週に一度、あの店に行きダーツをしていたという。その同僚からダーツを教わったのだが、初めはソフトダーツをしていた。あの店でハードダーツが出来ると知った同僚が優衣香と週に一度は行くようになったという。

「俺もあの店でダーツをするんだよ」

「そうなんだ!」

お互いに知らなかった共通点があることを知り、抱き寄せたまま笑い合った。

「あのね、バーテンダーに『今度、俺の彼女を連れて来る』って言ったんだよ」

「そうなの……んふっ……」

「なに？」

笑顔のまま、優衣香は目を伏せた。少ししてから、優衣香は『彼女』と言った。

「うん、彼女だよ。優衣ちゃんは俺の恋人」

「そうだね。私は敬ちゃんの恋人になったもんね」

「恥ずかしそうにする優衣香が可愛くて、俺はもう一度唇を合わせた。」

「優衣ちゃん、手を繋いでもいい？」

「うん」

優衣香の右手を取って、手を繋いだ。

優衣香の手は骨張っていて手のひらも大きくて指も長い。決して小さな手ではない。でも、俺にとっては優衣香の可愛い手だ。『初めて手を繋いだね』と言うと、優衣香は笑った。

「あの……敬ちゃん」

「なに？」

「大変長らくお待たせしました」

「……んっ？」

優衣香が何を言っているのかわからなかったが、『ラブレターの返事』として優衣香はこの前俺は好きだと言ってくれた。今日はその後の日だ。そういうことか。

「ふふっ、二十二年、待ってました、だね」

優衣香に俺は仕事で、夕飯を食べるためにあのバーに行くから店内滞在時間は四十

分程だと伝えた。笑顔で頷く優衣香の手に俺は力を込めると、優衣香も握り返してくれた。

バーの扉を俺は右手で開けた。左手は優衣香と手を繋いだままだ。

バーテンダーの望月奏人は、帰ったはずの優衣香と俺が一緒にいることに驚いていたが、繋いだ手を見てから俺の目を見て顔色を変えた。

——もしかして……。

コイツ、客に手を出そうとするなんてバカなのかなと思つたが、その女が俺の女だと知って絶望しているかわいそうな望月にエレガントな微笑みを返した。

——未遂なら俺は気にしないよ。

「いらつしやいませ」

「俺はロングアイランドアイステイーで。優衣ちゃんは？」

ハンドサインはもちろんノンアルコールだ。

今夜は優衣香と過ごせる楽しい時間のはずだったのに、コイツがドリンクや料理に何かを仕込まないか監視しなきゃならないようだ。

見上げる夜空

バーを出て優衣香を駅まで送り、改札口の向こうに姿が見えなくなるまで俺は優衣香を見ていた。優衣香は何度も振り返って、俺を見て、手を振っていた。一ヶ月で三回も会えるなんて今までなかったことだからすごく幸せな気分だ。

だが、俺は優衣香の姿が見えなくなったら走り出した。

時刻は午後十時五十三分で、その時には既にジャケツトの内ポケットに入れたスマートフォンが震えていた。画面を見ると相澤からたったが、俺は無視して、ただひたすらマンションに向けて走った。

クリスマスソングが流れる元町商店街。

白と青の幻想的なイルミネーションが施された街路灯の下を歩く道行く人は、俺の姿を見て避けていく。心の中で詫びながら、俺は走った。



十二月九日 午後十一時二分

——二分遅刻だ。クソッ、間に合わなかった。

マンシヨンのリビングの扉を開けると、捜査員全員が俺を見たが、全員が目線を彷徨わせた。加藤ですら目を伏せた。何かと思つたが、一番奥にいる米田にまずは謝罪せねばと米田を見ると、米田がいない。いない代わりに、奴がいた。

——なんでチンパンジーがいるんだよ。

米田がマンシヨンに来て会議をするからと全力で走つて戻つたのになんでチンパンジーがいるんだよ。チンパンジーなら歩いて帰つて適当に言い訳すれば済んだじゃないか——。

そんなことを考えながら須藤さんに近寄つて頭を下げた。『遅刻して申し訳ありませんでした』と言つたが、近くにいた武村の生唾を飲み込む音がした。他の捜査員の空気もいつもと違うものだった。須藤さんも何かを言いたくて言い淀んでいる感じで、『いや、大丈夫だよ』と優しく言うが、俺はこの場の雰囲気は何なのか不思議に思つた。コートを脱いで、加藤の右隣にいる相澤の右に俺が座つてから会議は始まつた。相澤の視線を感じたが、俺はそれを無視して須藤さんの話に耳を傾けた。

須藤さんがホワイトボードに書き込んでいる間は、俺はじつと正面にいる女性捜査員

を見ていた。彼女の目線に合わせるように椅子に浅く座り直し、椅子の背もたれにもたれた。彼女と目が合うが、彼女は目を伏せてしまふ。俺は腕をテーブルに出した。

——俺が正面の女とペアを組む、と。ああ、そうですか。

指先をテーブルに付けてピアノを奏でるような指の動きをすると、相澤、加藤、葉梨、本城の四人が反応した。それぞれ決められたサインを寄越したのを確認してから、俺はまた椅子を座り直して姿勢を正し、指を組んでテーブルに置く。

彼女はこちらをチラチラ見るが、俺がじつと見たままなことがわかり、次第に彼女の表情が曇っていった。

——なんでお前がいるんだよ。

この女性捜査員は山野花緒里だ。三年前、俺につきまとった女で年齢は二十九歳になったはず。事の詳細は相澤と加藤が知っているし、問題の引き金を引いたのは加藤だ。

——また米田から刺客かよ。面倒くせえな。

須藤さんの説明を聞き終えると通常ならば皆一通り自分の意見を言うが、今日は誰も何も言わない。だが加藤が何かを言おうとして、相澤が制止した。

俺はそれを横目で見て、山野から目線を外して下を向いて小さく息を吐いた時、加藤が相澤の制止する手を取り、相澤の太ももに落として、口を開いた。

山野は加藤を見た。加藤が何を言うのか不安なのだろう。

「私が松永さんのペアになるのはいけませんか？　山野のペアは相澤でどうでしょうか」

加藤は続けて、ハイヒールを履くと相澤の背を超えてしまい、低い靴だと服装と靴がちぐはぐになり違和感を持たれることから、背の高い俺と組みたいと言ったが、話している間、加藤は相澤の手の甲に触れて指先に力を込めていた。

暗に背が低いと言われた相澤だったが、加藤の意図は当然理解していて、『俺も山野の方がちっちゃいからペア替えしたいです』と言った。

相澤は右手人差し指で加藤の手のひらに二回触れて離し、それを受けた加藤は相澤の手をそつと二回、触れて手を離した。

山野は落胆を隠そうとしているが、俺にはわかる。相澤も気づいたようだ。

「あー、まあ、そう言うことなら……でもな……」

須藤さんはそう言いながら、俺を見た。目線が合い、俺は須藤さんが言いたいであろうことを口にした。

「米田さんが、山野は俺にと言ったんですよね。でしたら俺は従うだけです。どうぞ、そのままで結構です。俺は、従うだけですから」

そう言って、指を組んでいる右手の親指で三回、左手親指の爪に触れた。

それを横目で見ていた相澤と加藤は同時にテーブルの上に手を置いた。加藤は組んだ指をテーブル手前に置いて、相澤は手のひらをテーブルに付けて腕を伸ばして壁と天井の境目を見た。それを受けて、反社は腕組みをして椅子にもたれて、葉梨は太ももに手を置いて下を向いた。

——反対が一人、いる。

◇

会議終了後、須藤さんと俺、相澤と加藤だけで外へ出ることになった。

葉梨も本城は俺と山野の件を直接は知らないが、噂は耳にしているだろう。

二人は野川が俺を尾行したことはもちろん知っているし、野川は米田の刺客だということも知っている。そしてまた、女性捜査員が来た。

皆わかつてる。山野花緒里やまのかおりは野川里奈より厄介だ、と。

加藤は本城と葉梨とで何かを話していたが、葉梨は眉根を寄せた。目つきも変わった。

加藤が話し終えると二人は加藤に頭を下げたが、二人に背を向けてこちらにやって来る加藤は、歯を噛み締めていた。



午後十一時四十六分

捜査員用のマンションがあるブロックは一周五分だ。隣のブロックと合わせて、マンションの部屋に戻るまでの十五分間を歩きながら四人で打ち合わせをすることになった。

内容はもちろん山野のことだ。

須藤さんは俺の兄と同期だが、兄と違って出世を選んだ。兄とは高校時代から友達で親しく、弟の俺のことを目に掛けてくれている。

「山野だけど、俺はもう一回、米田に言う。だって敬志がこれじゃ——」

俺は一時間前まで優衣香と一緒にいた。

たった一時間でこんな状況になってしまった。

葉梨と一緒に署へ行った時、捜査員の補充があるとは言われたが、それがまさか山野花緒里だとは思いもしなかった。

俺は一時間前まで幸せだったのに。

優衣香を抱きしめてキスして手を繋いでパーに行つて、俺が頼んだペンネ・アラビ

アータはいつもよりすつごく辛かったけど、優衣香が一口食べたいと言うから俺があーんしてあげたら優衣香が笑ったから辛さなんてどうでもよくなつたし、ペンネ一つでも辛かったらしくて優衣香の鼻の頭にうっすら汗が浮いたのも可愛くて、食後にはオランジュエツトを優衣香が俺にあーんしてくれてすつごく嬉しくて、俺が笑ったら優衣香も笑つて幸せだった。

バーの帰り道は優衣香とまたおてて繋いでルンルン気分です信号待ちでまたチューして、駅ではウツキウキで優衣香の姿を見送つていたのになんでこんなことになつたんだ。

でも俺は優衣香をギューしてチューしたからあと一週間は寝なくても平気だ。多分俺は、優衣香を抱いたら一ヶ月は寝なくてもイケると思う。いやイケるってそういう意味じゃないけど、でもまあ思い出したら絶対にイケる。自信ある。だってこの前ベッドで薄い布越しに優衣香の肌身の柔らかさを初めて知つただけで俺、それだけで俺、って違う、そうじゃない。俺は優衣香を抱いたら俺は一ヶ月は寝なくて――。

「――さん！　なが――、松永さん！」

「んっ？　何？」

――ごめん、一ミリも聞いてなかった。

須藤さんと相澤、そして加藤の顔を見ると、全員揃つて同じ顔をしていた。

——もしかして憐憫の眼差しかな？

「あの……すみません、お話をもう一度、お願い出来ますか？」

そう須藤さんに言うのと、溜め息を吐かれた。二日休んで気力と体力を回復させて来いと言う。話が全く読めず、どういう意味なのか問うと、また三人は憐憫の眼差しを俺に向けてきた。

話を総合すると、俺は優衣香の事件の後に署で暴れた時と似たような目つき顔つきをしているという。疲労と睡眠不足が原因なのだろうが、そこに山野が関わることでまたあの状態になられても困るから、山野とペアは外すように米田に言っただけで、とにかく二日休め、とのことだった。

「大丈夫です。ご心配には及びません」

「でもさ、ちょっと、敬志……お前さ……」

俺は優衣香とルンルン気分でキャツキャウフフしてウツキウキだったが、その緩んだ顔にプラスして米田に頭を下げなくてはならないことが腹立たしくて顔に出たとは思っていた。それにインテリヤクザのはずがチンパンジーがいて、安心したと同時にチンパンジーの顔が少しムカついて、捜査員の中に山野花緒里がいることに気づいて、激憤とまではいかないが、それに近い怒りを抱いたのは確かだ。それに夏前からの疲労の蓄積と連日の睡眠不足がある。

——うん、凄い目つきと顔つきになるな、それ。

「大丈夫ですよ、睡眠不足は俺だけではありませんし——」

——でも！　優衣香と会った後に米田のことを考えると休みが貰えるんだね！

ぼくいいこと聞いた！

「——そう言つて下さるなら、まず加藤を先に休ませてあげて下さい」

俺どころか全員が睡眠不足だが、加藤は唯一の女性捜査員で気苦労も多く、ちよつと健康状態がよくない状態だと俺は思っている。

というのも、昨夜俺は加藤と話している最中に一瞬で寝落ちしたが、通常であれば手の甲で俺の頬をフルスイングか裏拳をお見舞いする加藤が、肩を優しく揺すつたのだ。加藤は正常な判断が出来なくなっている。

おそらく女性の体のことだろう。詳細はわからないが、十分な睡眠で回復出来るだろうと思う。須藤さんはマンションに来て、加藤を見て俺と同じように思ったようで、加藤に『自宅で連続した睡眠』を取れという命令が出された。

加藤は俺と須藤を交互に見たが、少し、安堵の表情を浮かべた。

「俺は少し長めの仮眠を取れば回復出来ます。捜査員が一人増えましたから、余力が出来ますましたし」

「そうか？……で、あの、山野のことなだけとき……」

山野は俺の件で他の所轄に行った。その後は仕事も真面目にやっていると。だが、須藤さんが思うにまだ俺に気があるのではと言う。

「どうすればいいんでしょうか。そんな山野とペア組むとロクなこと起きないと思います。米田さんはそれが狙いなんでしょうけど」

「私はハイヒールを履きたいです」

「俺はちっちゃい山野がいいです」

「うーん……じゃあさ、加藤は敬志と相澤と組んで、ハイヒールは二回に一回、つてのはどうか。山野のペアは葉梨と相澤も加えて、三人の日替わりでやれ。それで何かあったら俺がなんとかするから」

ベストではないが、ベターな選択だと思う。葉梨は単独行動で結果を上げている。女連れだと若干、厄介だ。俺と山野の接点を減らすために葉梨にそうさせるのは悪いなと考えていたら、歩きながら話す俺たちの空気が変わったことに気づいた。

背筋が寒くなったのだ。マフラーもなくて頭の下半分は短い髪で寒いものは寒いのだが、これはなんだろうか。それは俺の後ろから発せられるような気がした。

俺は恐る恐る後ろを見ると、加藤の隣にいた相澤も不穏な空気を感じたのか、後退りして加藤から離れていた。

——やだっ！ 般若の面を付けた狂犬がいる！

そういえば般若の面って女の嫉妬と恨みを表現した面だったなと思いつながら、優衣香の笑顔を思い出そうと空を見上げた。お星さまキレイ……。

——優衣ちゃん、ぼくお仕事がんばるから、次こそはこの前の続きしようね。
俺は、二日間の休みを貰えないか、もう一度頼んでみようと思った。

幕間 涙の理由

『この前、相澤が子供の時の写真を見せてくれたんですよ。今は体格がいいですけど、子供の時の……ふふっ、顔はゴリラなんですけど、ちびゴリラはゴリラじゃなかったんですよ。ふふっ。松永さんは相澤のちびゴリラの写真、見たことありますか?』

相澤は産まれた時から呼吸器疾患で入院を繰り返して、小学校に入った時は背が一番低かったと言っていた。だが、小学二年生から署の少年柔道に通うようになって、よく食べるようになったら丈夫な体になり、背も伸びたと言っていた。

相澤が警察官になりたいと思った理由は聞く必要がなかったが、加藤が警察官になりたいと思った理由は何なのかと思っただけで聞いた時、加藤はこう答えた。

『父方も母方も公務員が多くて、私の両親も公務員です。でも、警察だけはなぜかいなかったんです。だからです』



三年前、やまのかおり山野花緒里が所属する署の管内で俺は仕事をしていた。

約半年間だったが、毎日、山野がいる交番の前を必ず通らなくてはならず、立番している山野の顔だけは覚えていた。

ある日、深夜に所轄へ行くと山野から挨拶をされた。よく見かける俺が同業だと知って挨拶をと思ったと言ったが、その時の山野の目は面倒な色恋沙汰を想起させるものだった。

俺が信頼している同業女性は加藤を含めて数人いるが、そのうちの一人に連絡を取ると、加藤が山野の署にいますと言うので、加藤へ翌々日に連絡を取った。だが、加藤と俺が仲がいいことを調べていた山野は、すでに加藤へ連絡を取っていたようで、加藤は俺にこう言った。

『松永さんは特定の恋人を作らない方で、同業に手を出さないと山野に伝えました。諦めるように山野へ言いました。でも無理でした。山野は本気です』

俺は二十四歳の時に、一つ下の同業と遊びのつもりで関係を持ったが、その女が妊娠したから責任を取って結婚した。だが産まれた子が俺の子ではなく、離婚した。

離婚後の俺は、『女を食い散らかす男』と言われるようになった。優衣香に男がいる時は女遊びをするし、それが激しいのも事実だし、弁明する理由もない。むしろそれで同

業は寄って来なくなるし、合コンでも事前にそれを知って、それでもいいと割り切っている女だけが来るから便利だった。

俺は優衣香だけが好きで、他の女に心が揺らぐようなことはなかった。だから他の女に本気になられても、その気持ちに応えられないことが嫌だった。心が痛むのがただ嫌だった。

山野は加藤に俺の連絡先を教えてもらおうと何度もお願いしたようだが、加藤は断っていた。別の経路から山野から連絡先を教えて欲しいと言われたと連絡が来ていたが、俺は拒否した。

山野は連絡先がダメならと、俺に手紙を書いて寄越した。加藤経由で渡された手紙は、ラブレターなのに長封筒に入れられていて、縦書きの便箋には香が焚きしめてあった。香水ではなく、香だった。手紙には美しい字で、ひたむきな想いが綴られていた。真面目な子なんだと心が痛んだが、加藤へ連絡して『断ると伝えてくれ』と言った。それ以外に何も言う必要もなかった。同業には絶対に手を出さない、俺はそう決めていたから。

加藤から山野へ伝えたという連絡以降は何もなく、山野は諦めたのだろうと思つてた。

相変わらず山野の交番の前は毎日通り、山野が立番している時もあったが、視線を感

しても俺は無視した。

ある日、山野の交番の管轄にある駅前裏通りを歩いていると、緊走のパトカーが俺を追い抜いていつて約三十メートル先で停まった。

そのパトカーから山野が降りてきたが、俺の姿を見た山野は俺に向かって走ってきた。ペアは反対方向へ行つたが、山野がいないことにすぐ気づいて振り向いて山野を見た。

俺の前まで来た山野は手紙を出した。宛名に俺の名前が書かれた長封筒を俺に手渡そうとするが、ペアは山野を追いかけて来ていて、大声で山野を呼んでいた。

走り寄るペアは俺と山野の姿を見て怪訝な顔をしている。

俺はその男性警察官とは面識はなかったから、この手紙は彼に見られてはならない、俺はそう考えて山野から受け取り、すぐに隠した。

近寄つたものの状況が掴めないそのペアに俺は手帳を見せ、『用は済んだ』とだけ言つて、山野を連れて行くよう促した。

数日後、やっと時間が取れて一人になった俺は、山野のその手紙を読んだ。

美しい字で紡いである言葉は婉曲表現だったが、要はセフレでいいから自分と関係を持つて欲しいと書いてあつた。

『松永さんは体の関係ならいいと言うだろうから、それでいいのなら、松永さんにそう言

えと加藤さんに言われた』

この言葉は、もちろん手紙では婉曲表現だったが、言ってることは同じだった。

遊びの女が本気になって、セフレでもいいからと縋ってくることは過去にあった。そんなものには慣れていたはずだったが、俺は山野の手紙を読み終わる頃には全身の血が凍りつくような感覚に陥っていた。

俺はすぐに相澤に連絡を取り、俺がいることは伏せて加藤へ官舎に呼べと指示した。

数日後、官舎へやって来た加藤は俺がいることを特に気にする様子はなかったが、山野の手紙を見せると表情を変えた。

そこで初めて、相澤に山野の件を話し、山野の手紙も見せた。手紙を渡された日付、時間、場所、状況を相澤と加藤に話したが、加藤は事件を知っているから呆然としていた。相澤にはスマートフォンで山野が臨場した事件のネットニュースの画面を見せた。

『小学二年生の男子児童が男にランドセルを掴まれ、走行中の車の前に投げ飛ばされて車と接触。全治二週間の軽傷』

相澤は目に飛び込んだニュースのタイトルから目線をずらして加藤を見た。だがそれは仲のいい同期に向ける目ではなかった。

加藤は、相澤のその目に動揺した。初めて見たのだろう。下を向いて、手を握りしめていた。

俺は加藤の隣に座り、優しく加藤に話しかけた。

『奈緒ちゃん、あのね……俺はね、奈緒ちゃんにはね、同じ女性として、先輩として、山野にやってやれることがあったと——』

俺は思うんだ——。

そう続けて加藤に反省を促そうとした。

おそらく加藤と山野花緒里の間に何かがあり、不本意ながら結果としてこうなったのだろうと思っていた。だから加藤を傷つけてはならないと思つて、優しく諭すように声を柔らかくして言おうとしたが、加藤の反応は違つていた。

『でもっ!!　それを選んだのは山野です!!　私には関係ないですっ!!』

俺は加藤の長い髪を掴んで引き倒した。

加藤に馬乗りになり、両手首を床に抑え付けた。

一瞬にして視界が変わり、俺を見上げる加藤は目を見開いて、唇を震わせていた。

『放り投げられた男の子の気持ちつて、どんなだったろうな。怖かったろうな。泣いてただろうな。でもよ、おまわりさんが男とやりてえからつて助けに来てくれなかつたんだよ』

俺の言葉に顔を歪め、涙が溢れ出す加藤に、俺は何の感情も抱かず、ただ見下ろして
いた。

俺は、加藤が許せなかった。

為すべきことをしなかった加藤が許せなかった。

自分がどれだけ守られて来たかすらわかっていない加藤が許せなかった。

加藤は相澤に縋るように顔を向けたが、相澤は自分を冷めた目で見ていただけだった。そんな相澤に絶望したのだろう、腕に込めていた力は、指先の力は、静かに抜けていった。

俺は加藤から手を離し、体からも離れた。

相澤と目が合ったが、相澤は悲しいのか、怒りなのか、多分どちらもなのだろうと思ふような表情をしていた。

優しい相澤も加藤が許せなかった。

だが加藤は仲のいい同期だ。優しい裕くんは、加藤を見て、歯を食いしばって、手を握りしめて、また加藤を見て、溜め息を吐いてから立ち上がった。

涙を流して咳き込む加藤のそばへ行き、加藤を抱き起こして、胸に抱いて、腕の中で泣く加藤の背中を撫でた。

天井を見上げる相澤は、唇を噛み締めていた。

俺はその姿を見て、父が寄越した電話をふと思ひ出した。寝起きの俺の耳に流れ込んだ、父の弾んだ明るい声を。

『もしもし、お父さんだけど、あのさ、敬志にね、お父さん、伝えたいことがあつて電話しちやつた。ごめんね』

『でね、今日ね、連絡が来たんだけど、採用試験の面接で松永雅志さんまつながまてしのような優しい警察官になりたいですつて言つてくれた子がいたつて話、前にしたでしょ？ その子が

ね、採用されたんだよ。お父さん嬉しくて嬉しくて。ふふふつ』

『そうそう。腕を掴まれて車道に放り投げられた子。お父さんがずっと抱っこしてあげてた子ね。細くて小さくて、ずっと泣いてた子だったなあ』

『ふふふつ、お父さんがきつかけで警察官になりたいと言つてくれた初めての子なんだよ。ふふふつ、お父さんすごく嬉しい』

『でね、その子は敬志の三つ下で、名前は相澤裕典くんあいざわゆうすけつて言うから、いつか紹介するからさ、仲良くしてあげて欲しいんだよ』

相澤は被害者を第一に考える警察官になった。自分の時間を犠牲にしても被害者に心を寄せている。

俺はそんな相澤を見る度に、優しかった父を思い出す。

『裕くん、後はよろしくね』

そう言つて、俺は部屋を出た。

お砂糖とミルク

十二月十日 午前一時二十分

深夜の中華街から外れた裏通りは人気もなくひっそりとしている。その中を歩いているのは葉梨将由と加藤奈緒だけ。時折通り過ぎる車のヘッドライトが二人の姿を浮かび上がらせる。

「加藤さん！ 俺そんなの嫌ですよ！」

「仕方なくない？」

「もつと他に何かないんですか？」

「なら何がある？ 対案出してよ」

会議が終わり、須藤、松永、相澤、加藤の四人で外に出て、話しながら山野の件を話し合った結果、独身の葉梨と相澤を使い山野の気を引かせて加藤がそれをアシストする、という計画を立てた。

その後、加藤と葉梨は、捜査員用のマンションがあるブロックを歩きながらその話を

始めたが、二人は揉めている。

「対案出せないなら文句言わないでよ」

「すみません……」

「じゃあ、今日から早速始めてね」

そう言つて、加藤は先に歩いていった。

葉梨はその姿に眉根を寄せて、小さく息を吐き、加藤の後を追いかけた。

「あの……加藤さん」

「なに？」

「加藤さんは嫌じゃないんですか？」

そう葉梨に言われた加藤は立ち止まり、葉梨を見つめた。表情の変化は一切ないが、舌打ちをした。

「……あのさ、私に何を言わせたいの？」

「いや、あの……」

「私が可愛く甘えた声で、『私だって嫌だもん』とか言えばいいの？　言つて欲しいの？

ねえ」

「……………そうです」

その言葉に眉根を寄せた加藤は右手を上げて、手の甲で葉梨の頬を叩こうとして、寸

前のところで止めた。

葉梨は叩かれそうになった瞬間に体勢を変えようとして、止めた。

どちらが早かったのかはわからないが、葉梨は叩かれずに済んだ。

「バカなの？」

不機嫌な顔になった加藤に葉梨は後退したが、加藤は無視して歩き始めた。引き結んだ唇は、微かに震えていた。

◇

同時刻

捜査員用のマンションにいるのは、松永敬志と相澤裕典と山野花緒里だが、山野はシャワーを浴びていて、その後は仮眠を取るためにリビングに入って来る予定はない。

リビングにいる松永と相澤は、隣り合って座っているが、お互いに無言だった。

松永が指や手、顔の向きでサインを相澤に送っているが、松永が眉根を寄せると相澤は肘で小突かれている。

二人の手元にはスマートフォンがあり、メッセージアプリのトーク画面になっている。

『ちゃんと覚えてよ』

松永がそうメッセージを送信すると、相澤は肘で小突かれた。

その時、洗面所のドアが開く音がして、すぐに女性捜査員用の部屋のドアが開けられた。

ドアが閉まると、玄関の鍵を開ける音がした。

加藤と葉梨が帰ってきたようだ。

リビングのドアを開けた二人は、松永と相澤の二人が逆の意味のハンドサインを送っていることに困惑した。

それに気づいた松永は、相澤の頭を叩く。

「痛っー！」

「当たり前だ」

松永は人差し指を唇にあて、スマートフォンを掲げ、加藤にメッセージアプリで用件を伝えた。

『ボイスレコーダーがある』

それを見た加藤は、松永の目を見て、スマートフォンと葉梨を交互に指差した。

「うん、いいよ」

松永の許可が出て、加藤はメッセージを葉梨に見せた。それを見た葉梨は頷いて、二

人は席に着いた。

対面で座る四人は、松永と加藤のスマートフォンでやり取りを始めた。

『とりあえず三個見つけた』

『動かしていない？』

『うん』

『仮眠室にはなかった。男の』

『どうしますか』

『どうしようかね』

そこでメッセージのやり取りは中断し、それぞれが対応策を考え始めた。

『とりあえず一個テーブルに置いて、問い詰める？』

『それで他のを自分で申告させますか？』

『そうしよう』

「じゃ、そういうことで」

松永がそう言うのと、各々は『はい』と声に出した。



午前二時五十分

葉梨は、ペットボトルの蓋を外しながら仮眠室に入った。寝ていると思っていた松永の姿はなく、ベッドの上には毛布だけが畳まれて置いてあった。

ペットボトルを片手に持ちながら、もう片方の手でベッド脇に置いたバッグから、スマートフォンを取り出した。

メッセージアプリのアイコンをタップして、加藤とのトーク画面を開いて、小さく息を吐いている。

二人がデートした日、帰宅した加藤からメッセージが送られて葉梨はそれに返信したが、既読がついただけで返事はなかった。

翌朝、葉梨は午前七時にメッセージを送ったが、それに既読がつかないまま葉梨が捜査員用のマンションに行くと、加藤は既にマンションにいた。

それ以来、加藤からメッセージが届くこともなく、葉梨もメッセージを送っていない。葉梨は、スマートフォンを操作しながら、ペットボトルを飲んだ。

「なんだよ……」

独り言を呟き、苦笑しながらペットボトルを床に置き、横になった。

目を瞑ると、葉梨は眠りについた。

そのスマートフォンに加藤からメッセージが届いたのは、葉梨が眠ってから一時間が

経過した頃だった。



午前五時三十四分

捜査員用のマンションのリビングには、松永と加藤がいた。テーブルにある、綺麗に折り畳まれたバスタオルを前にして、二人は話していた。

葉梨と山野は仮眠中だが、山野がそろそろ身支度を終えてリビングに入ってきて来る頃だ。

「女性はやさ、メイクとか髪とか服とか、いろいろあつて大変だよね」

「ふふふつ、そうですね」

「奈緒ちゃんさ、ゆつくり休んでよ」

「ありがとうございます……松永さんは大丈夫なんですか？」

「俺？　ふふつ……大丈夫だよ」

リビングのドアが開き、山野が挨拶をして入って来た。加藤は返事をし、山野を手招きして自分の隣に座らせた。

松永は山野を見てから溜め息を吐き、椅子に浅く座り、椅子にもたれて右足を左足に

乗せ、座った山野を睨みつけた。

それを見た山野は怯え、横にいる加藤を見ると、加藤は優しく微笑んでいた。

「加藤、ほら」

「は、」

加藤はテーブルに置かれたバスタオルを手に取った。バスタオルの下にあったものを見た山野は、下を向いてしまった。

「他にもあるんだろ？ 全部出せよ」

下を向いて、手を握りしめて震える山野に、加藤は優しく声をかけた。

「大丈夫だよ。ね、だから全部出して」

山野の肩を抱き、優しく撫でながら加藤は言った。

それを受け、山野は小さな声で返事をして、立ち上がろうとした時、葉梨がリビングのドアを開けた。

大きな声で『寝坊しました！ すみません！』と言って、葉梨は頭を下げた。

「いいよ、大丈夫だよ、問題ない」

優しい声音の松永と、山野の背後からハンドサインを送る加藤をほとんど目を動かさずに見た葉梨は、『コーヒーを飲みますが、皆さんもいかがですか』と言った。

加藤は山野に『コーヒーを飲むか聞いて、加藤は葉梨に『全員お願いします』』と言い、そ

れを見た松永は眉根を寄せて、小さく息を吐いた。

「山野、お砂糖とミルクは入れる？」

「あ……はい。……一つづつで」

「ん、わかった」

キッチンに行った葉梨を見ていた松永は、視線を動かして山野を睨んだ。

「葉梨がコーヒー淹れてる間に全部出せよ、俺と加藤だけの秘密にしといてやるから」

加藤に促され、山野は席を立ち、松永と相澤がりビングで見つけた三個目のボイスレコーダーを手にとって席に戻った。

「二つ？　これだけ？」

「山野、二つだけなのかな？」

「……はい」

「そうか。わかった。これは俺らだけの秘密にするから安心しろ」

松永はそう言うと、ボイスレコーダー二つを並べて、またバスタオルを置いた。

下を向いている山野の肩には、また加藤の腕が回され、優しく撫でながら、『大丈夫だからね』と優しく加藤は言うが、目は笑っていないかった。

そこにコーヒーカップをトレーに乗せた葉梨がテーブルに来た。

松永、加藤、山野の順にコーヒーと、各人が使う砂糖とミルクを置いていく。

葉梨が席に着いたところで、松永は山野に声をかけた。

「山野、お前は野川里奈を知ってるだろ？ アイツさ、俺がペットボトルの茶を飲んでるのに、『コーヒー入れますね！』って、よくわからないタイミングでコーヒー淹れるんだよ。で、砂糖も出してさ、『入れた方がいいです！』って言うのよ。十日経つてもみんなの好みの砂糖とミルクを覚えなくてさ、やっぱりアイツはポンコツだな、って思つたよ。ふふっ」

「んふふ……私もでしたね。『加藤さんはブラックが似合います！』って言って、ミルクだけで砂糖をくれませんでした」

「あー、俺もでしたね。『葉梨さんは大きいからお砂糖二本です！』って言われて、ミルクはくれませんでした」

三人で山野の顔を見るが、表情に変化のない山野から目をそらし、コーヒーを飲み始めた。

第5章

消去と後悔

十二月十二日 午前二時三十五分

望月のバーに来ている。

カウンターの内側から、望月はクリスマスらしいラッピングが施されたギフトボックスを取り出した。深緑の包装紙に赤とゴールドのリボンがついたA4サイズの薄い箱だ。

「どうぞで」

「何これ？」

「クリスマスプレゼントだよ」

「わー！ 嬉しい！ ありがとうモッチー！」

「あはは、俺じゃないよ」

「えっ……誰からよ？」

笑顔のまま何も答えない望月に促されて俺はラッピングを開けたが、箱に手紙が貼付してあった。それは洋封筒で、俺のフルネームが宛名として書いてある。

「あら、手紙があるんだね」

「ん……？　この字、もしかして……」

「そうそう、笹倉さんだよ」

「えっ！　本当に!?!」

——優衣ちゃんからのプレゼント！　嬉しい！

俺は、クリスマスの朝に枕元のプレゼントを見つけた子供のようにはしゃぎながら箱を開けた。

「マフラー、かな？」

「マフラー！　マフラー！」

「あははっ！　松永さんってそういう顔するんだねー」

俺はマフラーを取り出し、頬ずりをした。嬉しい。すごく嬉しい。

「あははっ！　マジかよ！」

「だって！　すっごい嬉しいもん！」

マフラーを首に巻き、優衣香のぬくもりを感じながら手紙を読み始めると、望月はキッチンへ行った。



午前二時四十五分

夜更け、葉梨は山野と捜査員用のマンションに戻るところだった。

葉梨はポケットに手を入れ、指先に触れたものを取り出して山野に渡している。カイ口を手渡された山野は葉梨を見上げ、笑顔で受け取った。その笑顔を見た葉梨は頬を緩めた。

葉梨は隣にいる山野の肘にそつと触れると、山野は葉梨の方をちらつと見ただけで何も言わなかった。ただ黙って歩いているが、葉梨が口を開いた。

「まだ、松永さんのことが好きなの？」

すると、それまで無言だった山野が足を止め、じつと葉梨の顔を見つめた。目をそらすことなく、ずつと。

しばらくそうしていた山野だが、やがて首を横に振って、葉梨の顔を見上げて目を見て、『もう、忘れました』と、小さな声で言って、目を伏せた。

再び歩き始めた山野の隣で葉梨は言う。

「じゃあ、俺にも、もう一度チャンスがあるかな」

驚いた表情を見せる山野に葉梨は微笑んだ。

怪しむような視線を向ける山野に向かって葉梨は口を開く。

「俺のことを好きになれそうもないのなら、言つて欲しい」

そう言つて、葉梨は山野を見つめる。返事がないことから、また葉梨は言葉を続けた。

「山野。俺は松永さんみたいにイケメンじゃないし、無理かな？」

「そんなことありません……けど、あの時は……本当にすみませんでした」

葉梨の話を聞いているうちに山野の目から涙が溢れ落ちた。

「えっ……いや、いいつて。俺の方こそあの時は悪かった」

葉梨は慌てて言つた。

しばらくして、ようやく落ち着いたらしい山野は、涙を拭きながら謝つた。

「もう大丈夫？」

葉梨の言葉に山野は小さく頷く。それから二人は黙つたまま歩き出した。

少しして、ふと思ひ出したように山野が言う。

「聞きたいことがあるんですけど……」

「何？」

「どうして私のことを好きになつたんですか？ 私が葉梨さんに好かれる理由なんて思

いつかないです」

不思議そうな顔をしている山野に葉梨は微笑んだ。

「単純な理由だよ……山野は可愛いから。小さくて可愛いから。ダメかな、それじゃ」
笑う葉梨の顔を見る山野の頬が緩んだ。

それを見た葉梨は山野の腕を掴み、そのまま引き寄せると山野を抱きしめて、彼女の耳元で囁いた。

「俺じゃ、ダメかな……?」

突然の葉梨の行動に驚いて、山野は彼の腕の中で身を固くしていたが、やがて身体力を抜いていく。それを感じた葉梨は、さらに強く彼女を抱きしめた。

葉梨がふと顔を上げると、十五メートル先に挙動不審な長身の男がいた。その男は自分たちに気づいたようで、目が合った。

それは松永敬志だった。

松永は二人を見ていたが、目を見開いて口元を両手で隠し、ゆっくり後退りしていった。

その姿が見えなくなるまで、葉梨は山野を抱き寄せていた。



午前三時四分

——葉梨の女誑しっぷり、ヤバいな。熊なのに。

チンパンジー須藤が言い出した、『ボクの考えた最強の作戦』を相澤と加藤と三人で聞かされた時、俺たちは膝から崩れ落ちそうになった。

加藤は口を開けたものの、ぐつと堪えて何も言葉を発さなかった。多分、『バカなんですか』と言いかけたのだと思う。

相澤は、『山野は松永さんがイケメンだから惚れたんですよね？ 俺と葉梨じゃ無理ですよ、絶対に』と、そこにいなかった葉梨の悪口もついでに言っていた。

須藤さんはそれに対して、『いいんだよ、自分に気がある男が二人いるって状態にして揺さぶれば』と言い、さらに『葉梨には加藤、お前から話しておけよ』と言ったから、俺は怖くて加藤を見られなかった。

でも念のためちらっと加藤を見たが、表情を変えずに返事をしていた。俺はその時、ゴリラにも熊にも山野は靡かないだろうと、その時は思った。だがどうだ。さつき見た葉梨は山野を抱きしめていた。展開が早すぎてぼくはついていけない。

「あ、お疲れさまです、今戻りました」

「おかえりー」

このタイミングでマンションに戻るのは葉梨と山野だと思っただが、本城が帰ってき

た。ならあの二人は今何してるんだ。

——さすがにコトに及んでないよね、大丈夫だよね？

「あの山野の件ですけど、上手くいきますかね？」

「あー、あれな、大丈夫だよ、葉梨がやる。アイツは……葉梨は凄い、マジで」

「そうなんすか」

そこに葉梨と山野の二人が戻ってきた。俺がバーの帰り道で小躍りしながら二人を見た場所と、このマンシヨンの距離を考えると、ずいぶんと遅い戻りだ。まあ、いい。葉梨は与えられた任務をこなしたのだから。

——コトに及んだには早すぎるし。

声を揃えて『戻りました』と言う二人に、俺と本城が応えると、葉梨は山野の肘に触れた。山野は葉梨を見上げ、思い出したように『コーヒーはお飲みになりますか』と聞いてきた。葉梨はちゃんと、そっちの教育も済ませたようだった。

——やだっ！ そっちじゃない教育って何の教育よ!?

「ああ、ありがとう」

「俺もお願い、ありがとう」

俺と本城がそう応えると、山野は口元を緩めて、葉梨を見上げた。山野を見る葉梨の笑顔が優しい。

——葉梨くん凄い！　もう手懐けてる！

二人を見ていた本城はそれを見て少しだけ眉根を寄せたが、それだけなのに、その顔はなかなかの迫力だった。さすが反社だなと思う。

葉梨はコートを脱いだ山野に声をかけ、山野のコートを受け取り、そのコートをハンガーラックにかけた。だが自分のコートを脱いだ時にはすでに山野はキッチンに消えていて、それを見た葉梨は苦笑いしている。

テーブルに座ろうとする葉梨に、俺も反社もほぼ同時に話しかけた。

「やべえな」

「すげえ……」

「はっ……？」

俺らの言葉聞いて、葉梨は困惑した顔をしていた。俺はそんな葉梨の様子を横目で見ながら、本城に話しかける。

「な、葉梨は凄えだろ？」

「んふっ……そうですね」

「……なんででしょうか？」

そう言いながらも、葉梨はハンドサインを送ってきた。スマートフォンを取り出し、テキスト作成画面にすでに入力してあった文字を俺と本城に見せた。

「おつと……」

「えー」

「全部で……」

そう言つて言葉を止めた葉梨は、手のひらを見せてきた。

「あと、一？」

そう言つと、葉梨は『イエス』のハンドサインをした。

一気に組長メーターが上がる反社の本城と、頭を抱える俺、目を細める葉梨の三人は無言となった。

ポットのお湯をカップに注ぐ音がする。

それをトレイに乗せて、ミルクと砂糖も乗せて、キッチンから山野がこちらにやつて来た。

反社の前にコーヒーを置こうとする山野に、葉梨は順番が違う旨を窘めたが、俺は『いいよ、俺は女衞だから末端だし』と言つと、きよとんとした顔をした山野に二人は笑つた。

「いいよ、そのまま置きな。組長、構成員。で、女衞の俺の順でいいから」

そう言つと、葉梨も反社も声を出して笑つた。

仕事を完璧にこなす葉梨は、本当に有能だと、心から関心した。



午後三時二十九分

加藤奈緒は自宅にいた。

須藤から『自宅で連続した睡眠を取れ』と命令され、三十六時間を与えられている。充分な睡眠を取った加藤は真夜中に目覚め、起き上がって常温のミネラルウォーターのペットボトルを取りにキッチンへ向かった。

寝ている間にスマートフォンには様々な通知が来ていたが、メッセージアプリの通知を見て、アプリを開いた。

新規メッセージは松永敬志と相澤裕典の二人からだった。

松永からのメッセージがあることを見た加藤はそれを見ようとして人差し指を動かしたが、止めた。

相澤のトーク画面を先に開いた。

『奈緒ちゃん、寝てる？』

『ちゃんと寝てね』

それを見た加藤は口元を緩めた。

『ありがとう。ずっと寝てて、今起きた』

そう、メッセージを返した。

松永のメッセージを開くと、『ボイスレコーダーは全部で5個あると山野が葉梨に言った』とあった。

思わず舌打ちした加藤は、松永に『了解です。殴っていいですか?』と送ると、すぐに返事があり、『暴力、ダメ、ゼツタイ!』の文字に加藤は吹き出した。

またホーム画面に戻り、葉梨のトーク画面を見ると、加藤は画面から目線を外して、目を彷徨わせた。

自分が送ったメッセージは既読がついているが、丸二日経った今でも葉梨から返事が来ていない。

加藤はキーボードを画面に表示させたが、指が止まった。

目を瞑り、小さく息を吐く。

送ったメッセージを長押しし、送信取消しをタップしようとして、大きく溜め息を吐いた。

アプリを閉じるとスマートフォンを傍らに置き、ミネラルウォーターを飲み始めた。

口から溢れた水を手の甲で拭い、加藤は唇を噛み締めた。

誰も知らない

十二月十四日 午後二時三十二分

あれから俺はマフラーを着けっぱなしだ。

マンシヨンに戻っても着けっぱなしだ。

その姿を不思議に思っている捜査員に、『だって頭の下半分が短くて寒いから』と言っている。

シャワーを浴びる間でさえ優衣香のマフラーと離れることが嫌で、あれからずっとコンバットシャツだ。だから『手入れが楽になるよ』と言って毛量を半分にしやがった弟に今ではとつても感謝している。理さとくんありがとう。お兄ちゃんとっても嬉しいよ。今度頭をいい子いい子してあげるね。

ただ、『寝る時に着けたままだと毛玉が出来るし首が締まりますよ』と加藤に言われて、毛玉が出来るのは嫌だけど、首が締まることに関しては、何ならそういうプレイだと、優衣香はそういうプレイが好きなのだと思えばいいと思った。

そうだ。優衣香が俺の上において、このカシミアのマフラーで首を締められるのなら俺は死んでもいいと思っっている。あ、もちろん優衣ちゃん全裸でね、優衣ちゃんが妖艶な笑みを浮かべてね、ぼくの首を締めてね、『もつとお……』とか優衣ちゃんが甘い声で言っただけ……っつてヤバいなそれ、想像しただけでゴーゴーヘブンだ。

でもな、その前に優衣ちゃんにあんなことやこんなことをしてぼくの知らない優衣ちゃんを見てからじゃなきゃ、二人でめくるめく愛の世界へゴーゴーしてからじゃなきゃ、ぼくへブンに行けない。だからぼくの欲望が全部叶ったら、それから妖艶な笑みを浮かべる優衣ちゃんにそういうプレイされてもいいかな。それからならばぼくはゴーゴーヘブンでもどこでもゴーゴー——

「——さん！　松永さん！」

「ん？」

——というか、ここどこ？　あ、仮眠室か。

「寝てないですよね？」

「いや、寝たんじゃない……かな？」

俺と相澤は、仮眠時間を無理矢理作って一時間だけ寝ようとした。正味五十分程の仮眠が取れるとフラフラになりながら仮眠室のドアを開けた瞬間から、俺は記憶がない。だが、今相澤に声をかけられて目が覚めたのだと思うから、寝ていたのだと思う。だつ

てベッドに横になつてゐるし。

「奇声を上げてましたよ」

「え、やだ。そんな不審者目撃情報みたいなこと言わないでよ」

「やっぱり休みを取った方がいいですよ。山野も来たし、人数は揃いましたから」

「大丈夫だって」

結局、須藤さんは俺に二日の休みをくれようとしていたのに、加藤が優先だと言って俺の休みは却下された。まあそれは俺が望んだことだが、加藤は三十六時間で戻つて来るんだから、残り十二時間は俺のものだと思うが、ダメだと却下された。

——なにさ！　　チンパンジーのくせに！

「裕くんだってキツイでしょ？　　休み取つたら？」

「俺は大丈夫です……あの……ちよつと……」

そう言つた相澤は、ハンドサインを送つてきた。

意味は『この場所』と『注意』だった。

俺はベッドから起き上がり、相澤の前に立つ。

相澤の肩を掴んで顔を近づけて、小声で『それ先に言えよ、バカ』と言ひ、相澤も小声で返してきた。

相澤は仮眠室に入つてベッドの横まで来た記憶があるという。目覚めた時にベッド

に顔を埋めていて、体は正座したままなことに気づいたと。

ベッドに寝直そうと起き上がったところ、パイプベッドの下に膝が入っていたことに気づかず、そのまま勢いよく立ち上がったせいで膝をベッドにぶつけてしまったという。

——かわいいそうな裕くん。

その衝撃で、ベッドに括り付けてあったと思われるボイスレコーダーが落ちたことに相澤は気づいた。それを俺に伝えようと反対側のベッドで寝ている俺に近寄ると、俺は奇声を上げていたという。

「笹倉さんの名前を呼んでましたよ」

「あらやだ」

女誑し葉梨が山野から聞き出した情報から、ボイスレコーダー五個は見つけてある。

俺が見つけた三個のうち一個は山野に見せた。もうひとつは山野自身が出した。残り二個は加藤が見つけた。だが、今、ないはずの六個目が見つかった。残

「葉梨は？　今ここにいる？」

「見えます」

——面倒なことばかり起きやがって。



午後二時四十分

加藤奈緒は、捜査員用のマンションに戻る途中だった。近隣のドラッグストアへ買い物へ行き、マイバッグを肩に担いで、もうひとつのマイバッグは手に持っていた。

どちらも重いようで、肩にも指にも食い込んでいた。

そこに走り寄る葉梨将由がいた。

「加藤さん、持ちますよー！」

その声に立ち止まり、振り向いた加藤は表情を変えずに『ありがとう』と言い、手に持っていたマイバッグを葉梨に渡すと、葉梨は『そちらも』と言い、肩に担いだマイバッグも受け取ろうとした。

「ありがとう。ちよつと買い過ぎたから重くて」

そう言って、加藤はマイバッグを葉梨に渡し、二人は並んで歩き始めた。二人の間には会話はなく、ただ、黙々と歩いている。

葉梨が口を開いたのは、加藤がマンションの入口のガラスドアを開けた時だった。

「山野のこと、聞きましたよね？」

「山野のどんなこと？」

「あの……えっと、須藤さんが言い出したことです」

「……ああ、あんたが結果を出したんだってね。松永さんが褒めてたよ。よかったね」

「いや、加藤さん！」

「なによ？」

そこにエレベーターが到着し、山野が降りてきた。

「あつ！ 葉梨さん！ どこ行つてたんですか？ お買物だったんですか？」

私、荷物持ちますよ」

笑顔で駆け寄つた山野は加藤を一瞥し、すぐに葉梨の顔を見上げたが、葉梨は険しい顔をして言った。山野は葉梨の顔を見て驚いている。

「山野、悪いんだけど、これ持つて部屋に戻つてくれるかな。俺は加藤さんと話があるから」

そんな二人の様子を見ていた加藤が山野に向かって言った。その言葉は冷たく、感情がなかった。

「すぐ終わるから、ごめんね」

二人の表情に何かを察したのか、頭を下げただけで山野はエレベーターに乗った。ポタンは葉梨が押してやり、エレベーターの扉は閉じられた。

「加藤さん、外に出ましよう」

「いいでいいんじゃないの?」

その言葉に眉根を寄せた葉梨は加藤の腕を引つ張つて外に出た。

歩き始めた二人はまた無言のままだったが、最初に口を開いたのは加藤だった。立ち止まつて葉梨を見上げ、言いたいことを一気に言う加藤に、葉梨は呆気にとられた。

「松永さんがあんたのことを人誑しつて言つてたよ。ふふつ、女誑しと言わないのは松永さんの配慮なのかもね。で、岡島だけどぎ、アイツの口が軽いのは当然知ってるよね? 一年前にあんたさ、山野に初めて会つて、その後何かデートしたんだつてね。

告白したけど山野が断つたからあんたは連絡しなくなつたんでしょ? で、この前あ

んな山野を抱きしめたんだつてねえ。あんたは本当に凄いつて私も思った。で、今さっきの山野の目。私、笑いそうになつちやつた。だつて可愛い女の子がおめキラキラさせてあんたを見てるんだもん。いいじゃない、可愛くて。山野を可愛がつてやんなよ。

山野が可愛いんでしょう? ねえ?」

口元は笑みを浮かべているが、冷めた目で自分を見上げる加藤に、葉梨は何も言えなくなつていた。

「あんたさ、私に何か聞きたいことある?」

「……加藤さんは、それでいいんですか?」

「何が? あんたと山野が付き合うこと?」

「そうです」

「嫌だよ」

「んっ!？」

想定外の返答に驚きの表情を浮かべる葉梨を見て、加藤は声に出して笑った。『可愛く言えなくてごめんね』と言い、下を向いて、吸った息を深く吐いてから、また葉梨を見上げた。

「葉梨がさ、この前山野を抱きしめたって話、私は岡島から聞いたんだよ。私は山野からは聞いてない。多分だけど、葉梨があの日は何を言ったか、何をしたか、全部誰かに喋ったんじゃない? もちろん岡島まで話が行くまでに、数人が聞いてるだろうけど」

不機嫌な顔になった葉梨の顔を見上げながら、加藤は続ける。

「それでも、小さくて可愛い年下女がいいっていうなら、デカくて可愛げのない年上女は身を引くよ? どうする?」



午後二時五十四分

「ただいま戻りました」

リビングの扉を開けた加藤と葉梨は、二人とも不機嫌な顔をしていた。加藤は狂犬ではないが、あまり見ないタイプの不機嫌な顔をしていて、俺も相澤も思わず後退りした。「……おかえり」

椅子に座っている山野の背後で、相澤はハンドサインを葉梨に送った。だが、それを見た葉梨が俺を見ないどころか目を彷徨わせていることを不審に思い、俺も山野の背後に回ると、相澤は首を傾げながら葉梨に送ったハンドサインを俺に見せた。

「バカ！」

「痛っ!!」

「葉梨、外」

俺はそう言って、葉梨と外に出た。

——裕くん、そのサインは『マンションに戻れ』だよ。ちゃんと覚えてよ！
もう

！

雪の降る日

十二月二十二日 午前十一時八分

窓から見える景色は、昨晩から降り続く雪で白く染まっていた。風もなく穏やかに降り続ける雪を見つめていると時間を忘れてしまいそうになる。

俺は窓辺に立ち尽くしたまま、ぼんやりとその光景に見入っていた。外の世界はまるで別世界のように静かだ。

インタールホンが鳴り、モニターの前に行くと言画面に須藤さんが映っていた。

玄関へ行き、鍵を開けて須藤さんの中に入れて、俺は頭を下げた。

スリッパを出し、須藤さんの後を俺はついていく。

リビングへ入ると、コートを脱ぐ須藤さんを横目にコーヒを淹れに俺はキッチンへ行く。パイプ椅子を引いた音がして、パイプが軋む音がした。

——今日は、砂糖が、いるはず。

インスタントコーヒをカップに入れ、ポットのお湯を注いでトレイに乗せた時、須

藤さんの声がした。

「山野がな、セクハラがあつたと言ひ出した」

その言葉に俺は口の端を上げて、トレーを持ち上げて振り向いた。

リビングに入ると須藤さんと目が合う。

「もちろん、俺に、ですよね？」

山野とペアで外出した四回目の夜——緊張しているような、怯えているような、そんな目を山野はしていた。

何かあるな、と思っていたが、体を寄せて来ることが多く、俺は警戒をしつつも特に何もせず山野のやりたいようにやらせていた。

その日、俺が山野に触れたのは二回だった。

話す俺を歩きながら見上げていて、電柱に気づかなかつた山野の肩に触れてぶつからないようにした時と、俺が山野を見失つてしまい、山野が逆方向へ行こうとしている姿を見つけた時、山野に走り寄って腕を掴んだ時の二回だった。



「俺に何されたって言つてました？」

「暗がりに連れ込まれて服の上から触られた、と」

「そうですか。厚手のコート着てるのに？」

「ふっ……やつてないよな？」

「動画がありますけど、見ます？」

俺は須藤さんに、山野と外出する時は複数人で俺たちを尾行させ、動画を撮らせていたことを話した。山野は何も気づいていない。

「米田は、どうしてこんなに俺を恨むんでしようね、ふふっ」

「な。もう十年も経ってんのに」

「米田の女つての、全く記憶がないんですけどね」

「言うなよ、絶対にそれ本人に言うなよ？」

「ふふっ……ふふふっ」

須藤さんは砂糖とミルクを入れた小さなカゴに手を伸ばして、砂糖を取った。

——やっぱりね。

須藤さんは砂糖とミルク二個をコーヒーに入れてかき混ぜている。

「俺が外れればいいんじゃないですか？」

「いや、お前以外にもさ……いろいろ上がつてんのよ」

——米田も潮時、つてことか。

「ま、敬志の動画が役立つよ」

「そうですか」

俺もコーヒーカップを手に取り、湯気の向こうの須藤さんに笑顔を向けると、須藤さんは横目で俺を見て、口元を緩めた。

だが、コーヒーを一口飲んだ須藤さんの言葉に驚いた。

「加藤と葉梨って、意外なんだけど」

——相変わらず食えない奴だな。

「えーっ、何のことですかー？」

「教えてよ」

「ダメです」

「もー!!」



同時刻

加藤奈緒は自宅にいた。

町沢署から捜査員用のマンションに戻るために電車に乗ったが、積雪の影響で運行中

止となり途中駅で降ろされた。

その駅から加藤の自宅まで三キロはあったが、相澤裕典と一緒に歩いて自宅まで行った。

「奈緒ちゃん、ここ、もしかして分譲？」

相澤は、濡れたコートをかけたハンガーラックをエアコンの前に移動させている加藤に話しかけている。

「そうだよ。ローン組むの、早い方がいいと思って」

「そうなんだ」

リビングを見回す相澤は、視界に入る殺風景なりビングをキョロキョロ見回し、困惑した顔をしている。

「あのさ、女の家なのに可愛げがないとも思ってるでしょ？」

「……そんなことないよ」

「ふふっ、顔に書いてあるよ。ふふっ……お風呂洗ってくる」

そう相澤に伝え、加藤は浴室に行き、シャワーを出してお湯に変わるのを待っていた時、相澤も浴室に来たことに気づいた。

「俺がやるよ」

「いっよ」

「寒いから奈緒ちゃん向こうに行って温かくしてよ」

「いいって」

「ダメだよ」

相澤はスラックスの裾を捲り、靴下を脱いで浴室に入ってきた。加藤の肘を掴み『奈緒ちゃん、向こう』と頬を膨らませて言い、それを見た加藤は口元を緩めて『ありがとう』と言って、浴室を出た。



同時刻

「あったかいお風呂に入りたい……」

「んふっ、そうだね」

本城昇太と葉梨将由は、近くのドラッグストアへ来たものの、積雪の影響で営業開始時刻を遅らせる旨の案内を前にしていた。

刑事課長の須藤諒輔すどうりょうすけが捜査員用のマンションへ来ることを松永から告げられ、二人は三十分間だけマンションから出るよう言われた。カップ麺のストックが無くなっていることに気づいた二人は、それを買うためにドラッグストアに来たが、ドラッグストア

は営業していなかった。

「コンビニ、コンビニ行きましょう！」

「コンビニのカップ麺は高いよ」

「雪積もってるんすよ？ いいじゃないですか、今日くらい！」

「ふふっ、そうだね。そうしよう」



午前十一時五十分

風呂から上がった相澤は、加藤から渡されていた黒いTシャツにトランクス姿でリビングに戻ってきた。

「まだ体は熱いでしょ？ 寒くなったらベッドに行きなね。電気毛布入れてある」

そう言って加藤は浴室に行った。

リビングに残された相澤は、加藤が作ったミートソーススパゲティとコンソメスープをリビングの小さなテーブルで食べ始めた。

リビング、ダイニング、見える範囲のキッチンを見回す相澤は、『奈緒ちゃんらしいけど……』と呟いた。



同時刻

マンシヨンに戻った葉梨と本城の二人はリビングに入り、何のサインも送って来ない松永を見てから須藤に挨拶をした。

「寒い中、悪かったね」

「ごめんね」

本城が手にしているマイバッグに視線を落とした松永は、『コンビニに行ったの?』と言い、本城が経緯を話した。松永は『今日みたいな日はいいかもね』と言い、キツチンへ向かった。

本城は買ってきたカップ麺をテーブルに並べ、須藤と笑い合いながらひとつひとつ眺めている。

葉梨は松永の後を追い、キツチンへ行くと、『俺がやりますから!』とやや大き目の声を出して、ポットに水を注ぎようとしている松永に近寄った。

葉梨がもう一度、『松永さん、俺がやりますから』と言っている間、松永は葉梨の耳元で囁いた。

「チンパンジーに加藤のこと、バレてるよ」



午後〇時四十三分

「うっ……」

洗面所の扉の前にいた相澤と、バスタオルを巻いただけの加藤は見つめ合っていた。

「なに？　寝てなかったの？」

「あ……うん……」

「なんでよ？」

そう言つて加藤は、相澤の腕と首に触れ、眉根を寄せて『冷えてる』と言つた。

「なんでここに居るの？」

「あ……遅いから大丈夫なのかなって思つて……」

「……ああ、そういうことね。ふふっ」

加藤の含みのある言い方に首を傾げた相澤へ、『服着させてくれないかな』と言ひ、加藤は寝室へ向かったが、リビングに戻ろうとしている相澤を呼び止め、寝室へ来るように言つた。

加藤はウォークインクローゼットで服を選んでいるが、相澤が寝室へ来ないことを不審に思い、廊下に出た。

廊下にいる相澤に、『ベッドで寝ないと殴るよ』と言うと、相澤はしぶしぶ寝室へ入って来た。

「奈緒ちゃん、さすがに奈緒ちゃんのベッドで寝るのはダメだと思う」

「なんでよ？　電気毛布は暖かいよ？」

「それはわかるけど……」

加藤は相澤を促し、ベッドの掛布団を捲った。

「ほら」

「うーん……」

「殴るよ？」

頬を膨らませて『わかったよ』と言いながら相澤がベッドに入ったことを確認すると、『髪の毛乾かしてくる』と言い、電気を消して寝室を出て行った。



同時刻

カップ麺とレトルトのご飯を食べた俺たちは、ダブルの炭水化物摂取による血糖値の急上昇と急下降を経て、全力で睡魔と戦っていた。

「寝よう。二十分、寝よう」

須藤さんがそう言うのと、本城は目を輝かせて、葉梨を伴って仮眠室へ行った。

「敬志も仮眠室で寝ろよ」

「いや、いいですよ、俺はいいで」

須藤さんに仮眠室へ行くように促し、リビングに一人になった俺はテーブルに突っ伏して昼寝を始めた。

——絶対に俺、寝言で優衣香の名前呼ぶもん。聞かれたくないもん。

優衣香の姿を思い出して、頬が緩んだなと思うと同時に、眠りに落ちた。



午後一時十二分

部屋着に着替えて髪を乾かした加藤がそつと寢室を覗くと、相澤はベッドに座っていた。それを見て舌打ちした加藤は、ドアを開けたまま寢室の電気を付けずに相澤の元へ行った。それを見ていた相澤は立ち上がり、加藤に殴られないように構えたが、加藤は

気にせず手を出した。

「痛っ！ 離してよ」

加藤の両肘を掴んだ相澤は加藤を睨めつけ、ベッドに押し倒した。両手首を顔の横に押さえつけ、二の腕も腕で押さええている。

相澤の足の間に加藤の足があるが、下肢も相澤の足で押さえつけられていた。

「奈緒ちゃんごめん。でもこうでもしなきゃ、奈緒ちゃんは話を聞いてくれないから」

相澤のその言葉に目を伏せた加藤だが、体は抵抗している。体を振らせて逃げようとするが、それは相澤相手に出来るものではなかった。

「奈緒ちゃん、今好きな人がいるの？」

「だとしたら何よ？」

「なら俺は別れるまで待つてる」

「はっ!？」

「だって……」

相澤は、松永から加藤に言い寄っている男がいると聞かされたことを話した。その時に芽生えた感情は、加藤を誰にも渡したくないという気持ちだったと、相澤は言う。

「多分、奈緒ちゃんが好きなんだと思う」

「多分って何よ」

「わかんない」

「バカなの？」

加藤がいつも言うその言葉に相澤は舌打ちし、腕に力を込めた。目を見開いた加藤は謝罪をしようとしたのか、口を開いた。だが、声が発せられる前に相澤の唇が加藤の口を塞いだ。相澤の舌が、加藤の答えを求めた。

相澤の体の重みが加藤にかかり、それが苦しいのか、息が出来ないからなのか、苦しい吐息が漏れている。だがいつまでも応えない加藤に、相澤は唇を離して腕も足も離した。

手を加藤の体の脇にやり、足もそうした。

「ごめん……でも奈緒ちゃんがいいなら、俺はしたい。でも嫌なら俺はや——」

加藤は、自由になった腕を相澤の首に回して、唇に視線を落として、相澤を引き寄せた。

目撃者

一月十日 午前二時四十八分

車のヘッドライトが煌々と輝いている。暗い道を照らすその灯火はどこか暖かく感じられた。だがそれも束の間のことだった。通り過ぎる街の景色は徐々に暗くなつていき、やがて街灯だけがぼつんと立ち並ぶだけの風景へと戻る。

『明けましておめでとうございませう。久しぶりの御来店を心よりお待ちしております』
バーテンダーの望月から届いたショートメッセージが届いたのは、約三時間前だった。

——急ぎの連絡。何だろう。

◇

いつものようにカウンター席の端に座り、視線を上げると、バーテンダーの望月がグ

グラスを拭きながらこちらを見た。グラスを置くと、『明けましておめでとうございます』
そう言つて彼は恭しく頭を下げる。店内は客もなく、深夜の訪問のいつもと変わらず、
とても静かだ。

目の前に置かれたグラスの中には琥珀色の液体が入っている。一口飲むと、心地よい
冷たさが喉を通り抜けていった。モヒートジンジャーエールだ。

グラスの中で揺れるミントの葉を見つめっていると、望月が口を開いた。

「最近、いつ、笹倉さんと会いました?」

十二月九日の夜、優衣香とこのバーで過ごした後、駅までの帰り道で、このバーに來
た時は連絡が欲しいと伝えた。行く前ではなく、行つた後でいいと俺は伝えた。

直近のその連絡は約四時間前、望月からショートメッセージが届いた一時間前だつ
た。

「ここに連れて来て以来、会つてないよ」

「えっ……じゃ、ひと月も?」

「そうだよ」

優衣香のマンションを訪ねた十一月九日から、本来なら会えないはずだったが、俺は
おぼさんの命日にどうにかして時間を取った。そしてここで会えたのはたまたまだつ
た。優衣香のマンションに行くのはだいたい二ヶ月に一回のペースだが、長い時で八ヶ

月の時もあつたし、十一月九日は半年ぶりだった。

「そうですか……」

「何よ？　話してよ」

望月の目は俺を責めるような目をしている。だが俺がカウンターを指で叩いているのを気にして、話し始めた。

「笹倉さん、すごく痩せたから、心配で。病氣つてわけではなさそうだけど……」

優衣香は幼稚園の頃からスイミングスクールへ通い、小学生の時は少年野球チームに混じってたし、中学も高校も部活動をしていた活発な女の子だった。肩幅も広く、骨格もしっかりしている。顔が丸顔だから太って見えるが、太っているわけではない。痩せてもいないが。

「ああ、確かにここで会う前に会った時、少し痩せたなとは思ってた」

「そうなんだ」

「会いたいけど……難しい。俺、自宅にもひと月半、帰ってないし」

今、優衣香は俺の恋人だ。だが、恋人としてやってやりたいことは何ひとつ出来ない。このバーに来た時は連絡してくれと俺が言ったから、優衣香は連絡をしてくれるのであって、その他の連絡は一度もない。

——それって恋人じゃないよな。

俺とクリスマスも正月も一緒に過ごせず、連絡すらない。俺がどこで何をしているのか、どんな仕事しているのかすら知らない。でも、そんな男が恋人でいいと、優衣香はそれでもいいと、俺を好きだと言ってくれた。

優衣香に男がいる時にカップルが仲良くしている姿を見ると、心の中で悪態をついていた。だが今は優衣香が俺の隣にいないこと、優衣香の隣にいてやれないことを考えるようになった。

——他人が優衣香の変化に気づいているのに、また、俺は何も知らなかったのか。

「モッチー、教えてくれてありがとう」

「あ……いえ。何か……あつたのかと、思いました、ね」

「……ああ、ありがとう」



午前七時三十三分

捜査員用のマンションのリビングに入ってきたのは葉梨だった。てつきり相澤だと思っただが、葉梨だったことで葉梨と見つけ合ってしまった。

「おはようございますー！」

「おはよう……相澤は？」

「起きてます。すぐ来るかと思ひます」

相澤も俺も相変わらず休みを取れず、相澤だけは官舎に戻れた日はあつたが、それも荷物を取りに行くだけだつた。その際にマフラーを頼んだが、また忘れた。

優衣香にもらつたマフラーがあるからいいが、相変わらず着けつばなしだからそろそろ洗いたいの、相澤は俺のマフラーをまた忘れた。

葉梨はここから一番近い官舎に住んでいるから、他の捜査員よりは帰っているようだつた。

——奈緒ちゃんとデートはしたのかな。

加藤も葉梨も、二人の間に何があつたのか気取られないようにしているし、葉梨と山野の一件でも加藤は一切動じなかつた。

まさか寝落ちした葉梨に裏拳をお見舞いする加藤が、葉梨に恋する奈緒ちゃんだとは誰も思わないだろう。まあ、須藤さんだけはなぜか知っていたが。

だが、もう一人の男である相澤と加藤の關係に、このところ何か違和感がある。雪の日以降だ。

仕度を整えた相澤がリビングへ入ってきた。眠そうな顔をしているが、しっかりと睡眠は取れたようだつた。

「おはようございます」

「おはようございます!」

「おはよう。ねえ、相澤、ハンバーガー屋行こうよ。朝メニュー。たまにはさ」

「えっ、はい!」

「葉梨と本城の分も買ってくるから待っててよ」

「はい! ありがとうございます」

寝ている本城を起こさないようにそつと玄関を出た。

仕事に余裕がある頃は、朝メニューを食べに二人でよく行っていたが、最近はどうもいかず、かなり久しぶりに二人で行くことが出来た。

「久しぶりだな」

「そうですね、多分、一年ぶりじゃないかと」

「マジで」

平日の朝、通勤通学時間帯で混雑する駅前の店舗は避けて、山下公園側の店舗へ歩いていく。すれ違う人達の数は少ない。

「そろそろ仕事も余裕出てくる頃だし、裕くん休みを取りなよ」

「でも、松永さんの方が先に……」

「俺はいいよ……裕くん、加藤と時間を合わせるよ?」

——少しだけ、目が動いた。

「雪の日、何かあったんでしょ？」

何も聞かないけど、希望があるなら聞くから言っ

て」

「……ないです」

「ふふつ、そうか」

山下公園付近にあるハンバーガー屋は、店内の客が少なかつた。カウンターでいつものセットを頼むと、トレーにドリンクだけを乗せて渡された。店員が出来上がり次第、席まで持ってきてくれるという。

「あつたあつのが来るね」

「そうですね！」

俺も相澤も、この朝メニューは出来たての熱いバーガーが好きで、二人でコーヒーを飲みながら楽しみに待っている間、優衣香の件を聞いてみようと思いをかけると、加藤の件かと思っただのか、相澤は少しだけ構えた。

「ああ、ごめんね、優衣香のことだよ」

「あつ、笹倉さん……」

安心した顔をした相澤に不安な反面、俺には感情を出してもいいと信頼してくれていることが、少し嬉しかった。

「毎年、命日前に行つてるでしょ？　　前行った時は俺はその直後に行つて優衣香に会ったから聞かなかつたんだけど、裕くんから見て、優衣香は何か変わったことはあった？」

「物が減った気がしました」

「ああ、それはね、優衣香は引越しようと思つてゐるみたいで、物を減らしてるんだつて」

「そうですか。あとは……笹倉さん、痩せたなと思ひました」

「ああ。そうだね……かなり痩せたらしいけど……それについて、裕くんは事情を聞いた？」

「いえ……すみません。聞いてません」

そこに注文していた品が届いた。

熱くて持てないくらいの熱さだったが、相澤も俺も笑いながら紙を開いて少しだけ冷めるのを待った。

「裕くん、あのね。このマフラーは優衣香からもらったと言つたけどさ、これは望月に優衣香が預けたんだよ。それはいいんだけどさ、俺は優衣香に望月の店に行つたら連絡してつて約束してたのに、その時は優衣香が俺を驚かせようとして、連絡して来なかつたんだよ。でさ……ああ、食べよう。ごめん」

二人でバーガーを頬張るが、相澤は俺の顔をちらちら見る。
「ごめんね、帰り道でまた話すから、美味しく食べようよ」

◇

マンションで待つ葉梨と本城へテイクアウトでいくつかバーガーを注文し、その袋は相澤が持っている。

来た道は、開店準備を始めた人達と車両が増えていて、活気あふれる中華街へと変わりつつある。

帰り道、俺は優衣香の話の続きを始めた。

あの日、優衣香がマフラーをプレゼントしてくれた時に連絡がなかったから、お礼の電話をした時に、俺はやんわりとそれを咎めた。優衣香の動揺した『ごめんなさい』と言う声が今でも耳に残っている。

——俺は優衣香を傷つけた。

優衣香は俺が寒いと言ったから、喜ばせたいと思つて、ただそうしただけだったのに。会えないから、望月に託したのに。だが俺は、望月との関係を考えて、その気遣いを咎めた。優衣香に嫌な思いをさせてしまったことが辛かった。

「優衣香に連絡してさ、俺、それを咎めたんだよ。言葉を選んだし、声も優しく言ったけど、優衣香が動揺しちやっつてさ、『ごめんなさい』って、小さな声で言っつてさ……」

「松永さん……」

「初めてなんだよ、優衣香を傷つけたの……どうしよう」

そう言っつて相澤の顔を見ると、ニヤニヤしていた。

「……なんだよ」

「松永さんの恋のお悩みを聞くのが楽しくて」

「あ？」

声を出して笑う相澤は、『大好きな優衣ちゃんに会いに行けばいいんじゃないですか』と、いつか聞いたことのあることを言った。

「もうっ！ 真剣に悩んでるのに！」

「それで、笹倉さんが痩せてしまったのは自分が原因だから、と？」

「そうだよ？」

「んふっ……」

「なんだよ」

相澤はニヤニヤしながら、『俺は笹倉さんの家であるものを見ました。痩せたのはそれが原因だと思います』と言った。

「なんだよ、それ。何を見たんだよ」

「笹倉さんは、俺との秘密を守ってくれたんですよね？」

「……ああ、そうだよ」

「じゃ、俺も笹倉さんとの秘密を守りますから」

そう言つて、相澤は走つて逃げた。

「ちよっ！　裕くん！」

テイクアウトの袋を掴んで全力疾走する相澤の後ろ姿を見ながら、俺は呆氣に取られてその場に立ち尽くした。

——優衣ちゃんに電話をしよう。謝ろう。で、聞こう。

そう考えて、相澤の後を追つたが、いつもぶつちぎつて行く加藤の背中を追つてるせないのか、相澤はかなり走るのが速いと思つた。

——なにさ！　ゴリラのくせに！　待つてよ！

電話の声

葉梨将由は官舎の自室で電話をしている。

ベッドに腰かけ、左足をベッドに乗せている彼の表情は徐々に険しくなっていた。

「話してくれなかったから」

「……気持ちにはわかる、けど……」

「それって結局、俺のこと——」

「じゃあなんで、話してくれなかったんだよ」

少しだけ声を荒らげた彼は上を向いて奥歯を噛み締めた。

「俺はもう、いい」

「そう………冷めた」

電話の向こうの相手は、まだ彼に何かを言っているようだ。

「もう連絡しない。それじゃ」

そう言って、彼は通話ボタンをタップして、スマートフォンをベッドに投げつけた。

跳ねたスマートフォンは壁に当たって、大きな音がした。



一月十一日 午前十一時五十七分

冬の晴天の日。

その暖かな日差しの元、行き交う人々で賑わう横浜中華街。

そんな賑わいとは打って変わって、捜査員用のマンションがある裏通りは静かだ。

マンションを出て石川町駅方向へ歩いて行くと、見覚えのある濃いグレーのセダンが止まっていた。須藤さんの私有車だ。

今朝、チンパンジー須藤から電話があった。

『そっち行くから』と『昼に行く』とだけ言って電話は切れた。

昼って十二時かな、と思ってマンションを出ると須藤さんの車を見つけた。運転席の窓を覗き込むと、須藤さんはウインドウを開けた。

「あー、運転手さんねえ。交差点から五メートル以内は駐停車禁止なんですよ」

「ふふっ……見逃してよ」

そう言って、笑いながら須藤さんは後ろに乗るよう言った。

——へえ。公用車がフルモデルチェンジすると、こんなに高級になるのねー。

ドアを閉めると、静寂がそこにあつた。

「ヤバいつすね、すつげー高級車になつてる」

「な、俺も驚いたけど、公用車を新しくしても、これはクラウンパトより大きくなるから配備はされないだろうな」

俺がシートベルトを着けたことを確認すると、須藤さんは発車した。

他愛もない話を始めた須藤さんだったが、信号待ちでマグの温かい飲み物を飲んだ後、信号が変わってから話し始めた。

——やつと本題か。そんなに面倒そうな感じはしないけど。

「山野だけどさ、今は有給を消化させてるだろ？ こつちも事前に……まあ知つてたけど、新たにいろいろと、出てきて、さ……」

男性用仮眠室から出てきた、葉梨も聞かされていなかった六個目のボイスレコーダーの件は、葉梨が山野を懐柔して聞き出していた。

その報告が須藤さんに上がり、すでに山野は有給消化という名の自宅謹慎となつている。米田も何かしらあつたようだ。詳細はわからないが。

「葉梨は元々、かなり知つてたみたいですね」

「ああ、あれだろ？ 山野のこと、まだ何も知らん時に可愛いと思つて二人で遊びに

行つてたけど……」

「口は軽いし、ヤリマンだし、つて？　　ふふっ」

「以前はそうじゃなかったんだけどね」

ルームミラー越しに、須藤さんは俺に視線を送る。

「ぼくのせいだとおっしゃるんですか!？」

「ふふっ……どうだろうな」

「山野つて、カネ関連も……アレですよね」

山野がホストに入れ上げてるといふ情報は葉梨から受けていた。同僚に金を借りて
いるという。

「ああ、今日はその話で来た。……会社のカネが、さ……」

「えっ……」

「もう確定。今、山野の親と話し合ってる」

「おっと……」

「とりあえず、この話は敬志だけが知ってるから、よろしくね」

「……はい」



午後一時十二分

相澤裕典と加藤奈緒は昼ご飯を食べにいつもの中華屋へ行き、日替わりランチ三種類を注文して待っていた。

早歩きで店に来たせいで汗ばんでいる加藤は、水を飲み干し、空いたコップを相澤に突き出していた。

「……返盃？」

「あんたずいぶん偉くなったんだね」

「水を入れろってこと？」

「そうだよ」

「もうー！」

加藤のコップに水を入れる相澤は頬を膨らませている。それを優しい眼差しで加藤は見ていると、そこに顔なじみとなった女将が席にやって来た。

「今日もたくさん食べるのね」

「ふふっ、もちろんですよ」

二人の間にチャーハン三個、青椒肉絲、麻婆豆腐、餃子十個が置かれた。

「多分、足りないから何か注文します」

「えっ！ あ、そうね、ふふっ」

そう言つて、女将は相澤をチラツツと見た。相澤は置かれた品に目を輝かせている。

「本当に、奈緒ちゃんつていつぱい食べるね」

「燃費悪いからね」

「でも痩せてる」

「これでもね、三十過ぎてから肉が付いてきたんだよ」

「えっ……」

相澤は何かを思い浮かべたよう目で目を彷徨させた。

「……いいから食べな」

「うん……」

「八宝菜か油淋鶏、どっち頼む？」

「奈緒ちゃんの好きな方でいいよ」

「あんたが決めてよ」

「奈緒ちゃんが食べたい方を俺食べるから」

「決めてよ」

「どっちでもいいよ」

「決めて」

押し問答をする二人を、店主と女将は口元に笑みを浮かべながら眺めていた。

◇◇◇

午後一時三十分

須藤さんにマンション近くまで送ってもらい、車が見えなくなるまで見ていた。

——新しい捜査員は三人分働く女性だ。頼もしいけど……。

いいや、それは後で考えよう。

今は、優衣香のことだけを考えよう。

マンションには駐車場がなく、近くの時間貸パーキングを月極契約している。

優衣香に電話しよう。

ここには誰も来ないはずだ。

俺は停めてある公用車に乗り込んだ。

この公用車は優衣香と同じだ。優衣香のは後期型で七速だと言っていた。確かに五速の前期型は、高速道路では問題ないが、渋滞した市街地だとストレスになることもある。

履歴から優衣香の文字を探して、タップした。

あれから何回か電話しているが、今でも緊張するし、怖い。だが、俺は優衣香に謝らなければならない。

◇

「もしもし、俺……あの、今、電話大丈夫？」

「うん、大丈夫だよ。どうしたの？」

「……優衣ちゃん、声が……」

「ああ、うん、風邪ひいたみたいで、午前中に病院へ行ったけど、インフルエンザじゃなかったよ」

「えっ、あの……大丈夫なの？」

「うーん、咳と喉の痛みで、熱もある」

「ああ……どうしたの？　寒かったから風邪ひいたの？」

「うーん、疲れだと思う。このところ体を……ああ、でも大丈夫だよ。敬ちゃんは？」

体調は？　ちゃんと寝てるの？」

優衣香は何かを言いかけて止めた。何だろうか。でも、今は優衣香を休ませないといけないと思った。謝罪は優衣香が元気になってからでいいだろう。

「ああ、うん、大丈夫だよ。ありがとう。あの、優衣ちゃん、ゆっくり休んで。また連絡するね。ちゃんとお薬を飲んでね」

◇

午後一時四十七分

捜査員用のマンションには、相澤、加藤、葉梨、本城、武村がいた。皆リビングのテーブルに着席している。

俺は皆の顔を見ながら、爽やかな笑顔で話しかけた。

「皆さん！ とつてもいいお知らせですよ！」

俺がこういうことを言い出す時は例外なく口クでもないことだから、それを知らない武村以外が俺から視線を外した。

「なんと！ 新しい捜査員の補充があります！ 皆さん、嬉しいですね！」

捜査員の補充がある時点で余裕が生じるのは確かだから、少しでも期待している目で俺を見た。武村の目は輝いている。だが、前回の山野の件がある。それが誰なのか、固唾を飲んで俺を見つめた。

「^{アネ}姐さんです！ 明日の昼から^{れおな}玲緒奈さんが来て下さいますよ！」

「えっ！　本当ですか！　玲緒奈さんが来てくれるんですか！」

歓喜の声を上げる相澤と、誰のことかわからない武村以外の葉梨、本城、加藤の反応は同じだった。俺もさつきチンパンジーから聞かされた時も同じだった。

茫然自失――。

加藤は目眩がしたのか、隣の相澤にもたれかかった。

「奈緒ちゃん！　どうしたの!？」

「マジ……もう無理……」

「ええっ!？」

玲緒奈さんは今年四十一歳になる既婚女性で、俺が信頼する同業女性の一人だ。加藤を指導した先輩であり、同じ所轄の相澤を溺愛した女性でもある。

相澤には優しく指導したが、加藤にはそうではなかった。加藤が狂犬になったのは、玲緒奈さんのせいでもあるし、おかげでもある。

葉梨と本城に関しては何らない。だが表情を見る限り接点はあったのだろう。二人は唇を噛み、目を瞑っている。

「皆さん！　お気持ちもわかりますが、私が一番辛いんですよ！」

そうだ。玲緒奈さんに俺は頭が上がらない。玲緒奈さんが独身の頃から本当に、俺はお世話になっている。公私共に、お世話になっている。

——だってぼくの義姉だもん。

こんな美少女がなぜ警察官になったのか、何かの間違いではないのかと騒然とさせた松永玲緒奈は、一つ下の俺の兄が警察学校に入った時に、『私はあるたの嫁になる』と兄に言い、兄はよくわからないまま交際をして、よくわからないまま結婚して、二十二歳で父親になっていた。

兄もよくわからなかっただろうが、うちの家族もよくわからなかった。

両親は兄の恋人が一期上の同業とだけ聞いていただけだったから、玲緒奈さんを初めて見た時は動揺していた。初見で兄を選んだという玲緒奈さんを、美人局か詐欺ではないのかと疑ったという。玲緒奈さんも警察官なのに。

玲緒奈さんは加藤と同じで、背が高く痩せている。痩せていた時は陰で『ヤクザの愛人』と呼ばれていたが、三人目を産んだ後に少し肉付きがよくなり、三十半ば過ぎになつてからは、『姐さん』と呼ばれるようになった。インテリヤクザと反社の間ぐらいの顔でスラimer体型の兄が公務中に傷を負ったせいでもあるけど。

「では皆さん！ 覚悟を決めて、頑張りましたよう！ 休みだけは！ 休みだけは取れますから！」

——よし、ついでに言つてやる。

「俺、明日の朝まで時間もらう。心の準備させて……お願い……」

加藤、葉梨、本城の三人が憐憫の眼差しで俺を見て、小さく頷いた。

そんな俺を見ちやいない相澤は武村に教えている。『玲緒奈さんはね、すごく優しい女性なんだよ』と。その声にゆつくりと顔を向けた三人は、皆思い思いの表情をしていた。

——よし、優衣ちゃんに会って現実逃避しよう。

看病セットは何を買えばいいのかだけを考えて、玲緒奈さんのことは明日まで忘れようと思った。

—— 第5章・了 ——

第6章

二人の鼓動

午後五時五十一分

リビングのパイプ椅子に座っていつもの書類を読んでいるが、内容が全く頭に入って来ない。時計の秒針が進むたびに、刻一刻と迫る夜に心が騒ぐ。

加藤がマンションに戻ってきたら、交代で俺は帰ることが出来る。そろそろ帰って来る頃だ。

——優衣ちゃん、大丈夫かな。

優衣香は子供の時から丈夫な女の子で、二十代の頃は寝て起きると体調が悪かったことすら忘れていたような女の子だった。

だが三十五を過ぎたあたりから、『寝ても治らなくなった』と言っていた。

——心労だろう。俺のせいだ。

電話をしなかったことを俺が咎めたからだ。だから心労が溜まり、抵抗力が落ちて風

邪をひいたのだろう。だが今日は優衣香の元へ行ける。せめて看病くらいはさせて欲しい。

さつき電話をして、夜に行く伝えてある。声は相変わらずだったが、解熱剤で熱は落ち着いているものの、ブーツとっていると云っていた。

「ただいま戻りました」

——加藤が帰ってきた。

リビングのドアを開けて矢継ぎ早に連絡事項を伝える俺に、加藤は片足をスリッパに履き替えたまま、呆気にとられていた。

◇

午後七時三十九分

こんな早い時間に優衣香のマンションがある最寄り駅にいるなんて、これまでなかったことだ。ここは二路線ある駅で乗降客も多く、駅前は騒がしい。

駅前のスーパーで買い物をして、優衣香のマンションに向かったが、徒歩七分の道のりも人通りが多い。

マンションに着く前、オートロックの解除まで時間がかかるだろうから、起きていて

もらおうと思つて連絡すると優衣香は起きていた。

オートロックを解除してもらい、階段でいつも通り六階まで行く。インターホンを押すと、すぐにドアが開いた。

——また、ドアの前で待つてたのかな。

優衣香はパジャマの上にフリースジャケットを着ていて、髪の毛は横に流している。多少顔色が悪いが、笑顔で出迎えてくれた。

「優衣ちゃん、大丈夫？」

「うん、薬が効いてるから熱は下がったよ。けどちよつとフラフラしてる」

買い物袋を受け取ろうとする優衣香を制してそのまま優衣香を抱きしめる。腕の中で見上げる優衣香に顔を近づけると、優衣香は嫌がった。

「風邪、感染っちゃう」

「いいよ、そんなの」

「ダメだよ。それに……」

そう言つて、俺の腕から逃れようと抵抗していた。なぜかと問うと、風呂に入っていないからだ。

「優衣ちゃんは俺が風邪ひいたら看病してくれる？」

「うん」

「俺が風呂に入つてなかつたら看病してくれないの？」

俺を見上げて、少しだけ唇を結んだ優衣香にそつと唇を重ねた。唇が乾燥している。荒れた唇が痛々しい。

「お風呂、沸かそう。俺がやるから」

俺に掃除をさせることを嫌がったが、看病のうちのひとつだと言つて納得させた。

◇◇◇

午後九時十四分

「おかえ——」

「ヒイツ!!」

捜査員用のマンションに戻つた本城昇太は、廊下にいる加藤の姿に驚いて背を向けたが、振り向いた拍子に玄関ドアに頭をぶつけ、大きな音を立てていた。

「ごめんね、ブーツとして着——」

そこに葉梨がリビングから出てきた。葉梨が見たものは廊下のダウンライトの真下にいる加藤の後ろ姿だった。

スポットライトを浴びたような形になっている、バスタオル一枚だけを纏う加藤が振

り返った。葉梨を見て、『着替えを忘れたから』と言うと、『そうですか』と言い、加藤の肩越しに玄関ドアで頭をぶつけ、手で押さえている本城を見た。

「また相澤さんに怒られますよ!」

「えー?」

また本城に向き直し、答える加藤の背中を葉梨が見ると、加藤の肩甲骨部分に癍痕ケロイドが残る切創痕があることに気づいた。バスタオルで隠れていない部分だけでも五センチはある。

「とりあえずパンツ履かせてくれない?」

「ええっ!? 履いてないんですか!?!」

加藤の言葉に葉梨は壁に肘をついて、頭を抱えて目を閉じた。唇を噛んでいる。「だから着替えを忘れたって言ったでしょ」



同時刻

体がフラフラするなら一緒に風呂に入ろうと優衣香に言ったが、『嫌ですよ』と即答された。

さすがに俺は具合の悪い優衣香をどうにかしようとは思わない。だが、優衣香の姿を見ていると少しだけ不安があった。だから洗面所のドアを少しだけ開け、廊下で椅子に座って、優衣香が風呂から上がるのを待つことにした。

「ここに居るから、何かあつたら呼んでね」

「うん、ありがとう」

衣擦れの音がする。

この後は優衣香が風呂の扉を開けて、シャワーを出して、と音が聞こえるはずだが、音がしなくなった。

「優衣ちゃん、どうかした？」

「敬ちゃん……」

「入っていい？」

返事が返って来ない。今すぐドアを開けたいが、返事を待たないと、とも思った。『優衣ちゃん』ともう一度声をかけると同時に、優衣香がまた俺の名を呼んだ。

ドアを開けると、優衣香が裸で蹲つづくまっていた。

「優衣ちゃん！」

背を向けて蹲つづくまっている優衣香の肩を掴んで抱き起こそうとしたが、ずいぶんと細くなった体に驚いた。

「ごめんね……」

「優衣ちゃん、やっぱり一緒に入ろう」

「でも……」

「いいから」

急いで服を脱ぎ、シャワーを出してから優衣香を抱き起こす。風呂に入り、優衣香の腰に腕を回して、シャワーをかけると、優衣香が俺の肩や腕を見ていることに気づいた。

「どうしたの？」

「……三角筋と、上腕三頭筋と、大胸筋」

「ん？ ああ、そうだね」

指先で俺の肌に触れて、笑いながら筋肉の名称を言うのはなぜだろうと思いつつ、優衣香の体を洗おうとボディソープに手を伸ばした。

ボディタオルにボディソープを出して、優衣香を引き寄せて、肩越しに泡立てる。どれくらい強い強さなら痛くないのか訊ねながら優衣香の体を洗っていった。だが――。

優衣香の肌が濡れていて、泡が乗って、滑る。

恥ずかしそうに体を隠そうとしている優衣香の姿を見て、俺は気づいた。その時に初めて、俺と優衣香が置かれている状況に気づいたのだ。

俺たちは裸で抱き合っている。

優衣香の体は泡に包まれている。

——これ、ぼくの妄想カタログにないやつだ！

フラフラしている優衣香が心配だから二人で風呂に入っているが、いざ我に返ると当然、体は反応した。全力で反応している。

腰を抱いて体を密着させているから、優衣香もそれに気づいて俺を見た。ここでロクでもないことを言つて引かれるのも嫌だから、俺は微笑みながら『ごめんね、でも、優衣ちゃんとうこうしてるんだもん、しょうがないよね』と言つた。紳士の模範解答だ。下半身は変態紳士だが。

恥ずかしそうに目を伏せる優衣香が可愛かつた。

——優衣ちゃんホントはね、素手でね、いろんなところ触りたいけどね、ぼく我慢してるんだよ。

優衣香の肩と腰を持ちながら、優衣香を浴槽に入れた。背を向ける優衣香に『俺も体、洗うね』と言ひ、シャワーを浴びる。

コンバットシャワーで慣れた体洗いは手慣れたもので、さつさと終わらせて俺も浴槽に入ったが、勢いよく入ったせいか水流で優衣香が沈みそうになった。

「ごめん！ 優衣ちゃんごめん！」

「……びつくりした」

「……ちっおいで」

優衣香の腕を掴み、優衣香を後ろから抱きしめる。腰に腕を回したが、骨盤にも肋骨にも指が触れて驚いた。

「優衣ちゃん、どうして……痩せたの？　俺がこの前怒ったから？　だとしたら俺、

謝んなきゃ……」

「えっ!?　　違うよ……」

身を振って俺を見上げた優衣香は、『ダイエットして、それで……』と恥ずかしそうに言う。

相澤は優衣香の家で何かを見たというが、それが何なのか、リビングや和室を見ただけではわからなかった。

「ダイエット?　　どうして?」

「あの……えつと……」

優衣香は言い淀んで、あることに気づいて、体を前に向けた。

——ごめんね。ぼく優衣ちゃんのおっぱいガン見してるもんね。

前を向いてしまった優衣香の首すじに唇を寄せて、『どうして?』とまた聞いたが、答えはなかった。だが優衣香がこちらを向いて、俺の首に腕を回してきた。そして唇を軽く重ねる。

——優衣ちゃんが風邪ひいてなければよかったのに。

俺は優衣香の下唇を食んだ。舌で唇をなぞって、また唇を重ねる。もつとしたいが、負担はかけられない。

「優衣ちゃん、もう上がる？」

辛そうだよ？」

「うん……」

優衣香の体を拭いてやり、下着を優衣香が履いている間に俺は体を拭いた。

バスタオルを腰に巻き、優衣香にパジャマを着せてやって、そのまま抱きかかえて寝室へ連れていった。



午後九時四十八分

「ふふっ……そんなことがあったんだ……」

捜査員用のマンションのリビングで、加藤と葉梨がテーブルに向かい合っていた。

葉梨と松永の義理の姉である松永玲緒奈の思い出話に加藤は笑っているが、葉梨は頭を抱えていた。

本城は数分前、シャワーを浴びに浴室へ行っている。

「本城がシャワーから戻ったら、相澤が帰ってくるまで寝るから」
「わかりました」

「何か飲む？　冷蔵庫に飲み物いくつかあるよ。持ってくる」

葉梨の返事を待たず、加藤は席を立った。その後を葉梨が追う。

加藤を追い越してリビングのドアまで葉梨が来た時、加藤の腕を掴んだ。加藤が驚いた時にはもう、葉梨の腕の中に収まっていた。

葉梨はリビングのドアを体で塞いでいる。

「本城が戻るまで……」

「えっ、でも——」

葉梨の唇は、何かを言いかけた加藤の唇を塞ぐ。肩に回した手は、加藤の顎に添わせ、上を向かせている。唇を離れた葉梨は、『奈緒』と呼んだ。

呼び捨てにされて目を伏せる加藤にもう一度、言った。

「俺だけを、見て」

目を見開いた加藤を見て、葉梨は顎に添寄せた指に力を込めて、首に唇を這わせる。加藤は腰を抱く葉梨の腕に手を添寄せた。

葉梨の舌が耳朵から首を這うにつれ、加藤の吐息が漏れ出した。腕に添寄せた指先に力が入る。

加藤の肩に回した腕に力を込めて引き寄せると、耳元で葉梨は囁いた。

「奈緒の、あんな姿を見たら、俺……我慢出来ない」

そう囁いて加藤の目を見て、また唇を重ねた。

武闘派女と忍耐男（前編）

午後九時五十分

ベッドに寝かせた優衣香の隣に俺も横になり、顔を眺めていた。ベッドサイドの淡いランプの灯りに照らされた優衣香の頬を指先でなぞる。目元に指をやると、優衣香の長いまつ毛が俺の指の動きに合わせて揺れる。

火照った体で呼吸が少しだけ荒い優衣香を今すぐ襲ってしまいたい衝動に駆られるが、今日は出来ない。

優衣香に水を飲むかと聞くと飲むというので、ランプの前に置かれたミネラルウォーターのペットボトルを見たが、空だった。

「新しいの持つてくるよ。冷蔵庫だよね？」

「うん、ごめんね、ありがとう」

冷蔵庫を開けてミネラルウォーターを取り出して寝室へ戻ろうとした時、洗い物の中に女性宅にあってもおかしくはないが、基本的に男性宅にあるだろうと思料されるもの

を見つけた。なんとなく嫌な予感がして、キッチンを見回すと、あるものを俺は見つけてしまった。

——相澤はこれを見たのか？

優衣香が痩せた理由もこれで説明が出来る。だが同時に、よりによつてなぜ、という疑問が湧いてくる。

——優衣香は目的の為に最短距離を選択する。

優衣香は元々そういう人だ。これで痩せた経緯は説明出来る。だが原因を、優衣香は話してくれない。

——体型について、何か、誰かに言われたのだろうか。

ミネラルウォーターの蓋を開けて水を多めに口に含み、口内を潤す。もう一度水を口を含みながら寝室に戻ると、優衣香は起きようとした。水を飲み込み、『そのままでもいい』と言い、優衣香の頭の下に腕を入れて、ミネラルウォーターを口に含んで、そのまま優衣香に口移しで水を飲ませた。優衣香の喉が鳴る。

まだ飲むかと聞くと、飲むと、恥ずかしそうに言う。その顔が可愛くて、俺は少しだけミネラルウォーターを口に含んで、優衣香に口移しした。また優衣香の喉が鳴る。

さつきより量が少ないことに気づいた優衣香は、俺の目を見た。探るような目線を送るが、俺は口をつけたまま、頬と顎に手を添え、無理矢理、優衣香の口内に舌を滑り込

ませる。

頭の下にある腕で優衣香の肩を掴んで、両足に足を乗せて動かせないようにすると、優衣香は俺の頬に手を添えた。

優衣香の舌は俺に応えて、優衣香の指先が俺の頬から首、肩へと移動していく。舌が絡み合い、優衣香は苦しげに喘ぐ。

優衣香は俺の腕を、強い力で掴んだ。

——したいんだけどな。でも出来ない。

俺の冷たい舌が体温に戻る頃、唇を離すと、優衣香はうらめしそうな顔をした。

「ふふっ、これ以上したら、俺は我慢出来なくなっちゃうから」

「したいな……」

「優衣ちゃんに『したい』って言ってもらえて、俺はすごく嬉しい。元気になったら、続きをしようね」

そう言つて、また唇を重ねた。

「あの、優衣ちゃん。聞きたいことがある。ダイエットだけど、どうして？」

「ああ……うーん……」

優衣香の話は、経緯を説明するものだった。

駅前にジムがあり、そこにほぼ毎日通い、インストラクターの指導の元でトレーニン

グをして、食事制限もしていたという。ここひと月半の話だ。確かに、そのジムは駅前にあった。黄色い看板が目立っていた。

俺は、優衣香が目的の為に最短距離を選択する人であることを理解しているし、その選択は尊重すべきことだとも思っている。結果を出す為に、かなりの努力をすることも知っている。

だが、よりによってなぜ、そのジムなのか。そのジムでなくともいいだろうと、俺は思う。

だから俺はあえて言う。違う、そうじゃない、と――。

「ねえ、優衣ちゃん。そのジムって、マッチョしかないジムだね？」

「うん、だいたいマッチョ」

――だから風呂場で筋肉の名称を言ってたんだね。

「……スポーツクラブじゃだめなの？　他には、えっと、ホットヨガ、とか、そういった感じの」

「うーん、そういうのは私に合わないし……」

優衣香はホットヨガとかやってそうな可愛らしい雰囲気的女性だが、それはあくまでも、そういう雰囲気演技しているだけだ。仕事を含む社会生活において、その方が都合がいいから仕方なくやっているのだ。一種の処世術だろう。

だが実際の優衣香は、そうではない。

幼なじみの俺はよく知っている。優衣香は武闘派だと――。



弟の理志さとしとは七歳離れているが、優衣香は理志が産まれた時から知っているから溺愛している。

理志が俺に遊んで欲しいとやって来ると、俺は遊んであげた。だが男同士だ。高い高いをして少し手を離すとか、足にまわりつく理志を足で放り投げるとか、理志の腕を掴んで、ぐるぐる回って理志を放り投げるとか、優衣香から見れば危険だと思うことをしていた。

ぐるぐる回って放り投げるのは三つ上の兄がやってあげていた。庭には、理志が放り投げられても安全なように父が砂場を作っていた。

理志が三歳だったある日、兄がいない時に理志がそれをせがんできたから、俺はやることにした。

だが、ぐるぐるしていたものの、手を離すタイミングを間違えて理志がふっ飛んでいつてしまった。落ちた先に陶器の植木鉢があつて、理志は頭をぶつけた。

泣き出した理志の元へ駆け寄ろうとした時、優衣香が庭のフェンス越しにそれを見ていることに気づいた。一瞬にして表情を変えた優衣香は門扉經由ではなく、そのフェンスを乗り越えて理志の元へ駆け寄った。約六十センチのブロック塀の上にあるフェンスを乗り越えて来たのだ。

優衣香は理志を抱き起こして抱きしめた。理志の頭を撫でる優衣香の顔は優しくかった。だが俺に向けられた顔は般若だった。

俺は般若の優衣香が怖くて近寄ることが出来ず、その場で立ち尽くしていると、理志は泣き止んだ。

泣き止んだ理志から離れた優衣香は、般若のまま俺に向かって来た。

幼い時から優衣香と取っ組み合いのケンカになるといつも負けていた。優衣香の方が体格がよかったのだ。俺も父と兄と同じように柔道をするつもりだったが、バットを持つて追いかけて来る優衣香をどうにかしたくて剣道を選んだ。

十歳のその頃は、やっと優衣香の背を超えた頃だった。剣道をして体力もついてきていたから、俺は初めて、向かって来た優衣香を突き飛ばした。

それを理志を探しに来た母が見ていた。

俺と優衣香が取っ組み合いのケンカをしているのは見慣れた風景だったが、俺が初めて優衣香を突き飛ばしたことに驚いて、母は優衣香に駆け寄った。傍らには泣き腫らした

た目をした理志がいる。何が起きたのか察した母は俺に手を上げようとしたが、これまでに一度も手を上げたことがなかった母は躊躇して、手がだめなら肘でと考えたのだから。母は曲げた腕を振り下ろした。

そこに兄が帰って来た。

兄が見たものは、頭を両手で押さえる俺、泣き腫らした目をしている理志、土や葉で汚れている優衣香の着衣を手で払っている母、そして、涙をためて唇を引き結んでいる優衣香だった。

兄も、何が起きたのか察したのだろう。『優衣香ちゃん、大丈夫？』と優しく声をかけると、優衣香は答えた。

「敦志^{あつし}お兄ちゃん！ 私、強くなりたい！」

その後、十歳の優衣香が中学一年生で体格もいい柔道をやっている兄を相手に、打倒敬志をスローガンに特訓を始めた。

母は、『女の子が弱くていい時代は、もうとつくに終わってるわよ』と言っていたが、俺は何も言えなかった。

武闘派女と忍耐男（後編）

俺がキッチンで見つけたものは、マッチョしかいないジムのプロテインとブレNDER
ボトルだった。

相澤が来た時にそれを話したわけではないが、マッチョのジムのチラシがリビング
テーブルに置いてあった気がするという。

俺はもう一度、普通のスポーツクラブではダメなのかと言ったが、優衣香はダメだと。
「マシン使ってるよね、男の人が寄ってきて、話しかけてくるから……」

それは使い方などを教えてあげようとする善意を装った、下心のある男の行動だ。ス
ポーツクラブのスタッフもそういうことには対応はしてくれるが、あくまでも店舗内
でなら、の話だ。敷地外に出てしまったら対処は出来ない。

「女性専用フィットネスジムは？」

「駅の反対側だから面倒で」

——マッチョのジムめ。駅の反対側に出店しろよ。

「マツチヨのジムだつてマツチヨしかないよ？　　男だよ？」

「マツチヨは筋肉の話しかしないよ？」

——でしようね。自分の筋肉と会話してるもんね。

「うーん、でも、どうしてダイエツトしようとしたの？　　何かあったの？」

どうしても原因を言いたくないようだ。それは俺に気を遣っているのがわかる目で、優衣香は俺を見る。

「言わないと、くすぐるよ？」

俺は優衣香のパジャマの裾から手を入れて、タンクトップの裾も引き出して、優衣香の素肌に触れた。

「腹斜筋」

「んふふ……」

それから背中にかけてゆつくりと、指先を動かしていった。

「脊柱起立筋」

「腰痛対策に、ね」

「ふふっ……」

背中を中心に、爪でゆつくりと撫で上げていく。

優衣香はくすぐったいのか、唇を少し噛んで、俺を見る。潤んだ瞳にまた襲いたくな

る衝動に駆られたが、我慢した。だが指先はそのまま、肩甲骨を親指で触った時、優衣香は明らかかな動揺を見せた。

「……………どうしたの？」

「あ……………うん……………」

「なに？　話して」

「……………その肉は取れたでしょ？」

「えっ？」

優衣香は何の話をしているのだろうか。訊ねると、優衣香は小さく息を吐いてから話してくれた。

「敬ちゃんを腕枕した時、寝てる敬ちゃんがずっとそこを揉んで……………胸と勘違いしたのかな、って……………」

——夢で、揉んだ、おっぱいは！　おっぱいじゃなかった！

「えっと……………それを、気に、して……………？」

「うん……………」

——やっぱり俺が原因じゃないか。敬志のバカ！

「優衣ちゃん……………俺は痩せてる優衣ちゃんより——」

「背中の肉を落としたいの」

「どうして？」

「私、肩幅があるから、背中の肉がつくと、すごい貫録が出る」

「貫録」

「貫録」

二人で笑い合ったが、急激な体型の変化は健康によくないと伝えた。だから風邪をひいたのだと指摘すると、優衣香は『ごめんなさい』と言った。

「ああ……優衣ちゃん、怒ってないよ。言い方が悪かったね。ごめんね」

「いいの。ごめんなさい。気をつけるね」

俺は体格のいい優衣香が優衣香だと思っているから、そのままでもいいと思っ
る。

優衣香を見ると、目を伏せて少しだけ、唇を結んでいる。そんな優衣香に申し訳ない
なと思いつながら、背中に添わせた指を動かすと、優衣香が俺の目を見て、また伏せた。

「あの……敬ちゃん、胸、触る？」

「えっ……」

触りたいけど、優衣香が反応したら、俺はもう止められなくなる。でも――。

俺が躊躇している様を見て、優衣香は俺の腕を掴んで、手を体の前まで引つ張った。

手を添えた俺の手を、パジャマの裾から自分の胸に持つていこうとする。

「……じゃあ、優衣ちゃん。感じて、声を出さないでね。我慢出来なくなっちゃうから」

そう言つて、優衣香の胸に触れた。俺の手に、収まるくらいの大きさで、柔らかい。ゆつくりと手を動かすと、手のひらの中で、硬くなつた先端がわかつた。

優衣香が必死に声を出さないようにしている。

優衣香が声を出してしまわぬよう、唇を重ねる。それでも漏れてしまう甘い吐息に、俺は徐々に余裕がなくなつていった。

今なら、止められる——。

「我慢」

「んー」

体調が万全ではない優衣香を、なんとかして宥めて、俺は優衣香に寝るように言つた。

「優衣ちゃん、近々にまた休みを取れるから、その日までに必ず治しておいてね」

優衣香の返事を聞いて、また唇を重ねた。



一月十二日 午前二時三十四分

ビルの隙間を抜ける風は冷たく、スタンドカラーのコートの襟を寄せる加藤奈緒を、隣の本城昇太がちらりと見た。

道幅は狭く、車がすれ違うことは出来ないその道を歩いているのは二人だけだった。加藤は寒そうに身を縮めている。吐く息は白く、宙に浮かんで消える。

「姐さん、本当に来ちゃうんですね……」

「……まあ、仕方ないでしょ」

二人はマンションに戻る途中だが、戻りたくないのか、足取りが重いようだ。

「あんたはさ、何で玲緒奈さんが怖いのか？」

「あー、俺はアレです。松永さんの……あ、お兄さんの方の……」

初めて聞く二人の話に耳を傾けている加藤の表情は、だんだんと優しくなっていた。



同時刻

気づいたら二人とも寝ていたようで、今、ほぼ同時に目が覚めたようだった。

俺が目を開けた時、優衣香は眠たげな目で俺を見ていた。

冷えた空気で満ちているはずの部屋なのに、体の奥底から熱を帯びていくような感覚がある。

優衣香を抱き寄せると、優衣香は俺の肩に腕を回した。押しつけられた柔らかな膨らみから伝わる体温が心地よい。

こんなにも密着しているのに、優衣香の体温を感じているというのに、もつと触れたい、温もりを感じたいと思ってしまう。

そんなことを考えていたら俺は無意識のうちに優衣香を抱きしめる腕に力を込めていたようで、少し苦しうに身を振った優衣香は、潤んだ瞳でこちらを見上げてきた。その表情はどこか艶っぽくて、思わず息を飲んだ。

———したいな。でも……。

「我慢」

「んーっ！」

優衣香だつて、我慢している。体調さえよければ——。

俺は、自分の欲望だけで行動するわけにはいかない。

だが、腕の中にいる優衣香が欲しい。優衣香を全部手に入れたい。優衣香が乱れる姿を見たい。唇で舌で指で、優衣香が望む快樂を与えてやりたい。愛したいけど、壊してしまいたい気もする。そんな矛盾する思考に脳内を支配されながらも、理性を総動員さ

せてなんとか堪えていた。

「多分、腹減ってるから我慢出来ないんだと思う」

「んふっ、そうだね、食欲で満たす？」

「ふふっ……何か食べようか」

「ブロッコリーとささみと卵があるよ」

「でしようね」

プロテインと言わなかっただけ、まだ俺に気を遣っているのだと思えば、その筋肉三点セットでも十分だと思う。



武闘派の優衣香は、打倒敬志をスローガンに兄と特訓する日々で、柔道が面白いと思つたようだった。中学では柔道部に入ろうとしたが、優衣香の両親が必死に止めていた。

特訓の成果が出て、隣に住む同い年の男の子を足払いしている愛娘の姿に、『違う、そうじゃない』と思つたのだろう。

結局、部活はバレーボールを選んだ。

竹刀では、後ろから飛んでくるバレーボールはどうにも出来なかった。

子供の頃は、仲良く遊ぶ時と、理志に関する事でケンカをする時があった。仲良しだったけど、シヨートヘアで男の子みたいだった優衣香に恋をする日が来るとは思わなかった。

十四歳に抱いた恋心を、二十三年も持ち続けるとも思わなかった。

二十三年経って、やっと手に入れた優衣香が、今、俺の腕の中で笑ってる。

——優衣ちゃん的笑容が大好きです。

優衣香がいてくれるから、俺は生きていける。

優衣香が笑顔でいてくれるなら、俺は幸せだ。

——でも、マツチヨシしかないあのジムは、ちよつとな……。

「優衣ちゃん、スポーツをすればいいんじゃない?」

「ん? 格闘技?」

「それだけはやめてって、言ったよね」

「んー」

優衣香と駅前ではったり会った二十歳のあの日。

シヨートヘアになった優衣香に気づかなかったあの日。

優衣香がシヨートヘアになったことがシヨックだったが、それよりも俺は焦ったこと

があつた。

優衣香はチラシを持っていたから。

チラシにあつた文字は、優衣香に倒されて、勝ち誇る優衣香の顔を仰ぎ見た日の記憶を呼び起こすものだったから。

『新オープン！ グレイシー柔術 無料体験！』

——ぼく、女の子は弱くていいと思うんだよ。

幕間 初めて聞く話

一月十二日 午前二時三十四分

降り注ぐような星空が広がっている。

星々の輝きが夜空いっぱい、満天の星空が広がっていた。そんな星空の下で、マンシオンに帰りかけの加藤奈緒と本城昇太は、松永敬志の兄嫁である松永玲緒奈との関係話を話し始めた。



四年前、本城昇太はある事件の合同捜査本部で別の所轄の松永敦志まっながあつしと初めて会った。二人が直接関わることはなかったが、捜査員として顔と名前を双方が覚えていた。

ある日、本城昇太とペアを組む男性捜査員が、過去の事件で関係のあった男に尾行されていることに気づき、捜査本部で相談すると、松永敦志と本城昇太がペアを組むこと

に決まった。

数日後、深夜の繁華街の裏通りを歩いていた二人は、四人の男に襲われた。

松永敦志も本城昇太も柔道有段者ではあるが、全員が刃物を持つていることからケガをせずに全員を捕縛することは無理だった。二人は四人のうち三人を捕縛したが、残り一人は逃走した。

連絡を受けた所轄から緊走のパトカーが到着する頃、逃走したと思われた一人が現れ、本城の背後に歩み寄った。

後に判明したことだが、目的は本城昇太だった。

本城の背後にいる男に気づいた松永敦志は、本城に声をかける間もなく、本城を歩道の植栽に投げた。

突然のことに驚いた本城が揉み合いになっている二人を見ると、松永敦志は顎から耳にかけての切創から血が吹き出していた。

救急要請した本城は、止血をしながら詫び続けた。松永敦志は、『大丈夫だよ』と優しい言葉を本城にかけたという。

その後、自宅療養していた松永敦志の元へ本城がお見舞いに出向いた際に、本城は初めて妻の松永玲緒奈に会った。

事前に松永玲緒奈のことを複数人から話を聞いていた本城は、二人に土下座した。

松永敦志は、『いいんだよ』と優しく言葉をかけたが、松永玲緒奈は手を握り締めて下を向いたままだった。

それを見た松永敦志は、『カミさんが話あるみたいだから席を外すよ』と言って部屋から出ていった。

本城は何が起きたのかわからなかったが、残された松永玲緒奈に再度謝罪をした。

すると、正座していた松永玲緒奈は本城の前へにじり寄り、本城の手を取り、こう言った。

『本城さんがご無事で、なによりです』

本城の目に映る松永玲緒奈は、優しく笑みを浮かべる、美しい女性だった。

本城は事前に聞いていた松永玲緒奈の評判とは全く違うことに拍子抜けしたものの、ひたすら謝罪を続けた。だが、謝罪を止めない本城の姿を見て、『そろそろ止めないと、殴るよ?』と言った。

その言葉がまるで符牒だったかのように、松永敦志が戻ってきた。入れ替わりに松永玲緒奈は部屋を出ていった。

その姿を本城の肩越しに見ていた松永敦志は、ドアが閉じると本城の目を見て、『あれはね、父が殉職した時に、母が言った言葉なんだよ』と、頬を緩ませて言った。

視線を彷徨わせる本城を見た松永敦志は、『あ、殴るよ、じゃない方ね。先に言った方

だよ』と笑った。



「俺、姐さんに殺されてもおかしくないと思ったんですけど……」

「ふふふっ……」

加藤は優しい笑みを浮かべながら、その後の松永玲緒奈のことを本城に話した。

「荒れ狂ってたよ。ふふっ、居酒屋でさ、『本城許さねえ』って言いながら一升瓶ラツパ飲みしてた」

「やっぱり」

「あんたがさ、あの後、どう仕事に取り組んでるのか、私生活はどうなのか、玲緒奈さんは全部見てる」

「えっ……」

「今日の昼から、あんたの真価が問われる。覚悟しなよ」

「うっ……」

「玲緒奈さんね、あんたがクソ警察官になったら、『いつでも命を貰い受ける』って言うてたから」

「ヒイツ!!」

◇◇◇

同時刻

捜査員用のマンションのリビングに、相澤裕典と葉梨将由がいた。

二人は事務処理をしている。

松永玲緒奈が来る前に済ませておかなければならない事務処理が終わらないようだ。

「相澤さん、コーヒー飲みますか？」

「うん、お願い。ありがとう」

キッチンへ行つた葉梨を横目に、パソコンに向かう相澤は大きな欠伸あくびをした。

◇

コーヒーを淹れてリビングに戻って来た葉梨は、相澤はなぜ松永玲緒奈が苦手ではないのか聞いた。相澤は、『多分、松永さんのお父さんに可愛がつてもらったからだと思う』と答えた。

葉梨は初めて聞いた話だったようで、詳細を求めた。

「子供の時、腕を掴まれて車道に放り投げられてね、その時に臨場したのが松永さんのお父さんだったんだよ」

「えっ、そうだったんですか」

「うん、俺はずっと泣いてて、松永さんのお父さんが抱っこしてくれてね、それから署の少年柔道に通うようになって、採用試験の時に松永さんのお父さんみたいな警察官になりたいですって言ったんだよ」

葉梨は二年間だけ相澤と同じ所轄にいたこともあり、付き合いは長いが、初めて聞いた話を楽しそうに聞いていた。

「玲緒奈さんは加藤の指導員で、俺のことはもちろん松永さんのお父さんのこともあるけど、一番は加藤のボディガードとして、俺が言われた通りちゃんとやっていたからだと思う」

相澤はコーヒーを飲みながら話していたからか、葉梨の目が動いたことには気づかなかった。

「ボディガード？」

「そう。加藤は美人だから先輩たちから飲み連れてこいって言われて、加藤は嫌がったけど、俺がいるならいいって言うから、毎回俺はボディガードとして行ってた。あ、今

でもだけどね。ほら、岡島と飲んだ時、葉梨が加藤と初めて会った日もそうだよ」
「そうだったんですか」

「玲緒奈さんは、同業の飲み会には必ず俺と一緒に言っ行ってたから。でも……」
言い淀んだ相澤と葉梨は視線を合わせると、相澤は口元を緩めた。

「一回だけね、玲緒奈さんにもものすごく怒られたことがあった。官舎に帰ったら部屋の前に玲緒奈さんと加藤がいてね、部屋に入れたんだけど、玄関の鍵を締めた瞬間に玲緒奈さんに殴られた。ふふふ」

驚く葉梨に、相澤は続けた。

「玲緒奈さんを止めようとした加藤は蹴られて泣き出すし、俺はポッコボコにされるし、寝てた松永さんが起きてきてさ、玲緒奈さんを必死に止めてた」

「えっ……なんで……怒られたんですか」

「……それは言えない。でも、俺の責任。だから、仕方のないことだった」
その時のことを思い出したのか、相澤は目を伏せた。

「松永さんが、後輩の指導が至らなかつた自分の責任だと言ってね、玲緒奈さんに土下座して場を収めたんだよ。俺より松永さんがポッコボコにされてたけど。でも、松永さんがいなかったら、俺は病院送りになってたと思うよ、ふふふ」

葉梨は何かがあったのか聞きたいのか、相澤の目を探るが、無理だと悟ったようだ。そ

の葉梨の表情の変化を見た相澤は、『加藤は足が速いからね。無事だった、とだけ』と言った。



午前二時五十二分

「暑い」

加藤奈緒と捜査員用マンションへ戻った本城昇太は暖房の効いたリビングに入り、赤い顔をしてそう言った。

相澤も葉梨も本城の言葉に不思議そうにしていると、『加藤さん、歩くの速いんですもん』と言い、後ろにいた加藤は笑っていた。

コートを脱ぐ二人を横目に、相澤は葉梨に話しかけた。

「葉梨、合コンだけど、俺は行かないから代わりに岡島が行くつて。それともうひと——」

その言葉が耳に入った本城は二人を見て、『合コンつか、いいつすね！ 俺も行きたい』と言い、葉梨の隣に座った。

二人の斜向かいに座る相澤の隣に加藤が座り、『玲緒奈さんが来るし、余裕も出来るか

ら息抜きしてきなよ』と本城を見て言った。相澤は加藤をちらりと見て、『相手は四人になっただって。本城を連れて行けば揃うから、ちようどよかった』と続けた。

加藤は相澤のノートパソコンの画面を見ている。

「あんたさ、これ間違ってるよ」

「えっ、どこ？」

ノートパソコンの画面を覗き込む加藤を見ている葉梨は視点が定まらないようで、ゆっくりと息を吸い込み、天井を見上げた。

敵意と希望

午前七時四十六分

優衣香のマンションを出て始発に乗り、着替えを取りに官舎へ寄ってから捜査員用のマンションに戻って来た。

リビングのテーブルでは加藤、相澤、葉梨、本城の四人が事務処理をしている。

コートを脱いでハンガーにかけていると加藤が俺の服を見ていることに気づいた。

「ん？ どうかした？」

「そのTシャツ……」

このTシャツは優衣香が俺に買ってくれたものだ。下に白い長袖Tシャツを着ている。

黄色い看板のマッチョしかいないジムで数量限定販売されたもので、マッチョしかいないジムのロゴはあまり目立たない黒いTシャツだ。ロゴが浮かび上がったデザインでカッコいいから俺はウツキウキだ。

優衣香には部屋着にしろと言われたが、ウツキウキで着て来た。だからこちらを見て
いる加藤にだけ見えるよう、俺は片目を瞑り、小指を立てた。

「んふっ」

「なんだよ、笑うなよ」

「すいま……んふっ」

加藤が笑い出し、他の捜査員も俺を見たが、相澤が俺のTシャツを見て、『あつ』と言っ
た。

相澤は、優衣香がマッチョしかないジムに通っていることを知っていたのだろう
か。相澤が何を見たのか後で聞いてみようと思ったが、想定外のことを言った。

「加藤も同じの持って……」

「んふふふっ……」

「……え、加藤と俺、パールックなの？」

「いえ……違いますよ」

「ん？ 何よっ？」

加藤も相澤も俺の顔つきを見て、昨夜何があったのか察しているのだろう。何も言わ
ないので俺が何度か聞くと、相澤は着ているウインドブレーカーのファスナーを開け
た。

「……ペアルックだ」

「うれしいですね」

相澤は抑揚のない声でそう言うが、元々は加藤のTシャツだと言っていた。

「加藤はなんでこれ持ってるの？」

「買ったからです」

「どこで？」

「ジムです」

——もしかして奈緒ちゃんもマッチョ会員なの？

「マッチョじゃないジムに通ってるの？」

「いけませんか？」

「いけなくないです」

——どうしてぼくのまわりには強い女の子しかないのかな。

「そのジムにいる男性って、ウザい奴がいないんです。筋肉かプロテインの話しかしないので」

——プロテインの話もするんだ。

せっかく優衣香が俺に選んでくれたTシャツは優衣香とペアルックだったのに、相澤ともペアルックになってちよつと悲しいけど、まあ裕くんとならいいかと思っていたら

葉梨が声をかけてきた。

「俺も同じの持ってます」

——なにさ！ マッチョのバカ！ ぼくが何したって言うんだ！

「……じゃあ、みんなでペアルックってことで」

そう言つてそれぞれの顔を見てみると、本城が声をかけてきた。

「俺、前に販売した分を持って、くたびれてきたから部屋着にしています」

——本城昇太、お前がくたびれるがよい。

なんだろうか、この胸にこみ上げてくる感情は。

俺は優衣香からTシャツを貰つてウツキウキだったのに。優衣香とペアルックでウツキウキだったのに。Tシャツに頬ずりして優衣香に若干引かれたけどウツキウキだったのに。

マッチョしかいないジムで売ってるTシャツだから誰かしらと被ることはあるだろう。だが、同僚とここまで被るのは奇跡なのではないだろうか。

「あの、松永さん、ペアルックって言葉、古いですよ」

「えっ、そうなの？」

言い出した加藤以外の三人の顔を見ると目が泳いでいた。知らなかつたようだ。

——君たちは警察官なのに、それじゃダメだと思ふよ？

「今は何て言うの？」

「リンクコーデとかお揃いコーデですね」

また三人の顔を見ると、また目を泳がせていた。知らなかったのだろう。無理もない。

◇

午前八時三十一分

今日は昼過ぎに玲緒奈さんが来るからと、皆溜め込んだ事務処理を必死に終わらせようとしている。

相澤にハンバーガー屋の朝メニュー食いに行こうと誘ったが、事務処理が終わらないからと断られた。

——もう！　裕くんはいつもそうなんだから！

「加藤、一緒に行かねえ？」

「無理です」

「何ですよ？　お前は終わってるだろ？」

「総、仕、上、げ、しなきやいけないので」

「総仕上げ」

「そうです」

気持ちもわからなくはないから加藤と行くのは諦めようと思い、葉梨と本城を見ると、葉梨と目が合った。

「あと五分頂ければ、ご一緒出来ます」

——さすが熊！　ゴリラとは違うね！　つてあれ？

葉梨はノートパソコンで隠すように、俺にハンドサインを送っている。

——話がある、と。なんだろうか。

「うん、待ってるね！」



午前八時五十八分

ハンバーガー屋までの道すがら、葉梨の話聞いていた俺は脳内の妄想カタログのページをめくっていた。まあ、要は現実逃避だ。玲緒奈さんが捜査に加わるからと現実逃避で優衣香に会いに行き、妄想カタログにたくさんページが増えたなとルンルン気分でマンションに戻って来たのに、また現実逃避しなきゃならないのか。相澤が加藤の前

で合コンの話をしたという。

——いいよ、優衣香のおっぱい揉んだから土下座くらいしてやるよ。

「ゴリラめ」

「ただですね、あの……もしかして、相澤さん、俺と加藤さんのことを知ってるんじゃないかと思ひまして……」

——さすが葉梨くんだね！　ぼくもそう思ってる！

「なんで？　何か言われたの？」

「いや、合コンの話をした時に、違和感があったので」

「ふーん」

「加藤さんが言わせたのかとも思いました」

相澤が合コンの話をしたタイミングと、加藤の表情に違和感があったという。二人だけがわかる符牒があるのではとも葉梨は言った。

「今回は二年ぶりだけど、一緒に仕事することもあったから二人だけの符牒もあるよ。それに仲のいい同期だし」

「あの、もしかして、加藤さんの男って、相澤さんなんですか？」

「んなわけねえだろ。相澤の好みってポンコツ野川みたいな小動物だぞ？」

女教師モ

ノに食指は動かねえよ」

——葉梨は俺を試してる。

「葉梨、お前、本当に加藤のこと、好きか？」

「えっ、はい」

おそらく、須藤さん経由で相澤は加藤と葉梨の関係を知ったのだろう。加藤が話したとも考えられるが。

雪の日、電車が止まった影響で相澤は加藤の家に行った。滞在時間は六時間程か。話し合いも出来ただろう。だが俺はその件も含めて、相澤と加藤の関係にもう何も言わないし聞かないと決めた。

もちろん葉梨と加藤の関係も、と言いたい所だが、こっちはそうもいかない。だって俺が二人がデート出来るようにしたから。責任がある。

それに、恋する奈緒ちゃんウツキウツキな姿は微笑ましいから見ていたい。

「お前は秘密を守るか？」

「はい」

俺と葉梨の背丈はあまり変わらない。立っていて目線を下にやらずに話せるのは、今は葉梨だけだ。

返事をした葉梨の目の奥の色を探る。

葉梨は信用出来るだろう。

「相澤と加藤の関係については、否定も肯定もしない」

俺の返事の意味を考えているのだろうか。表情も目も変わらないが、返事をしない。

「葉梨、あの——」

「諦めた方がいいですか？」

それはお前が決めるよ、と言いかけたが、目の奥に不安そうな色を湛える葉梨に、俺は言えなかった。

嫉妬も憎悪も目の奥になく、ただ不安そうにしている。欲しいものを手に入れかけているのに、手放さなくてはならない苦悩は俺にもわかる。辛いだろう。

——加藤のことを、真剣に考えてるんだ。

「葉梨、あのさ……お前は、加藤を待つてやることは、出来るか？　俺は……待つてやって欲しいと、思ってる」

伏せていた目を上げて、俺の目を見た葉梨の目には明るさが戻った。

——どうなるかは知らないよ。

「葉梨、俺は加藤の味方なんだよ。俺は加藤の相手がお前ならいいだろうと思って、時間を作つてやつた。それだけは、覚えておいて」

俺の目を見て、元気に『はい』と言つて頷いた葉梨の口元にエクボが出来て、俺の頬は緩んだ。

——玲緒奈さんは、相澤と加藤をくつつけるために十年以上も奔走してるけどね。
「頑張れよ」

俺は葉梨の肩を叩いて、ハンバーガー屋へまた歩き始めた。

—— 第6章・了 ——

幕間 恋の終わりに

雪が降りしきる中、一時間近く歩いた。

風呂に入って体を温めて、睡眠を取れば雪道を歩いた分の疲れは取れるだろうと思つて、私は相澤をベッドに寝かせようとした。

電気毛布も入れてあり布団は暖かいから。

客用布団は無いから私のベッドで寝かせるしかないと思つたのだが、相澤は嫌がつた。どうしてだろうか。

服を着て髪の毛を乾かして寝室を覗くと相澤はベッドに座っていた。

どうしてそんなに嫌がるのだろうか。電気毛布は強にしてあるから暖かいのに。

◇

「奈緒ちゃんごめん。でもこうでもしなきゃ、奈緒ちゃんは話を聞いてくれないから」

肘を掴まれたと思つたら、ベッドに押し倒されて相澤を見上げるまで一瞬だった。腕も足も動かせない。

ずつと私は、相澤とこの話をすることを拒否していた。

だつて私は、相澤の答えを知りたくなかつたから。

あの日、『ずつと好きだつた』と言つた。

なら今はどうなのかと言えば、葉梨が好きだ。私は葉梨に恋をしている。だからもう私は、相澤に恋をしていないということになるだろう。だけど――。

「奈緒ちゃん、今好きな人がいるの？」

松永さんから聞いたのだろうか。相手が葉梨だとは知らないだろう。その素振りは無いから。だが私に好きな人がいたとして、相澤はどうするのだろうか。

「だとしたら何よ？」

「なら俺は別れるまで待つてる」

「はっ!？」

どういう意味なのだろうか。葉梨と付き合つて別れたら、相澤は私と付き合うと言うことか。ならそれは今だつていいだろう。違うのか。

「だつて……」

相澤は私を、『誰にも渡したくないと思つた』のか。私はいつから相澤のものだったの

だろうか。相澤のものになった記憶は無いのに。どういう意味だ。

「多分、奈緒ちゃんが好きなんだと思う」

「多分って何よ」

そんな不明瞭な気持ちでは困る。

はつきりと言つて欲しい。

「わかんない」

「バカなの？」

——痛い。

相澤が舌打ちして、掴んだ私の手首に力を込めている。

ああ、相澤を怒らせてしまった。目が怒っている。真面目に話してくれているのに、その言葉はさすがに失礼だった。謝らなければ。

「ごめ——」

相澤の唇が私の口を塞いだ。

手首を掴んだ腕の力は少しだけ緩んだが、二の腕にある相澤の腕に押し潰されそう
だ。痛い。

相澤の舌が私の口内に入つて来た。苦しい。

体は相澤が体重をかけている。重い。苦しい。重い。息が出来ない。苦しい。

——鼻ですればいいのか。

そう思つて鼻で息を始めた時、相澤は唇を離した。

相澤を目で追うと、相澤は掴んだ腕も、足も離した。

——今のはキスだった、のか？

あまりにも突然のことだったし、重くて苦しくて重くて何も考えられなかった。

そうか、キスだ。私は相澤とキスをしたんだ。相澤の舌は、私を求めていたんだ。そうか、応えないといけなかったのか。でも——。

「ごめん……でも奈緒ちゃんがいいなら、俺はしたい。でも嫌なら俺はや——」
腕を相澤の首に回して、私は相澤を引き寄せた。

また相澤が私の体の上に来ると苦しいから、私は身をかわ躲して横向きになった。

相澤の首に腕を回したまま横向きになると、相澤は私の背中に腕を回した。

「裕くん、寒いから布団に入ろうよ」

「あ……うん」

起き上がり、一度ベッドから下りて布団に入り直した。セミダブルのベッドは、二人で寝ると狭い。

マットレスの隅っこにいと、相澤は私の体を引き寄せた。隅っこじゃなくとも大丈夫だったのか。相澤は私の肩と腰に腕を回した。相澤の体が密着している。

下はトランクスだけの相澤は、足が冷えていた。つま先が相澤の足に触れた時、すごく冷たかった。

電気毛布は暖かい。

相澤の冷たい足を、電気毛布が当たらない部分を、私は暖めてあげようとして足を相澤のふくらはぎに乗せた。

それから相澤の顔を見ると、相澤は私の足の間に割り入ってきた。そして私の背中はシートに沈められて、相澤は私に覆いかぶさった。

——元に戻った。

苦しいから横向きになったのにどうしてこうなった。

「裕くん……んふっ……ふふふっ」

「奈緒ちゃん、なに？」

「苦しいから……横に……んふっ」

「ああっ！」

相澤はまた横向きになり、『ごめんね』と言って私を強く抱き寄せた。私の下腹部に、熱く張りつめて、硬くなったものが当たっている。

小さくて可愛い女の子が好き相澤が、デカくて可愛げのない女に欲情している。相澤は好きでもない女を抱けるのか。

「裕くん……あの……」

私は熱く張りつめたそれに手を伸ばし、指先が触れた時、相澤は私が言いたかったことを理解したのか、『そうだよ、奈緒ちゃんだからだよ』と言った。

「でも、私を好きかわからないんでしょ？」

「それは……」

——始めたら、終わりがある。

始めなければいいのだ。

この先、仲の良い同期として、無事に退官するその日まで、私は相澤とずっと一緒にいたい。

「今日で、片思いを終わらせる」

「えっ……」

「私は裕くんがずっと好きだった」

「うん」

私がつと、勇気を出して、早く想いを伝えていけば、きつと相澤は私の気持ちに伝えてくれていただろう。でももう、いい。

「十六年、ありがとう」

「はっ!? 十六年!?!」

「そうだよ」

「裕くん、ありがとう」

「えっ、でも……」

「なに？」

「俺は別れるまで待つてるから」

——また元に戻った。

私はどうすればいいのだろうか。海つペリの公園で告白した時は、まだ相澤のことは好きだった。だがもつと前から葉梨に心が揺れ動いていたのは事実だ。そして葉梨とデートして、私は恋を覚えた。

「早く結婚しなよ」

「奈緒ちゃん……」

「片思いは今日で終わる」

「……俺は奈緒ちゃんが好き」

「さつき多分って言ったよ？」

相澤から返事が無い。表情を見ると、唇を噛み締めている。小さく息を吐いてから私の目を見て、また強く抱き寄せた。

「奈緒ちゃんがいいなら、俺はしたい。でも嫌なら俺はやめる」

——また元に戻った。

これはよくあるアレだ。警察官によくあることだ。激務と睡眠不足で正常な判断が出来ず、判断を見誤るアレだ。

私も女だ。相澤は女とこうしてベッドに一緒にいるのだ。相澤は性欲が溜まって、私で処理したいのだろう。

襲わないだけ相澤はまだいい。松永さんよりマシだ。私の同意を得られないのなら相澤は引き下がるだろう。

「わかった。最後に裕くんを抱かれて、私の片思いは終わる。それにする」

私はそう言って、相澤の唇を求めた。

初めて自分から求めたキスに相澤は応えてくれた。

私達は何度も唇を重ねた。

舌がまた、私の口内に入ってきて、私は応えた。でもさつきより、性急さがあつた。舌が狂おしく私を求める。

相澤が唇を離れた時、私の肩を抱いた腕に力が込められて、抱き起こされた。私を抱き寄せている相澤は耳元で囁いた。『我慢出来ない』と。

私の長袖Tシャツと中に着ていたタンクトップを乱暴に脱がして、相澤もTシャツを脱ぎ捨てた。

私はシーツに沈められ、相澤が足の間に割入って、私たちは体が重なった。

「奈緒ちゃん」

私に体重をかけないようにしているのか、相澤が遠くにいる気がする。

相澤に恋人が来ると、小さくて可愛い女の子を抱く相澤を俯瞰したイメージが頭に浮かんで、心が騒いだ。

だが今は、ベッドで私は、相澤の腕に抱かれている。願いが叶ったのだ。私は嬉しい。「奈緒ちゃんのこと、好きだよ」

相澤は私の背中に手を差し入れ、手のひらで私の肌を撫でている。私は、相澤の左上腕を見ていた。

そつと唇を重ねて、耳元から首すじへと唇が這う。

その時、私の背中にある傷に相澤は気づいたのだろう。目の色を変えて私を抱き起こして背中を見た。

「奈緒ちゃん！ もう傷は消えたって言ってたよね？ 残ってるよ!」

私は相澤の左上腕にある傷に唇を這わせた。

私の背中和相澤の左上腕にある切創痕は、私が全て負うはずだった傷を二人で分けたものだ。

「私の中に裕くんはずっといる。裕くんも左腕を見た時、私を思い出してよ」

今にも泣きそうな顔の相澤が愛しくて、相澤の首すじに添わせた指先に力を込めた。「裕くん、抱いて。私を抱いて」

泣きそうな顔のまま、眉根を寄せた相澤は、私を強く抱きしめた。「奈緒ちゃんの嘘つき」と言いながら、唇を重ねる。

「奈緒ちゃん、好き」

その言葉は、欲望が果てた後にも言ったら、信じてあげる。だけど――。
でも、もう、いい。

第7章

姐さん、襲来（前編）

一月十二日 午後一時二十六分

そろそろ、姐さんが来る頃だろうか。

俺はウインドブレーカーを着て、マンションの外廊下に出て姐さんを迎えようと玄関ドアを開けると、廊下の向こうから姐さんが歩いてくるのが見えた。

「お疲れさま。久しぶりだねー、出迎えありがとう」

姐さんはリュックを背負い、トランクを引いて大きな布製のバッグを肩にかけている。俺は『お疲れさまです。寒かったです。さ、中へどうぞ』と言って中へ入ってもらうと、声が出た。

「お疲れさまです！」

加藤奈緒、相澤裕典、葉梨将由、本城昇太、武村雅人の捜査員全員が、廊下で松永玲緒奈を出迎えている。

スリッパに履き替えて靴を揃えた姐さんは俺たちを見てこう言った。

「通れくない？ バカなの？」

幅九十センチ、長さ二メートル七十センチの廊下に五人がいる。狭い廊下のみつちみちで。

「おっしやる通りです、玲緒奈さん」

——姐さん、みんな緊張し過ぎて正常な判断が出来ないんですよ。

リビングへ行くために皆が振り向き、俺はトランクを持って玲緒奈さんの前を歩き出した所で、玲緒奈さんが布製のバッグから何かを取り出した。

そして『ピツ』という呑気な音がして、頭に衝撃を感じた。痛くはないが、なぜそんなものを玲緒奈さんが持っているのかを考えながら振り向くと、ピコピコハンマーを手に持って上品な笑みを浮かべる玲緒奈さんは口を開いた。

「ほら、今、いろいろうるさいからね。パワハラとか。だからピコピコハンマーで叩けばいいかと思って」

——姐さんは、『叩かない』という選択をしないんですね。

「ええ、そうですね。おっしやる通りです……さ、リビングへどうぞ」

振り向くと、ピコピコハンマーに怯える五人の警察官がいた。

——警察官も人の子だもんね。怖いものくらい、あるよね。



リビングのドアの正面には大きなテーブルがある。これは長机を三つ合わせて大きなテーブルのようにしていた。

左手のキッチンに接するダイニング部分には座卓と座布団がある。テーブルに書類がある状態の場合は食事は座卓で食べるようにしているが、そこはすごく、昭和な雰囲気のある一角となっている。みかんが乗っている鎌倉彫の菓子盆は俺が持ってきた。

「座卓？　なんであるの？」

「ああ、これは……書類に味噌汁ぶちまけた奴がいましたね、それで食事は座卓で取るようにしているんですよ」

「なんで？」

—— 声音が変わった。ぼくこわい。

玲緒奈さんの目つきは変わらずだが、声が低く冷たい。捜査員からの『松永め、余計なことを』と思っているだろうと思料される視線が突き刺さる。

普通ならそうだ。この場面ならミスを告げ口したと、松永は余計なことを言った、

バカなのかと誰もが思うだろうが、今回に関しては、それは違う。

「相澤です」

そう言うのと、狂犬の親玉の玲緒奈さんは途端に『優しい女の人』になり、声音も変わった。

「そつかあー、裕ゆうくんがこぼしちやつたんだ。もー！　ちゃんとみんなにごめんなさいしたの？」

「はい！　　しました！」

——姐さん、葉梨と本城がドン引きしてますよ。

葉梨と本城は、玲緒奈さんが狂犬加藤の産みの親だと知っているが、相澤を溺愛する姿は初めて見る。だがそれよりも、ただの『優しい女の人』を加藤が受け継いでいないことに驚いたようだ。二人は加藤を見ていた。

——奈緒ちゃんとはつちり。

椅子に座った玲緒奈さんは左に相澤を侍らせた。右には武村雅人が座ろうとしている。

——武村はチャレンジヤー！　　すごいよ雅人さん！

玲緒奈さんの武村を見る目は優しい。まだ武村の素行は知らないのだろうか。俺が武村にやったことの原因は玲緒奈さんに言っていないが、知らないはずがない。だが、

優しい目をしているから、玲緒奈さんには問題ないのだろう。

全員が席に着いた時、武村が玲緒奈さんにコーヒを淹れると伝え、『ありがとう』と言うと、加藤も席を立った。その姿を見て、テーブルに置いたピコピコハンマーを手に取った玲緒奈さんは本城の頭を叩いた。

「痛っ！　俺ですかつ!？」

「そうよ？」

「でも玲緒奈さん……私がやらないと」

「どうして？」

「えっと……女だから……」

その言葉に眉根を寄せた玲緒奈さんは加藤にキレた。さすが狂犬の親玉だ。思わず顔を伏せた。

玲緒奈さんの目つきが変わるのは狂犬メーターが振り切れる寸前のサインだ。叱責に段階があるのは一種のアンガーマネジメントのようだが、結局はピコピコハンマーで引っ叩くからアンガーをマネジメント出来ていないじゃないかと思う。

「今時さ、男だから女だからなんて関係ないでしょ。武村の次に若いのは本城。あんたさ、後輩の立場も考えないで何してんの」

「あつ……はい、そうです、申し訳ございませんでした」

「本城！」

「はいっ!!」

「加藤がやるから関係ないって思ったの？ バカなの？」

「申し訳ございませんでした！」

三十歳の本城は反社にしか見えない見た目をしていて、リビングにいと組事務所にしか思えなくなるが、玲緒奈さんに説教されている姿は下っ端構成員にしか見えない。

玲緒奈さんはピコピコハンマーを置くと隣の相澤に向き、『裕くんはちゃんとしてるもんね、偉いね』と言い、『はいー』と元氣よく答える相澤に優しく微笑んでいた。

俺はその相澤の姿を見て、十七歳の時に玲緒奈さんに初めて会った時のことを思い出した。



俺の兄が二十歳の時、玲緒奈さんと結婚を前提としたお付き合いをしていると聞いた両親は、初めて玲緒奈さんを家に招いた。

その頃の俺にとって玲緒奈さんは綺麗なお姉さんだった。

当時俺は十七歳で、弟の理志は十歳だった。

綺麗なお姉さんに浮かれる理志を隣に座らせ、理志の話を一生懸命聞いている姿は今でも記憶に残っている。俺も話したかったが、理志がずっと話しているから話せなかった。だが玲緒奈さんはそれがわかっていて、理志の話を俺も話に加わることが出来るように誘導していた。優しいお姉さんだった。

当時、テレビCMで『綺麗なお姉さんは好きですか』がキャッチコピーのCMがあった。

理志とテレビを見ている時にそれが流れると、俺たち二人で頷いて、理志は『うん！大好き！』と大声で言い、母は笑っていた。

優衣香とは高校が別だった。公立高校に進むなら同じ高校のはずだったが、優衣香はバレーボールを続けたいからと私立の女子高に進んだ。

優衣香とは家が隣だから学校の行き帰りに会うこともあったし、休日は理志の勉強を見にうちに来ることもあった。

優衣香のことはもちろんずっと好きだったが、十七歳の俺は玲緒奈さんが綺麗なお姉さんで憧れた。それは優衣香への恋心とは違う感情だった。だが、それは警察学校に入るまでの青春の思い出となる。

俺が警察学校に入る直前に兄と玲緒奈さんは結婚したが、警察官として会った俺に玲緒奈さんは厳しかった。豹変した玲緒奈さんに驚いたが、兄は『これが標準だよ』と言っ

ていた。

『警察官になったってことは、私の後輩ってこと。だから甘やかさないからね』

そう言う玲緒奈さんに、挨拶の聲が小さいと手の甲で頬を叩かれた。俺は青春を返してくれと言いたかったが、言えなかった。

警察官にならなかった弟の理志のことは、今でも玲緒奈さんは溺愛している。

狂犬加藤も狂犬の親玉も知らない理志は、世界で一番幸せ者だと思う。



武村と本城がコーヒーを全員分仕度してリビングへ戻って来ると、玲緒奈さんはコーヒーを置く順番、砂糖とミルクの個人の好みの数を淀みなく各々の前に置いていく武村と本城に口元を緩めていた。

二人が着席すると『さて、本題に入りましょうか』と言い、打ち合わせが始まった。

姐さん、襲来（後編）

午後二時十四分

打ち合わせであった玲緒奈さんからの連絡事項は、休みが増えることと武村と交代でポンコツ野川が戻って来ることだった。

玲緒奈さんは、背の高い自分と加藤は俺と葉梨とでペアを組み、ポンコツ野川は相澤と本城とでペアを組み、加藤が意見を言った。

「その日の状況次第でペアを変えればいいと思います」

「でもさ、加藤はハイヒール履きたいって小猿に言ったんでしょ？　そう聞いてるよ？」

「その時はそうだっただけです。私の個人的な都合で変えて頂くのは申し訳ないと思います」

「うーん……」

——小猿なんだ。チンパンジーじゃなくて。

確かに背の高い俺と葉梨なら、同じく背の高い女性の方がバランスが取れる。ポンコツ野川のように身長が低いと真横にいるのに視界から消えてびっくりすることもあるし、何よりも歩幅が合わない。

だが、ハイヒールを履く加藤とも歩幅が合わない時もある。それにハイヒールだと機動力も落ちる。その指摘に、以前加藤は『練習します』と答えていた。

相澤は雪の日に加藤の家に行ったが、横長のリビングダイニングがトレーニングルームだったと言っていた。サンドバッグもあったという。

家具は一人掛けソファ一つと小さいテーブルと大きなテレビしかなく、床にはケトルベルやダンベルが転がっていて、トレッドミルの横に高さの違うハイヒールと、十センチ以上あるピンヒールもあったそうだ。懸垂マシンにはストッキングが掛けてあり、目の遣り場に困ったと言っていた。

努力の方向性が合つても合つてないとも俺が言うことではないが、努力しているのなら、実地で結果を出す必要もあるだろう。

それに、隣の葉梨がテーブルの下でハンドサインを送っている。

気が重い、俺は玲緒奈さんに意見しなくてはならないようだ。

「私からも、よろしいでしょうか」

「んっ? なにー?」

「背の低い野川だと、私も葉梨も困ります」

「だよね」

「はい。視界から消えますし、走った時に野川は追い付けません」

「だよねー」

加藤の顔を見るが、表情の変化はない。だが、相澤の目が少しだけ、変わった。

その相澤の顔を葉梨は見ていたが、玲緒奈さんに顔を向ける。玲緒奈さんは『暑い』と言い、着ていたウインドブレーカーを脱ぎようとしていた。

「少し、換気しましょう」

俺はそう言つて席を立ち、加藤も席を立つてバルコニーに面した窓とリビングのドアを各々が開けたが、相澤が『あつ』と言い、何かと思つて相澤を見ると、同じ視界にいる加藤が今にも倒れそうになっているのも見えた。俺はリビングのドア近くにいた加藤に走り寄つて体を支えた。

「玲緒奈さんと俺、お揃いコーデですね！」

「あー！ ホントだねー！」

加藤を支えながら玲緒奈さんと相澤を見ると、黄色い看板のマッチョしかいないジムで売っているあのTシャツを、玲緒奈さんも着ていた。

二人は笑顔で顔を見合わせている。

「ヤバいです、松永さん……」

今にも消え入りそうな声で加藤が俺を呼んだ。何かと思つて加藤を見たが、相澤の声に俺も倒れそうになった。

「これは加藤がお下がりでくれたんです！」

「……お下がり？」

顔面蒼白となつた加藤は、『マジもう無理』と言つて、目を閉じた。

加藤は雪の日に相澤を風呂に入らせたが、下着は仕方ないにせよ、汗ばんでいる肌着を風呂上がりに着せるのもどうかと思ひ、オーバーサイズで気に入っていたマツチョシかないジムの黒いTシャツを相澤にあげた。それは襟ぐりがピロンピロンになつていたため、加藤は部屋着にしていたという。

だが相澤は、カッコいいからと一軍として着ている。裕くんはそういうのをあんまり気にしないタイプだ。

「襟ぐりがデロンデロンじゃない、ダメよ、裕くん」

「そうですか？」

玲緒奈さんが加藤に向き直るのが早かつたのか、加藤の口が開くのが早かつたのか定かではないが、加藤の新人ばりの大きな声がりピングに響き渡つた。

「隣の駅前にマツチョシしかないジムがあります！ 私、今から買ってきます！」

加藤がコートを着てカバンを持ち、玄関を出ていくまで五秒もかからなかった。玲緒奈さんと俺以外の捜査員は呆気にとられている。

——優衣ちゃんの言う通り、部屋着にすればよかった。

俺はウインドブレーカーのファスナーを一番上までそっと上げた。

◇

午後二時四十分

打ち合わせが終わり、相澤、本城、武村の三人は昼食を取りに外出している。

捜査員用のマンションのリビングにいるのは俺と葉梨で、玲緒奈さんは女性捜査員用の仮眠室で荷物を解いている。加藤はまだ帰って来ない。多分、石川町駅に行つて電車に乗るより早いからとマッチョしかいないジムまで走つて行つたと思う。

「姐さん、昔は容赦なく引つ叩いてたけど、もうアラフォーだし丸くなったのかな」

「えっと……松永さんはご存知ないんですか？」

「何を？」

「玲緒奈さんが手を上げなくなった理由です」

「三人殴つたんだろ？ 詳細は知らないけど」

葉梨が話し始めた玲緒奈さんに関わることは四年前に起きたことで、優衣香の実家の事件が起きた後だった。俺はその時、情報を一切遮断されていて、何も知らなかった。

玲緒奈さんの件はかなり問題になったが、直後に兄が本城を庇って公務中に怪我を負ったことで有耶無耶になった。というより、それで許された面もある。

そこに俺が署で暴れて怪我人が出たことも重なり、玲緒奈さんの件は完全に無かったことになった。

玲緒奈さんがしでかしたということのは、葉梨に関わることだった。

玲緒奈さんとペアを組んでいた葉梨は、その日寝坊した。葉梨は待ち合わせ場所に八分遅れたが、玲緒奈さんが笑顔で手を大きく振っていたことで葉梨は油断し、手を上げた玲緒奈さんを躲すことが出来ずに鼻にグーパンを食らった。

人はここまで冷めた目を出来るのかと葉梨は思ったという。

一般的に、女性が被害者で男性が加害者だと周囲の人は助けに行くか通報をするが、これが反対だとそうでもない。

だが、通行人が近くの交番に『男性が殴られて血が出ている』とだけ言い、交番から警察官が走ってきた。

彼らが見たものは、仁王立ちする背の高い女と、その女に圧倒されて何も出来ないでいる鼻血が噴き出したままの体格のいい男だった。

彼らは二人と面識もなく、運が悪いのか、玲緒奈さんに声をかけた方は対応が悪いタイプの警察官で、SNSや動画サイトで全世界に晒されるタイプの警察官だった。

そこで手帳を見せれば済んだはずなのに、玲緒奈さんはその警察官を葉梨と同じようにグーパンした。

それを見ていたペアの警察官は対応が丁寧なタイプだったようだが、玲緒奈さんはそれいつもついでにグーパンした。連帯責任だったらしい。

高身長で体格のいい葉梨と、制服警察官二人は鼻血を出していて、三人を仁王立ちで睨みつける玲緒奈さんの元に、応援の制服警察官も緊走のパトカーも臨場し、大騒ぎとなった。

後から走って臨場した制服は玲緒奈さんと葉梨に面識があり、対応が悪いタイプの警察官が何かしでかしてグーパンされた上に、残り二人はついでにやられたのだと思い、玲緒奈さんの話を聞かずに制服警察官の頭を下げさせたという。

「なんだその地獄絵図は」

「俺のせいです」

「まあ、そうだけど……」

その後、玲緒奈さんは副署長の前で正座して、『もうグーパンしません』と誓ったという。

四年経った今はピコピコハンマーが活躍中だ。

「パワハラで訴えられればいいのに」

「ちよっ!! 義理のお姉さんですよ!」?

「パワハラがなんだって?」

「聞こえてましたか」

——やべえな。気配を全く感じなかった。

「地獄絵図も」

「あらやだ」

テーブルにあるピコピコハンマーを手に取った玲緒奈さんに俺は頭を叩かれた。

「敬志は本当に知らなかったの?」

「はい。初めて聞きました」

「あなたの情報源、構築し直した方がいいんじゃないの?」

——姐さん、この件はみんな気を遣ったんだと思います。

葉梨は玲緒奈さんの希望で冷蔵庫に冷たい飲み物を取りに行き、戻って来たところで

玲緒奈さんは『二人に話がある』と言った。

「野川が相澤を好きなのは二人とも知ってるよね?」

俺も葉梨も直接彼女から聞いたわけではないが、野川を見ていれば相澤が好きなこと

は明らかだった。

「あの子さ、私としては裕くんがいいかなって思うのよ」

——加藤とくつつけるのは止めたのかよ。

「あの子、私を利用しようとしてるんだけど、それがね、やり方が上手いんだよね。あの子、出世するわ」

相澤は松永家にとって、血縁関係は無いが親戚の子のようなものだ。俺は弟だと思っ
ているし、父を慕って警察官を志望した相澤は、父亡き今、松永家にとっては宝物でも
ある。

だが、相澤は若干ポンコツだ。

仕事は俺が補えばいいし、私生活は加藤が補えばいいと俺と玲緒奈さんは思っていた
が、玲緒奈さんがポンコツ野川を推してきた。

ポンコツ野川はポンコツだが、成長の余地はある。どちらかというと出世させた方が
いいと思って、俺は彼女にそう言った。それは玲緒奈さんも同じ考えなようだ。

「ねえ、葉梨」

「はい」

「加藤はもう三十四歳だし、あんたがいいなら早く結婚してあげてよ」

「はっ!?!」

——なんで知ってるんだよ。

「敬志が二人をくつつけたんでしょ？」

「……はい。そうです」

「よくやったね、褒めてあげる」

玲緒奈さんは上品な笑みを浮かべて、『じゃ、相澤と野川の件、よろしくね』と言った。

そこに昼飯から三人が帰って来た。

「玲緒奈さんもお昼、ご一緒に」

「いいねー」

「葉梨、行こう」

「はいー」

玲緒奈さんは立ち上がり、帰って来た三人を出迎えて、それぞれに笑顔で声をかけていた。

服装、髪型、髪と肌の調子、顔つき、目線、声の質を観察して、捜査員の心と体のコンディションを判断している。それを元に各人へ適切な対応をしていた。

そこにいる微笑む玲緒奈さんは優しい女の人——。

玲緒奈さんは、加藤が後輩を思い遣れるようになるには相澤ではダメだと見切りを付けたのだろう。そして、相手が葉梨なら加藤はそうなる、と見込んだのだろう。

——葉梨、頑張れよ。

俺は、加藤から食らう裏拳や手の甲でフルスイングがピコピコハンマーで済むのなら、二人を全力で応援しようと思った。

幕間 始まった二人（前編）

一月十三日 午後九時四十七分

「もしもし、葉梨です」

「はい」

「今から会えませんか？ 急で——」

「なんで？」

「あの、謝りたくて」

「なにを？」

「ごっつ……合コンです」

「気にしてないよ」

「でも……加藤さん、謝りたいです。直接、謝りたいんです」



午後十時五十二分

「いらっしやい」

合コンを終えた葉梨は私の家にやって来た。

ネイビーのフルジップパーカーに白いヘンリーネックのTシャツで、黒いストレートパンツを履いている。

多分、駅から走って来たのだと思う。呼吸は正常だが、香水が強く香る。

少し顔が赤くて酒臭い葉梨は、私がワンルームマンションに住んでいるのだと思っていたのだろうが、ファミリー向けマンションに住んでいることに驚いているようだった。

「夜遅くに本当にすみません」

「ああ、いいの。会いたって言ったのは私だし」

リビングに入ると、葉梨は相澤と同じ反応をした。

そりやそうだ。リビングがトレーニングルームで、家具は来客を想定していないのだ。驚くだろう。

「私らしいでしょ？」 ふふっ

冷蔵庫から冷えたミネラルウォーターを取り、葉梨に渡し、葉梨を一人掛けソファに

座らせた。

私はソファに一番近いエアロバイクに跨って話を聞くことにしたが、葉梨がそれを見て笑い始めた。

「インクラインベンチはあっちで遠いし、仕方くない？」

「そうですね、ふふっ」

「ふふっ……」

葉梨は冷たいミネラルウォーターをたつぷりと口に含んだ。喉が上下する様を見て、私の口元は緩んだ。葉梨が来てくれたことが嬉しい。

私はエアロバイクを下りて、葉梨の前に行った。

私を見上げる葉梨は立ち上がりそうとしたが、それを制して葉梨の左脚に座り、腕を首に回した。

「話を聞く」

私の行動に呆気にとられていた葉梨だったが、合コンは先輩の誘いで断れなかったと謝罪した。葉梨は私の体に触れない。腕は肘掛けにある。

「来た理由は？」

「えっと、お持ち帰りしてない証明です」

「ふふっ、女の子が外で待ってるかも知れないよね？」

「証明出来くない？」

葉梨の目は動揺していた。

言葉足らずだったのだろうか。朝までずっと一緒にいたいと言いたかったのだが、伝わっただろうか。

私は葉梨の首に回した腕に力を込めて、引き寄せた耳元で囁いた。

「会いたかった」

そう言つて、耳朶にキスをした。

葉梨の汗ばむ肌の匂いと混ざり合う香水の香りに思わず目を伏せてしまう。

「俺もです。でも……」

「ん？」

「俺で、いいんですか？」

「ん？」

「俺で……あの……」

葉梨は、私と相澤のことを知っている。合コンの話が相澤がした時、目つきが変わった。多分、松永さんが何かを言ったのだろう。

相澤のことを正直に話してもいいと思うが、言わない方がいいだろう。あの怖い目は、見たくない。

「葉梨こそ、私でいいの？」

私は肘掛けに置かれた葉梨の右腕に手を伸ばして、私の腰に添わせるように腕を取った。

葉梨は腕から私に目線を動かして、私を見た。

「葉梨」

「あの、俺でいいんですか？」

——元に戻った。

「葉梨は私でいいの？」

「俺でいいんですか？」

「……葉梨は私でいいの？」

「いいです。加藤さんがいいんです」

その言葉を聞いて、私は葉梨の額にキスをした。

◇

葉梨に風呂に入るように言い、その間に私は葉梨が着れるような服を探した。

相澤に着せたTシャツは襟ぐりがヨレヨレになっていたのであげてもよかつたが、相澤より体格のいい葉梨が着れるような服は無い。困った。

葉梨は長袖Ｔシャツと黒いストレートパンツだから、上はそのＴシャツだけでいいだろう。布団は電気毛布を入れてあるし、体が冷えないうちに布団に入れば大丈夫だ。そう考えていると、葉梨が風呂から出た音がした。

私は洗面所のドアの前に行き、ノックして声をかけた。

すぐにドアは開いたが、体を拭かぬままバスタオルを腰に巻いただけの葉梨が目の前にいた。

「……えっと、体を拭いて髪の毛乾かして、寝室へ来てよ」

閉じられたドアの前で、私は動けなくなった。

体格がいいとは思っていたが、あんなに鍛えているとは思わなかった。葉梨は脂肪が乗っている体型なのだと思っていたが違っていった。

全裸の松永さんを見たことはあるが、葉梨は松永さんと似たようなものだ。服を着ていると背が高く痩せているだけと思わせて、実は均整の取れた美しい筋肉質な体。

葉梨の方が体脂肪が多いが、トレーニングを欠かさずしている体だ。歩き方が柔道ではないとは思っていたが、葉梨は何をしているのだろうか。

松永さんが自重筋トレやドラゴンフラッグをしている姿はよく見かけるし、手と足の力だけで廊下の壁を伝って天井にへばり付いている姿には、『バカなのかな』と思っているが、葉梨は筋トレをいつやっているのだろうか。まあ仮眠室でやっているのだろうか。そ

う言えば葉梨もマッチョしかないジムのTシャツを持っていてと言っていた。ビジター会員だろうか。それなら今度一緒にトレーニングへ行け——。

「あつ……あの、加藤さん、ドライヤーってどこですか？」

「えつ、あ……ごめんね」

ドアを開けて私がまだいることに驚いた葉梨は、黒のボクサーパンツを履いただけだった。

下半身の筋トレもちゃんとやっている。

こんなにもいい体をしているとは思わなかった。

洗面台の下からドライヤーを取り出して、葉梨に渡したが、見上げる葉梨の体に目が眩んだ。

——私は何やってるんだろうか。

私の目線に少し顔を傾げる葉梨に寝室の場所を教え、私は洗面所を出た。



寝室は六畳で、三畳のウォークインクローゼットがある。家具は部屋のやや奥にセミダブルベッドがあり、ナイトテーブルが一つだけだ。

ベッドに腰かけて葉梨を待つていると、葉梨がやって来た。仄暗いランプに照らされる葉梨は、身の置き場に悩んでいるようだった。

ヘンリーネックの白い長袖Tシャツにボクサーパンツの葉梨の大腿四頭筋はよく鍛えられている。

私は立ち上がり、掛布団を捲つて中に入るように言った。私の目を見て何か言いたそうにしているが、『ほら』と言うと、葉梨は素直に布団に入った。

「もつと奥に行つてよ」

「あつ、すみません」

葉梨が奥に行く前に私も布団に入り、まだ奥に行こうとする葉梨の腰を掴んで止めた。

葉梨はこの後、私をどうするつもりだろうか。

私が誘えば応じるだろうが、葉梨からは私を口説こうとする気配が一切無い。

「葉梨、今日は疲れたでしょ？　もう寝なよ」

葉梨は目張り気配りを欠かさない男だ。合コンでもそうだろう。もちろん女がやることを横取りなどしない。率先して盛り付けやドリンクのオーダーなどを意図的にやろうとする女、自然と出来る女、やりたいけどタイミングを逃している女を見分けて、過不足無いように彼女たちが思い通りに出来るようにお膳立てするのが葉梨だ。

おそらくだが、今回の合コンは意図的にやろうとする女が多かったのだろう。葉梨は少し酔いすぎている。

警察官という職業が目当ての合コンによくあるパターンだ。

だが、熊とゴリラのハイブリッドの間宮さんに、反社の本城、チンピラの岡島、そして熊の葉梨だ。濃すぎるだろう。私にとっては日常の景色だが、カタギの女の子たちは怖くなかったのだろうか。

「合コン。疲れたでしょ?」

「ああ、まあ……」

葉梨は仰向けで私の腕が葉梨のお腹に乗っているが、葉梨は腕を自分の体に添わせたままで、こちらを向くこともしない。

「あの、本当にすみませんでした」

「さつき何度も謝ったでしょ」

「はい……でも……」

私は葉梨が合コンに行ったことを何とも思っていない。上下関係が厳しい警察組織だ。先輩に言われたらノーとは言えないのだから、葉梨が謝ることではない。

「じゃあどうする?」

「えっ」

こちらを向いた葉梨はランプの灯りに照らされている。不安そうな目で私を見ていた。

「ねえ、キスして」

その言葉で一層不安げな目をする葉梨に、お腹に乗せた腕を顔に動かした。耳元に添わせた指先に力を込めて、私は目を閉じた。

葉梨は横向きになり、私の体の向こうのシートに手を置いて、唇を重ねた。

——それだけ？

目を開けると、まだ不安そうな目で私を見ていた。

なぜだろうか。私はもう一度、耳元に添わせた指先に力を込めて、ねだった。

今度は長く唇を重ねているが、葉梨はそれ以上のことをしない。

私は舌で葉梨の唇をなぞった。その時、私の体の向こうに置いた葉梨の手が動いた。だが背中に触れようとして、躊躇っている。

少しだけ開いた葉梨の口に、私は舌の先をそつと入れた。歯列をなぞっても葉梨は応えない。

葉梨と目が合ったままだった時、葉梨は私の背中を指先で触れた。その指先が下へ向かっている。

私は長袖のTシャツの下にブラトップを着ている。Tシャツの裾を捉えた指先は、中

へ入り背中を撫ぜ上げてゆく。

それがくすぐったくて、唇を離してしまった。

「んふっ……くすぐりたい」

私の背中に添わせた葉梨の指先は肩甲骨の下で止まったままだ。葉梨を見ると、もう不安そうな目はしていないが、ただ、私を見ているだけだった。

幕間 始まった二人（後編）

どうして何もしないのだろう。

もしかして、私がキスしたいと言ったから、キスだけなのか。

「葉梨」

「はい」

「したい？」

「……はい、したいです、けど……」

やっぱり何か遠慮している。それは何だろうか。

葉梨は私の背中に添寄せた手をTシャツから出して、体の向こうに置いた。葉梨の二の腕が微かに私の体に触れているだけで、私たちの間には隙間がある。

葉梨は『加藤さん』と呼び、見上げると困った顔をしていた。

「今日は、合コンの件でお詫びに来ました。だから、あの、しちやいけなと思って……」
葉梨はどこまで真面目なんだろうか。

謝罪は受けたし気にしていないとも言った。そもそも気にしていないのだから許すも何もないのだが、許されていないから何も出来ないという。

「そっか。わかった」

私はそう言つて、葉梨の腕の中で反転した。

葉梨の腕を掴んで胸に押し付けて、『寒いからくつついてよ』と言うと、葉梨は言われた通りに私に体を寄せた。

「じゃあ、今日は何もしない」

「はい。あの、すみませんでした」

「うん」

葉梨は下になった腕で掛布団に手をかけて、私の正面に隙間が出来ないようにした。その腕をどうするのかと思つていたら、葉梨も困つていたようだ。

「葉梨、腕枕して」

「あつ、はい」

葉梨は腕枕をして、また掛布団に隙間が出来ないように引き寄せた。

私の両手は葉梨の腕を胸に押し付けたままだ。

葉梨はその上から私の肩を抱いた。

私はふと思ひ立ち、葉梨の腕を上につまみ張つた。

葉梨の手を顔の前にやり、手のひらを眺める。

大きくて、ゴツゴツした男の手だ。

中指にペンだこがあると気づいて、それにそっと口づけると、葉梨の体が強張った。

「なに？」

「……びつくりしただけです」

「そう」

私は何だかそれが面白くて、中指のペンだこを舌先で舐めた。私の肩を抱く葉梨の手に、少しだけ力が入った。

——葉梨はどこまで我慢出来るのだろうか。

そんなことを考えていたら口元が緩んだ。

ペンだこをまた舌先で舐めて、そのまま中指を付け根までゆつくりと唇を這わせた。

左手で小指と薬指を、右手で親指と人差し指を包んで、中指の付け根に唇を這わせる。

舌先で中指を指先までゆつくり舐めていると、葉梨が少しだけ私の背中から体を離れた。

「何で離れるの」

「いや、あの……」

理由は言わなくてもわかる。私を抱く肩だって、さつきより強く掴んでいる。

「寒い」

「……はっ」

葉梨は体をまた寄せた。

私の下腿に、当たっている。

——葉梨はどこまでしたら、我慢出来なくなるのだろうか。

試してみよう、そう考えて、私は舌を出した。

中指の根元から舌を大きく動かして、唇も這わして指先まで舐めた。

何度も何度も、指先へと唇と舌で往復させる。

葉梨はたまに呼吸を止めているのか、唇を噛んでいるのか、たまに大きく息を吐いている。

葉梨は私の後頭部に顔を埋めた。

私の首すじに、髪の毛越しに、葉梨の熱い吐息がかかる。

その吐息に私も思わず息が詰まりそうになった。

それでも葉梨は何もしないでいる。

でも、下腿に当たると硬く熱く張りつめたものは熱量を増して、押しつけられていた。

「もう、やめた方がいい？」

「うっ……お任せします」

「ふふっ……何それ」

私は葉梨の中指の指先だけ、唇で包んだ。ゆっくり手を動かして、唇で葉梨の中指の先を味わった。

口内で、葉梨の指先を優しく舌で包む。舌で指を根元まで舐めるが、葉梨の長い指は奥まで入れると苦しい。でも、私は葉梨の全てが欲しい。

残りの指を包んだ両手から力を抜いて、葉梨が自ら指を動かすように誘導すると、葉梨は指を動かした。

ゆっくりと、抜き差しして、私は舌で受ける。

唾液を飲み込むと、葉梨は息を止める。

葉梨が漏らす吐息に私も我慢しなくてはならないのかと、『今日は何もしない』と言つてしまったことを後悔した。

◇

葉梨の、下腿に当たる熱く張りつめたものに触れたくて、手を伸ばした。だが、葉梨は私の体に腰を強く押し付けて、触れさせないようにする。それを横目で見てみると、葉梨は耳に唇をつけた。

吐息混じりの、優しい声音。でも、男の声だった。二人きりの時にしか聴けない葉梨の声——。

「奈緒は、『今日は何もしない』って言ったよね」
背筋がぞわりとした。

葉梨は私の下肢に足をかけ、私の口内にある指を抜き差しして、少しずつスピードを早めていった。

耳元に寄せた葉梨の唇は首すじを這っている。

肩を抱く腕も力を込められて、私は苦しくて、葉梨の腕を掴んで、声を漏らすと、また葉梨は耳元で囁いた。

「前言撤回、する?」

そう言うと、葉梨は指を口から抜いた。

——形勢逆転だ。

「奈緒、どうする?」

どうしよう。したい。したいけど、葉梨の言葉が——。

私は葉梨に向き直り、葉梨を見上げた。

「バカなの?」

「んふっ……申し訳ございません」

「…………ふっ」

葉梨は私を強く抱きしめて、足も引き寄せた。

見上げる葉梨は笑っている。

だが、私を見て、笑顔を消した。

どうしたのかと思っていると、『奈緒』と呼んだ。

「次は、俺の番だから、ね」

そう言つて、口元を緩めた。

ああ、それは次は私がされる番、ということか。

どんなことをされるのだろうか。考えていたら恥ずかしくて目を伏せてしまったが、

また葉梨が私の名を呼んだ。

目を上げると、葉梨は不安そうな目で私を見ていた。

「どうしたの?」

「あの……次は、ありますか?」

「はっ!」

「あの、俺は加藤さんが好きです。でも、加藤さんはどうなのかと……」

そうか、私はきちんと言葉にして気持ちを伝えていなかった。だから葉梨は不安なのか。悪いことをしてしまった。雑音が入る上に、私の気持ちがわからないのなら、不安

で堪らなかつただろう。

「葉梨、私は葉梨が好きだよ」

言えた。私はちやんと言えた。好きな人に好きだと言えた。

それが嬉しくて、私にも出来るのだと嬉しくて、笑顔で葉梨を見上げた。

葉梨も嬉しそうに笑っていた。

葉梨は笑うとエクボが出来るのか。知らなかつた。

私はエクボに手を伸ばした。

「エクボが出来るんだね」

「加藤さんも。左に出来る」

そう言つて葉梨は私のエクボにキスをした。私も葉梨の首に腕を回して引き寄せて、

エクボにキスをした。

「あの、加藤さん」

「ん?」

「前言撤回はしますか?」

私が場の雰囲気流されて承諾するとも思っているのか。葉梨はバカなのか。

「殴るよ?」

二人きりでいる時にこんな上下関係を持ち込むようなことはしたくないと思うが、如

何せんまだ不慣れだ。そのうちムカつかなくもなるのだろう。

葉梨の表情がみるみる変わっていく。

「ねえ、葉梨。あんた今日何しに来たの？」

「……合コンの件でお詫びに……です」

「だよね？ 何もしないって言ったよね？」

「はい……」

「わかつてるならいいよ」

私の下腿に当たっていた、葉梨の熱く張りつめたものは、もうすでに熱を無くしていた。それはとても残念だが、仕方のないことだ。

「葉梨はいい体してるね。柔道じゃないよね？ 何やってるの？」

「子供の頃からグレイシー柔術やっています」

「そうなんだ」

「今度さ、マッチョしかいないジムに一緒に行こうよ」

「ええっ!？」

「嫌なの？」

「行きます行きます」

マッチョしかいないジムに数量限定のリングータンクがあった。ブルーは葉梨によ

く似合うと思ったが、早く戻らなければと思って買わなかった。だから一緒に行った時にプレゼントしてあげればいいだろう。

葉梨はスリーブレスも似合うだろうが、私はリンガータンクを着た葉梨の姿を見てみたい。

マッチョしかないジムで葉梨がトレーニングしている姿を見るのが楽しみだ。

見上げる葉梨は困ったような顔をしている。何でだろう。ああ、きっと不安なのだ。トレーニングに集中したいのに私に気を遣わなければならぬから、出来るか不安なのだろう。葉梨はどこまで真面目なのだろうか。

「葉梨、大丈夫だよ。トレーニングは邪魔しない。絶対に。私も自分のトレーニングに集中するし」

「ん……はい。わかりました」

私は葉梨とマッチョしかないジムに行けることが楽しみで、嬉しくて葉梨の胸に顔を埋めた。頬が緩んでいる顔を葉梨に見せたくない。だって恥ずかしいから。

葉梨の大きく息を吐く呼吸音が心地よい。もっと、聞かせて欲しい。

一人の女だけを夢中にさせる男は、いい男——。

私はもう、葉梨に夢中だ。

16年の片思い

一月十四日 午後二時三分

弟が勤める美容院に来ている。

理志は、俺の伸びた髪を指先に取って眺めていた。
さとし

「優衣香はこの前来たんでしょ？」

「ああ、うん、カットとトリートメントだね」

「ここ来た後に風邪ひいて寝込んだ」

「あらら」

理志は頭の下半分の短い髪を見てから、鏡越しに俺の顔を見て、『優衣ねえの髪型はどうだった？』と口元を緩めて言った。

「どうって？」

「可愛いとか、すごい可愛いとか、なんか感想あるでしょ？ ちゃんと行ってあげたの

？」

——優衣香はいつも可愛いよ。

それはさすがに理志には言えないなと思っていたら、俺の目が彷徨っていることに気づいた理志は噴き出した。

「兄ちゃんも優衣ねえのあの髪型が好きでしょ？」

それを優衣ねえに言ったら、なら

その髪型にしようって言ったんだよ。ふふっ」

「そうなんだ……」

「優衣ねえが好きなの兄ちゃんの髪型って、知ってる？ 聞いたことある？」

「えっ、ないよ。知らない」

理志は鏡の前にあるカウンターに置かれたタブレットを手に取り、表示された画像を俺に見せた。

「優衣ねえは短い髪が好きみたいだね、こういう『理容師が手がける昭和のいい男』みたいな髪型がいいって言ってたよ」

タブレットに表示された髪型のタイトルは『スパイキーショート』とあったが、トップに多少のボリュウムのあるベリーショートだった。

「問題ないなら、それにする？」

「美容師さん！ お願います！」

俺を見せて笑う俺を見て、理志は笑いながらこう言った。

「俺が美容師になるまで、兄ちゃんはずっとこういう髪型だったよね」



午後三時二十六分

おばさんの命日の夜に行った時の帰りがけ、優衣香に『おかつぱ頭』と言われて、なんか少し嫌で弟に任せたら、おかつぱ頭のままで毛量が減っただけだった。

後ろで結っていたら、『マンバン』だからいつもそうしていたが、そろそろ髪型も変えようと思っていた矢先のこの前も、また優衣香に『おかつぱ頭』と言われた。

優衣香が短い髪が好きだとは知らなかった。

理志は『十代の兄ちゃんの記憶が強く残ってるからじやないの』と言っていた。理志が美容師になるまでは理容室で髪を切ってたし、服装も気を遣わなかった。

理志が髪を切ってくれるようになって、服のコーディネートやアクセサリーも選んでくれて、なんとなくお洒落な雰囲気になって、優衣香に男がいる時に合コンへ行くとかごくモテた。外見って大事なんだな、とは思ったが、肝心の優衣香の反応はイマイチだった。

チャライ雰囲気の人に会うと後退りするし、スリーピースでオールバックだと顔が引

き撃ってたし。

優衣香の反応がよかったのは、確かに短髪の時だった。ジャージとか、濃い目のベージュのストレートパンツに黒いTシャツ、ウインドブレーカー姿で、中にベストを着ていたら『ザ・捜査員』が完成する格好で会いに行ったら、優衣香が嬉しそうに笑っていた。

普通の格好だから、怖くないから笑っているのだと思っていたけど、短髪だから嬉しかったのか。

優衣香は俺が好むからと茶髪でカールした髪型にしてくれたんだから、俺も優衣香が好きで短髪にしようと思った。

優衣香が好きで髪型を聞き出してくれた理志には感謝しなきゃ。前回は意図が伝わらず毛量が半分になっただけで、『違う、そうじゃない』ってお兄ちゃん言いたかったけど、今回は感謝するよ。理さとくんありがとう、お兄ちゃんとっても嬉しいよ。

それにね、この前お風呂でね、髪の毛を後ろで纏めてた優衣ちゃんのね、髪の毛がうねうねクリンクリンしててね、お兄ちゃんはすごい可愛いって思ったんだよ。優衣ちゃんの髪の毛にパーマかけてくれたのは理くんだもんね、理くん本当にありがとう。

十年くらい前かな、優衣ちゃんがずっとロングヘアなのは俺のためだって思い込んでルンルン気分だった時、優衣ちゃんが『理志くんのためだよ。練習台になろうと思っ

て』って言った時には理くんの頭を引つ叩いてやろうと思つたけど、今では立派な美容師さんになって、お兄ちゃんとっても嬉しいよ。

理くんが高校生の時だったよね、『美容師になりたい』って言い出した時、お父さんもお母さんも反対したけど、玲緒奈さんは賛成したよね。玲緒奈さんが理くんを美容師にさせないとダメだつて、すごく力説してたよね。お父さんもお母さんも玲緒奈さんに説得されて、理くんは美容師学校に進学出来たもんね。玲緒奈さんには感謝しないとね。

理くんは知つてるかな、玲緒奈さんが理くんを美容師にさせたかつた理由だよ。

玲緒奈さんはね、俺とお兄ちゃんにね、『敦志も敬志もダサイから』って言つたんだよ。ついでにね、『お義父さんとうも、こう、ね?』って、松永家の嫁として若干気を遣つた言い方してたけど、巡査長が警視のお父さんをデイスつてたんだよ。

お兄ちゃんも俺もね、あの時のことはね、今でも思い出し怒り出来るんだけど、んー、まあ、確かにね、どこへ行くにも適当なジャージでやり過ごそうとする夫と義弟と義父をどうにかしたかつた気持ちもわかる。うん、そうだね、やっぱり玲緒奈さんには感謝しなきゃね。俺もお兄ちゃんも理くんのおかげでなんとなくいい感じのお洒落な雰囲気な男だしね。でもな、やっぱり玲緒奈さんに『ダサイ』って言われたことは今でも腹立——。

「——さん、松永さん！」

「んっ? あれ? 奈緒ちゃん……」

「不審な男がいるなど思ってた見てたら松永さんでした」

「あらやだ」

美容院から捜査員用のマンションへ戻る途中、優衣香と風呂に入った時のことを思い出した頃に立ち止まった気がする。

加藤は髪を下ろしていて、ダウンコートにストールを巻いて、デニムを履いている。靴はスニーカーで、メイクは最低限だが、血色のいい健康な顔色をしている。

「松永さんって、表情豊かなんですね」

「ニヤニヤしてた?」

「はい。ニヤニヤしたと思ったたら眉間にシワ寄せたり」

「あらやだ」

マツチョシしかないジムに走ってTシャツを買いに行った加藤は、無事に買えて相澤に新しいTシャツを渡していたが、五千円ちよいのTシャツなのに玲緒奈さんが外出している間に加藤は相澤へ一万円を要求していた。

襟ぐりがピロンピロンのTシャツで問題ない相澤と、それを一軍として着られては困る加藤が取っ組み合いの喧嘩を始めるのかと思っただが、トレーニング不足だったのか、加藤の足が攣って喧嘩にならずに済んだ。

「今戻つて来たの?」

「ええ、そうです」

足が攀つて悶えていた時に玲緒奈さんが戻つて来たが、かわいそうな子を見るような目つきで加藤を見て、休みを取れと言つた。

加藤は昨日の昼過ぎから今までの約二十四時間を与えられて、しっかりと睡眠が取れたのだらう。元氣そうだ。

「ゆつくり出来た?」

「おかげさまで。ありがとうございました」

「葉梨と時間は被つてたけど……」

「ふふっ……」

ちよつと変化した相澤と、何も変わらない加藤。そしていろいろと勘づいてる葉梨の三角関係が始まっている。

俺の立ち位置は、加藤と葉梨をくつつける側だ。

「葉梨と会つたの?」

「ふふっ、葉梨は本城と合コンでしたよ」

「あっ……」

そうだった。相澤が加藤がいる前で葉梨に合コンの話をしたんだつた。そして、七回

目の土下座もしなくてはならないことも思い出した。

「あー、奈緒ちゃん、あのさ」

「はい」

「葉梨が合コンに行くハメになったのは俺のせいなんだよ」

「それで？」

「えつと……お詫びしなければと……」

加藤の顔を見ると、笑っていた。

怒っていないのだろうか。

「相澤は私と葉梨のことを知ってます。だから私の前で合コンの話をしたんですよ」

「えつ……」

「相澤って、そういうことするんだと、びっくりしました」

加藤の話では、相澤は誰かに二人の関係を聞いたようだという。おそらく須藤さんだろう。雪の日に何があったのかは言わないが、相澤がヤキモチを焼くような関係になったのは確かだ。

だとしたら、加藤はどうするのだろうか。長い片思いが叶ったとも言える。では葉梨に夢中な恋する奈緒ちゃんははどうするのか。

「昨日の夜、葉梨は、合コンでお持ち帰りをしていない証明をするために私の家に来まし

た」

葉梨なら誠意を見せるためにそれくらいのことにはするだろうと思っただが、お持ち帰りしていただくとも連絡先の交換はするだろうし、後で連絡が来ることだつてあり得る。そもそも合コンへ行つたこと自体が裏切りに当たるだろうに。だが加藤は笑顔だ。

「松永さん、秘密は守つて下さいますか？」

「……はい。もちろんです」

——どうした。こんなことは初めてだ。

「昨夜、葉梨を泊めたんです。でも客用布団は無いから、私のベッドと一緒に寝たんですけど、葉梨は何もしなかつたんですよ」

「えっ……」

「私が背を向けて寝たから、葉梨は何もせずに寝ました」

——俺なら三回戦するのに。

加藤が何を言いたいのか目を探るが、よくわからない。

「えつと……」

「ふふつ。信じられないでしょう？」

「はい……」

「相澤も松永さんも、そうではないですからね」

「あー……奈緒ちゃん、その件は本当に申し訳ないと思——」

「違います松永さん、相澤です。あ、い、ぎ、わ」

「ええっ!？」

加藤は無理矢理ではなく、合意の元だったと言った。

「松永さん、私の十六年の片思いは終わりました。そのご報告です。今までありがとうございます」

叶わぬ恋が終わったのに晴れやかな顔をしている。

ああ、そうか。葉梨がいい男だったから、自分の選択が正しいとわかったのか。

「そっか」

「……お願いがあります」

「なに?」

「相澤が何をしでかすかわかりませんから、よろしくお願いします」

裕くんは優しいから加藤の気持ちに応えようとしたけど、いつの間にか加藤は葉梨に恋する奈緒ちゃんになって、葉梨を攻撃し始めたのか。

——面倒くさいな。

「野川がいる。ポンコツ野川はまだ、相澤が好きだ」

「ああ、そうでしたね」

「奈緒ちゃん、それでいこう」

「ふふっ……どうなりますかね」

笑顔の加藤の口元には、エクボがあつた。

——お幸せに。

俺は後で、葉梨にメシを奢ってやろうと思つた。おあずけ食らつてる仲間だから。

いい男と庇う男

一月十六日 午後六時二十六分

玲緒奈さんは人の三倍、仕事する。そこにポンコツ野川が武村と交代で入った。頭数は一人増えただけだが、玲緒奈さんは三人分でポンコツ野川は〇・七人分だ。だから二人で三・七人分ということになる。

したがって、増えて、減った。頭数が増えて、みんなの仕事量は減ったということ……なんだよ、それでいいだろうが。うるさいな、中学の数学で躓いた俺つまづに聞く方が間違っている。それに優衣香が懇切丁寧に教えてくれなかったら俺は今頃どうなってたか考えたくもないんだ。

でも優衣ちゃん、ありがとうね。あの時は本当にありがとうね。

小学生の時はバツト持って追いかけて来た優衣ちゃんは中学に入ったらなぜか木刀に持ち替えたけど、その木刀を傍らに数学を教えてくれる優衣ちゃんが恐ろしくてぼくは勉強を頑張ったんだよ。

でもね、警察官になって知ったんだけどね、警察官なのに『警察』って書けない奴もいてね、数学が苦手でもぼくは警察官にはなれただろうから、あの時そんなに頑張らなくてもよかったみたいだったよ。でもありがとうね、優衣ちゃん大好き。次こそは続きを――。

「敬――、ねえ、敬志」

「はいっ！」

「今、何を考えてた？」

「えー、オーストラリア産小麦の豊作でアメリカ産小麦の不作の懸念が相殺されましたから、国際市況の押し下げ――」

「そんなこと、一ミクロンも考えてないでしょう？」

「ええ、よくご存じで」

傍らに置いたピコピコハンマーを掴み、俺の頭にピコピコハンマーを振り下ろす玲緒奈さんと、それを怯えた顔で見る加藤と三人で事務処理をしていた俺は、現実逃避をしていた。

話の方向性を考えると優衣香の妄想カタログはダメだと考えて、頭数と仕事量の計算をしようとして、計算が出来なかった。

――もうっ！ 敬志のバカ！

そもそも加藤が、加藤があんなことを言うからだ。加藤のせいだ。

玲緒奈さんの前では絶対に嘘をつけない加藤は言ってしまったのだ。『松永さんの全裸を見たことはありません』と。

加藤と葉梨のウキウキ惚気話を聞き出そうとする玲緒奈さんに、加藤は正直に答えていた。

加藤の『葉梨はすごくいい体をしていました』と頬を赤らめて言う姿には驚いたが、『下半身もちゃんと鍛えていて』と続けた加藤に俺が下ネタで返すと、玲緒奈さんはやっぱり俺の頭にピコピコハンマーを振り下ろしたが、それを見た加藤が『葉梨は松永さんよりも脂肪がついてましたけど』と言ってしまった。

それはどういう意味だと玲緒奈さんは問い詰め、正直に加藤は答えた。『松永さんの全裸を見たことがあります』と。

だから俺はその瞬間に現実逃避を始めた。

「風呂上がりにも全裸で加藤の前に出たのは俺の責任です。謝罪はしました」

「謝罪は受けました」

「……いつの話？」

——マズい、玲緒奈さんは加藤の嘘に気づいた。

俺をちらりと見た加藤は、『七年前です』と答えた。確かに七年前に全裸は見せたが、

実はもう一回、ある。五年前だ。

「七年前のその頃は、敬志は太ってたよね？」

「はい、そうです」

どうしても一時的に体型を変えないといけない仕事で、そのために十五キロの増量をしたが、加藤に全裸を見せてしまった時は減量をして元の体重より五キロ多かった時だった。おそらく、今の葉梨より脂肪は乗っていただろう。

「正直に言ってます」

加藤が正直に言ってしまうのはマズい。俺が悪者になればいい。それしかないだろう。玲緒奈さんは加藤が男関係で身を持ち崩さないように相澤をつけたのだし、俺を信用して七年前から俺も監視するように命令したのだから。だが俺が嘘についても、玲緒奈さんは見破る。ならば、正直に言わなくてはならない。

「五年前、加藤と関係を持ちました」

加藤の目を見ると、俺の意図を汲んだようだった。ハンドサインもそうだった。

玲緒奈さんは俺を真つすぐ見ているが、冷たい目をしている。

俺を殴るなら殴って、この話は終わらせて欲しい。加藤のためだ。

実際はしていないが、それを証明する術が無い。加藤とホテルに行ったのは事実だから言うしかない。

玲緒奈さんが大切にしている加藤と関係を持ったと思料されるようなことをしたのは確かだから。

「玲緒奈さん、仕方ないです。加藤は俺の好みのド真ん中ですから。それにその時、優衣香はプロポーズされた後でした。俺だって、別の人生を考えますよ」

優衣香の名を出した時、玲緒奈さんの目が動いた。俺は『加藤に優衣香の件は、まあ、話してあります』と言い、玲緒奈さんはどの程度まで話したのか察した。

「同業には手を出さないって決めてましたけど、加藤は別です。こんないい女ですよ？

俺は本気でした。本気で口説きました」

「……そう」

「その一回だけです。加藤に離婚歴のある男は嫌だと言われて諦めました」

——騙せた。大丈夫だ。

玲緒奈さんは大きく息を吸って、吐いた。

小さな声で『信じてたのに』と言う玲緒奈さんには申し訳無いが、真実は言えない。言わなくていい。

「二人共、殴っていい？」

「俺が加藤の分も受けます。俺だけにして下さい」

鼻血が出ない程度のグーパンなら二発でもいいと思った。思ったのだが、玲緒奈さん

はやっぱり加藤も殴りたかったようで、ピコピコハンマーを両手で持つと、柄の部分で俺たちの後頭部にフルスイングした。

「痛っ！」

「痛い……」

「バカ！」

そこに葉梨が戻って来た。リビングのドアを開けたら葉梨は『戻りました』と言っていたのだろうが、リビングの異様な光景に『も』と言ったまま固まっていた。

「あら、葉梨、おかえりなさい」

「ただいま、戻りました……」

「私と敬志は出かけるから、お二人でゆっくり」

「えっ」

「敬志、仕度して」

「……はい」

ピコピコハンマーを両手で持って『ピッピッ』と音をさせている玲緒奈さんと、後頭部を両手で抑えて苦悶の表情をしている加藤と俺がいるリビングはさぞかし異様な雰囲気だったろう。

——葉梨くん、ごめんね。



マンションを出て、隣のブロックと合わせた約十五分間の予定で、歩きながら玲緒奈さんと話している。

「ねえ、敬志。嘘をつくのは上手くなったけど、誰かを庇う時に顔に出るのは、まだまだだね」

——やっぱり騙せなかったか。

「敬志が全力で口説いて、加藤は絆されて、ホテル行って、で、何回ヤツたの？」

「そんなこと、言いたくないです」

「いいじゃない、教えてよ」

「あー、もう。一回です。一回」

「なんで？」

——玲緒奈さんは探ってる。なんでだよ。

「俺が疲れちゃったんで」

「なんで？ あんたその時三十二でしょ？ 若いのに」

「酒が入ってたせいです」

「ふーん、じゃあさ、加藤の体って、どうだった？」

体の相性はどうだった？

敬志好

みの女なのに一回だけなんて勿体なくない？」

——複数回しなかった理由に何かあるのか？

「しようがないでしょう」

「なんで？　言つてよ」

「加藤も疲れてたみたいで、寝ちやいま——」

「敬志、加藤は処女だよ？」

「えっ？」

声を出して笑う玲緒奈さんに、俺は呆然となった。

加藤が処女だなんて、そんなことは無いだろう。付き合った男はいたと聞いているし、デートしてる所だつて一度だけ見たことがある。

「本当なんですか？」

「そうだよ。あの子が私に嘘を吐けると思う？」

「思わないです」

玲緒奈さんは、俺が加藤の初めての男だったとわかりショックだったが、なんとなく違和感があつて俺を問い詰めたという。

「多分だけど、何かあつて、敬志が奈緒ちゃんを守つたんでしょ？」

「……まあ、そうですね」

「よかった。敬志、ありがとうね。本当にありがとう」

警察官全員が品行方正なわけがない。ただでさえ少ない女性警察官で、美人な加藤が狙われないわけがない。相澤の目が届かない時、加藤は危機的状況に陥ったことがあった。だから、玲緒奈さんは俺も監視役にした。

十九歳で兄を見初め、交際し、結婚をして二十三歳で子供を産んだ玲緒奈さんには無縁な話だったが、だからこそ見えてくるものがあつたのだろう。

「葉梨に恋する加藤がさ、可愛いくて可愛いくて」

微笑む玲緒奈さんは、優しい女の人だった。

——そっか、初めては裕くんに捧げたのか。

長い片思いは叶わず終わつたのに、晴れやかな顔をしていたのはそのせいだったのか。加藤にとっては幸せな結末だったのか。

「葉梨は、加藤のことを真剣に考えていますよ」

「でしようね。葉梨はいい男だもん」

「……そうですね」

また歩き出した玲緒奈さんは、『葉梨は敦志あつしと似てる』と言つた。兄に顔も性格も似ていないと思ひ、首を傾げると、玲緒奈さんは『敦志は私以外の女には男を見せないんだ

よ』と言った。

——ああ、加藤は玲緒奈さんにそう教育されていたのか。

「ごちそうさまです。ふふっ」

「敬志もさ、優衣香ちゃんと早く結婚しなよ」

「……はい。それは考えています」

俺の少し前を歩く玲緒奈さんの足取りは軽い。

反社とインテリヤクザの間くらの顔をした兄は、結婚記念日と玲緒奈さんの誕生日に必ず十二本の深紅の薔薇と手紙を贈っている。

七年前、俺も加藤を監視するように命令した時、玲緒奈さんはこう言っていた。

「加藤もね、好きな男と結婚して、幸せになって欲しいんだよ。だからお願いね」
一つ年下の男の子に一目惚れした十九歳の女の子が、そこにいた。

ハイヒールとライフル銃

一月十七日 午前一時二十六分

人通りの少ない路地裏を歩きながら俺と葉梨は寒さを堪えていた。

葉梨はスーツにスタンドカラーのコートを着ていて、俺はデニムにパーカーを着てフードを被っている。俺たちは肩を寄せ合い、望月のバーまで歩いていった。

「ポンコツ野川の頭のリボンってさ、見失った時に目印になるよね」

「んふっ……そうですね、わかりやすかったです」

等間隔で歩道を照らすだけの暗い歩道を俺たちは歩いている。

「葉梨もポンコツ野川みたいな清楚系の小柄な女が好きなんだろう？ 山野だって小柄

だし」

「ああ……前の彼女がそうだっただけで、そんなにこだわりは無いですよ」

「ふふっ……前の彼女、か……いいねえ、ふふっ」

横目でお互いの目を見て、頬を緩ませる。

「そろそろ聞かせてよ、生々しい話」

「まだ何もしてませんよ」

「あれ？ この前会ったんじゃないの？」

「……あの日、合コンでした」

「おっと……」

俺は立ち止まり、お腹を手のひらで押さえて目を伏せた。

「どうしました？」

「胃が痛い」

「大丈夫です、加藤さんは許してくれましたから」

「えー、ほんとにー？」

「本当です」



バーの扉を開けるとベルが鳴る。カウンターには望月はいなかった。

視線を左にやると、望月はテーブル席を片付けていた。シルバーのトレイにグラス、灰皿、小皿、カラトリーを手際よく並べたところで顔を見せた。

「いらつしやいませーって、あら」

トレーを持ち上げて、カウンターに置いた。

葉梨の顔を覚えていた望月は葉梨に微笑み、フードを被る俺を見た。

「松永さんのカジユアルな格好は久しぶりに見るなー」

「んふふ……髪も短くして心機一転だよ」

「反省して、頭丸めたの？」

「ふふつ、そうだね、それもある」

俺たちの会話の意味がわからない葉梨将由は視線を外した。俺と望月が符牒を介して意思疎通を図っていることに気づいたから。



優衣香が痩せてしまったと望月から聞いたのは一週間前だった。

俺が優衣香の行動を咎めたから心労で痩せてしまったのかと心配していたが、背中の贅肉を気にして優衣香は短期集中ダイエットで痩せてしまっただけだった。

夢で揉んだおっぱいはおっぱいじゃなかった。

望月が教えてくれなかったら、また俺は何も知らないままだった。そう、本物の優衣

香のおっぱいも——。

——モッチー、ありがとう。柔らかかったよ。

「ノンアルのドリンクをお願い」

「かしこまりました」

他に客がいる時や久しぶりの来店時にノンアルコールを指示するハンドサインをするが、今日は葉梨がいるからしなくてもいい。

今日は望月に事前に連絡をしていて、フードメニューをメインに注文すると伝えてあった。

「腹減ってるだろ？」

「はい。減ってます」

ドリンクが置かれ、サラダと前菜がカウンターに並べられた。望月が、『では、料理の準備をしますので、ごゆっくり』と言い、望月はキッチンに行った。

ノンアルコールのロングアイランドアイステイヤーを手に持ち、『乾杯』と言って、葉梨のグラスに合わせた。

「葉梨はさ、加藤のどこがいいと思ったの？」

美人だけど、あいつ狂犬だろ？

誰も

寄りつかなかったのに。なんでよ？」

ドリンクをコースターに置き、フォークを手に持った葉梨は俺に顔を向け、『加藤さん

は、尊敬出来るカッコいい女性です』と言った。

「結局、会わなかったの？ まさかお持ち帰りしたんじゃないよな？」

「してませんよ！」

「だよー」

「おまたせー」

望月の明るい声はキッチンを隔てる暖簾の向こうから聞こえた。

「今日は牡蠣が入ってね。でも小さめだからパスタにしたよ」

牡蠣は二人共問題無い旨を伝えてあり、葉梨は目を輝かせてカウンターに置かれた牡蠣のパスタを眺めていた。

「次はピザ、持ってくるよ」

キッチンに行った望月の後ろ姿を目で追った葉梨は、そのまま俺の目を見た。

「加藤さんみたいな美人から好かれるなんて、考えたこともなくて……」

楽しそうに、嬉しそうに葉梨は頬を緩めている。

葉梨の見た目は熊だが、それは背が高く、体格がよく、眉毛が濃くてタレ目だからそう見えるだけで、顔の造形が悪いとか、そういうことではない。

ジムトレーニングを毎日出来る仕事ではないが、時間を見つけては自重筋トレをしているのは知っている。性格も温厚で、仕事もよくやっている。加藤が見込んだのも、よ

くわかる。

「今でも、騙されているんじゃないかと思ってます」

「んふっ……ふっ……ふふっ」

「明け方、目が覚めたら加藤さんが隣にいないくて、夢だったのかな、って思いました」

「え、何？ 会ったの？ 泊まったの？」

「ああ、はい」

「……でもヤツてない、と？」

「はい」

牡蠣の Pasta を頬張りながら話す葉梨と目が合った。

葉梨が咀嚼し、飲み込み、ドリンクを飲んだところで俺は手を出したが、それが何なのかわからない葉梨は手と目を交互に見ている。

「握手」

「え、はい」

微笑みながら葉梨と握手をして、手を離れた時に望月がピザを持ってきた。

「今日はね、モッツアレラチーズをたくさん作ったからね。増量してあるから」

直径二十センチ程のマルゲリータが二枚、俺と葉梨の前に置かれた。

「いいねー、美味しそう」

「あとはサーロインステーキ。いけるでしょ？」

「葉梨、食えるよな？」

「はい！」

「じゃ、よろしく」

「その前にドリンク、お作りしましょうか？」

炭酸水でいいと伝えて、ドリンクを作るとすぐに望月はキッチンへ行った。

「葉梨、俺もおあずけ食らってるどころだから。お前と仲間だよ」

「えっ!？」

「お前は……二回連続？」

「えっと、まあそうですね」

「俺もだよ、ふふっ」

葉梨は知っている。托卵されて離婚歴があり、同業には手を出さないが女を食い散らかす男だと知っている。

「松永さんは恋人がいるんですか」

「うん。ちようどここの仕事が始まる前に、彼女が出来た。で、この二ヶ月で二回会ったけど、二回共おあずけ食らってる」

「あー……ははっ……」

葉梨の目は、俺を観察している。

なぜこんな話をするのか、意味がわからないだろう。

「他意は無いよ。ただ、二回連続でおあずけ食らってる仲間として話してるだけだよ。ふふっ」

「そうですか」

「俺ね、長い片思いが叶ったんだよ」

「えっ……」

「毎日楽しくて。ふふっ」

葉梨に、十年以上も片思いをしていて、やっと恋人になってくれたとだけ話した。

「好きな女がさ、俺のことも好きなのって、こんなに幸せなんだって、始めて知った」

葉梨から返答が無い。そうだろう、頬が緩んでニヤニヤしているのは俺の姿を見たことが無いのだから。

「どつちが早くヤれるか、先にヤった方がメシ奢るのはどう？　いつもの中華屋で」

「んふっ……わかりました」

「ふふっ……」

サーロインステーキが焼き上がり、カットしてトレーに乗せた音がした。望月の声がする。

「おまたせ」

ミディアムレアのロゼ色の肉色に二人で口元が緩む。

「モツチー、何か飲めよ。奢る」

「ありがとうございまーす」

平日深夜で終電も無くなったこの時間に来る客はいない。調理の片付けを終えた望月奏人はターキーのソーダ割りを作り、俺に目配せした。

「じゃ、あの加藤が惚れた男に、乾杯！」

驚く葉梨は笑顔の望月からグラスを寄せられ、自分のグラスを持ち上げて乾杯した。

「加藤の惚気話、聞かせてよ」

「あー、聞きたいですねー、ふふふ」

「えっ、そんな……」

「明け方、加藤は何してたの？」

「ああつー！」

寝ている葉梨の隣からそつと抜け出して加藤がしていたことは、なんとなく察するこ
とが出来る。普通の男ならドン引きするだろうが、葉梨なら大丈夫だろう。羨望と恥じ
らい、そんな目をして思い出している。

「リビングにあるレッドミルで、ハイヒール履いて走ってました」

「あー、やつぱりトレーニングしてるんだ」

「えっ?」 女性警察官つて、そんなトレーニングしなきゃいけないの?」

足が誰よりも速くて狂犬な加藤を知らない望月は、加藤の仕事やプライベートの話に興味津々で目を輝かせている。

「服装の都合上、ハイヒールを履かないといけないけど、走るとどうしても遅くなるから加藤はトレーニングしてるんだよ。普通、そんなことやる女性警察官はいないけど」

「あの、加藤さんは十キロのダンベルを左肩に担いでました」

「はあ!」

「ええっ!」

葉梨が加藤を探してリビングの扉を開けた時、タイトスカートにストッキング、ハイヒールを履いて、肩にダンベルを乗せて走っていた。

葉梨に気づいた加藤は、『あと十分だから待って』と言い、葉梨は懸垂マシンで懸垂しながら待っていたら、加藤はトレッドミルの速度を落として早歩き程度にして、右肩に合計十五キロのプレートを付けたバーベルを担ぎ、両手で持ちながら重心を落として早歩きしていたと言う。

「もしかして、ライフルとかを持った想定?」

「そうみたいです」

やり取りを聞いていた望月は、俺と葉梨を交互に見ながら、『待つて、待つて。あのさ、あんな細い女性警察官がそういう想定をしてトレーニングするのって、もしかして今の日本って、国家存亡の危機とかなの?』と驚いた表情で言った。

俺と葉梨は顔を見合わせ、真顔で望月に語りかけた。

「国民の生命と財産を守るために、警察官は、いつでも頑張ってるんだよ」

小さな声で『そうなんだ』と言う望月に俺も葉梨も笑いそうになったが、なんとか堪えた。

——加藤は特殊事件捜査係所属だったっけ？

表向きは町沢署刑事課所属だが、加藤の明後日な努力は何のためにやっているのか、後で聞いてみようと思った。

空いたグラス

一月十七日 午前二時四十分

相澤裕典と野川里奈は、捜査員用のマンションに戻ろうとしていた。

「相澤さん」

後ろからかけられた言葉に振り返った相澤は、マフラーで顔の半分を隠した野川里奈を見た。寒さのせいかわ頬が赤く染まっている彼女の吐く息は白く、夜空へと消えていく。

「寒い？」

「えっ……はいっ！」

「あー、じゃ、こっちおいで」

マンションまではあと十五分で着くが、すでに二人は一時間以上も歩き続けている。野川は疲れているようだった。

野川は慣れないヒールにフレアースカート、ショート丈のコート姿で防寒は出来てい

ない。

相澤は野川に手を差し出すが、躊躇している。少しの間の後で二人は手を繋いだが、野川は相澤をちらちらと見る。それを見た相澤は手を解きダウンコートを脱いで、野川のコートの上から腰を覆い、袖をウエスト部分に結んだ。

「疲れたでしょ？ おんぶするよ」

「ええっ!? でも……」

「いいから。背中に野川がいれば俺も寒くないし」

「ああ……はい……すみません」

相澤は野川に背を向けてしゃがむと、野川が体を預けた。立ち上がり、歩き出すが、野川は頭の置き場に悩んでいるようだった。

「あの、相澤さん」

「なに？」

「すみません、本当に。ご迷惑おかけして……」

「いいんだよ、疲れたでしょ」

「はい……」

野川は遠慮がちに相澤のネックウオーマーへ顔をつけた。それを見た相澤は口元を緩め、優しく声をかける。

「玲緒奈さんと加藤は普段からトレイニングしてるけど、野川までやることはないよ。野川は辛かったら言えばいいんだよ」



午前二時四十五分

バーの帰り道、食べ過ぎた俺は腹が苦しかった。葉梨は足りなかったようで、望月からもらった煎餅を食べながら歩いている。

「葉梨って、柔道じゃないよね？」

「ええ、俺はグレ——」

進行方向先、約百メートル先にある交差点の角の暗がりから、若干上半身を前傾させた大きなリュックを背負った男が出てきた。葉梨も煎餅を頬張りながら見ている。

「子泣き爺って、おんぶだっけ？」

「うーん、抱っこ、だった気がします」

ぼんやりと浮かび上がるシルエツトだけを見ていると妖怪にしか見えなかったが、街灯の灯りが微かにその男に届いた時、俺も葉梨も驚いた。

「おっと……アイツまたすっ転んだのか？」

「かも知れませんか」

◇

同時刻

捜査員用のマンションのリビングに松永玲緒奈は一人であった。加藤奈緒は仮眠室で寝ているが、そろそろ起きる時間だ。

松永玲緒奈は捜査員が上げた書類に目を通してているが、殆ど全ての書類に赤ペンで添削していた。

添削が終わって天井を見上げて溜め息を吐いた時、仮眠室のドアが開き、洗面所のドアが開く音がした。

その音を聞き、傍らのマグボトルのフタを開け、飲み物を少しだけ飲んだ。

テーブルに広げた書類をまとめ、トレーに入れてから立ち上がり、キッチンへ向かう。グラスとミネラルウォーターを持って戻ると加藤奈緒がリビングのドアを開けた。

「おはよー」

「おはようございます」

「水、飲む？」

「はい、いただきます」

二人とも着席し、松永玲緒奈はグラスにミネラルウォーターを注ぎ、加藤奈緒の前に置いた。

加藤奈緒はグラスに注がれたミネラルウォーターを半分飲み、テーブルにグラスを置いた。

松永玲緒奈はグラスを見つめる加藤奈緒の姿を見ている。

「あの、玲緒奈さん」

「なにー？」

「松永さ……あ、敬志さんの件……」

「ああ、いい。聞かないよ」

「でも……」

加藤奈緒は顔を上げて松永玲緒奈の顔を見たが、目を伏せてしまった。

「私は聞かない。あのさ、敬志はあんたに何もしなかったんでしょ？」

「はい」

「ならいい。それだけわかれば私はいいの」

松永玲緒奈は加藤奈緒のグラスにミネラルウォーターを注いだ。

「じゃあさ、一つだけ聞かせてよ」

「はい」

「敬志が言つてたこと……敬志はあんたに本気だつたつてやつ。あれ、本当？」

「……確かに、そう、おつしやつてました」

「で、あんたは絆されて、敬志に襲われた、と」

「うっ……」

「全て知つてるよ」

怯えた目をする加藤奈緒に、松永玲緒奈は口元に笑みを浮かべたまま見つめていた。

「あの敬志が挫けるわけがない……でも、何もされなかつたんでしょ？」

「はい……望月さんにお願ひして潰してもらいました」

その言葉に目を見開いた松永玲緒奈は、笑いを堪えながら肩を震わせていた。



野川の足をコートで包み、おんぶする相澤の姿を見ていると、葉梨が話しかけてきた。
「加藤さんは、相澤さんのああいふ優しさに惹かれたんですかね」

加藤が相澤をなぜ好きになつたのかを聞いた時、加藤は首を傾げながら、『多分、お姫様抱っこされたからです』と答えていた。

恋に落ちる理由などそんなもんだらうと俺は思った。俺だって優衣香の髪が風に揺れてたからだし。

「何が言いたいの？」

「……やっぱり不安で」

「なんでよ？」

「お二人は同期でずっと一緒だったわけですから」

恋の始まりは不安がつきものだ。俺だって本当に優衣香が俺をずっと好きでいてくれるのか不安で堪らない。

「なあ、相澤が優しいのは、加藤にだけじゃないんだよ。男女問わず、周囲の人間全員に優しい。それは知ってるだろう？」

「はい。俺にも優しい先輩です」

「加藤は、自分だけを見てくれるお前がいいに決まってる」

「……そうですか」

「加藤はお前しか見てないよ」

不安そうな顔をする葉梨を見ると、俺も不安になってくる。

——始めたら、終わりがある。

「なあ、葉梨」

「はいー！」

「もうさ、プロポーズしちやおうよ」

「ええっ!？」

「俺も、する」

「ええっ!？」

終わらなければいい。

終わらない恋をすれば、いい。

「あー、でもまだ俺ら、ヤツてねえな、そういや」

「んふっ……そうですね」

「じゃ、ヤツてからプロポーズしよう。賢者タイムに言うとなは信用するよ」

「ちよっ!？」　今まで何言ってきたんですかっ!？」

「……まあ、いろいろと、ね？」

さつきまで不安そうな顔をしていた葉梨は、少し眉根を寄せて真っすぐ見つめている。きっと、『お前は何を言っているんだ』とでも言いたいが先輩の俺には言えないから顔だけでアピールしているのだろう。

そんな真面目な葉梨くんが加藤の恋人で本当によかったと思う。ほんの少しだけ、信頼は失くした気がするが。

| 第7章·了 |

幕間 おにぎり派の忠告

「本城は、砂糖二本とミルク二つ、だったよね？」

そう言いながら、玲緒奈^{れおな}さんは俺の前にコーヒークップを置いた。湯気と共に立ち上る香りが鼻腔をくすぐる。

「ありがとうございます」

「いいのよー」

玲緒奈さんは俺の後ろを通り過ぎ、昭和感あふれる座卓コーナーに座った。

捜査員用のマンションでは長机を並べてテーブル代わりにしているが、相澤さんが味噌汁を溢して書類にぶちまけたから食事は座卓で食べるようにしている。

座卓にある鎌倉彫の菓子盆は松永敬志さんの結婚式の引き出物で、松永さんが何度捨てても気づくと手元に戻って来ているという、松永さんラブな菓子盆だ。

その菓子盆からベランダの窓へ視線を動かした。

窓の外は快晴で、雲一つない青空が広がっている。冬の寒さなど微塵も感じさせない

ような天気だ。暖房の効いた部屋の中だが、この暖かな陽射しもあつてなおさら心地よく感じられる。今日も穏やかで平和な一日になりそうな予感がした。

◇

玲緒奈さんが淹れてくれたコーヒーを飲みながらパソコンで作業をしているが、視界の端に振り向いて俺を見る玲緒奈さんがいた。

何かと思い視線を玲緒奈さんにやると、『本城つてさ、サンドウィッチ好きだよね?』と言う。

最近はお卵のサンドウィッチにチキンを挟んで食べるのが好きだ。チキンを挟んだだけなのに、満足感の得られるサンドウィッチになる。

それは署の隣のコンビニではなく、少し離れたコンビニの女性店員が教えてくれて、もちろん俺はその女性店員に恋をした。でもまたすぐに加藤さんに見つかり、『バカなの?』と言われた。

加藤さんの言う『バカなの?』は、一般女性の言う『こんにちは、いいお天気ですね』と同じ意味だと松永さんから言われて納得しているが、加藤さんは、『お釣り返す時に男性客の手のひらを包むような店員つて、私たちの仕事増やしてると思わないの?』と続け

た。

確かにそうだ。色恋営業のようなものだ。

勘違いした男性客がストーカーとなり、性被害や刃傷沙汰になって俺らが臨場する。

——仕事が増えて、休みが減る。最悪だ。

そうやって俺の恋はまた秒で終わったが、サンドウイッチにチキンを挟むライフハックには何の罪もないから、俺はチキンを挟んでいる。

「サンドウイッチ好きです」

「近くに小さいパン屋さんあるの知ってる?」

捜査員用のマンション近隣は中華街で、肉まんや甘栗なら売っているが、パン屋はあつただろうか。近隣を思い出しても記憶が無い。

「知らないです」

「学校に納入してるパン屋さんみたいでさ、コッペパンとかロールパンに卵とかコロツケとか挟んである、なんか懐かしい感じのパンしか無いんだけど、美味しいよ」

「そうなんですか」

ちようど昼時だ。玲緒奈さんに教えられたパン屋に俺も行ってみることにした。



捜査員用のマンションを出て石川町駅方向へ三分ほど歩いた所にそのパン屋はあった。

そのパン屋はお店かと思ったが、商品什器が路面に面しているお店で、什器に並ぶパンは玲緒奈さんが言っていた通りの懐かしい感じのパンだった。

「いらつしやいませ」

「ああ、えつと……」

「んふふふ……ごゆっくりお選び下さい」

優しい声に顔を上げると、艶やかな黒髪をポニーテールにしている三角巾をした女性店員が微笑んでいた。

——キミの瞳を、逮捕する。

また俺は恋に落ちた。

◇

恋をすると世界が光り輝く。

緑が美しい。空が、太陽が、全てが美しい。

植栽の下にあるゴミも美しいし、マジギレしてピコピコハンマーで引っ叩いてくる玲緒奈さんですら美しく輝いて見える。

俺は彼女に恋をしてから毎日が楽しい。

恋をしていない時は、痴情のもつれ事案に振り回されるとうんざりする。この世から恋愛感情が無くなれば警察業務の半分は無くなるだろうと思っっているし、そうすれば休みも、有休休暇も取れるだろう。

休みたい、ただそれだけを考えて、見知らぬ男女の痴情のもつれに振り回されている。でも恋をするとな変する。全てが愛しく思えるのだ。

恋をする则自分比二割増して全力対応する俺を加藤さんは手の甲で引っ叩いてくるが、しょうがないじゃないか、おまわりさんも人間だもの――。



玲緒奈さんが教えてくれたパン屋で彼女に一目惚れしてからというもの、俺は毎日のようにそのパン屋へ通った。

彼女の名前を、俺はまだ知らない。だって名札をしていないから。名前を聞いてみようかな。でもどうやって聞こうか。そんなことを考えるのも幸せな時間だ。

だが、この恋もまた加藤さんにすぐバレてしまうのだろうか。それだけは避けたい。絶対に。

そんなことを考えながら、今日もパン屋まで来た。

——あ、松永さんだ。

サンドウィッチよりもおにぎり派の松永さんがパン屋にいるなんて珍しいなと思っただが、なんとなく隠れた方がいいと思つて隠れて見ていると、松永さんと彼女の話し声が聞こえた。

「いつもありがとうございます。でもうちのパンだけじゃ足りないんじゃないんですか？」

「……パンだけじゃない、から」

彼女の瞳は松永さんに逮捕されていた。

ああ、あれか。『キミに会いに来てくれるんだよ』みたいな意味か。この色男め。

彼女は漫画にあるような『キュン』みたいな顔してキラキラおめめで松永さんを見つめているんじゃないか。

イケメンの松永さんに見つめられてそんなことを言われたら女なんてみんな『キュン』つてするだろう。しないで『バカなんですか？』と言うのは狂犬の加藤さんくらいだ。

だが俺は思った。ついに、ついに松永さんは再始動したのか、と。

ここ数年はすつごく大人しくなったが、松永さんは女を食い散らかす人だ。たまに女がお門違いな署に来て暴れて大惨事になる。いつか彼女も般若顔で暴れるのか――。

松永さんはパンが入った紙袋を持って、捜査員用のマンションとは反対側へ歩いていった。

俺はその後ろ姿を見ていたが、五年前にその女の確保に向かったものの、暴れる女からボツコボコにされた記憶が蘇ってきた。

公務労災で休もうとしたら須藤さんから『仕事増やすのやめてくれない?』と言われた記憶――。

そんなしよんぼり事案は頭の片隅に追いやり、俺はパン屋へ行った。

「いらつしやいませ」

「ああ……こんにちは」

松永さんのせいなのだろう、いつもより笑顔の彼女は可愛い。でも俺だって松永さんよりいい所はある。俺は彼女に一途だ。食い散らかしたりしない。

「今日もいつものですか?」

「えっ、ああ、はい。そうします」

彼女は微笑んで、俺がいつも注文するロールパンの卵とツナ、コロツケのコツペパン

を取り出した。

袋詰めしながら彼女は、『うちのパンだけじゃ足りないんじゃないんですか?』と言った。

——チャンスだ。チャンスがやってきた!

「ああ、ふつ……俺はパンだけじゃない、から……」

そう言つて彼女の瞳を見た。

彼女は微笑んでいる。

松永さんみたいにイケメンじゃないが、俺だつて悪くないはずだ。見た目は反社だけど、仕事じゃない時は爽やかな笑顔で人当たりのいい反社だし。

「おにぎりとかカップ麺とかも食べてるんですか?」

「んんっ!」



イケメンと反社ツラはこんなにも対応に差があるのかと思ひながら捜査員用のマンションに帰ろうとパン屋を後にして、角を曲がった時だった。松永さんが俺を見ていた。

「お疲れ」

「……お疲れさまです」

——俺を待っていたのだろうか。

だとしたらパン屋の近くで隠れていたこともバレているのだろうかと考えると、歩き始めた松永さんは優しげな笑顔で口を開いた。

「フォーリンラブでウッキウキの所に悪いんだけど、あの子はやめときな」

なぜバレているのだろうか。なぜバレているのだろうか。あまりに動揺しすぎて俺は同じ言葉を二度も心の中で言ってしまった——。

「あの子、三回結婚して、旦那は若いのに三人とも死んでる。保険金詐欺の線もあつて……まあ、シロだけど、ね？」

——えっらい重いじゃないか。

「えっと、その捜査、してたんですか？」

「いや。あの子の兄ちゃんは俺の情報提供者だから」

「おっと……」

「死んでもいいってくらい惚れてるなら俺は止めないよ」

そう言い残し、松永さんは俺を残して去って行った。

俺には彼女しかいない……そう思っていたが、俺はまだ死にたくない。

だがしかし、彼女の兄貴が松永さんの情報提供者だということはわかった。手をつけ
ちやダメな女性——。

——警察官になりたかったけど、警察官になるんじやなかった。

誰にも知られない恋をしたいと、俺は思った。

そうだ、アプリだ。アプリで探そう。俺はそう思った。

痴情のもつれ事案でちよいちよい出てくるアプリ、正しく使えば、大丈夫——。

幕間 言葉足らずの乙女心

午後四時五十八分

——この世は不条理だ。

私は今、リビングにある全身が映る大きな鏡で自分を見ている。

ネット通販で買ったものを着て大きな鏡で見ているが、着用画像では裾が骨盤を覆っていたのに私が着たら臍が見えている。どういうことだ。

原因はわかつている。私の背が高いからだ。

一昨年の健康診断で身長は一メートル六十八センチだったが、昨年の健康診断では一センチ伸びていた。おそらく原因は懸垂マシンだろう。

——今年は大台に乗るのか？

大丈夫だ。大台に乗ったところで葉梨は一メートル八十五センチだ。大丈夫、超えない。まだ、大丈夫。それだけは安心していいだろう。

だが、ネット通販で買ったこれはどうなのか。臍が見えているのだ。小さい女の子な

らば大成功だったろうが、いかんせん私はデカイ女だ。やはり失敗だったのだ。臍が見えている。

——この世は不条理だ。

先週、私はネットで『初エッチで男性が彼女に着て欲しいランジェリー』というタイトルの記事を読んでいたのだが、そこに書かれていた男性は全員、違うことを言っていた。何の参考にもならないじゃないか。そう思った。

仕方なく私はベビードールがいいだろうと考えて、ネット通販で商品を見て、買った。だがそれがこれで、臍が見えている。

ネットで調べた私の努力は、水の泡——。

——この世は不条理だ。

実は、参考にしたいたからと松永さんに質問をしたのだが、結論から言えばそれも失敗だったのだ。今思えば、初っぱなの人選の時点で私は間違えている。

彼女からまだおあずけを食らっていて悶々としている松永さんに彼女が着ていたら嬉しいランジェリーを聞いてみると、松永さんは元氣よく『全裸』と言ひ、聞かなきゃよかつたと思った。だが、『葉梨は喜ぶと思うから、本人に聞いてみたら？』と言つたのだ。

そんなこと恥ずかしくて聞けないだろう。聞けないから調べたのだ。葉梨に聞けな

いから松永さんに聞いたのだ。だから松永さんに女心をわかつていないと抗議すると、『なんで俺に聞くのは恥ずかしくないの?』と呆れられた。ごもつともだ。

仕方ない、松永さんの言う通りに葉梨に聞いてみよう。写真を撮って、葉梨に送ってみるか。

葉梨の好みのランジェリーはどういうものだろうか。

これは葉梨の新しい一面を知ることになるコミュニケーションだ。私の頬は緩んだ。



ベビードールを平置きして真上から撮った写真をメッセージアプリで送信した。『これはどう?』とメッセージを送ったのだが、葉梨は『証拠品ですか?』と返してきた。

——違う、そうじゃない。

そうか、フローリングに平置きするのはなんとなく嫌で、このマットに平置きしたのがいけなかったのか。

父から何かに使うだろうと言われて持たされた、透明なデスクマットの下に敷くこのグリーンのマットがよくなかったのか。

ああ、言われてみれば確かに証拠品の写真のようだ。まるでランパブの摘発事案――

——お父さん、床に転がってるケトルベルを置くよ。

やはりフロアリングに平置きはなんとなく嫌だから、私は畳の上にベビードールを置き、正座して写真を撮り、葉梨に送った。『こっちは？』とメッセージを送ると、返ってきたメッセージは『押収品展示ですか？』だった。

——違う、そうじゃない。

だが、言われてみれば確かに押収品展示のようだ。

新人の頃、窃盗未遂で逮捕した男性宅から押収した大量の女性用下着をひたすら道場に並べたことがある。

私が適当に並べていると、玲緒奈さんや先輩たちから上下セットにしろとか色を揃えてグラデーションになるように並べろとか面倒なことを言われながら相澤と一緒に道場に並べていた。

相澤はゴリラだが、ああ見えても几帳面だ。一生懸命並べながら、『ピンクってこんな色があるんだね』と、ガーターベルトを手に持ち、女性用下着を上下セットにしようと神経衰弱をしながら言っていた。

私は疲労と睡眠不足でフラフラしながらそれを聞いていたせいかな、出てきた言葉が『ピンクって二百色あんな』だった。

相澤は眉根を寄せて私を真つすぐ見つめていたが、何も言わなかった。相澤も疲れていたのでろう。

その会見のニュースを見た父は私が勤務する所轄だと気づき連絡を寄越したが、『私が並べたんだよ』と誇らしげに言うのと絶句していた。私は褒められると思つたのだが、今思えば、うら若き二十歳の愛娘が下着を並べている姿を想像して哀しくなつたのだらう。同じ公務員とはいえ、国税局勤めの父は女性用下着を並べたことは無いだらうし。

——お父さん、警察官つてそんなもんなんだよ。

◇

私はどうすればいいのだろうか。

葉梨に『こういうのは好き?』とメッセージを送つた。それで私の気持ちは伝わるだらうか。

先程の証拠品と押収品のメッセージはすぐに既読になつて返信があつた。だが、既読はついたが返信が遅い。今、葉梨は官舎に戻つた頃だと思ふのだが、何か忙しくしているのだらう。

しばらくすると、葉梨から電話がかかつてきた。

「もしもし」

「もしもし！ 葉梨です！」

「はい」

「あの、どうしたんですか？」

「なにが？」

葉梨は、女性用下着の写真を送られた上に質問の意図がわからず悩んでいたという。だから電話したと言った。

——言葉足らずだったのか。

「ごめんね。どうかناと思って、送った」

「はい、あの……それで、何が、どうか、なのでしょうか」

「あー。えっと、葉梨は、私が、これを着ていたら、嬉しい？」

「はっ!？」

——文法を間違えたのだろうか。

「臍が見えるけど」

「んっ!？」

「臍は隠れている方がいいでしょ？」

「えっ!？」

葉梨は臍が見えていた方がいいのか。好きなものをはつきりと言えない時もあるのだな、と新しい一面を知って嬉しかった。

葉梨に官舎で同室の岡島はいるのか聞くと、岡島はいないという。

岡島は私と同期なのだが、私はこの十六年間で、岡島を物理的に抹殺してやろうと思いつけている。しかし、機会に恵まれずに今に至る。

あの日、膝カックンした岡島のことを私は一生忘れない。

「岡島がいらないならさ、ビデオ通話しようよ」

「えっ、はい！」

せっかく葉梨とビデオ通話するのだから、このベビードールを着てセットのパンツを履こう。パンツはソングでケツが寒いけど仕方ない。

私はメッセージアプリのビデオ通話をタップし、葉梨の応答を待った。

葉梨が応答すると、困った表情をしていた。どうしたのだろうか。

「葉梨はこういうの好き？」

「えっと、あの、もう、着ている、と」

「うん」

私が今着ているベビードールは黒いサテンで、薄いピンクのリボンが縁取りとしてフリフリしている。肩紐は細い紐が二本だ。何のために二本あるのかわからないが、おそ

らく念のためだろう。

葉梨は私を着ているものならなんでもいいという。それでは困るのだが、頭を抱えながら目を閉じてそう言う葉梨は、先輩の私に気を遣っているのだろう。

「ねえ葉梨、臍が見えてるんだよ」

「んんっ!?!」

私は懸垂マシンで腹筋をする時に握るグリップにスマートフォンを立てかけ、全身が映るようにした。

「ほら、臍が見えるでしょ?」

「……はい」

「臍が見えてもいいの?」

「……はい。見えていてもいいです」

ついだから、葉梨へこのペビードールを買うに至った経緯を話した。ネットで『初エッチで男性が彼女に着て欲しいランジェリー』というタイトルの記事を読んだこと、そこに書かれていた男性の意見は皆違っていて参考にならず、葉梨に聞いてみよう思っただと言った。

記事タイトルを言った時点で葉梨は唇を噛んで天井を見上げていたが、今は画面を見ている。

「あの、加藤さん」

「なにー?」

「今から行つてもいいですか?」

「あー、うん……」

「すみません、ご迷惑なら……」

迷惑なわけではない。だが、今日の葉梨は休みではない。午前零時には捜査員用のマンションに戻らなくてはならない。官舎へは荷物を取りに戻っただけだ。

「あのさ、これ以外にも、買ったものがあるんだよね」

「えっ……」

「それを見せるから、えっと、あの……マッチョしかないジムに行かない?」

「はっ!?!」

画面の葉梨は、眉根を寄せて真つすぐ見つめている。きつと『お前は何を言っているんだ』とでも言いたいのだろうが、先輩の私に伝えるわけがない。だが私は葉梨のこの顔が好きだ。ちよつとカッコいいと思っている。

こんなにも早く、葉梨とマッチョしかないジムに行けるとは思わなかった。嬉しい。世界中にあるマッチョしかないジムだが、葉梨はどのジムにいるマッチョよりも

カッコいいだろう。

だからマツチヨシかないないジムのロゴ入りの青いリングータンクを着た葉梨は、世界で一番カッコいいはずだ。買って置いてよかった。

一人の女だけを夢中にさせる男は、いい男――。

私はもう、葉梨に夢中だ。

最終章

君としたい（前編）

相澤と口裏を合わせているが、俺は官舎の所在地を優衣香に嘘を吐いている。

これまで官舎に優衣香を招くことが無かったから問題は無かったのだが、今日は優衣香が車で迎えに来る。もちろん適当な場所で待ち合わせすればいいのだが、今日は大きな荷物があるから困っている。

その大きな荷物があるから優衣香が車で来るのだが、その大きな荷物を持ったままでも問題の無い適当な待ち合わせ場所はどこなのか、見当もつかず俺は困っている。

——バーベルを担いで待ってても大丈夫な場所ってどこかな。

バーベルのシャフトはただの金属棒だ。それだけなら問題無い。俺は警察官だし、万が一職質を受けても、まあ、大丈夫だ。とつても面倒だけど。

だが問題はバーベルプレートだ。クッソ重いバーベルプレートとシャフトで分けてしまつたら、持ち運びがとても辛い。どうすればいいんだ。

——全ては、マッチョしかないジムのせいだ。

そう思っているが、そもそも優衣香がマッチョしかないジムに行った理由は俺のせいだ。だからバーベルを担いで途方に暮れている俺の責任だ。

——夢で揉んだおっぱいがおっぱいじゃなくても俺はよかつたのに。

結局、正直に優衣香に官舎の所在地を教えて、車を横付けしてもらったことにした。

電話した時、優衣香は『車を買って替えたんだよ』と嬉しそうに話していた。車種は言わず、『楽しみにしててね』と言った優衣香の弾んだ声が可愛かった。

◇

一月二十日 午後三時二分

優衣香の到着予定時間になり、バーベルを肩に担いで階段を下りていると、官舎の駐車場にバックでブツ込むイカつい車が視界に入った。官舎に存在するのはあまりよろしくないイカつい車——。

多分、優衣香だろう。膝から崩れ落ちそうになったが、バーベルを肩に担いでいるからそれも出来なかった。

——どうしてこう、優衣ちゃんはそうなのかな。

ダイエツトに格闘技を選ぼうとした優衣香を全力で止めて、ホツトヨガとかピラティスとか、なんとなく女の子っぽいものを勧めたら、『もちろんそれはいいと思うけど、なんか、あんまり……』と言葉を濁していた。

意識するなら、『そんなしやらくせーモンじゃやった気にならんわ』と言いたくて、適切な言葉が出てこなくて言い淀んだのだと俺は考えている。風邪ひいてボーつとしてたし。

以前の車だつてそうだ。公用車と同じ、一般的には高級スポーツセダンを買った時も、『高速で百キロ出してもね、一般道で五十キロで流してるとような安定性なんだよ』とか、『煽ってるわけじゃないのに前の車が避けるの。車線変更しても後ろの車はすんなり入れてくれるし、どんどん車間を空けるし、私の前に入って来る車もないんだよ。ある意味安全だよ』と、楽しそうに話していた。

可愛いコンパクトカーに乗ってそうな見た目の優衣香だが、実際はそうではない。車のミュージックサーバーに入っている音楽はゴリツゴリのヒップホップだし。

優衣香は優衣香だから、優衣香がどんな性格でも俺は好きだからいい。だが今回の車はずいぶんところ、どうなのかなと俺は思った。

エンジンを止め、運転席から降りた優衣香は茶髪でカールした髪を靡かせて俺に笑いかけている。

——チンパンジー須藤と同じ車なんだね。

公用車のフルモデルチェンジした車に、エアロパーツを架装したイカつい車の脇で微笑む優衣香に俺も笑顔で応えた。

「いい車だね」

「うん、カッコいいでしょう?」

そういつてトランクを開けた優衣香は、バーベルを見ていた。

優衣香が持つて来たダンボールにバーベルプレートを入れ、シャフトを置いてトランクを閉めると、優衣香は俺の顔を見て何か言いたそうにしていた。

「ん? 優衣ちゃん、どうしたの?」

「車のナンバー……」

何かと思いながらトランクから後退り、ナンバーを見た。

——ぼくの誕生日だ!!

「誕生日!」

「そうなの。希望ナンバーだね、敬ちゃんの誕生日にしたんだよ」

——ぼくすっごく嬉しい!

優衣香に近づいて抱きしめようとしたが、ここは官舎だと思い出した。

「後で、後で抱きしめる」

「んふっ……うん」

「行こうか」

「うん」

イカついスポーツセダンに乗ってる優衣ちゃんは本当にカッコいいね。可愛いコンパクトカーなんてしやらくせーよね。ぼくはカッコいい優衣ちゃんも大好きだよ。

◇

チンパンジー須藤の私有車はノーマルだった。警察官の私有車がイカついのはよろしくないから。だが、優衣香のこの車はエアロパーツにホイール、マフラー、おそらく殆ど全てを装着したと思う。ステアリングにもロゴが入っている。

「優衣ちゃん、後付けパーツで百万、超えてるよね？」

「うん！ 百五十万くらいだった！」

「そっかあー」

優衣香は働いて自分の力で生きている女性だ。俺は優衣香のカネの使い道にとやかく言う立場に無いし、俺だってカネの使い道にとやかく言われたくない。

——あれ、俺は何にカネ使ってるんだっけ？

酒、メシ、服、美容院、それに……あれ、そんなに使ってないな。優衣香に男がいた時は女遊びにカネ使ってたけど、ここ四年はそれも無いし。今の俺は休みも無く、酒は官舎に戻った時に数本飲むだけだ。そもそも官舎に戻ることが稀だ。

——でもこれからは優衣香に使えばいい。

「優衣ちゃん、マフラーとマツチョシかないジムのTシャツのお返しをしたいんだけど」

「えー、いいよ」

「でも、お返しさせてよ」

「うーん……」

「ポーナス入ったし、何でもいいよ」

優衣香は何を欲しがるとのだろうか。指輪、ピアス、ネックレス、カバンか。身につけるものを言って欲しいと思いつつながら、欲しいものを思い浮かべて悩んでいる優衣香の横顔を眺めていた。

信号が変わって、優衣香は何かを思い出したようで、欲しいものを口にした。

「取っ手の取れるフライパンセットが欲しい」

——どうしてこう、優衣ちゃんはそうなのかな。

それも金属製でピカピカしてるけど、方向性が違うよね。

「アクセサリーとかは？」

優衣香はパドルシフトに慣れていないのか、減速時にシフトレバーに触れようと
して、手が空を切っている。

「んふっ……慣れなくて」

「ふふっ」

左手の薬指には指輪はしていない。中指に大ぶりの指輪をしていて、手首にはブレス
レットと腕時計をしている。

「優衣ちゃん、時計はどうか？」

「目覚まし時計？」

——違う。そうじゃない。

「ペアウオッチ。腕時計だよ」

「ああつ！ いいね。敬ちゃんはどんな時計がいい？」

——俺の希望を優先しなくてもいいのに。

「優衣ちゃんはどんなものがいいの？」

「うーん……」

「見てから考えようか」

「そうだね」

「じゃあ、これから行くか。デパートかな？」

俺がそう言うと、優衣香の目が動いた。

そして、横目で俺を見て、すぐに前を向いた。

俺はその目の動きが何なのかわからなかったが、自分の服を見て理解した。

「これじゃ、デパートは無理だね」

今日の俺はジャージだ。バーベルを担ぐからジャージの方がいいだろうと思ってそうしたから、よそ行きのジャージじゃなくて適当なジャージだ。ダウンコートは着ているが。

優衣香は俺を迎えに来た後はスーパーで買い物をすると言ったから、適当なジャージでも問題無いと思った。

デパートは想定外だった。それに仕事で外出していた優衣香はもちろんスーツで、優衣香とも服装が合っていない。しかも今気づいたが、俺は上下別のジャージを着ている。

——もう！　敬志のバカ！

「ごめんね、ジャージで」

「いいよ、私はジャージ姿の敬ちゃんが好きだよ」

「本当に？」

「うん。ふふふ」



スーパーで買い物を買って済ませて車に乗って、優衣香がサイドブレーキを解除しないうちに俺は優衣香の名を呼んだ。こちらを向いた優衣香の頬に手を添わせて顔を近づけると優衣香も顔を寄せてきて、軽く、唇を重ねた。

「優衣ちゃん、今夜、やっと、続きが出来る」

——三回戦は出来るな、ああ、俺なら出来る。二回と一回だ。連続三回はちよつと無理かな。

額をくつつつけて優衣香の目を見ると、恥ずかしそうに目を伏せて、可愛いなと思った。だが——。

「あのね、仕事が終わらなくて、なんとか終わらせるように頑張る。でも敬ちゃんは寝てもいいからね」

——あのっ！　　いつ一回は、一回は出来ますよね!?

「うん、優衣ちゃん、仕事大変だね」

「あー、うん……ごめんね、せつかく会えたのに」

「ふふつ、いいんだよ。仕事だもん」

——よくないよ！ 事件も事故も無くなればいいのに！

優衣香が言うには、検察で^{とうしや}贋写した刑事記録と事故発生当初の聴取内容に乖離があり、とつても困ったことになっているという。『保険会社の片方が全額払う事故じゃない』と。

守秘義務があるから詳細は言わないが、署に出向き、交通捜査課の担当とも話したという。

「町沢署の交通捜査課の福岡さんって、いい人だった」

「あー、知ってる。黒縁の眼鏡かけてる奴だ」

「そうそう」

「でも、捜査のことは話せないでしょ？ それにもう起訴されてるし」

「うん。でもね、私の事情もちゃんと聞いてくれて、その上で話せることは話してくれただ」

——ああ、他は話をまともに聞かない奴ばかりだから、優衣香はそういう言い方をするののか。

「福岡さんね、私が持ってた判例タイムズを興味深そうに見ていてね、当該事故の過失割合について質問してきたの」

「民事は関係ないのに？」

「そう。福岡さんに『後学のために教えて下さい』って言われた」

「あー、福岡はそういう奴だよ」

「真面目で向上心のある人なんだね」

——それは刑法を思い出そうとすると脳内映像にモザイクがかかるぼくへの当てつけかな。

「うん、福岡はそうだよ」

今日は優衣香に会えてウツキウキなはずなのに、なんだか少しずつライフが減少していくような感覚になっているが、俺は気にしないことにした。

君としたい（後編）

一月二十日 午後五時五十分

バーベルをリビングの隅に置き、お仏壇に線香を上げてリビングに戻ると優衣香はキッチンにいた。買って来たものはすでに片付けたようだ。

俺は夕飯の支度を始めた優衣香に話しかけようとして、カウンターに手をついた。

「優衣ちゃん、本当に、俺でいいの？」

「えっ？」

——優衣香は朝行つて夜帰つて来る普通の人と結婚するのが幸せだ。

「この二ヶ月で五回会えたけど、本来は二ヶ月とか、長い時は半年とか、それくらい会えないんだよ？」

こんな話は今ここで話すようなことじゃないとは思うが、どうしても聞きたかった。

この先、結婚をしたとしてもずっと不安にさせる。でも俺は優衣香とずっといたい。

優衣香が俺のものなら俺は幸せだ。でも優衣香は——。

優衣香は俺を見つめて、『大丈夫』という。何が大丈夫なのか問うと、『頑張る』と答える。

「優衣ちゃん、答えになってないよ」

「んふっ、そうだね」

優衣香は、中学二年の時の級友の話を始めた。もちろん、俺も知っている。今でも優衣香とは友人で、彼女の話を聞くこともある。

彼女の夫は海上自衛隊員で、一度海に出てしまえば数ヶ月は帰って来ないし、そもそもいつが出港なのかも、帰港するのもわからない。それは国防に關することだから当然だ。音楽隊で楽器を拭く係とか適当なことを言っている警察官の俺と似たようなものだ。

「付き合い始めた時からそうだったから、そういうものだと思ってるんだって」

「ああ……」

「そう言われてみれば、私も同じじゃないかな、と思つて」

優衣香が口元を緩ませてそう言ったから、俺は嬉しくなった。

「俺はね、優衣ちゃんが笑顔でいてくれるなら、それだけでいい。もし優衣ちゃんが俺が嫌になつ——」

「そういうことは言わないで」

「……そうだね、ごめんね」

キツチンに入り、米を研いでいる優衣香を後ろから抱きしめて、耳元で囁いた。

「優衣ちゃん、したい」

そのまま首すじに唇を這わせると、優衣香は首を竦ませた。『くすぐったい』と吐息が混ざる声に俺は堪らなくなり、優衣香の胸へ手をやった。

「あつ、手が濡れてるの……敬ちゃん、ダメ……」

耳朵を食んで、舌を耳に這わせながら、優衣香の胸に触れた。

「優衣ちゃん、したい」

「でも……」

「したいの……ダメ……?」

顔をこちらに向けて見上げる優衣香がまた『でも』と言ったから、俺は唇を塞いだ。体をシンクに押し付けて、舌を優衣香の口内に入れると優衣香は応えてくれた。

スカートからブラウスを引き出して裾から手を入れると優衣香は目を開けてそれを横目で見て、苦しげに喘ぐ。左手で優衣香の顎を押さえて、右手指先で優衣香の肌を撫ぜる。

指先がブラジャーに触れた時、優衣香が口を離そうとしたが、俺は左手に力を込めた。ブラジャーの下から指を滑り込ませて、膨らみを手のひらで包むと、もう先端は硬く

なっていた。それを指先で捏ねると、優衣香は声を出した。

「優衣ちゃん……」

「……ダメ」

「したいの」

首すじに舌を這わせながら左手を顎から離し、スカートの裾へと手を伸ばすと優衣香は逃げようとした。ならばとスカートのホックとファスナーを開けようと背中の手をやると、吐息混じりの声で『ダメ』と言う。

「優衣ちゃん、我慢出来ないんだよ」

「でも、でも……」

ホックもファスナーも外し、ブラウスの裾から手を入れた。左手も優衣香の胸の膨らみへと手を伸ばした。優衣香の足の間に膝を入れ、両手で後ろから優しく揉むと、喘ぐ声が耳に流れ込む。

優衣香の柔らかな膨らみの先端を強く摘むと、優衣香の体はビクンと跳ねて、体をのけ反らせた。

——ここで、する。もう無理だ。

左手をスカートにやり、裾を手繰り寄せると、優衣香はまた何かを言おうとしたが、口を塞いだ。

優衣香の足の付け根に指先を沿わせると、体温より熱くなっていた。そこからもつと熱を帯びた場所へ指を伸ばすと、優衣香は腰を引く。

指先でショーツの上から触れると、優衣香は口を離して、また『ダメ』と言う。

——どうしてダメなの？ どうして？

優衣香は首を小さく横に振るだけだった。

◇

俺は今、お風呂洗い洗剤の詰替え用を本体に注いでいる。

スプレーボトルに書いてある『ピンクぬめり』の文言に下ネタでツツコミを入れる余裕は、無い。

——優衣ちゃんに怒られた。

米を研いでいる時に、手が濡れている時に、アレはよくなかった。優衣香は米を研ぎ始めたばかりで初回の水を捨てて水を張った所だった。

研いで、水を切って、としなくてはならないのに、俺は邪魔したんだ。

『お米が欠けちゃうでしょ！』

そう言った優衣香の怒った顔は怖かったけど、ちよつと可愛かった。

——でもぼくは米に負けたんだ。

またほんの少し、ライフが減少した気がした。

◇

午後七時四十六分

俺は今、洗い物をしている。

優衣香が『私、あんまり料理は好きじゃないんだよね』と言ったから、ブロッコリーとササミとゆで卵の筋肉三点セットご飯が出てくるのかと不安になった。だが俺はそれでも構わないし、海苔と納豆はあると言っていたからそれでいいと思っていた。

でも、優衣香が作ってくれた料理は美味しかった。

出汗巻玉子、豚肉と小松菜と炒り卵の入った炒め物、キュウリとワカメとカニカマの酢の物、漬物、ご飯に味噌汁、冷や奴、納豆、海苔。

実家に帰ったような、そんな気持ちになった。ちよつと卵が多い気がしたが、ダイニングテーブルに並べられた料理はどれも美味しくて、無言で食べていたが優衣香は笑顔で俺を見ていた。

料理は好きじゃないと言うのは、手間のかかる料理はしたくないという意味だった。

『食材がよければ、煮る・焼く・蒸すの一工程で済む』

食材の単価は上がるが、食事に満足出来る上に手間が減るのならそれを選択する、という優衣香は男前だなど思った。

美味しい夕飯だったから、俺のライフは元に戻った気がする。

◇

午後八時四分

俺は今、優衣香が仕事している姿を眺めている。

リビングの隅にある書斎スペースで優衣香は大量の書類や複数の判例タイムズや刑事記録を広げている。

——お役所が絡むと紙まみれになるよね。

時折、舌打ちや含み笑いや聞いたことの無い低い声が聞こえるが、俺は何も聞いていない。

俺は見てていいよと言われた優衣香が過去に使っていた過失割合の判例タイムズを眺めているが、ところどころに付箋が貼られていて、余白の部分に細かな字がびっしりと書いてある。

法改正や新たな判例が出ると加筆してあるようだった。だが、この判例タイムズ自体も定期的に刊行される。ということは、これまで加筆していたものは全て頭に入っているということなのか。

——ぼくは警察職員の職務倫理ナントカすら忘れてるのに。

◇

本棚にデジタルフレームがあることに気づいた俺は、ソファから立ち上がって本棚の前に行った。

——実家にある優衣香と俺たちで撮った写真だ。

優衣香の実家が放火された時、優衣香は一人暮らしをしていた。子供の頃の写真や家族写真、卒業アルバムは、一部を除いて実家にあった。

母は、アルバムから優衣香が写る写真を探して渡したと言っていた。きっと、それを元にデジタル化したのだろう。

庭でビニールプールに入っている俺と優衣香は、五歳くらいだろうか。思わず頬が緩んだ。

数秒ごとに変わる写真を眺めていると、優衣香のおじさんとおばさんが若い時の写真

になった。産まれたばかりの優衣香もいる。

——親戚から貰ったデータかな。

正月に親戚が集まったような宴席の写真、誰かの結婚式の写真、観光地で撮られた写真。どれも俺の記憶にあるおじさんとお婆さんの姿がある。

優衣香は目元がおじさん似で、鼻と口元はお婆さん似なんだなと懐かしい気持ちになりながら眺めていると、俺はあることに気づいた。

——おじさんはいつも短髪だ。

『優衣ねえは短い髪が好きみたいでね、こういう理容師が手掛ける昭和のいい男みたいな髪型がいいって言ってたよ』

ああ、そうか。優衣香は十八歳で父親を病気で亡くした女の子なんだった。これまで付き合う男は皆、歳の離れた男だった。

——父親を重ねていたのか。

俺が父親を亡くしたのは二十九歳の時だったが、優衣香は十八歳の時だった。親の死を同じように乗り越えたのだらうと思ってたが、多分、違う。

でも、優衣香は同い年の俺の恋人になると決めた。

どうしてだろう。本当は年上の男がいいだろうに。

デジタルフレームから優衣香の背に視線を移すと、優衣香は背伸びをして椅子にもた

れて、こちらを向いた。

「どうしたの？」

「ああ、写真を見てた」

「おぼさんがくれてね、本当に嬉しかったよ。ありがとう」

笑う優衣香の元に近寄って顔を近づけると、優衣香は俺の首に腕を回して引き寄せた。

「もう少し。だから待っててね」

「うん」

「……私だって、したいんだよ」

甘い声で囁かれた俺は、優衣香の唇を求めた。

◇

午後十一時十分

この前と同じだ。

優衣香が寝室に来るのを、俺はベッドで待っている。ついに俺は優衣香を抱ける。優衣香を俺のものに出来る。

——想像しただけでギンギンなんですけど。

絶対にこれ、挿れたら即、ゴーゴーヘブンだと思う。だって俺、しばらくヤツて無いし。マズいな。どうしよう。一発、抜いとこうかな。でもな、優衣ちゃんはそろそろ来るみたいだし、抜いてる所を見られたら恥ずかしいな。

よし、じゃ、刑法と刑事訴訟法を思い出せば……と思っただけど、脳内映像の刑法はモザイクだったけど刑事訴訟法は真っ黒なんですけど。おかしいな、一生懸命覚えたような気がするんだけどな。じゃあ、警察職員のナントカを思い出してみ——

——優衣ちゃんが来た。

ワンピースとガウンに身を包む優衣香は、カールする髪を横に流しながら俺の元へ来た。

最終話 心に灯るあかり

「おまたせ」

「うん」

優衣香はこの前と同じ艶のある薄紫色のガウンとワンピースを着ている。風邪をひいていた時は綿のパジャマだった。

優衣香はガウンを脱がずに掛布団を捲って俺の横に来て、横向きになっている俺の胸に顔を埋めた。

右腕で優衣香の体を強く抱くと手のひらから少しずつ、優衣香の温もりが伝わってくる。

「優衣ちゃん」

仄暗いランプは優衣香を照らすが髪で影になってよく見えない。

抱きしめたまま優衣香に体重をかけて仰向けにさせると優衣香は左腕を俺の首に回した。ランプに照らされた優衣香の瞳は俺を見ている。

「優衣ちゃん、好きだよ」

恥ずかしそうに微笑む優衣香が可愛い。ついにこの時が来た――。

唇を重ねると優衣香の舌が俺の唇をなぞった。舌が歯列を割って、口内に入って来て、俺の舌を求めている。

優衣香の体の下にあつた右腕を外し、左肩を押さえて耳を指先でなぞると、『んっ』と小さく呻いた。

優衣香が求めるように舌を差し出すと、優衣香はそれを吸い上げた。唾液が絡み合う音が部屋に響く。

優衣香の舌は甘く、柔らかく、温かい。

首筋に舌を這わせ鎖骨の窪みを舐めると、優衣香は身を振る。そのまま左胸へ舌を移動させ、ワンピースの上から先端を口に含んだ。

優衣香は唇を噛んで、声を出さないようにしている。

――もっと、声を聞かせてよ。

右手をワンピースの裾へと伸ばし、手繰り寄せた。柔らかな布地はひんやりとしている。

舌を先端に絡めて転がすと、優衣香はまた体を仰け反らせる。

優衣香の唇に軽く重ねて、鼻の頭をくつつけた。

指先は内腿をなぞっている。

目線を交わすと、優衣香は目をそらした。

「優衣ちゃん、どうして欲しい？」

優衣香は何も言わない。潤んだ瞳で見つめられるだけだ。

左手で右頬に触れ、親指で下瞼を押し下げないように撫でると優衣香は困ったような表情をして少し笑った。その笑顔が愛しくて、額にキスをした。そしてもう一度、今度は深くキスをする。

お互いを求め合って長い時間唇を重ねていた。

優衣香の柔らかい舌先を感じながら、ゆつくりと舌を動かす。唇を重ねたまま、そつと手を太ももの内側に滑らせていく。でも、体温より熱いそこには、触れない。

唇を離れた時、優衣香は囁いた。『敬ちゃんも脱いで』と。

優衣香は起き上がって俺を見下ろしながらガウンを脱ぎ捨て、俺の手を取る。

Tシャツを脱ぎ、下も脱いだ時、優衣香は俺の肩に指先を添わせた。

俺はベッドに脚を開いて座り、間に膝立ちになった優衣香を引き寄せた。

「優衣ちゃん、どうして欲しいか、言って」

そう言いながらワンピースの肩紐を両手で外すと、優衣香は恥ずかしそうに目を伏せた。

左腕を優衣香の腰に回して背中を指先でなぞると優衣香の唇から甘い吐息が落ちてくる。

優衣香の柔らかかなふくらみを口に含んで先端を噛むと、喘ぐ声に変わった。

「敬ちゃん、欲しい……」

「もう……?」

肩に置いた優衣香の指先に力が入っている。

「でも、まだ、あげない」

優衣香をシートに沈めて、優衣香の体に唇を這わせた。俺は優衣香はどこが感じるのか知りたかった。何度も何度も、優衣香は俺とひとつになることを望んだが、そのたびに俺は『ダメ』と言った。

俺だって、優衣香に『ダメ』と言われたのだからいいだろう。

「敬ちゃん……もう、我慢出来ないの……」

——優衣香が望むなら。

俺は二十三年分の気持ちも、ただひたすら優衣香にぶつけた。優衣香が果てもなお俺は優衣香を求めた。一回だけじゃ、済まなかったから。

◇

力なく横たわる優衣香の隣に寝転がり、汗ばむ優衣香の頬に触れると、指先が濡れる。俺が指先を舐めると、優衣香は恥ずかしそうに目を伏せた。

「優衣ちゃん、大好きだよ」

優衣香は小さく笑みを浮かべて、目を閉じた。

穏やかな表情をしている優衣香を見て、俺は思った。

——ずっと、そばにいるよ。だって、俺は優衣ちゃんが大好きだから。

◇

一月二十一日 午前零時三分

気怠くて、目を閉じたらそのまま深い眠りに落ちてしまいそうになるのをなんとか耐えて、俺の腕の中にいる優衣香にプロポーズをしようと思った。

でも、プロポーズはもっと、想い出に残るようなことをしたいとも思う。

どうしようか。ずっと一緒にいたいと思ってるし、優衣香だって、こんな俺でもいいと言ってくれた。でも優衣香は——。

「ねえ、敬ちゃん」

優衣香は俺の鎖骨をなぞりながら、見上げて笑顔で言った。『私、敬ちゃんの子供のお母さんになりたい』と。

その言葉に驚いた俺は飛び起きてしまった。

「えっ……あの、優衣ちゃん、それって……」

「うーん、プロポーズ？」

優衣香は続けた。俺が前回半年ぶりに会いに来たあとからのこの二ヶ月の間に、『自分が俺の帰る場所になればいい』と思ったという。

優衣香は家族を亡くして帰る家が無くなった。でも生きていけるだけの術はありこのまま一人で生きていくつもりだったが、自分一人で生きていけるから、結婚してもいいと思ったそうだ。

子供の頃の武闘派の優衣香は、大人になってからは愛情深く優しい女性になったと思っていた。元々体力があつて体を動かすことが好きな女性だけで、女性らしい可愛い人だと思っていた。

違った。優衣香は強い。

「ふふっ……嬉しい。でも優衣ちゃん……」

「なに？」

「俺も今、プロポーズしようと思つてたのに先に言われちゃった」

「えっ……」

優衣香を強く抱きしめて、あらためて俺からプロポーズさせて欲しいと言うと、腕の中の優衣香は笑っていた。

その時だった。

優衣香と永遠に一緒にいられると思ったのに、現実には引き戻された。

俺は警察官で、“音楽隊で楽器を拭く係”だから。

ナイトテーブルに置いたスマートフォンが鳴った。仕事用とプライベート用の両方が同時に鳴っていた。

仕事用は須藤さんからで、プライベート用は相澤だった。

俺は仕事用のスマートフォンを取った。

優衣香に背を向け、電話に出ると須藤さんの第一声は緊急事態を告げる言葉だった。

「お前は目薬は使う？」

——捜査員が行方不明、と。

「はい」

——誰だ。誰がいなくなったんだ。

「あの洗剤ってあんまり落ちないよ」

——同時に誰かが大怪我した、と。

「そうですね」

——誰よ。

「クレンザーとオリーブオイル買ってきてよ」

——行方不明は野川里奈、本城昇太が大怪我、か。

「その脇の引き出しの二段目にありますよ」

——九十分で戻ります。

電話を終えた俺は優衣香に振り向いた。電話の須藤さんの声は聞こえていたのだから。少しだけ首を傾げている。

「優衣ちゃん、ごめん帰る。送って欲しい」

「えっ、うん……」

おそらく、俺の目つきが変わったからだろう、優衣香は怯えた目をした。

優衣香に車で送ってもらうことは本来はしない。だが、俺は話さなければならぬことがある。

服を着て慌ただしく支度する優衣香の姿に、俺は申し訳無いと思った。

◇

優衣香が車を出している間に相澤へ連絡をした。

俺が電話に出なかったから相澤はメッセージを送ってきたが、そこには本城の容体が箇条書きされていた。もちろん暗号としての単語の羅列だった。

——兄ちゃんと同じ場所、か。

顔に切創を負ったのか。

「もしもし」

「あ、お疲れ様です、あの、のど飴はいりますか?」

——葉梨が情報を得た、と。

「うん、ありがとう」

——何の情報よ。

「耳栓は持ってます。タオルケットは置みますか?」

——山野花緒里が関わっている、と。

「クレンザーは?」

「無いです。大きい絆創膏より包帯がいいですよ」

——追ってるが、本城昇太とは別件だと?」

「そうか」

——本城昇太が目的じゃないのか。

ヘッドライトが近づく。優衣香が俺の横に車を寄せた。

「キャビネットの右側の上の棚にあるよ。じゃ、よろしく」

相澤に午前二時二十分までに戻ると伝えて電話を切った。

◇

捜査員用のマンションまで送ってもらうわけにはいかないから、マンションに一番近い加賀町警察署まで送ってもらうことにした。そこから走れば五分だ。

夜中だからあと四十分程で到着するが、優衣香は急いでいる雰囲気だった。

「優衣ちゃん、道交法遵守で」

「でも……」

「捕まると遅くなる」

「……うん」

優衣香にとっては初めてのことだ。だが、本来はこんなことを優衣香にさせてはならない。

俺の恋人だからこんなことをさせられている。

真夜中に男を送って行くために車を出すなんて、そんな都合のいい女みたいな扱

は、『普通の人』からはされないだろう。

この仕事をしている限り、優衣香を幸せにすることは出来ないと思う。

優衣香は朝行つて夜帰つて来る『普通の人』と暮らすのが幸せに決まってる。

——何度目だ、これを考えるのは。

優衣香が誰かと結婚すれば、俺はこんなに悩まなくて済むのに。優衣香を諦めることが出来るのに。

——でも優衣香は俺と結婚すると言った。

あの日、優衣香のマンションを出てからも同じことを考えた。そして、今も同じことを考えている。

本当に優衣香は俺でいいのか。

でも、優衣香は俺の人生に責任を持ちたいと言った。

——俺は優衣香の人生に責任持てないのに。

◇

一般人の優衣香には、深夜の警察署は静まり返っていると思うだろう。

だが、俺にはわかる。ここに来るまでの間にも、同業だからわかる変化があった。

こつちも非常招集されている。

——優衣ちゃんは何も知らずにいていいんだよ。

「()でいいの?」

「うん、ありがとう」

横浜スタジアム向かいの玄武門から入り、加賀町警察署脇に到着した。

デニムにダウンジャケットを着た優衣香は不安そうな顔をして助手席の俺を眺めている。

多分、半年は戻って来れない。それ以上かも知れない。

俺は優衣香がそれに気づくようなことを伝えたい。だが、本当はしてはいけない。音楽隊で楽器を拭く係の俺は、何も言えない。でも——。

「優衣ちゃん、あのバーに行っても、もう俺に連絡しなくていいから。じゃあまた、葉書を送るね」

何かを察した優衣香は目を見開いて俺を見たが、俺は目を合わせず、車を降りた。

「敬ちゃん!」

ドアを閉じようとした瞬間、優衣香の声があった。屈んで優衣香を見ると、助手席のシートに手をつけて俺を見上げている優衣香は笑顔でこう言った。

「いつてらっしゃい。待ってるからね」

俺は少しだけ口元を緩めて、頷いた。それからドアを閉じて背を向けて走り出す。

——帰る時の『またね』じゃなかった。

先の角を曲がれば優衣香の車は見えなくなる。

その前に振り向くと、優衣香は車の脇で笑顔で俺を見ていた。

俺の誕生日のナンバープレート車の脇で。

優衣ちゃん笑顔が大好きです——。

二十三年の時を経て、やっと優衣香に想いが伝わった。優衣香が、俺の帰る場所になつた。

捜査員用のマンションまではあと少し。

またしばらく優衣香と会えないけど、俺の心は弾んでいた。

——第一部・終——